公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（38）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保（かわくぼ）遺跡 4
A 地点

（鹿屋市串良町）

縄文時代前期・古代・中世編

第２分冊

2021年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

本文目次

第Ⅳ章　調査の成果 …… 1
　第２節　縄文時代前期の成果 …… 1
　　１　遺構 …… 1
　　２　遺物 …… 13
　第３節　古代の成果 …… 48
　　１　遺構 …… 48
　　２　遺物 …… 67
　第４節　中世の成果 …… 96
　　１　遺構 …… 96
　　２　遺物 …… 214
　第５節　自然科学分析 …… 254
第Ⅴ章　総括 …… 262
　第１節　縄文時代早期 …… 262
　第２節　縄文時代前期 …… 268
　第３節　古代・中世 …… 268

挿図目次

第 212 図　縄文時代前期集石配置図 …… 2
第 213 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石１ …… 3
第 214 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石２ …… 4
第 215 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石３ …… 5
第 216 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石４ …… 6
第 217 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石５ …… 7
第 218 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石６ …… 8
第 219 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石７ …… 9
第 220 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石８ …… 10
第 221 図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石９ …… 11
第 222 図　16 類土器　255・256 出土状況 …… 14
第 223 図　16 類土器分布図 …… 15
第 224 図　16 類土器１ …… 16
第 225 図　16 類土器２ …… 17
第 226 図　16 類土器３ …… 18
第 227 図　17 類土器分布図 …… 20
第 228 図　17 類土器 …… 21
第 229 図　18 類土器分布図 …… 23
第 230 図　18 類土器１ …… 26
第 231 図　18 類土器２ …… 27
第 232 図　18 類土器３ …… 28
第 233 図　18 類土器４ …… 29
第 234 図　18 類土器５ …… 30
第 235 図　18 類土器６ …… 31
第 236 図　18 類土器７ …… 32
第 237 図　18 類土器８ …… 33
第 238 図　Ⅴ層剥片石器類分布図 …… 36
第 239 図　Ⅴ層出土石器１ …… 39
第 240 図　Ⅴ層出土石器２ …… 40
第 241 図　Ⅴ層出土石器３ …… 41
第 242 図　Ⅴ層出土石器４ …… 42
第 243 図　Ⅴ層出土石器５ …… 43
第 244 図　Ⅴ層出土石器６ …… 44
第 245 図　Ⅴ層出土石器７ …… 45
第 246 図　Ⅴ層出土石器８ …… 46
第 247 図　Ⅴ層出土石器９ …… 47
第 248 図　古代土坑配置図 …… 51
第 249 図　古代の土坑１ …… 52
第 250 図　古代の土坑２ …… 53
第 251 図　古代の土坑３ …… 54
第 252 図　古代の土坑４ …… 55
第 253 図　古代の土坑５ …… 56
第 254 図　古代の土坑６ …… 57
第 255 図　古代の土坑７ …… 58
第 256 図　古代の土坑８ …… 59
第 257 図　古代の土坑９ …… 60
第 258 図　古代の土坑 10 …… 61
第 259 図　古代の土坑 11 …… 62
第 260 図　古代の土坑 12 …… 63
第 261 図　土坑 34 号出土遺物 …… 65
第 262 図　土坑 39 号出土遺物 …… 65
第 263 図　土坑 40 号出土遺物 …… 65
第 264 図　土坑 50 号出土遺物 …… 66
第 265 図　古代土師器分布図 …… 68
第 266 図　焼塩土器分布図 …… 68
第 267 図　古代土師器　皿・坏 …… 70
第 268 図　古代土師器　坏 …… 72
第 269 図　古代土師器　椀 …… 72
第 270 図　古代土師器　椀・壺・焼塩土器 …… 73
第 271 図　古代土師器　甕１ …… 76
第 272 図　古代土師器　甕２ …… 79
第 273 図　黒色土器分布図 …… 84
第 274 図　墨書土器分布図 …… 84
第 275 図　黒色土器１ …… 85
第 276 図　黒色土器２ …… 87
第 277 図　墨書土器 …… 87
第 278 図　古代須恵器１ …… 90
第 279 図　古代須恵器２ …… 92
第 280 図　古代須恵器３ …… 93
第 281 図　古代須恵器４ …… 94
第 282 図　掘立柱建物跡配置図 …… 97
第 283 図　掘立柱建物跡１号 …… 98
第 284 図　掘立柱建物跡２号 …… 99
第 285 図　掘立柱建物跡３号 …… 100
第 286 図　掘立柱建物跡４号１ …… 101
第 287 図　掘立柱建物跡４号２ …… 102
第 288 図　掘立柱建物跡５号 …… 103
第 289 図　掘立柱建物跡６号 …… 104
第 290 図　掘立柱建物跡７号 …… 105
第 291 図　掘立柱建物跡８号 …… 106
第 292 図　掘立柱建物跡９号 …… 107
第 293 図　掘立柱建物跡 10 号 …… 108
第 294 図　掘立柱建物跡 11 号 …… 109
第 295 図　掘立柱建物跡 12 号 …… 110
第 296 図　掘立柱建物跡 13 号 …… 111
第 297 図　掘立柱建物跡 14 号 …… 112
第 298 図　掘立柱建物跡 15 号 …… 113
第 299 図　掘立柱建物跡 16 号 …… 114
第 300 図　掘立柱建物跡 17 号 …… 115
第 301 図　掘立柱建物跡 18 号 …… 116
第 302 図　掘立柱建物跡 19 号 …… 117
第 303 図　掘立柱建物跡 20 号 …… 118
第 304 図　掘立柱建物跡 21 号 …… 119
第 305 図　掘立柱建物跡 22 号 …… 120
第 306 図　掘立柱建物跡 23 号 …… 121
第 307 図　掘立柱建物跡 24 号 …… 122
第 308 図　掘立柱建物跡 25 号 …… 123
第 309 図　掘立柱建物跡 26 号１ …… 124
第 310 図　掘立柱建物跡 26 号２ …… 125
第 311 図　掘立柱建物跡 27 号１ …… 126

第312図　掘立柱建物跡27号2 …… 127
第313図　掘立柱建物跡28号 …… 128
第314図　掘立柱建物跡29号 …… 129
第315図　掘立柱建物跡30号 …… 130
第316図　掘立柱建物跡31号 …… 131
第317図　掘立柱建物跡32号 …… 132
第318図　掘立柱建物跡33号1 …… 133
第319図　掘立柱建物跡33号2 …… 134
第320図　掘立柱建物跡34号 …… 135
第321図　竪穴建物跡・土坑墓・土坑配置図 …… 143
第322図　中世の竪穴建物跡1 …… 144
第323図　中世の竪穴建物跡2 …… 145
第324図　中世の竪穴建物跡3 …… 146
第325図　中世の土坑墓1 …… 147
第326図　中世の土坑墓2 …… 148
第327図　中世の土坑1 …… 149
第328図　中世の土坑2 …… 150
第329図　中世の土坑3 …… 151
第330図　中世の土坑4 …… 152
第331図　中世の土坑5 …… 153
第332図　中世の土坑6 …… 154
第333図　中世の土坑7 …… 155
第334図　中世の土坑8 …… 156
第335図　中世の土坑9 …… 157
第336図　中世の土坑10 …… 158
第337図　中世の土坑11 …… 159
第338図　中世の土坑12 …… 160
第339図　中世の土坑13 …… 161
第340図　中世の土坑14 …… 162
第341図　中世の土坑15 …… 163
第342図　中世の土坑16 …… 164
第343図　中世の土坑17 …… 165
第344図　中世の土坑18 …… 166
第345図　中世の土坑19 …… 167
第346図　中世の土坑20 …… 168
第347図　中世の土坑21 …… 169
第348図　中世の土坑22 …… 170
第349図　中世の土坑23 …… 171
第350図　中世の土坑24 …… 172
第351図　中世の土坑25 …… 173
第352図　中世の土坑26 …… 174
第353図　中世の土坑27 …… 175
第354図　中世溝・古道全体配置図 …… 178
第355図　中世溝・古道配置図1 …… 179
第356図　中世溝1及びその道1・2 …… 180
第357図　中世溝2・3 …… 181
第358図　中世古道3・4・5 …… 182
第359図　中世溝・古道配置図2 …… 183
第360図　中世溝・古道配置図3 …… 184
第361図　中世溝4・5 …… 185
第362図　中世溝4 …… 186
第363図　中世溝6 …… 187
第364図　中世古道6 …… 188
第365図　中世溝・古道配置図4 …… 189
第366図　中世溝7 …… 190
第367図　中世溝8 …… 191
第368図　中世溝・古道配置図5 …… 192
第369図　中世溝9 …… 193
第370図　中世溝10 …… 193
第371図　中世溝・古道配置図6 …… 194
第372図　中世溝11・12 …… 195
第373図　中世古道7 …… 196
第374図　中世溝・古道配置図7 …… 197
第375図　中世溝13 …… 198
第376図　中世古道8 …… 199
第377図　中世古道9 …… 200
第378図　中世溝・古道配置図8 …… 201
第379図　中世古道10 …… 202
第380図　中世溝・古道配置図9 …… 203
第381図　中世溝14 …… 204
第382図　中世溝15・16 …… 205
第383図　中世溝・古道配置図10 …… 206
第384図　中世古道11・12 …… 207
第385図　中世古道11・12 …… 208
第386図　中世古道13・14 …… 209
第387図　中世古道15 …… 210
第388図　土坑墓出土遺物 …… 211
第389図　竪穴建物跡出土遺物 …… 212
第390図　掘立柱建物跡柱穴出土遺物 …… 212
第391図　土坑内出土遺物 …… 212
第392図　中世土師器（皿）分布図 …… 215
第393図　土師器皿・鍋 …… 216
第394図　瓦器椀 …… 217
第395図　中世須恵器（東播系捏ね鉢鉢）分布図 …… 219
第396図　国内産陶器（備前焼擂鉢）分布図 …… 219
第397図　中世須恵器1 …… 221
第398図　中世須恵器2 …… 222
第399図　国内産陶器 …… 224
第400図　青磁分布図 …… 226
第401図　青磁1 …… 228
第402図　青磁2 …… 230
第403図　青磁3 …… 231
第404図　白磁分布図 …… 235
第405図　白磁 …… 236
第406図　白磁・青白磁 …… 238
第407図　青花分布図 …… 242
第408図　青花1 …… 243
第409図　青花2 …… 244
第410図　国外産陶器分布図 …… 246
第411図　国外産陶器 …… 248
第412図　土製品 …… 248
第413図　石製品分布図 …… 250
第414図　石製品 …… 252
第415図　遠穴土坑の長軸幅 …… 263
第416図　遠穴土坑の短軸幅 …… 263
第417図　遠穴土坑平面形状による分類 …… 263
第418図　Ⅶ層検出集石及びⅧ層出土石器分布図 …… 265
第419図　Ⅵ層検出集石及びⅦ層出土石器分布図 …… 266
第420図　Ⅴａ層検出集石及びⅤ層出土石器分布図 …… 267
第421図　掘立柱建物群分類図 …… 270

表目次

第39表　縄文時代前期集石 …… 12
第40表　16類土器観察表（西之薗式） …… 19
第41表　17類土器観察表（轟B式） …… 22
第42表　18類土器観察表1 …… 25
第43表　18類土器観察表2 …… 34
第44表　18類土器観察表3 …… 35
第45表　V層出土石器観察表 …… 38
第46表　古代土坑一覧表 …… 64
第47表　古代土坑出土土器観察表 …… 66
第48表　古代土師器観察表1 …… 80
第49表　古代土師器観察表2 …… 81
第50表　黒色土器観察表 …… 86
第51表　墨書土器観察表 …… 88
第52表　古代須恵器観察表 …… 95
第53表　中世竪穴建物跡一覧表 …… 176
第54表　中世土坑墓一覧表 …… 176
第55表　中世土坑一覧表1 …… 176
第56表　中世土坑一覧表2 …… 177
第57表　中世遺構出土土器観察表 …… 213
第58表　中世遺構出土縄器観察表 …… 213
第59表　中世土師器観察表 …… 217
第60表　瓦器観察表 …… 218
第61表　中世須恵器観察表 …… 222
第62表　国内産陶器観察表 …… 225
第63表　青磁観察表1 …… 232
第64表　青磁観察表2 …… 233
第65表　白磁観察表 …… 240
第66表　白磁・青白磁観察表 …… 241
第67表　青花観察表 …… 245
第68表　国外産陶器観察表 …… 249
第69表　土製品観察表 …… 249
第70表　石製品観察表 …… 253
第71表　石器組成表 …… 267

第Ⅳ章　調査の成果

第２節　縄文時代前期の成果

１　遺構

（１）縄文時代前期集石（第212図）

縄文時代前期の集石はⅤａ層から23基検出された。そのうち16基は調査区南東部分の東へ緩く下る斜面に作られている。

Ⅴａ層検出集石（第213～221図）

集石277号から299号はⅤａ層から検出された集石である。土坑を伴う集石が１基のみ検出されている。

集石277号はⅤａ層（アカホヤ火山灰二次堆積層）に掘り込まれた土坑を伴う集石である。土坑は長軸約70cm，短軸約54cmの楕円形を呈しており，深さは約10cmである。土坑は南東向きの緩斜面に掘られている。土坑内の礫は約76%がホルンフェルスであり，６～11cm大の礫を主体としている。

集石278～285号は礫の集中が見られる集石である。集石278号は441個の礫で構成される集石である。断面図を見ると，礫の垂直分布にレベル差が確認できるため，少なくとも２基の集石に分かれる可能性が考えられる。礫は西側で円形に集中しており，そこから北東方向に向けて帯状に礫の多い部分が見られ，南側には礫が散在している状況である。構成礫の石材は安山岩が53%と最も多くなっており，礫の大きさは６～10cm大の礫を主体としているが，Ⅴａ層検出の集石の中では５cm大以下の礫の割合が最も多くなっている。

集石279号は調査区の北東部から検出された集石であり，集石289号と隣接して検出された。北東部からは，この２基の集石が検出されている。集石279号の礫は直径約60cmの円形状に集中しており，原位置を保っている可能性が高い集石である。構成礫は６～10cm大の礫を主体としている。

集石280号は直径約20cmの円の中に礫が密集する集石である。土坑は確認されていないが，断面図を見ると，礫の分布にレベル差があるため，掘り込みを持っていた可能性が考えられる。約60%がホルンフェルスであり，６～10cm大の礫を主体としている。

集石281号は安山岩とホルンフェルスの割合がほぼ半々になる集石である。６～10cm大の礫を主体としている。

集石282号は約80%がホルンフェルスで構成される集石である。

集石283号は南側を樹痕による撹乱を受けている集石である。約74%がホルンフェルスで構成されている。

集石284号は27個の礫で構成される集石である。構成礫の石材の割合は安山岩：ホルンフェルス：砂岩がほぼ１：１：１の割合で構成されている。礫の大きさは全て６～10cm大の礫である。

集石285号は約86%が安山岩で構成される集石である。

集石286～299号は礫の集中が見られない集石である。集石286号は112個の礫で構成される集石である。南東方向に緩く傾斜する斜面に作られているが，東西方向の断面図を見ると，東側に向けて礫の検出レベルが高くなる傾向にある。67%がホルンフェルスで構成され，６～10cm大の礫を主体とする集石である。

集石287号は調査区の南側で検出された集石である。ホルンフェルスの割合が最も高く，曽畑式土器を伴って検出された集石である。

集石288号は約58%をホルンフェルスで構成する集石であり，曽畑式土器が出土している。

集石289号は集石279号と隣接して検出された集石である。集石279号ほど礫はまとまらず，散礫状態で検出された。６～10cm大の礫を主体としている。

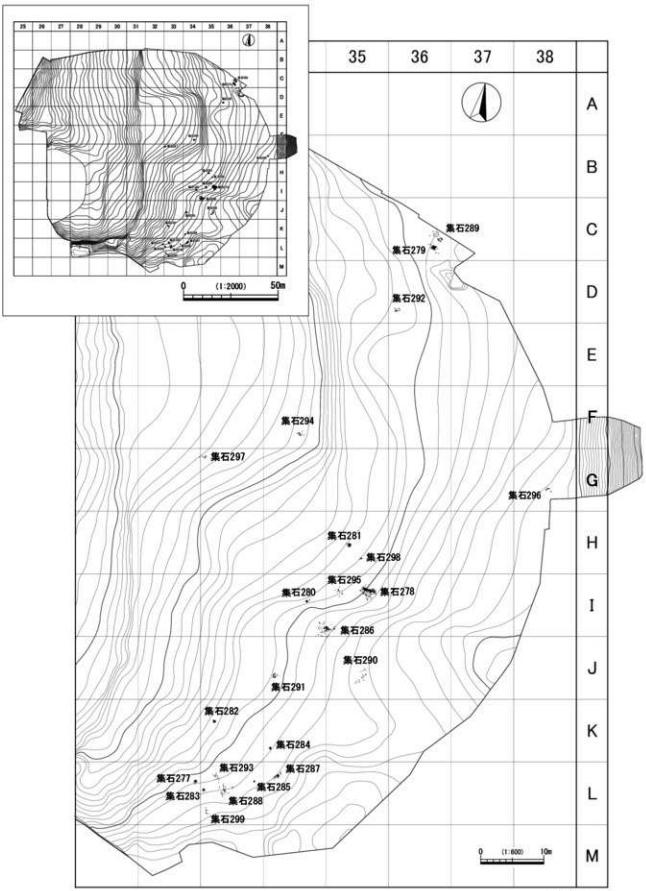
集石290・291号は構成礫のホルンフェルスの割合が高い集石である。

集石293号は安山岩の割合が55%と高い集石である。

集石295号からは曽畑式土器が出土している。

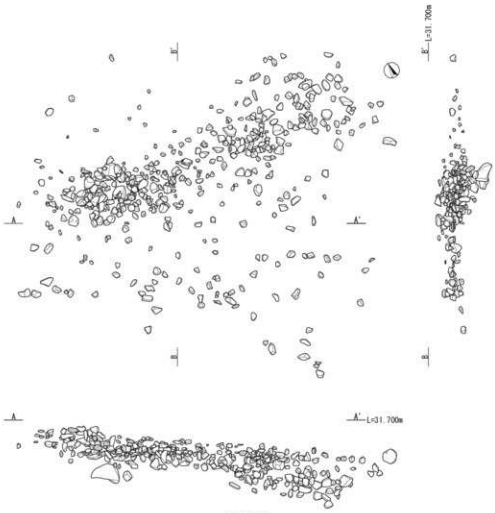
Ⅴａ層検出集石について（第39表）

Ⅴａ層から検出された集石の特徴としては，まず集石を構成する礫の石材にホルンフェルスを多用することが挙げられる。石材を確認できた18基の集石のうち，12基がホルンフェルスの割合が５割を超えている状況である。礫の大きさは全ての集石が６～10cm大の礫を主体としている。明瞭な土坑を持つ集石は少なく，集石277号１基のみに掘り込みが確認されている。

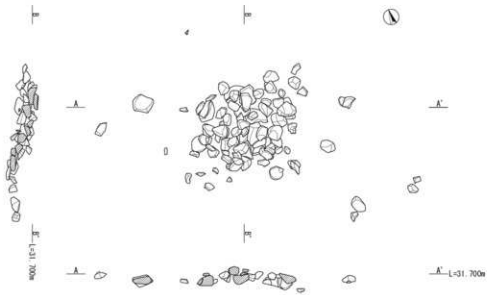


Ⅴa層コンタ図

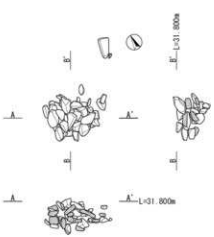
第212図　縄文時代前期集石配置図



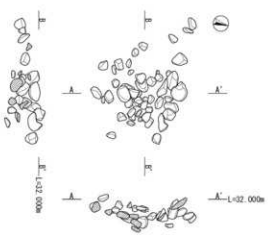
第213図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石１



集石279号

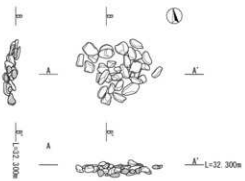


集石280号

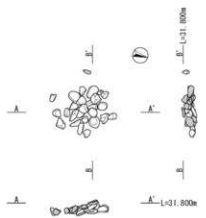


集石281号

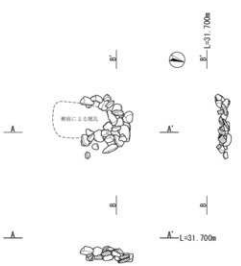
第214図　縄文時代前期Ｖａ層検出集石２



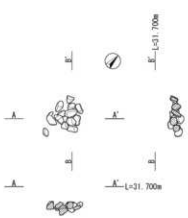
集石282号



集石284号

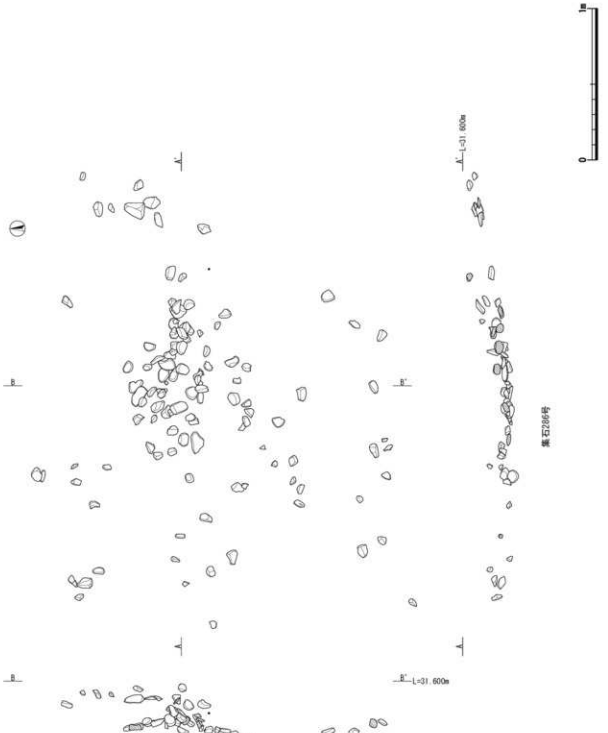


集石283号

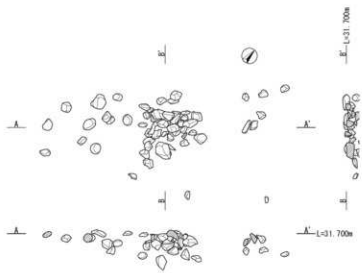


集石285号

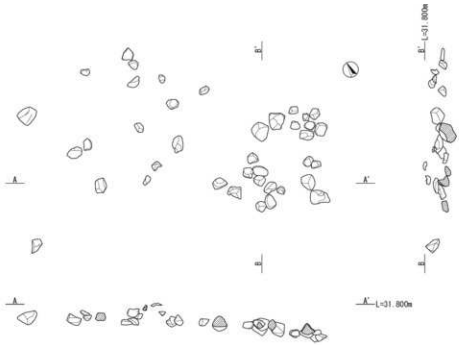
第215図　縄文時代前期Ｖａ層検出集石３



第216図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石４



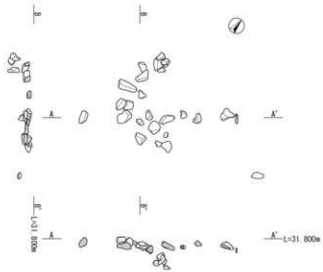
集石287号



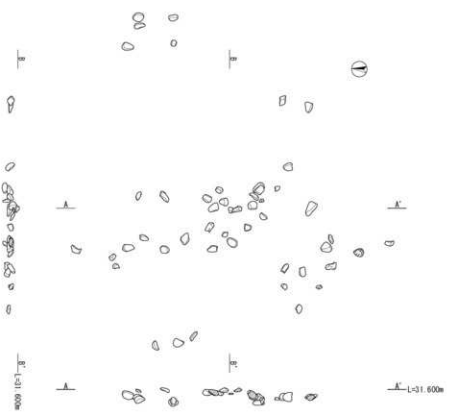
集石289号

0 1m

第217図　縄文時代前期Ⅴａ層検出集石５



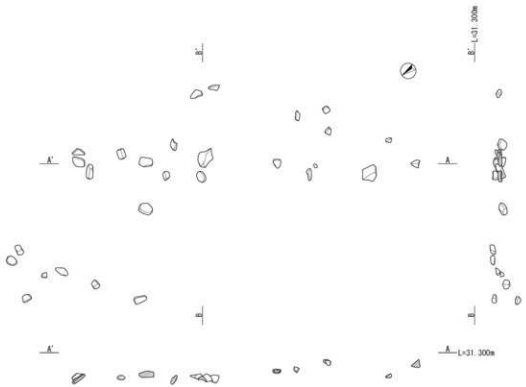
集石291号



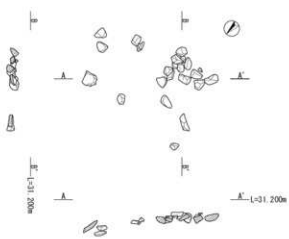
集石288号

0 1m

第218図　縄文時代前期Ｖａ層検出集石６

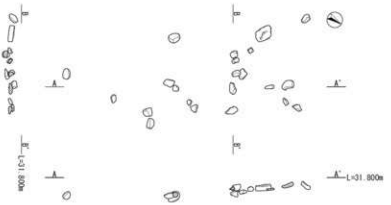


集石290号

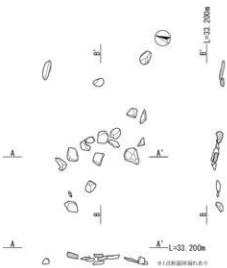


集石292号

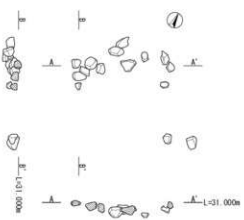
第219図　縄文時代前期Ｖａ層検出集石７



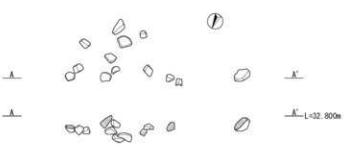
集石293号



集石294号

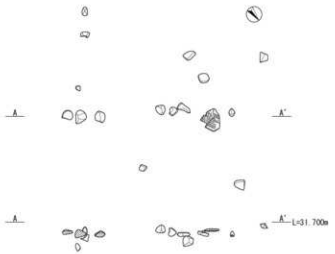


集石296号

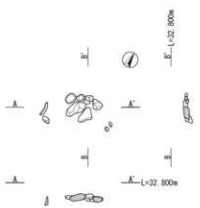


集石297号

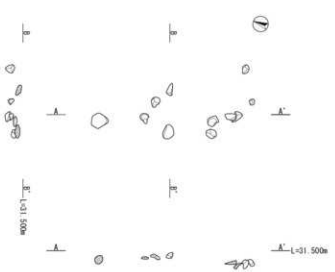
第220図　縄文時代前期Ｖａ層検出集石８



集石295号



集石298号



集石299号

第221図　縄文時代前期Ｖａ層検出集石９

第39表　縄文時代前期集石

掲図番号	遺構番号	検出区	層	土器	掘込	礫の集中	礫数	礫石材							礫の大きさ						備考
								安山岩(数/%)		ホルンフェルス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～5cm	～10cm	～15cm	～20cm	21cm～	数量	
213	277	L32			○	○	38	4	11%	29	76%	5	13%	0	38	2	36	0	0	0	38	
213	278	I35		2		○	441	232	53%	149	34%	29	7%	30	440	59	381	1	0	0	441	
214	279	G36				○	100	－	－	－	－	－	－	－	0	7	77	9	1	0	94	
214	280	I34				○	52	7	13%	31	60%	11	21%	3	52	2	48	2	0	0	52	
214	281	H35				○	48	25	52%	22	46%	1	2%	0	48	3	40	5	0	0	48	
215	282	K33				○	35	2	6%	28	80%	5	14%	0	35	0	32	3	0	0	35	
215	283	L33				○	31	2	6%	23	74%	5	16%	1	31	0	28	3	0	0	31	
215	284	K34				○	27	9	33%	10	37%	8	30%	0	27	0	27	0	0	0	27	
215	285	L33				○	14	12	86%	1	7%	0	0%	1	14	0	14	0	0	0	14	
216	286	I34･35					112	14	13%	75	67%	20	18%	3	112	2	101	9	0	0	112	
217	287	L34		1			60	17	28%	29	48%	14	23%	0	60	0	59	1	0	0	60	骨部式土器
218	288	L33	Va	1			48	11	23%	28	58%	8	17%	0	47	2	45	1	0	0	48	骨部式土器
217	289	C36					46	－	－	－	－	－	－	－	0	1	39	6	0	0	46	
219	290	J35					28	6	21%	18	64%	3	11%	1	28	2	24	2	0	0	28	
218	291	J34					27	3	11%	14	52%	5	19%	5	27	2	23	2	0	0	27	
219	292	I37					23	－	－	－	－	－	－	－	0	3	19	1	0	0	23	
220	293	L33					22	12	55%	7	32%	2	9%	1	22	0	21	1	0	0	22	
220	294	F34					18	－	－	－	－	－	－	－	0	1	16	1	0	0	18	
221	295	I35		1			16	3	19%	9	56%	3	19%	0	15	1	17	0	0	0	18	骨部式土器
220	296	G38					15	－	－	－	－	－	－	－	0	1	14	0	0	0	15	
220	297	G32･33					13	1	8%	9	69%	3	17%	0	13	0	11	2	0	0	13	
221	298	H34					11	0	0%	10	91%	0	0%	1	10	2	7	2	0	0	11	
221	299	L33					11	5	45%	6	55%	0	0%	0	11	1	10	0	0	0	11	

2　遺物

（1）土器

縄文時代前期に該当する土器は16～18類土器までの３種類の土器が出土している。すべてＶａ層からの出土である。

16類土器は遺跡の中央部，東側，南側の３か所にまとまって出土している。中央部で１個体，東側で２個体，南側で２個体の計５個体が出土している。

17類土器はH36区とK36区の２か所に集中して出土している。H36区からは口縁部片３点，K36区からは胴部から底部片２点１個体が出土している。出土量が少ないため，出土した土器は全て図化した。

18類土器は調査区全体から出土しているが，特に調査区の中心部より東側で多く出土しており，G33区・F35区・H35区などで出土量が多い。18類土器は縄文時代前期の土器としては，他の２型式と比較して圧倒的な量が出土しており，個体数も多い。そのうち108点を図化している。

16類土器（第222～226図　255～262）

16類土器は口縁部上端に２条の突帯を施し，突帯上にキザミもしくは刺突文を施す土器である。胴部には内外面ともに貝殻条痕調整がおこなわれている。外面の貝殻条痕調整の上から，弧状の貝殻条痕を重ねるものと，貝殻条痕調整のみの２種類の土器が出土している。

255・256はF・G32・33区から集中して出土している土器である。255は口縁部から底部，256は口縁部から胴部までの資料であり，同一個体である。

255は口縁部から底部まで残存している資料である。波状口縁を呈し，器高は波頂部で32.7cm，口径は35.8cmであり，やや胴部が間延びする器形の尖底土器である。口唇部および口縁部上端に施された２条の突帯上にキザミが施されている。胴部には縦位方向に貝殻条痕調整がおこなわれ，貝殻条痕調整の上に，下向きの弧状の貝殻条痕文が連続して施されている。この下向きの弧文は，胴部下半になると施されなくなる。内面は口縁部から底部まで貝殻条痕調整がおこなわれているが，口縁部上端部分のみ３mm程の幅でナデ調整がおこなわれている。ナデ調整の直下の貝殻条痕調整は，胴部の貝殻条痕調整と比べると，若干調整が浅く，この部分に関しても弱いナデ調整がおこなわれていると考えられる。

257はH37区から出土している。口縁部から底部付近まで残存しており，底部は残存していないが，残存している器高は34.7cmであり，尖底になるとすると，推定で約37cm程度の器高になると考えられる。口径は35.8cmである。口唇部および口縁部上端に施された２条の突帯上にはキザミが施されている。器面調整は内外面ともに全面に貝殻条痕調整がおこなわれており，外面の貝殻条痕調整は突帯直下までは横位方向，それ以下は斜位方向の貝殻条痕調整がおこなわれている。また，内面は口縁部付近では斜位，胴部中ほどから下位は横位の貝殻条痕調整がおこなわれている。内面の横位方向の貝殻条痕調整がおこなわれている部分は，貝殻条痕調整後にナデ調整をおこなっているのか，口縁部付近の斜位方向の貝殻条痕調整と比較すると，条痕が浅い。

258は261・262の周辺で出土した土器である。口縁部片であり，丸みを帯びた口唇部にはキザミ，口縁部上端には２条の突帯を施し，突帯上には棒状工具により刺突文が施されている。器面調整は突帯部分周辺のみナデ調整がおこなわれ，突帯より下位は貝殻条痕調整がおこなわれている。条痕の太さから，小さめの貝殻を用いて調整をおこなっていることが分かる。内面は貝殻条痕調整後に工具ナデ調整をおこなっているが，調整は粗い。胎土に雲母が含まれているのが特徴である。

259はI35区で出土した口縁部片である。口唇部は平坦に整形され，やや間隔を空けた刺突文が施されている。刺突文の形状から，施文原体は貝殻を用いたと考えられる。口縁部上端には２条の突帯が施され，突帯上には斜位方向の刺突文が施されている。器面調整は，外面の突帯部分は貝殻条痕調整後ナデ調整，突帯よりも下位は貝殻条痕調整がおこなわれている。内面器面調整は，斜位から横位方向の貝殻条痕調整がおこなわれている。胎土中には雲母が含まれている。

260は表土一括資料である。丸みを帯びた口唇部には，浅く刺突文が施され，口縁部上端には２条の突帯を施し，突帯上には棒状工具により刺突文が施されている。器面調整は突帯部分周辺のみナデ調整がおこなわれ，突帯より下位は斜位方向の貝殻条痕調整がおこなわれている。内面は口縁部上端に横位方向の貝殻条痕調整をおこなった後，縦位方向の貝殻条痕調整をおこなっており，一部貝殻条痕が重なっている。胎土には極わずかに雲母が含まれている。

261・262はL33区から集中して出土している。図化はしなかったが，大きめの胴部片も出土しており，１個体が集中して出土していると考えられる。

261は口縁部片である。丸みを帯びた口唇部にはキザミが施され，口縁部上端に２条の突帯を施し，突帯上に竹管状の工具により刺突文が施されている。器面調整は斜位方向の貝殻条痕調整がおこなわれているが，突帯周辺のみはナデ調整がおこなわれている。内面調整も貝殻条痕調整がおこなわれているが，こちらは貝殻条痕調整後に編んで調整がおこなわれており，下位にいくほど貝殻条痕調整がナデ消されている。外面には極わずかにススの付着が確認できる。

262は底部片である。器面調整は内外面ともに貝殻条痕調整がおこなわれているが，貝殻条痕調整後にナデ消

しがおこなわれている。底部部分は直径約３㎝で平坦気味に整形されている。また，器壁の厚さは，**261**の口縁部で８㎜，胴部下半で７㎜のところ，底部では厚さが30㎜と厚くなる。

17類土器（第227・228図　263～267）

263～265は口縁部片である。H36区よりまとまって出土している。

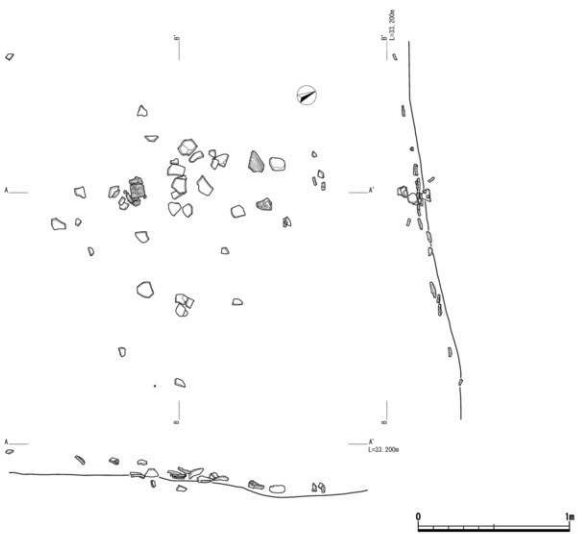
263は口縁部上端に４条のミミズバレ状の突帯が施される土器である。最上位の突帯から口唇部までは，約２㎝とやや幅の広い無文帯があるため，この部分にもう１条突帯が施されていた可能性が高く，突帯の痕跡のようなものも残存している。器面調整は外面はナデ調整，内面は貝殻条痕調整がおこなわれているが，やや浅く，貝殻条痕調整後に，軽いナデ調整がおこなわれていると考えられる。外面の突帯間の谷間にはススが付着している。

264は口縁部上端に４条のミミズバレ状突帯が施されている。下２条の突帯は摩滅が激しい。器面調整は外面はナデ調整，内面は貝殻条痕後ナデ調整がおこなわれているが，ナデ調整があまく貝殻条痕ははっきりと確認できる。

265は口縁部上端に２条のミミズバレ状突帯が確認できる土器である。破片資料であるため，突帯の数は確認できない。突帯は２条とも左側部分が剥落している。**263**と同様に，最上位の突帯から口唇部まで，やや幅の広い空間があるが，こちらには突帯の痕跡等は確認できない。器面調整は**264**と同様である。

266・267はK36区よりまとまって出土している。貝殻条痕調整や胎土・色調が類似している点からも同一個体と考えられ，周囲から出土している土器片もすべて同じ個体の破片と考えられる。

266は胴部片である。ミミズバレ状突帯が３条施されており，口縁部付近の破片である。**263～265**のミミズバレ状突帯と比較すると，突帯が低く，突帯に施された指つまみも丁寧である。器面調整は内外面ともに貝殻条痕調整がおこなわれており，貝殻条痕の太さからも，大き



第222図　16類土器　255・256出土状況

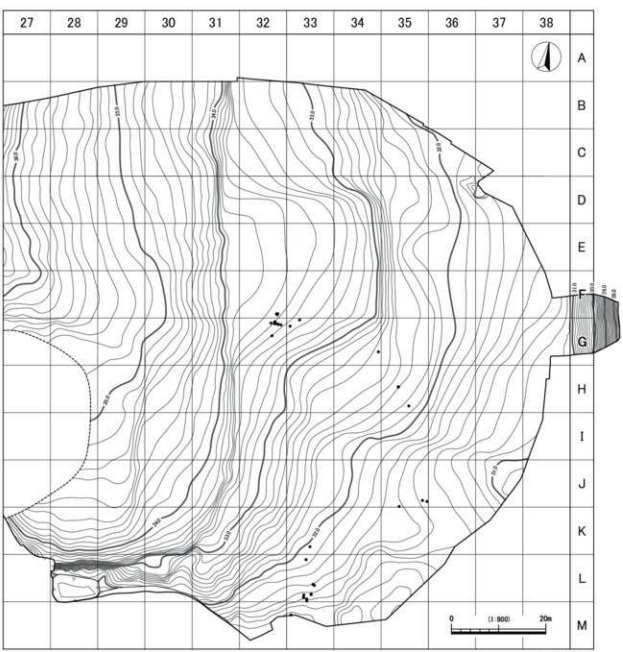
めの貝殻を用いて調整をおこなったことが分かる。貝殻条痕調整は突帯部分にも確認でき，貝殻条痕調整の上から直接，突帯を施していることが分かる。外面にはわずかにススの付着が見られる。

267は胴部から底部にかけての破片である。残存部での器高は16.9㎝，最大胴部径は35㎝の，やや丸みを帯びた大型の尖底土器である。内外面ともに深い貝殻条痕調整がおこなわれている。上位の部分にはススの付着が広範囲に確認できるが，外面の貝殻条痕調整が横方向におこなわれる部分から下位にはススの付着は確認できない。

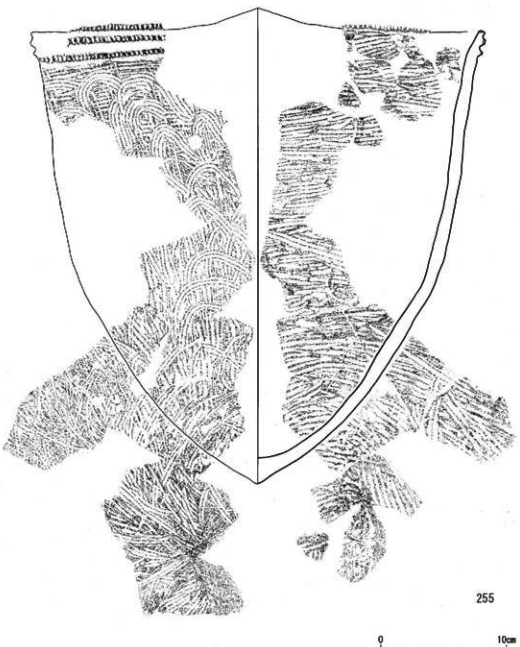
18類土器（第229～237図　268～374）

268～273は口縁部上端に刺突文を施す土器である。

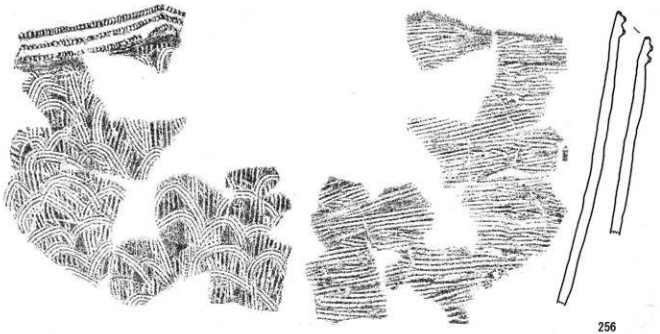
268は外反する土器の口縁部である。やや外傾する口唇部に１列の刺突文を施し，外面には棒状工具等を用いた斜位方向の刺突文が４列施されており，わずかにではあるが５列目も確認できる。内面にも同様の刺突文が５～６列施されており，その下位には横位の沈線文が施されている。内面の刺突文列は，外面の刺突文列と比較すると，やや粗く施されており，列に乱れが生じている。文様は全て同じ施文原体で施されていると考えられる。



第223図　16類土器分布図



第224図　16類土器 1



第225図　16類土器２

第226図　16類土器3

器面調整は内外面ともにナデ調整がおこなわれている。

269も外反する土器の口縁部である。やや外傾する口唇部には1列の刺突文が施される。外面には5列の刺突文が施され，内面にも6列程度の刺突文列が施されている。内面の刺突文に関しては，途中で刺突の方向が変化しているのが確認できる。**268**と**269**は器形・文様・施文原体・胎土・色調など多くの共通点を持つ土器であり，同一個体の可能性が非常に高い土器である。ただし，内面文様に関しては違いが見られ，内面の文様は部位により大きく変化する可能性のある土器であると考えられる。

270はわずかに外傾する土器であり，丸みを帯びた口唇部にキザミが施される土器である。外面には竹管文の様な刺突文が4列施される。内面にも同一の施文原体で3列の刺突文を施しているが，こちらは原体を下方から上に突き上げるように施した刺突文である。内外面ともにナデ調整が施され，胎土には雲母が含まれる。

271は外反する土器であり，丁寧にナデ調整が施された口唇部に斜位方向のキザミが施されている。外面は口縁部上端より，斜位方向の刺突文1列，2条の横位沈線文，斜位方向の刺突文1列が施される。さらにその下位には，横位沈線文が施されている。内面にも同様に刺突文と横位沈線文が交互に施されているが，こちらは沈線文が短沈線化する。内外面ともにナデ調整が施されているが，特に内面のナデ調整は丁寧におこなわれている。外面には部分的にススが付着している。

272は丸みを帯びた口唇部を持つ土器である。外面には刺突文と横位沈線文が交互に施されている。一見すると単純な棒状工具で文様を施しているように見えるが，2列目の刺突文は，竹管状の工具をほぼ真下から刺突しており，刺突文の上側に竹管文状の文様が残っている。内面は口唇部から口縁部上端にかけて1列の刺突文を施す。その下位には，横位の沈線文が非常に浅く施されている。

273は口唇部に斜位のキザミ，外面に斜位方向の刺突文と横位沈線文，内面に斜位短沈線文と横位沈線文を施す土器である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

274・275は口縁部上端に押引文を施す土器である。

274は外傾する口唇部を平坦に整形し，刺突文を施している。外面には4列の押引文が施されているが，1番目の押引文は上方からの圧迫により，押しつぶされた形状をしている。内面にも5列の押引文が施されている。

275も外傾する口唇部を平坦に整形するが，こちらは口唇部にも押引文を施している。外面は口縁部上端に横位の押引文を2条施し，その下位には横位の沈線文が施されている。内面は3条の横位押引文と，その下位に1条の横位沈線文が施されている。4条の中で1条のみが横位沈線文ということで，再三確認をおこなったが，やはり横位沈線文であった。内外面ともにナデ調整をおこなっている。

276・277は口縁部上端に斜位の短沈線文を施す土器である。**276**は平坦に整形した口唇部に刺突文を施し，外面には斜位の短沈線文を2列「く」の字状に施している。その下位には，横位沈線文と縦位沈線文が組み合わされて施されている様である。内面には横位短沈線文と考えられる文様が施されている。内外面ともにナデ調整をおこなっている。

277は大きく外反する土器である。やや丸みを帯びた口唇部には斜位方向にキザミが施されている。外面は口縁部上端に斜位短沈線文が1列施され，その下位には横位沈線文，横位沈線文と縦位沈線文を三角形の区画に幾何学的に組み合わせた文様が施されている。横位沈線文の上からは，文様を重ねるように縦位沈線文が施され，部分的に二重施文となっている。内面は口縁部上端に1列の斜位短沈線文が施され，その下位には横位沈線文が9列施されている。横位沈線文には切れ目が確認できる

第40表　16類土器観察表（西之薗式）

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	部位	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
224図	255	G32	Va	16類土器	完形	刻目突帯 貝殻条痕	無文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
第225図	256	G32	Va		口縁部	刻目突帯 貝殻条痕	無文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		にぶい褐色	灰褐色	良	
	257	H37	Va		完形	刻目突帯	無文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		黒褐色	黒褐色	良	
第226図	258	K33	Va		口縁部	刺突突帯	無文	ナデ 貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	○	○		橙色	褐色	良	
	259	I35	Va			刺突突帯	無文	ナデ 貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	○	○		褐色	にぶい褐色	良	
	260	—	表土			刺突突帯	無文	ナデ 貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	261	L33	Va		口縁部	刺突突帯	無文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		橙色	にぶい褐色	良	
	262	L33	Va		底部	無文	無文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		橙色	橙色	良	

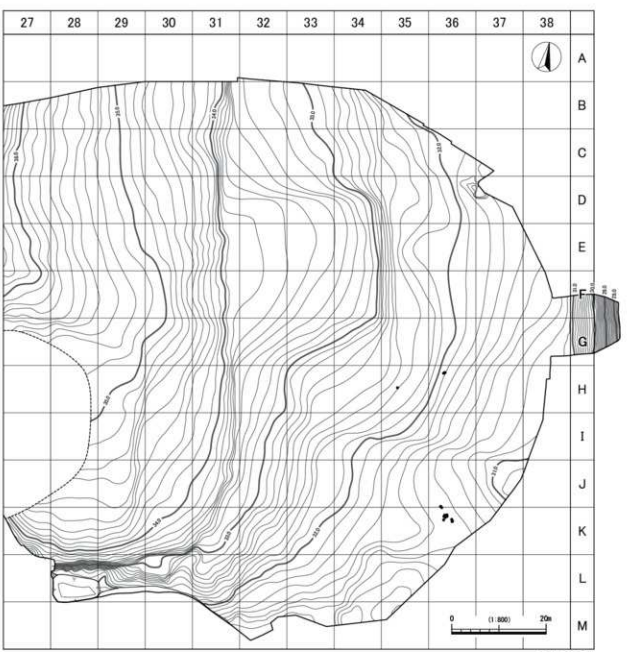
ため，短沈線文の可能性も考えられる。器面調整は内外面ともに非常に丁寧なナデ調整がおこなわれている。

278～318は口縁部上端に横位の沈線文を施す土器である。

278～282は内面に刺突文を施す土器である。**278**は口縁部が外反する土器であり，平坦に整形された口唇部には斜位方向の刺突文が施されている。外面には４条の横位沈線文，その下位には２方向の斜位沈線文が施されている。斜位沈線文の上端は，４条目の横位沈線文により切られているため，斜位沈線文が先に施されていることが分かる。内面は刺突文が３列施されている。刺突文ではあるが，３条目の刺突文は極端に隣接して施文されているため，押引状にも見える。

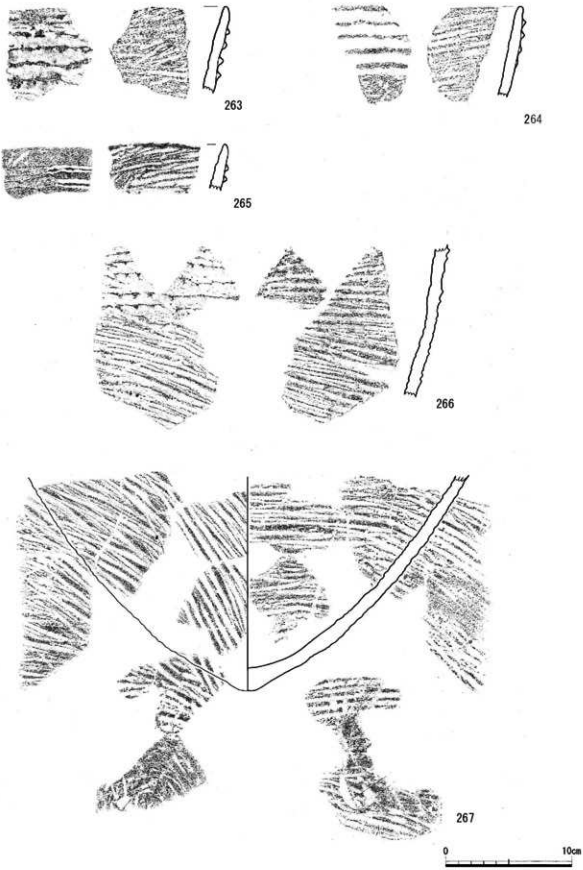
279は丸みを帯びた口唇部にキザミが施されている。外面は口縁部上端に４条の横位沈線文が施され，その下位には横位沈線文と斜位沈線文の組み合わせ文様が施されている。内面は２列の刺突文が施されている。刺突文は下位方向から上向きに刺突されている。内外面ともにナデ調整が施されており，外面には広くススが付着している。

280は**278**と類似した文様を施す土器であるが，施文原体や胎土は異なる。また胎土中にやや大きめの礫を含む。



Ⅴa層コンタ図

第227図　17類土器分布図



第228図　17類土器

281は外面にやや粗めの横位沈線文を施す土器である。沈線文の間隔は広く，直線的ではなく，やや曲線的に施されている。内面には２列の刺突文が施されるが，この刺突文は下位方向から上向きに刺突がおこなわれている。外面文様はやや粗めではあるが，器面調整は内外面ともにナデ調整が丁寧におこなわれている。

282は小型の土器の口縁部片である。口唇部と内面には同様の刺突文が施され，外面には同一の施文原体である細めの棒状工具を用いて施したと考えられる横位沈線文が施されている。

283・284は内面に横位の押引文を施す土器である。口唇部にも押引文が施されている。283・284ともに，口縁部上端に横位沈線文を３～４条施し，その下位には横位沈線文と縦位沈線文を三角形の区画で幾何学的に組み合わせ文様が施されている。内外面はともにナデ調整が施されている。

285～289は内面に刺突文と横位沈線文を施す土器である。５点ともに口縁部が外反する土器であり，平坦に整形された口唇部に，285は斜位方向の刺突文，286・287は斜位のキザミを施している。

285は外面に３条の横位沈線文を施し，その下位には横位沈線文と縦位沈線文を，三角形の区画に幾何学的に組み合わせた文様が施されている。

286の外面は口縁部上端に，やや粗めの横位沈線文が施され，その下位に斜位の刺突文が１列施されている。内面には縦位や斜位の刺突文と，横位沈線文が交互に施されている。

287の内面は１列の斜位刺突文の下位に横位沈線文が施されている。

288は外傾する口唇部に刺突文が施され，内面には刺突文・横位沈線文が施されている。この内面文様は，特に上位の文様はデナデ調整により文様がつぶれており，さらに上位と下位ではナデ調整の様子が異なっているため，何らかの理由で口縁部上端部分のみ文様施文後に，追加でナデ調整をおこなったと考えられる。

289は平坦に整形された口唇部に，一見するとキザミに見えるが，縦位の刺突文が施されている。内面にも縦位の刺突文が，横位沈線文と交互に施されている。同じ縦位方向の刺突文であるが，口唇部の刺突文は真上から，内面の刺突文は下位方向から上方向に向けて施文原体を刺突していることが確認できる。

290は口唇部に斜位のキザミ，内面に「く」の字状に斜位短沈線文を施している土器である。

291は口縁部上端に２条の横位沈線文を施し，その下位に「く」の字状に斜位短沈線文を施す土器である。

292の内面には，口縁部上端に２方向の斜位の短沈線文による三角組合せ文様が施され，その下位には２列の刺突文が施されている。

293の口唇部は平坦に整形され，棒状工具による刺突文が施されるが，全体に刺突文があるわけではなく，約半分程の範囲の口唇部には文様が施されていない。

294～310は内面に横位沈線文を施す土器である。全て口縁部は外反もしくは外傾する。294は口縁部が外反する土器であり，丸みを帯び外傾する口唇部には斜位の刺突文が施されている。外面は口縁部上端に５条の横位短沈線文，その下位に２～３条の横位沈線文，さらにその下位には横位沈線文と縦位沈線文による三角形区画の幾何学文様が施されている。内面には８列の横位短沈線文が施されている。303・304は丸みを帯びた口唇部を持つが，他の土器の口唇部は平坦に整形されている。口唇部には刺突文が施されるものが多いが，294・299には押引文，300・306・307にはキザミが施される。

311はやや内湾する口縁部を持つ土器であり，ボウル状の器形を呈すると考えられる土器である。丸みを帯びた口唇部には文様は施されず，外面には，口縁部上端に２条の横位沈線文，その下位には横位沈線文と斜位沈線文による組み合わせ文様が施されている。内面は無文である。器面調整は内外面ともにナデ調整がおこなわれており，内面は指ナデ調整がおこなわれている。外面の最上位の横位沈線文の位置に，焼成前に穿孔された穴が確認できる。外面から内面に向けて穿孔されており，穿孔の内面側では粘土の盛り上がりが見られる。

312は丸みを帯びた口唇部を持つ土器であり，口唇部には全面ではなく，部分的にキザミが施されている。外

第41表　17類土器観察表（鼻B式）

掲図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	部位	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第228図	263	H36	Va	17類土器	口縁部	ミミズバレ突帯	無文	ナデ	貝殻条痕→ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	スス付着
	264	H36	Va			ミミズバレ突帯	無文	ナデ	貝殻条痕→ナデ	○	○	○		○		灰黄褐色	にぶい黄橙	良	スス付着
	265	H36	Va			ミミズバレ突帯	無文	ナデ	貝殻条痕→ナデ	○	○	○		○		灰黄褐色	にぶい黄橙	良	スス付着
	266	K36	Va		胴部	ミミズバレ突帯	無文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		黒褐色	にぶい黄橙	良	スス付着
	267	K36	Va		底部	無文	無文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	スス付着

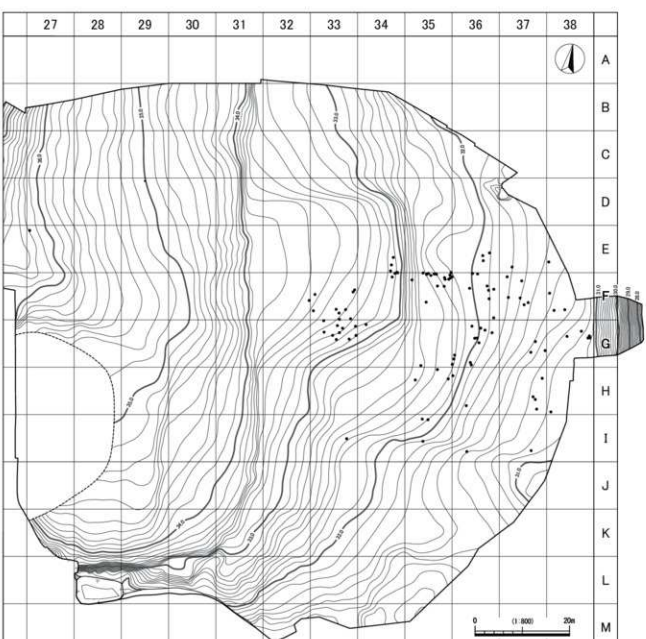
面の横位沈線文は粗く施され，内面は無文である。

313も丸みを帯びた口唇部を持つ土器であり，破片資料であるため，はっきりとはしないが，口唇部の一部が盛り上がり，突起状もしくは波状口縁になる可能性が考えられる。文様の施文は粗い。内面の口縁部上端は，焼成前に工具により表面が削り取られており，意図的に口縁部を細く，鋭角に作ろうとした意図が読み取れる。

314～318は二重施文を施す土器である。

314・315は外面に，316は内外面にそれぞれ横位沈線文の上から，２本で１単位の斜位沈線文が施されている。また，317は内面に横位沈線文の上から斜位沈線文が施されている。

314は文様以外にも特徴のある土器である。314は２つの破片が接合した資料であり，その接合部分から等距離の位置に，穿孔途中の補修孔が確認できる。補修孔は２か所ともに，土器の器壁の半ほどまで穿孔されている。向かって右側の補修孔は完全な形をしているが，左側の補修孔に関しては，補修孔の穿孔部分でちょうど補修孔を真っ二つにするように，横方向に土器が破損している。このことから，314は土器にできた縦方向のひび割れを補修するために，補修孔を穿孔していたが，穿孔部分で土器が横方向に破損してしまったために，作業途中で土



第229図　18類土器分布図

器を放棄した資料と考えられる。補修孔は内外面の両方向から穿孔するのが一般的であり，314には内面からの穿孔は確認できないため，穿孔は外側からおこなったと見られる。

318は内外面ともに口縁部上端に押引文が施されており，外面はその下位に縦位沈線文が施されている。外面ではその文様の上から，下向きの弧状の曲線文が施されている。

319～343は口縁部上端に横位沈線文と縦位沈線文が施される土器である。この横位沈線文と縦位沈線文はそれぞれ三角形の区画の中に施され，幾何学的な文様構成となっているものが多い。

319～321は内面に刺突文を施す土器である。319・320は２列，321は３列の刺突文が施されている。321は胎土中に雲母を含んでいる。

322～324は内面に刺突文と横位沈線文を施す土器である。322の内面文様は，２列の刺突文の下位に，３条の横位短沈線文が施される。323・324の口唇部には押引文が施されている。内面文様は刺突文と横位沈線文が交互に施される。４列目までは刺突文と横位沈線文が平行に施されているが，最下位の刺突文・横位沈線文は，上位の文様の途中から出現している。323・324の文様等は非常によく似ているが，土器の胎土は異なる。

325～334は内面に横位沈線文を施す土器である。325は口縁部が外反する土器であり，胴部は少し膨らむ器形を呈していると考えられる。外傾する口唇部は平坦に整形され，斜位方向のキザミが施されている。外面には横位沈線文と縦位沈線文の三角形区画の幾何学文様が３段施されている。内面は横位短沈線文が６条施されている。内外面ともにナデ調整が施され，外面にはわずかではあるがススが付着している。

326は外傾する口唇部に斜位方向の刺突文が施されている。口縁部下位には補修孔が確認でき，回転穿孔により内外面より穿孔されており，器壁のほぼ中ほどで貫通している。胎土中には雲母が含まれている。

327は口縁部が大きく外反する土器であり，外傾する口唇部には326とよく似たキザミが施されている。

328の胎土には雲母が含まれている。

329の胎土には赤色の小礫が含まれており，外面にはわずかにススが付着している。

330は他の土器と比べると，胎土・色調がやや異なる土器であり，重量もやや軽い印象を受ける土器である。

331は胎土に大きさ約１㎝四方，厚さ約４㎜の礫が含まれている。331の器壁の厚さが７㎜なので，混和剤としての礫としてはやや大きすぎる感がある。

335は内面に斜位方向のキザミと横位沈線文を施す土器である。口縁部は外反し，丸みを帯びた口唇部には棒状工具により刺突文が施されている。全体的に施文が粗く，外面には文様の空白部分が見られる。

336は内面に方向の斜位短沈線文が施されている。

337～341は内面が無文の土器である。

337・338は口唇部にキザミが施され，339～341の口唇部は無文である。341の内面口縁部直下には押圧のような痕跡があるが，文様かどうかははっきりしない。

342・343は口縁部上端に横位沈線文と縦位沈線文が施されているが，三角形区画の文様にならない土器である。342の胎土には多量の雲母が含まれている。

344～358は口縁部上端に斜位沈線文を施す土器である。

344～347は内面に刺突文を施す土器である。344・346の外面の口縁部上端は，わずかに肥厚している。344～346は３点とも口唇部にはキザミが施されている。外面には２方向の斜位沈線文が施されており，344には斜位沈線文間に空白が見られ，345の斜位沈線文は部分的に重なる。内面には２列の刺突文が施され，胎土には雲母が含まれている。347は小型の土器であり，内面には１列の刺突文が施されている。

348・349は内面に刺突文と横位沈線文が施される土器である。349は胎土に雲母が含まれる。

350は内面に斜位短沈線文と横位沈線文が施される土器である。胎土には雲母が含まれている。

351～354は内面に横位沈線文を施す土器である。351の沈線文は内外面ともに短沈線化し，沈線文の両端が細くなる傾向が見られるため，丁寧に文様を施している様には見えない。353は文様を施した後に，口縁部上端の約７㎜幅をナデ調整しているため，口縁部上端の斜位沈線文の上部は，このナデ調整の影響を受けている。しかし，影響は部分的であり，当初からこのナデ調整をおこなっている部分を考慮に入れたうえで，口縁部上端より少し下位に文様を施していることが分かる。

355の内面には斜位沈線文と横位沈線文が施されている。外面にはわずかにススが付着している。

356の内面には横位沈線文が施されており，その上から斜位の沈線文が施され，二重施文となっている。胎土には雲母が含まれている。

357・358の内面は無文である。357の口唇部は，わずかではあるが一部突起状になっている部分が見られる。

359は外面に曲線文を施す土器である。口縁部は外反し，外傾する平坦に整形された口唇部には刺突文が施される。外面にはあらゆる方向に波状の曲線文が施されている。内面には斜位の短沈線文が「く」の字状に３列施されている。胎土には雲母が含まれている。

360は外面に文様が施されない土器である。外面には貝殻条痕調整が残り，沈線文等の文様は確認できない。あえて言うならば，口縁部上端に残る貝殻条痕調整が，横位方向におこなわれており，それが文様として機能していた可能性が考えられる。丸みを帯びた口唇部には刺

突文が施され，内面には横位沈線文が施されている。

361～368は胴部片である。破片の大きなもの，文様が特徴的なものを抽出して掲載している。

361は内面に刺突文が確認できることから，口縁部付近の破片と考えられる。外面には縦位短沈線文が施され，文様の配置から考えると，口縁部上端から縦位沈線文のみが施されている可能性が高い。器面調整に関しては，外面はナデ調整がおこなわれているが，内面は貝殻条痕調整が残る。また，外面にはススが付着している。

362～364は横位沈線文と縦位沈線文が三角形の区画で幾何学的に施されている。363・364はその器形から，底部に近い部分であると考えられる。

365も横位沈線文と縦位沈線文が組み合わさる文様が施されているが，三角形の区画は無く，割と乱雑に文様が施されている。

366～368は胴部に刺突文が施されている土器である。366は刺突文と縦位沈線文，367は刺突文と曲線文が施されている。368は器形からすると底部に近い部分と考えられ，三角形に区画された斜位沈線文の間に，２列の刺突文が施されている。

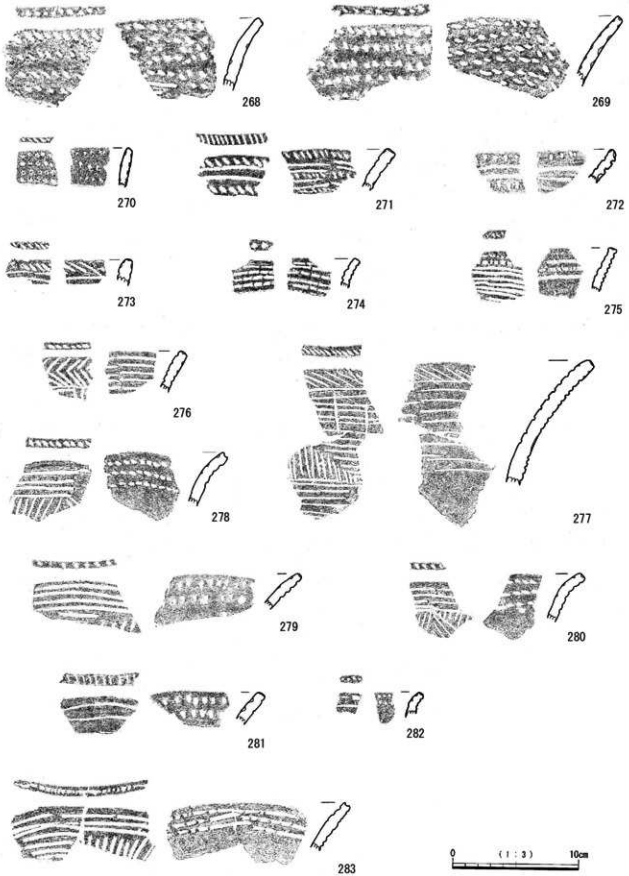
369～374は底部片である。369～373は沈線文の組み合わせにより，「クモの巣」状の文様が施されている。底部は丸底の形状をしているが，372のみは平底に近い形状となる。

369は底部中心に集約される沈線文の上から，横位沈線文を二重施文し，「クモの巣」状の文様になるように施文している。

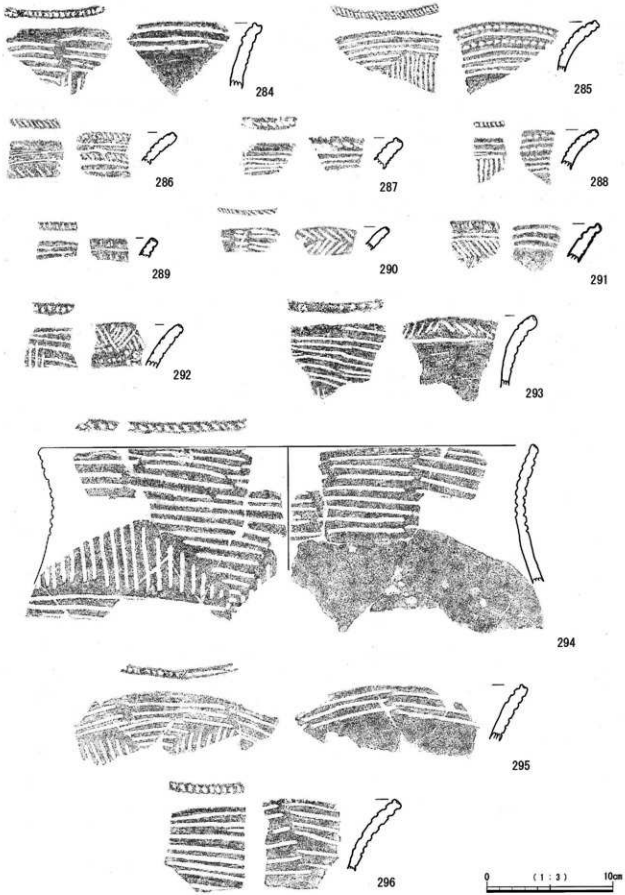
374は底部中心から十字形に縦位沈線文を立ち上げ，その区画の中を斜位沈線文で充填している。

第42表　18類土器観察表 1

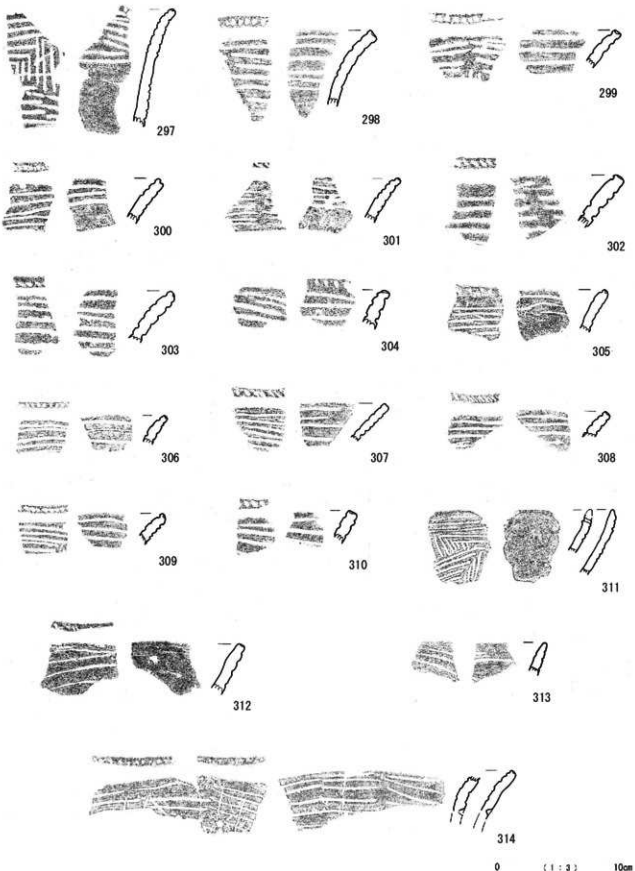
挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第230図	268	G36	Ⅳa	18類土器	刺突文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	黒褐色	にぶい黄橙	良	
	269	G35	Ⅴa		刺突文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	黒褐色	にぶい黄橙	良	
	270	H37	Ⅴa		刺突文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	
	271	G36	Ⅴa		刺突文 横位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	にぶい赤褐	良	スス付着 （極微量）
	272	H37	Ⅴa		刺突文	刺突文 横位沈線文	ナデ	貝殻条痕 →ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	褐色	良	
	273	I35	Ⅴa		刺突文 横位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	黒褐色	良	
	274	G34	Ⅴa		横位押引文	横位押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	275		遺構内		横位押引文 横位沈線文	横位押引文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	古墳時代 竪穴建物跡出土
	276	E34	Ⅳa		斜位沈線文 横縦位沈線	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	黒褐色	良	
	277	E36	Ⅴa		斜位沈線文 横縦位沈線	斜位沈線文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	にぶい橙色	良	二重施文
	278	E38	Ⅴa		横位沈線文 斜位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	暗褐色	良	
	279		遺構内		横位沈線文 斜位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	黒褐色	黒褐色	良	古墳時代 竪穴建物跡出土
	280	F37	Ⅳa		横位沈線文 斜位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	281	F33	Ⅴa		横位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	明赤褐色	良	
	282	E35	Ⅳb		横位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	283	G36	Ⅴa		横位沈線文 斜位沈線文	横位押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
第231図	284	G36	Ⅴa	18類土器	横位沈線文 縦位沈線文	横位押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	285	F33	Ⅴa		横位沈線文 縦位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	明赤褐色	良	
	286	F35	Ⅴa		横位沈線文 刺突文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	
	287	I35	Ⅳa		横位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	288	F34	Ⅴa		横位沈線文 縦位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	289	F35	Ⅴa		横位沈線文 縦位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	290	D28	Ⅴa		横位沈線文	斜位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	



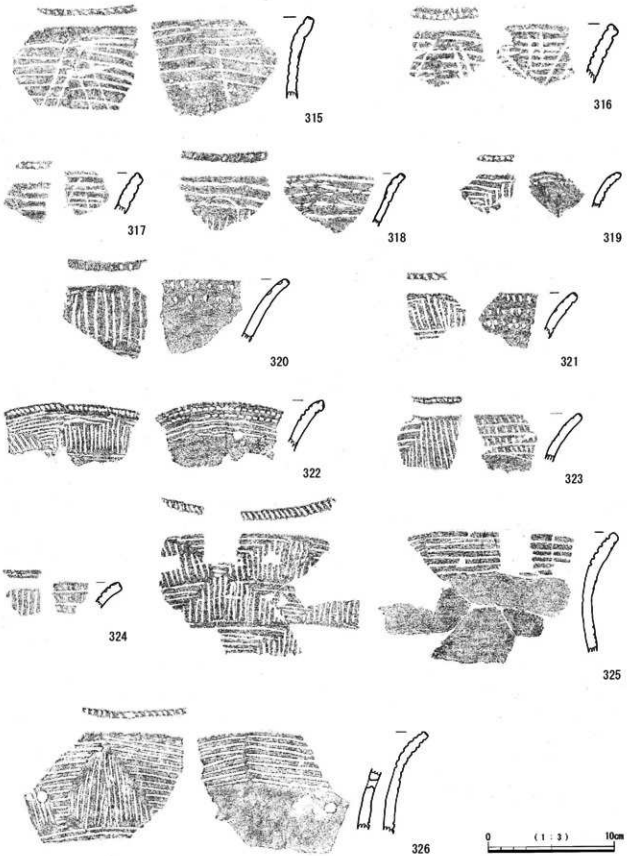
第230図　18類土器 1



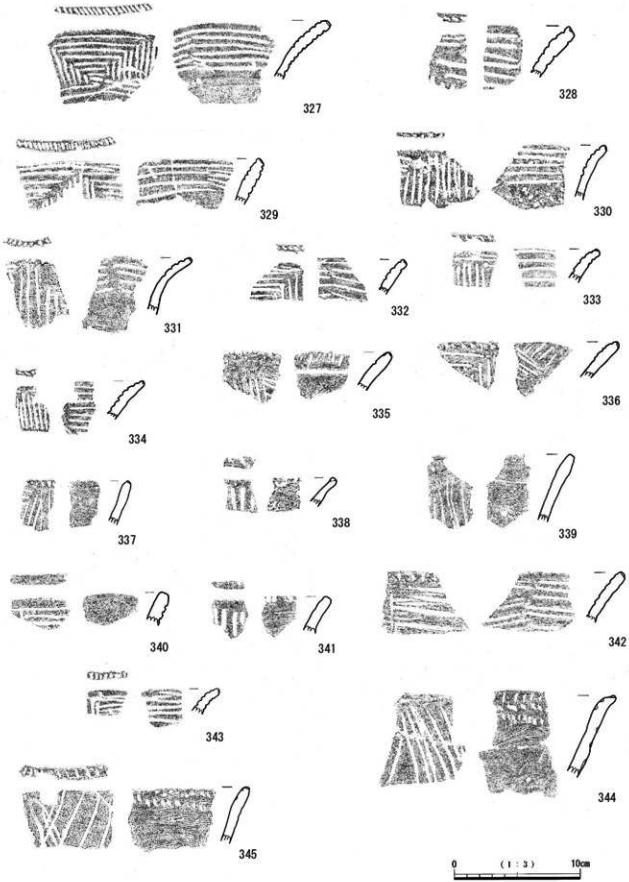
第231図　18類土器２



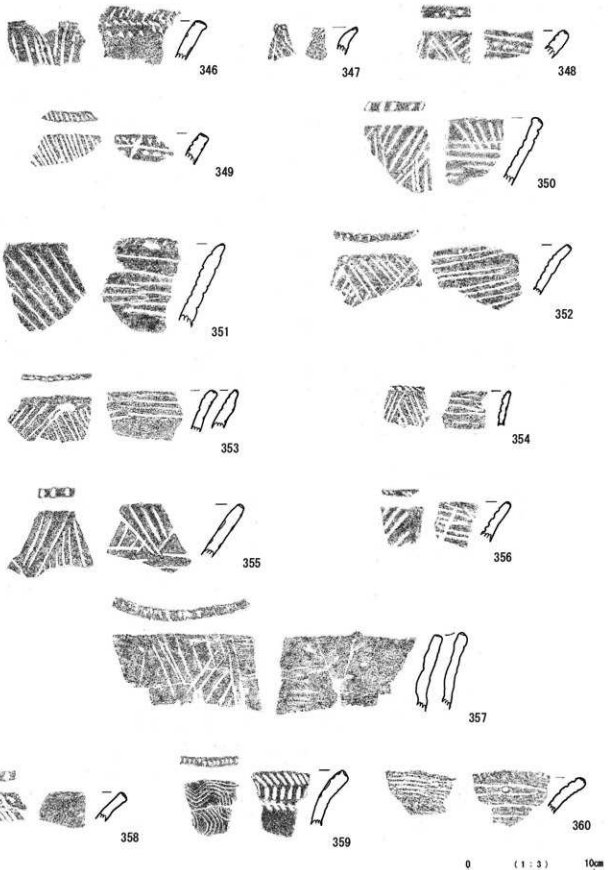
第232図　18類土器３



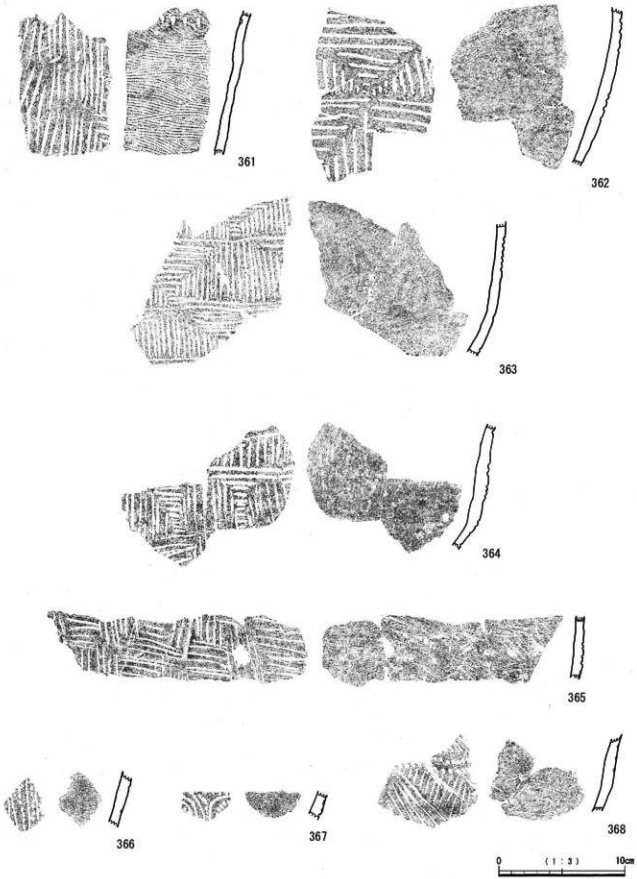
第233図　18類土器4



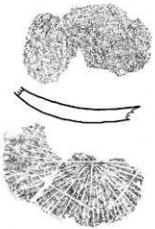
第234図　18類土器５



第235図　18類土器6



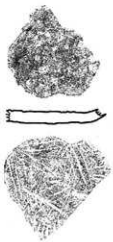
第236図　18類土器 7



369

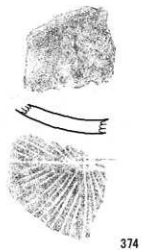
370

371



372

373



374

第237図　18類土器８

第43表　18類土器観察表２

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第231図	291		遺構内		横位沈線文 斜位沈線文	横位押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	スス付着 古墳時代遺構内
	292	D34	Ⅳa		横位沈線文 縦位沈線文	斜位沈線文 刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	293	E27	Va		横位沈線文 縦位沈線文	斜位沈線文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	橙色	良	スス付着 (細破棄)
	294	F36	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	295	G35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	スス付着 (少量)
	296	E34	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	明赤褐色	良	スス付着（強調）
第232図	297	H35	Va	18類土器	横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい褐色	黒褐色	良	
	298	I33	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙色	橙色	良	
	299	F35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙色	橙色	良	
	300	F37	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	301	H37	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	橙色	良	
	302	F36	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	303	G37	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	304	F36	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	305	H37	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	306	D29	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	307	G33	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	黒褐色	暗赤褐色	良	
	308	F36	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	
	309	G34	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	黒褐色	良	
	310	F33	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	黒褐色	暗赤褐色	良	
	311	G35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	312	H35	Va		横位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	313	E35	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	
	314	G33	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい黄橙	良	二重施文・スス 補修孔（途中）
第233図	315	F37	Va	18類土器	横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	橙色	良	二重施文・スス
	316	F35	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい黄橙	良	二重施文
	317	E35	Va		横位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい黄橙	良	二重施文・スス
	318	F37	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	橙色	良	二重施文
	319	H35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	褐色	褐色	良	
	320	F33	Va		縦位沈線文 横位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	黒褐色	良	スス付着 (細破棄)
	321	F36	Va		横位沈線文 縦位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	
	322	G36	Ⅳa		横位沈線文 縦位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	にぶい赤褐	良	
	323	E35	Ⅳb		横位沈線文 縦位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	
	324	E36	Va		縦位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	325		遺構内		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	褐色	良	
	326	F37	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙色	にぶい褐色	良	補修孔
第234図	327	G33	Va	18類土器	横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	褐色	良	スス付着 (細破棄)
	328	G38	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙色	にぶい橙色	良	
	329	F35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	褐色	良	スス付着 (細破棄)
	330	E34	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	331	G36	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	にぶい橙色	良	

第44表　18類土器観察表３

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様		器面調整		胎土					色調		焼成	備考
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面	
第234図	332	G33	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい赤褐	良	
	333	G35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	にぶい橙色	良	
	334	E35	Va		縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	褐色	にぶい黄橙	良	
	335		遺構内		横位沈線文 縦位沈線文	斜位沈線文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	古墳時代 堅穴建物跡出土
	336	B38	Va		横位沈線文 縦位沈線文	斜位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	337	F35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	
	338	D38	Va		縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	339	I35	Va		縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	明赤褐色	良	
	340	F35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	褐色	にぶい褐色	良	
	341	I37	Va		縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	342	E34	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	橙色	良	スス付着 黒斑多い
	343	G36	Va		横位沈線文 縦位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	にぶい橙色	良	
	344	G38	Va		斜位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	345	G38	Va		斜位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
第235図	346	G39	Va	18類土器	斜位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	347	G33	Va		斜位沈線文	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	黒褐色	良	
	348	G38	Va		斜位沈線文	横位沈線文 刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	349	G33	Va		斜位沈線文	刺突文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい褐色	良	
	350	E35	Va		斜位沈線文 縦位沈線文	斜位沈線文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	黒褐色	黒褐色	良	スス付着 (少量)
	351	I37	Va		斜位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙色	橙色	良	
	352	I37	Va		斜位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	353	F32	Va		斜位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	暗赤褐色	暗赤褐色	良	
	354	E35	Va		斜位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	黒褐色	良	
	355	G37	Va		斜位沈線文	斜位沈線文 横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	にぶい橙色	良	スス付着 (微量)
	356	E29	Va		斜位沈線文	横位沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	二重施文
	357	I37	Va		斜位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	358	H35	Va		斜位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	黒褐色	良	
	359		遺構内		曲線文	短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	古墳時代 堅穴建物跡出土
	360	E36	Va		横位沈線文 斜位沈線文	横位沈線文	粗いナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
第236図	361	F35	Va	18類土器胴部	縦位沈線文	刺突文	ナデ	貝殻条痕	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	橙色	良	スス付着 (微量)
	362	E36	Va		横位沈線文 縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	363	F35	Va		横位沈線文 縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	にぶい橙色	良	
	364	E34	Va		横位沈線文 縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい黄橙	良	スス付着
	365	F38	Va		横位沈線文 縦位沈線文	無文	ナデ	ケズリ→ナデ	○	○	○	○	○	○	橙色	橙色	良	
	366		遺構内		刺突文 縦位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	暗赤褐色	良	古墳時代 堅穴建物跡出土
	367		遺構内		刺突文 曲線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	古墳時代 堅穴建物跡出土
	368	F34	Va		刺突文 斜位沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい橙色	にぶい赤褐	良	
第237図	369	F36	Va	18類土器底部	沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	にぶい黄橙	良	二重施文
	370	G38	Va		沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄橙	灰黄褐色	良	
	371	G33	Va		沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	褐色	良	
	372		遺構内		沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	明赤褐色	良	古墳時代 堅穴建物跡出土
	373	F35	Va		沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	にぶい赤褐	黒褐色	良	
	374	G33	Va		沈線文	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	橙色	橙色	良	

（2）石器

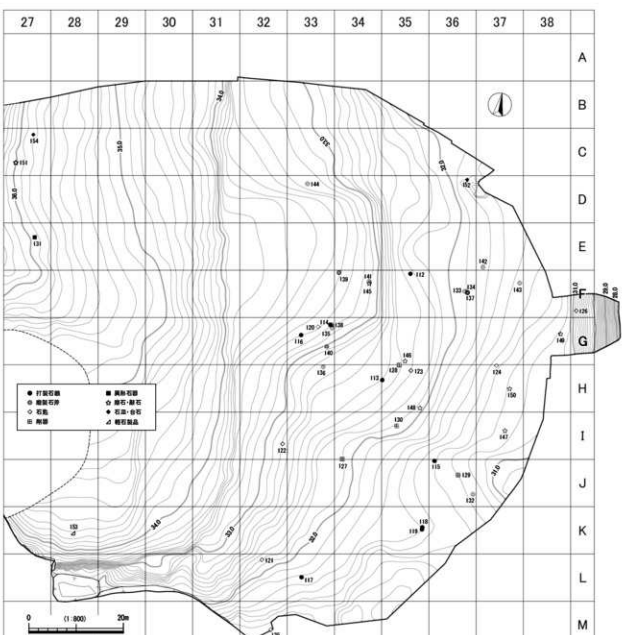
Ⅴ層は縄文時代前期に比定される層位である。報告に際しては，縄文時代早期と同様に遺物を出土層位別及び器種別に掲載し，図化した遺物について遺物分布図を作成して掲載している。

Ⅴ層出土石器

本層位からは，打製石鏃23点，石匙11点，削器９点，楔形石器１点，異形石器１点，打製石斧８点，磨製石斧22点，礫器２点，砥石５点，磨・敲石34点，石皿・台石13点，軽石製品７点及び剥片類12点が出土しており，そのうち 43点を図化した。図化した遺物の分布状況を見ると，石皿１点，磨・敲石１点，異形石器１点がC～E 27区から出土している以外は，遺物のほとんどが32区以東の調査区東側から散在して出土している。

打製石鏃（第239図　S112～S119）

S112～S119は打製石鏃であり，S112・S113は１類，S114～S118は２類，S119は３類に分類される。S112は形状が三角形を呈し，基部に浅く抉りが入る。S113は基部にわずかに抉りが入る。先端部と左脚端部を欠失している。S114は先端部と左脚端部を欠失している。表裏面ともに細かい剥離が施される。S115は形状が二



Va 層コンタ図

第238図　Ⅴ層剥片石器類分布図

等辺三角形を呈し，基部に抉りが入る。S116は基部に抉りが入る。左脚端部を部分的に欠失している。S117は基部に抉りが入る。S118は基部に抉りが入る。先端部から側縁中央にかけて膨らみ，脚部にかけて幅がやや狭まる。先端部と左側縁部を欠失している。S119は五角形状を呈し，基部には抉りが入る。肩部が上部に位置し，肩部から脚部にかけて湾曲している。

石匙（第239～241図　S120～S126）

S120～S126は石匙であり，S120～S122は1類，S123～S126は2類に分類される。S120は自然面を有する縦長に近い剥片を素材とし，素材の打面部を摘み部に据えた石匙である。左側縁は折断面であり，刃部は右側縁に作出されている。刃部と摘み部の境である頸部の作出は，左側縁では部分的に確認できるのみである。S121は黒曜石製であり，薄手で縦長の剥片の打面部を摘み部に据えている。刃部は左側縁に作出されており，右側縁には下半部に微細な剥離痕が確認できる。S122は横長の剥片を素材としたもので，刃部は左側縁に作出されている。右側面は折断面であり，上面は自然面である。S123はチャート製であり，弧状を呈する刃部が作出されている。S124はS123に形態的に類似しているが，やや小型である。刃部は主に表面側から作出されている。S125は薄手で横長の剥片を素材としたもので，素材の末端側に直線状の刃部が作出されている。右側縁には自然面が残る。S126は裏面が主要剥離面であり，素材の打面側に摘み部が作出されている。刃部は緩やかな弧状を呈し，左側縁は表面側から二次加工が施されている。

削器（第241・242図　S127～S130）

S127～S130は削器である。S127はチャート製で縦長の剥片を横位に用い，素材の片側の側縁から末端にかけて刃部が作出されている。反対側の側縁は折断面であり，折断後にややバルブが発達する素材の中ほどまで達する二次加工が連続して施されている。S128は裏面が主要剥離面であり，素材の片側の側縁に主に腹面側から二次加工が施されて刃部が作出されている。S129は自然面を大きく残す横長の剥片を素材とし，素材の末端側に表裏面から角度の浅い二次加工が施されて，弧状を呈する刃部が作出されている。S130はチャート製の削器であり，左側面は折断や二次加工によって作出された平坦面である。右側縁上半には表裏面から二次加工が施されて斜刃を呈する刃部が作出されており，断面三角形状を呈している。削器に分類しているが，他の器種の可能性もある。

異形石器（第242図　S131）

S131は異形石器である。裏面は主要剥離面であり，素材の末端側が肥厚する縦長の剥片を素材としている。両側縁に腹面側から二次加工が施されており，横断面が台形に近い形状を呈している。下面には素材の打面が残る。用途は不明である。

磨製石斧（第243～246図　S132～S144）

S132～S144は磨製石斧であり，S132～S136は1類，S137～S142は2類，S143・S144は3類に分類される。S132は刃部が蛤刃を呈する石斧であり，基部まで研磨が施される。基部の一部に敲打痕が見られる。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕が見られる。S133は刃部が蛤刃を呈する石斧であり，基部まで研磨が施される。S134は刃部が蛤刃を呈する石斧である。基部には敲打痕が確認され，刃部には摩耗が見られる。S135は偏刃の磨製石斧である。表裏面ともに剥片剥離による粗割後に研磨が施されている。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕が見られる。S136は扁平な石斧である。S137は扁平な石斧である。基部まで研磨を施しており，表裏面ともに剥離で整形した後に研磨を施している。S138は撥形を呈する。基部まで研磨が施されている。刃部を一部欠失している。S139は撥形を呈する。基部に見られる剥離痕は，研磨痕との先後関係から粗割時の加工痕である。S140は撥形を呈する。研磨は基部まで施されており，刃部はやや湾曲した形状となっている。全体的にやや風化が進んでいる。S141は基部を欠失している。刃部には使用時に生じたと思われる摩滅が見られる。S142は短冊形を呈し，器厚は薄い。基部と刃部の一部を欠失している。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕が見られる。S143は鑿形を呈する小型の石斧である。基部と刃部を欠失している。S144は鑿形を呈する小型の石斧である。研磨が基部まで施されている。刃部には使用時に生じたと思われる摩滅が見られる。

磨石（第246・247図　S145～S151）

S145～S151は磨石である。S145は表面中央に凹みを持ち，裏面下半にも浅い凹みが見られる。右側面下半に擦痕が見られることから，磨面として利用していた可能性がある。裏面右側面上半を欠失している。S146は小型の棒状を呈する礫を用いている。敲打痕は上面と下面に集中して見られ，敲石として利用している。敲打痕は右側面にも見られる。S147は左側面下半を欠失している。側面には現存する範囲で全面に敲打痕が見られ，表面にも部分的に確認できる。S148は楕円形を呈する磨・敲石である。敲打痕は表裏面に見られる。S149は小型の棒状を呈する礫を素材としている。上面に敲打痕が見られ，敲石として利用している。下半部を欠失している。S150は楕円形を呈する礫を素材としている。敲打痕が見られる。表面上半を部分的に欠失している。S151は表面に浅い凹みを持ち，裏面にも敲打痕が見られる。表裏面を素面として利用している。

石皿（第247図　S152・S153）

S152・S153は石皿である。S152は大型の礫を素材としており，大半を欠失している。表面に敲打痕が見ら

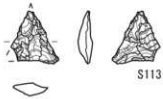
れる。S153は扁平な大型の礫を素材としており，下半部を欠失している。表面には緩やかな凹みが見られ，敲打痕が確認できる。

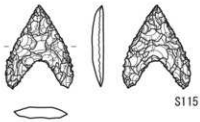
軽石製品（第247図　S154）

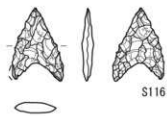
S154は軽石製品である。大型の軽石を素材にしており，縦断面が逆三角形状を呈している。表面には多方向に削られた同規模の擦痕が複数確認でき，長軸方向に浅く凹むように整形されている。用途等は不明である。

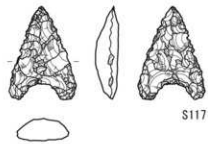
第45表　V層出土石器観察表

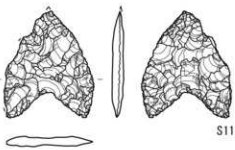
掲図番号	挿載番号	器種	石材	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
239	S112	打製石鏃1	安山岩1b	F35	Va	1.10	1.20	0.30	0.20	26218	
	S113	打製石鏃1	黒曜石5	H35	Va	1.40	1.30	0.30	0.30	16355	
	S114	打製石鏃2	黒曜石7	G33	Va	(1.50)	(1.50)	0.20	0.30	5693	
	S115	打製石鏃2	頁岩8	J36	Va	2.20	1.80	0.30	0.90	8528	
	S116	打製石鏃2	安山岩1b	G33	Va	1.90	1.30	0.30	0.60	17798	
	S117	打製石鏃2	黒曜石1	L33	Va	2.50	1.80	0.60	1.90	44630	
	S118	打製石鏃2	黒曜石4	K35	Va	(2.80)	(2.30)	0.30	1.80	8740	
	S119	打製石鏃3	チャート	K35	Va	2.00	1.20	0.30	0.70	45853	
	S120	石匙1	安山岩3a	G33	Va	6.20	3.20	1.20	21.80	17660	
	S121	石匙1	黒曜石3	K32	Va	4.45	2.35	0.55	5.30	44898	
240	S122	石匙1	安山岩1b	I32	Va	5.50	3.30	0.70	12.80	57615	
	S123	石匙2	チャート	H35	Va	3.10	4.90	0.90	12.00	16231	
	S124	石匙2	黒曜石7	H37	Va	2.50	3.60	0.60	4.70	9633	
	S125	石匙2	安山岩1b	M32	Va	3.05	9.15	0.50	14.40	46035	
241	S126	石匙2	頁岩6	F39	V	5.00	6.80	1.25	37.50	2433	
	S127	削器1	チャート	I34	Va	4.40	7.40	1.40	53.60	16219	
	S128	削器2	安山岩3a	H35	Va	5.10	6.30	1.80	44.40	1556	
242	S129	削器2	安山岩1b	J36	Va	3.50	7.40	1.60	35.70	8635	
	S130	削器3	チャート	I35	Va	9.00	2.60	1.20	27.70	16618	
	S131	異形石器	黒曜石3	E27	Va	3.30	1.10	0.70	1.58	97017	
243	S132	磨製石斧1	頁岩6	J36	Va	15.20	6.10	3.50	540.00	8450	
	S133	磨製石斧1	頁岩1	F36	Va	15.80	6.00	3.75	520.00	4200	
244	S134	磨製石斧1	頁岩7	F36	Va	12.50	5.20	2.30	250.00	3991	
	S135	磨製石斧1	頁岩8	G33	Va	15.90	5.20	2.10	219.40	17278	
	S136	磨製石斧1	頁岩8	H33	Va	14.50	5.00	1.70	190.00	54016	
	S137	磨製石斧2	蛇紋岩	F36	Va	13.95	6.55	1.80	250.00	3902	
245	S138	磨製石斧2	蛇紋岩	G33	Va	11.60	4.10	2.00	103.40	17787	
	S139	磨製石斧2	蛇紋岩	F34	Va	7.80	4.00	1.30	51.30	16235	
	S140	磨製石斧2	頁岩1	G33	Va	9.00	4.90	2.10	114.30	57616	
	S141	磨製石斧2	頁岩3	F34	Va	7.40	4.20	2.40	111.30	17136	
	S142	磨製石斧2	頁岩7	E37	Va	7.10	4.00	1.20	45.00	2317	
246	S143	磨製石斧3	頁岩1	F37	Va	(7.10)	(2.80)	1.50	43.20	1571	
	S144	磨製石斧3	頁岩7	D33	Va	7.00	2.50	1.90	49.30	16379	
	S145	磨・敲石	砂岩2	F34	Va	11.80	9.10	4.20	618.50	16794	
	S146	磨・敲石	安山岩4	G35	Va	7.50	3.50	2.85	120.60	5698	
	S147	磨・敲石	安山岩4	I37	Va	11.60	9.50	5.40	834.00	8102	
	S148	磨・敲石	安山岩4	H35	Va	11.30	8.30	4.20	653.00	16614	
	S149	磨・敲石	砂岩2	G38	Va	4.10	2.40	1.80	27.80	4230	
247	S150	磨・敲石	安山岩4	H37	Va	9.00	6.00	4.50	308.00	3557	
	S151	磨・敲石	安山岩4	C27	Va	9.00	8.10	4.00	416.00	67691	
	S152	石皿類	花崗岩	C35	Va	18.20	18.20	15.20	7790.00	8802	
	S153	石皿類	安山岩4	C27	Va	15.50	24.30	5.90	2474.00	68399	
	S154	軽石製品	軽石	K28	V	35.70	17.50	18.50	1730.00	69182	

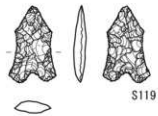


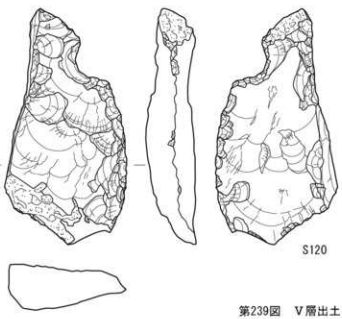


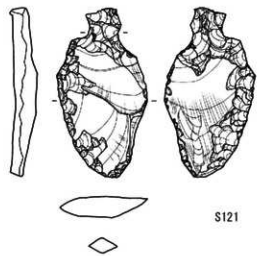




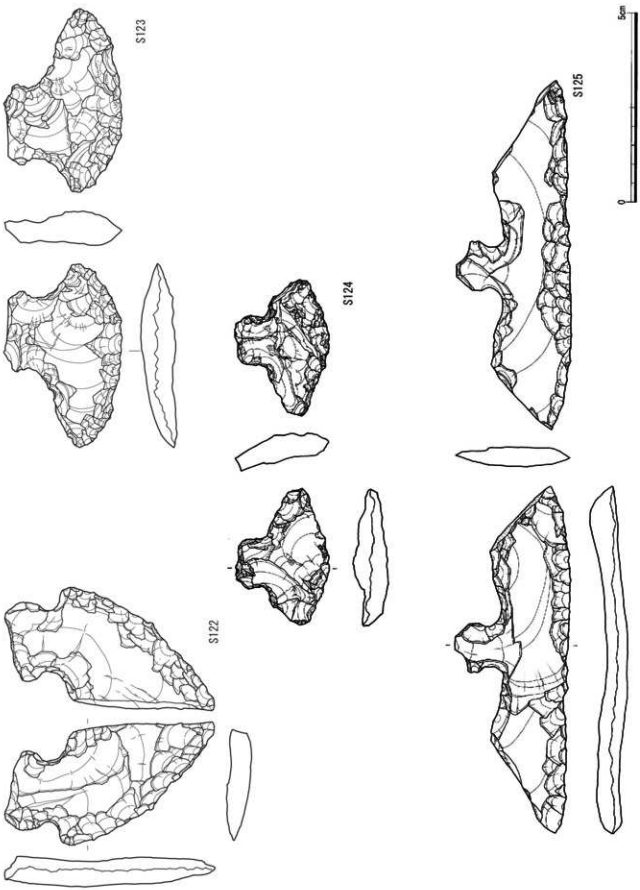




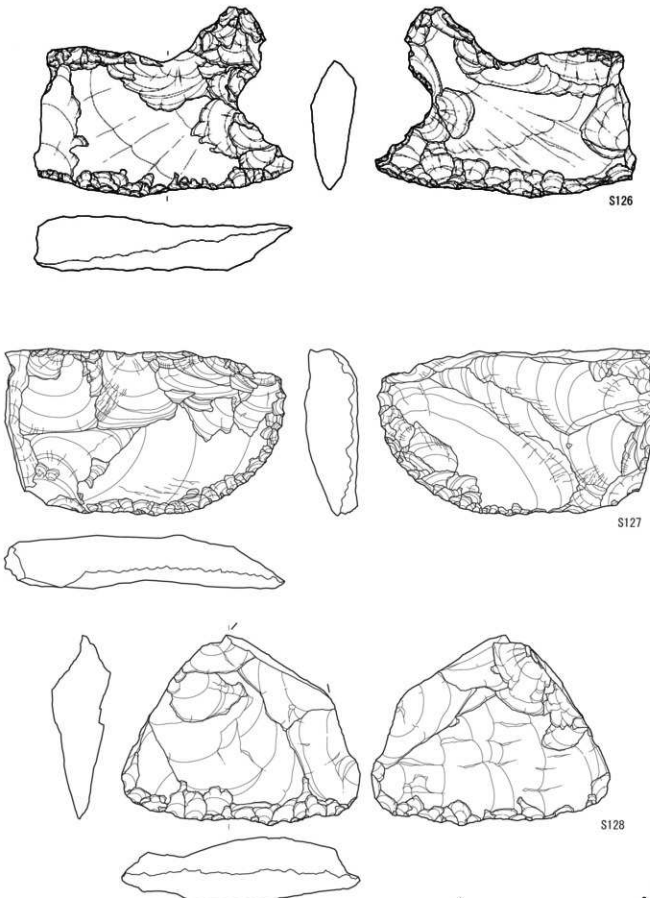




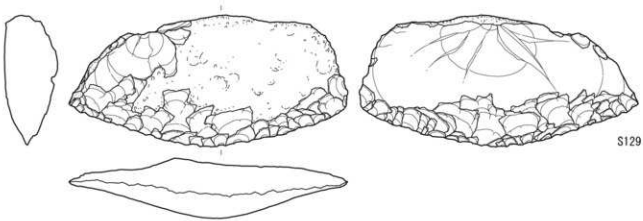
第239図　V層出土石器 1

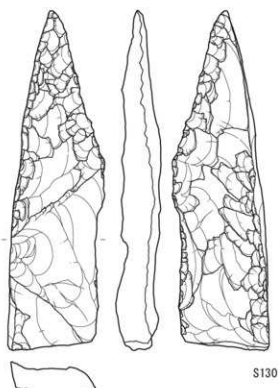


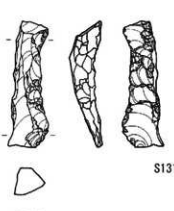
第240図　V層出土石器２



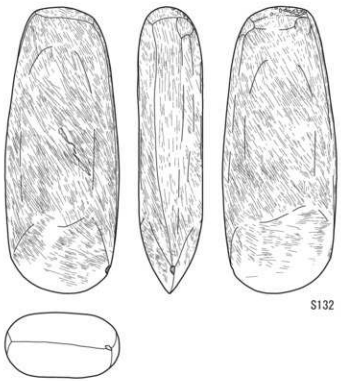
第241図　V層出土石器３



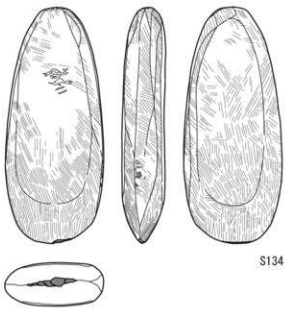


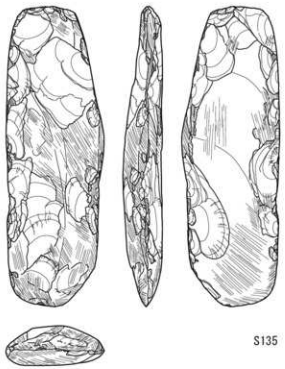


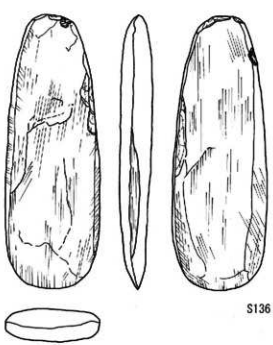
第242図　V層出土石器４

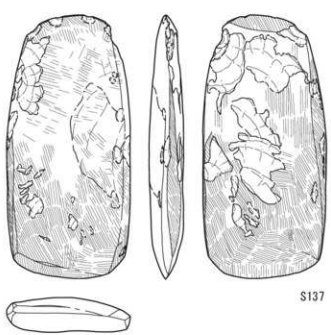


第243図　Ⅴ層出土石器５

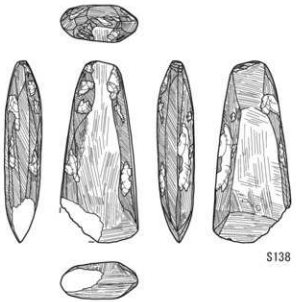


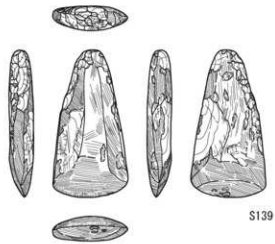


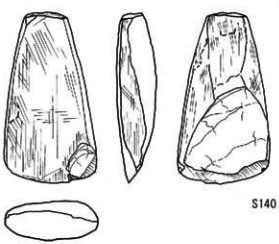


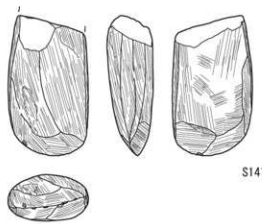


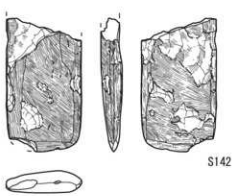
第244図　V層出土石器６



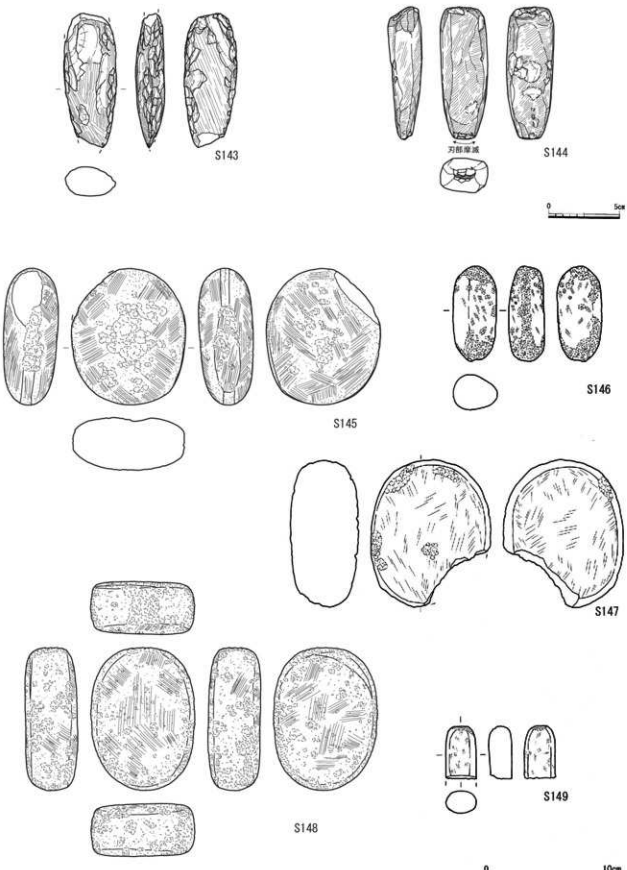




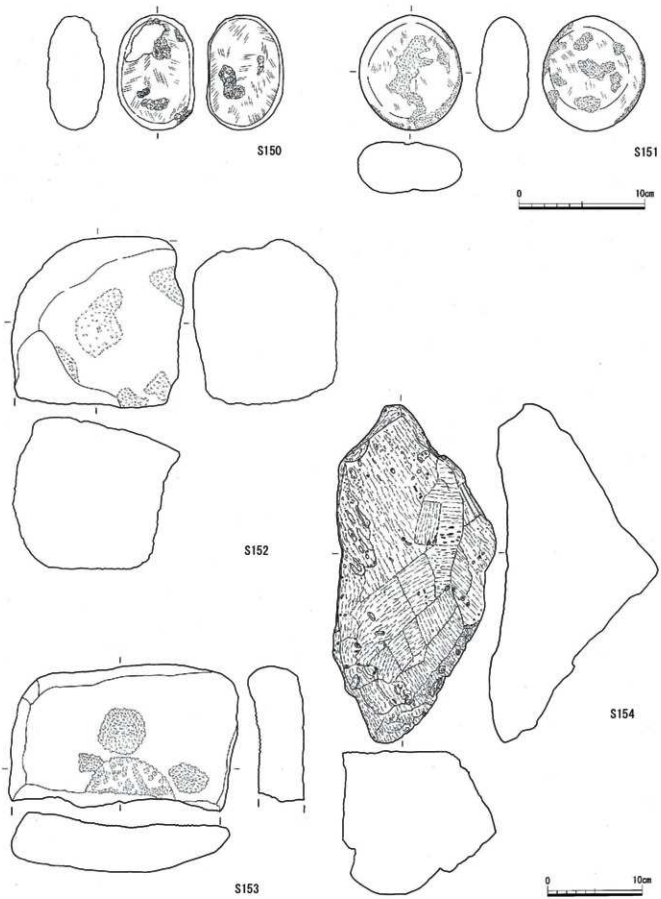




第245図　Ⅴ層出土石器７



第246図　V層出土石器８



第247図　V層出土石器９

第３節　古代の成果

１　遺構

（１）古代の土坑（第248～264図　土坑34～55号）

古代の土坑としては，Ｖａ層を主として22基の土坑が検出された。基本的には暗褐色土を埋土としているが，上位に黒褐色土が入るものも見られる。検出地点は大きく分けると，調査区東側・調査区北西部・谷部（調査区西）の３か所から検出されており，さらに東側の検出地点は南北に分かれる。調査区の中央部や南側からは検出されていない。

調査区東側北検出土坑群（土坑34～38号）

調査区東側の北部からは，土坑34～38号の５基の土坑が検出されている。

土坑34号は古代の土坑の中でも最も特徴的な土坑である。形状は隅丸方形状を呈し，長軸135cm，短軸120cmである。表土を除去するとすぐに検出された土坑であり，検出面は噴砂シラス層であるＶｘ層である。断面形状からすると，特に東側は削平を受けていると見られる。南西角と南東部の高まり２か所で焼土が確認されており，さらに南西部の床面は黒色化しており，少量の炭化物も混ざる。この黒色化部分は炭などを掻き出した場所と考えられ，南西角の焼土に付随し，南西角にはカマド等の施設があったと考えられる。ここには，器種は不明であるが，上向きに置かれた底部片が出土している。南東部の焼土と合わせて，土坑34は調理場的な役割の施設であったと考えられる。遺構内には土師甕が３個体程度のほか，土師器の椀・坏・鉢が出土している。

土坑34号－１は土師器坏で体部下半から底部が残存するが，体部上半を打ち欠いている可能性がある。法量は底径5.6cmを測る。器形は体部が底部から直線的に立ち上がる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。体部外面の下端は回転ヘラケズリ後，ナデ調整をおこなうが不十分なため，回転ヘラケズリの痕跡が残る。外底面は回転台が時計回りの回転ヘラ切り離し後，不定方向のナデ調整をおこなう。内底面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，外面には部分的に黒色化した範囲が認められ，また内面は赤色化した範囲が認められる。胎土はおおむね精良で，白・黒色粒子，石英，角閃石等の微粒を含んでいる。

土坑34号－２は土師器鉢で胴部下半から底部が残存する。器形は底部が尖底を呈する。器面調整は外面が回転ヘラミガキで，砂粒は左方向へ移動する。内面は内底面がナデ調整で胴部が放射状のヘラミガキをおこなう。焼成は良好で，内面に黒色化範囲が認められる。胎土はおおむね精良で，白・黒色粒子，石英，角閃石等の微粒を含んでいる。

土坑34号－３は土師器甕で口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反して口縁部は長く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面は回転ナデ調整，胴部の内面は屈曲部付近に横位のケズリ調整を行った後，やや下に縦位のケズリ調整をおこなう。その上端は不揃いで明確な稜は持たない。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面が橙色，内面がにぶい橙色を呈し，胎土は精良である。

土坑34号－４は土師器甕で口縁部から胴部上半の一部が残存する。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整で一部に工具痕や未調整部分が認められ，内面の胴部は斜位方向のケズリ調整で，その上端はそろえられ口縁部と胴部の屈曲部は稜を成している。これに対し外面の屈曲部は内面よりもやや上位の口縁部の中程で緩やかに屈曲し，口縁端部はわずかに丸く面をもたせておさめる。焼成は良好で，色調は外面がにぶい褐色，内面が灰褐色を呈し，胎土は粗めで金雲母が多く含まれている。

土坑34号－５は土師器甕で口縁部から胴部下半の底部との境付近まで残存している。法量は復元口径25.0cmを測る。器形は胴部がやや外傾しながら立ち上がり，頸部で外反して口縁部はやや短く延びる。器面調整は口縁部の内外面は横位のナデ調整，胴部の内面は縦位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部外面はナデ調整をおこなう。口縁端部は丸くおさめる。焼成は良好で色調は外面がにぶい赤褐色，内面が灰褐色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を多く含む。残存部の内外面ともにススの付着や黒色化が認められる。

土坑34号－６は須恵器坏で口縁部から体部下半まで残存する。法量は復元底径11.2cmを測る。器形は体部下半から丸みをもって立ち上がり，口縁部はわずかに外側に丸く突出させ，口縁端は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で硬質である。口縁端部を除いて赤色化しており，赤土の泥漿を塗布したものと思われる。胎土はおおむね精良で，白色粒子等の微粒が含まれている。

土坑35号は長軸165cm，短軸60～100cmの二等辺三角形に近い形状の土坑である。埋土中からは土師甕片や，土師器片と考えられる土器片が出土している。

土坑36・37号は隣接して検出された土坑である。遺構間には近代の芋穴による撹乱が見られる。当初は同一遺構としていたが，土坑36号の埋土が西側からも流入していることから別遺構とした。遺物等は特に出土していない。

土坑38号は２基の土坑が切り合って検出された。北側の土坑は南側の土坑に切られており，南側の土坑７基は埋土中から青磁片が出土していることから中世の土坑と考えられる。北側の土坑からは遺物の出土は見られない。

調査区東側南検出土坑群（土坑39～46号）

調査区東側の北部からは，土坑39～46号の８基の土坑が検出されている。

土坑39号は南東部角のみ，やや潰れているが，長軸160cm，短軸130cmの隅丸長方形状を呈す土坑である。東側は一段掘り込まれている。遺構内からは，土師器の坏や土師甕が出土している。土坑39号には，深さ約90cmの中世の土坑が掘り込まれている。

土坑39号－１は土師器坏で体部から底部が残存する。法量は底部径が6.2cmを測る。器面調整は体部の内外面ともに回転ナデ調整で，外面の体部下端を回転ケズリ調整後回転ナデ調整をおこなうが不十分なためケズリの痕跡が残り，その直上と内面の底部と体部の境には指頭圧痕が認められる。内面の見込みは渦巻き状のロクロ成形後に不定方向にナデ調整をおこない，その痕跡として外底面にヘラ切り離し後に板状圧痕が残るが，これもある程度ナデ消されている。また，内面の見込みを除き粘土板の結合痕が残る。焼成は良好で，胎土は精良である。

土坑39号－２は土師器甕の口縁部で内面に胴部の一部がわずかに残存する。法量は復元口径が27.2cmを測る。器面調整は口縁部の内外面ともに横位方向のナデ調整を行う。内面の胴部は横位方向のケズリ調整で，その上端をそろえ口縁部と胴部の屈曲部は稜を成している。外面は緩やかに外反し，口縁端部はわずかに丸く面をもたせておさめる。焼成は良好で，色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。胎土は粗めで胎土に砂粒を含み，特に金雲母が多く含まれている。器表には部分的にススの付着が認められる。

土坑40号は北東角部のみ潰れているが，長軸150cm，短軸110cmの隅丸長方形状を呈す土坑である。検出面からの深さは約40cmであり，埋土中には極微量ではあるが炭化物を含んでいる。埋土中からは土師器片が出土している。

土坑40号－１は土師器鉢で口縁部から胴部の一部がわずかに残存する。法量は復元口径25.2cmを測る。器面調整は口縁部の内外面ともに横位方向のナデ調整で部分的にススの付着が認められる。内面の胴部は横位方向のケズリ調整で，その上端をそろえ口縁部と胴部の屈曲部は稜を成している。外面は緩やかに外反し，口縁端部は丸く面をもたせておさめる。焼成は良好で，色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。胎土はやや粗めで砂粒を含み，特に金雲母が多く含まれている。

土坑40号－２は両黒の黒色土器の口縁部片で，器種は椀・坏・皿のいずれかと思われるが小片のため不明である。器面調整は内面が放射状に丁寧なヘラミガキをおこない，外面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良で白色粒子をわずかに含んでいる。

土坑41号はやや歪ながら，長軸180cm，短軸160cmの隅丸方形状を呈す土坑である。西側の柱穴は別遺構の柱穴である。また，南側は樹痕による撹乱を受けている。中央部には不定形ながら掘り込みが確認でき，埋土からは確認できなかったが，こちらも樹痕による撹乱の可能性が考えられる。埋土中からは土師器片が出土している。

土坑42号は長軸80cm，短軸50cmの隅丸長方形状を呈す土坑である。遺構内からは土師器片が２点と，土器細片が出土している。

土坑43号は長軸105cm，短軸55cmの楕円形を呈する土坑である。遺構の南側は一部撹乱を受けている。東側の柱穴は中世の柱穴であり，柱穴の底面部分から礫が１点出土している。遺構内からは土師器片が出土している。

土坑44号は長軸95cm，短軸60cmの楕円形状を呈す土坑である。深さは25cmを測り，埋土はレンズ状堆積を呈している。遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

土坑45号は長軸150cm，短軸70cmのやや歪な楕円形を呈す土坑である。遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

土坑46号は長軸220cm，短軸130cmの楕円形状を呈す土坑である。中央床面には直径約35cmの円形上の掘り込みが確認されている。遺物は時期不明の土器の小片１点のみが出土している。

調査区北西部検出土坑群（土坑47～53号）

調査区北西部からは，土坑47～53号の７基の土坑が検出されている。土坑47は直径120cmの円形の土坑である。検出面からの深さは約20cmで，埋土はレンズ状堆積を呈し，堆積状況から斜面の上側（西側）から土が流入したことが分かる。遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

土坑48号は直径70cmの円形の土坑である。遺構内からは土師器片が出土している。

土坑49号はやや歪ながら，長軸75cm，短軸35cmの隅丸長方形状を呈す土坑である。遺構内からは黒色土器，須恵器片や土師器片が出土している。

土坑50号はやや歪ながら長軸140cm，短軸100cmの楕円形状の土坑である。北側で古墳時代の竪穴建物跡を切っている。遺構内からは土師器の椀・坏・鉢，黒色土器，墨書土器が出土している。

土坑50号－１は土師器椀で口縁部から体部が残存する。法量は復元口径が14.0cmを測る。器面調整は体部の内外面ともに回転ナデ調整で，ロクロ目が明瞭に残り，また器表面の剥落が著しい。これは二次被熱によるものと思われる。胎土は精良で１mm以下の白色粒子等を含んでいる。

土坑50号－２は土師器坏の底部片である。法量は復元底部径が6.6cmを測る。器形は底部を厚く肥厚させ，その端部はわずかに突出しており，円盤状の底部を呈す

る。器面調整は外面の体部が回転ナデ調整で，内面の見込みは不定方向のナデ調整でロクロ目をナデ消す。外底面はヘラ切り離し後不定方向のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良で１㎜以下の白色粒子等を含んでいる。

土坑50号－３は土師器坏で体部から底部が残存する。法量は底部径が6.6cmを測る。器形は底部を厚く肥厚させ，その端部を突出させる円盤状の底部を呈する。器面調整は体部の内外面ともに回転ナデ調整で，内面の見込みは不定方向のナデ調整でロクロ目をナデ消す。外底面は不定方向のナデ調整をおこない，周縁を工具により面取りをおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

土坑50号－４は内黒の黒色土器の椀または高台付皿で口縁から体部が残存する。法量は復元口径13.5cmを測る。器面調整は内面が口縁端部に横位方向のミガキ，体部は放射状にヘラミガキをおこない，外面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

土坑50号－５は坏または椀と思われる土師器の体部片で，体部外面に「田」の文字を含む墨書が認められる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒色粒子，石英等の微粒が含まれている。

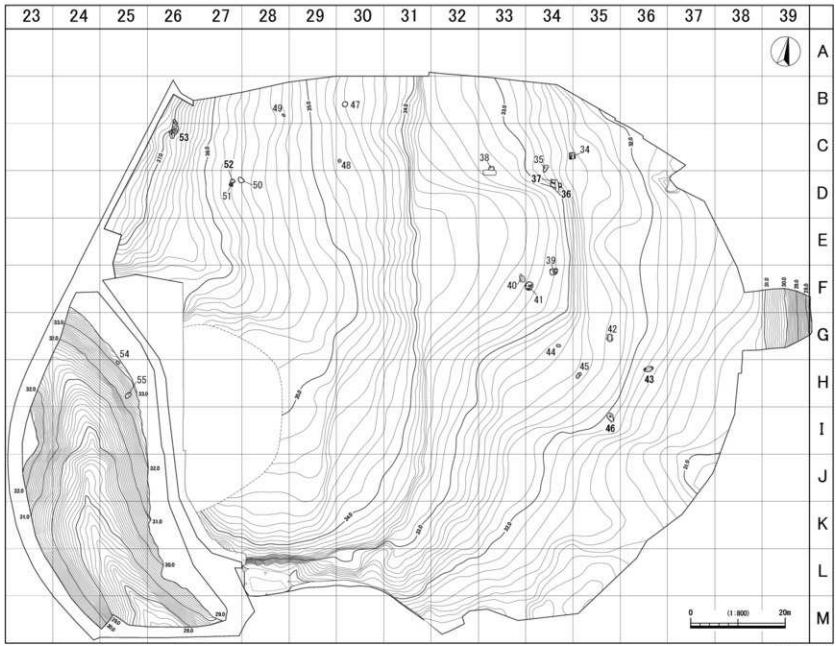
土坑51・52号は隣接して検出された土坑であり，土坑52号が土坑51号を切っている。また土坑52号は古墳時代の竪穴建物跡も切っており，さらにどちらの土坑も中世の柱穴により切られている。床面は特に土坑51号で安定せず平坦ではない。土層断面の観察により辛うじて土坑52号が土坑51号を切っていることが判明したが，２つの土坑に埋土の差はほとんど無いため，近い時期の土坑であると考えられる。遺物は両方の土坑から土師甕片や土師器片が出土している。

土坑53号は長軸410cm，短軸140cmを測る不定形の土坑であるが，中央部分の長軸125cm，短軸85cmの隅丸方形状の土坑以外は撹乱の可能性が高い。実際，調査区の北西角部分は樹痕による撹乱が多く見られ，現代においても植林されており，伐根作業が必要な場所であった。遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

谷部（調査区西）検出土坑群（土坑54・55号）

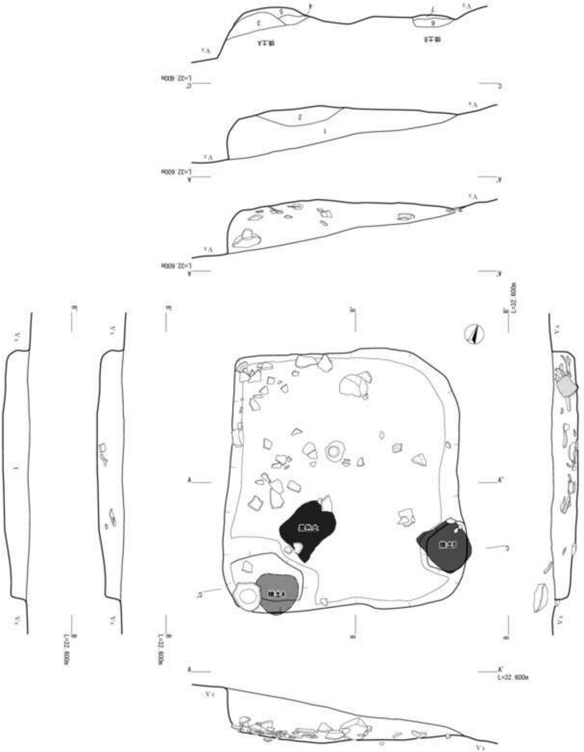
谷部（調査区西）からは土坑54・55号の２基の土坑が検出されている。いずれも谷部の上場周辺での検出である。土坑54号は長軸90cm，短軸60cmの楕円形を呈す土坑である。遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

土坑55号は斜面に平行に掘られた土坑であり，やや歪ながら，長軸155cm，短軸80cmの楕円形状を呈する土坑である。深さは最深部で約45cmを測る。遺構内からは遺物の出土は見られなかった。



第248図　古代土坑配置図

Va層コンタ図



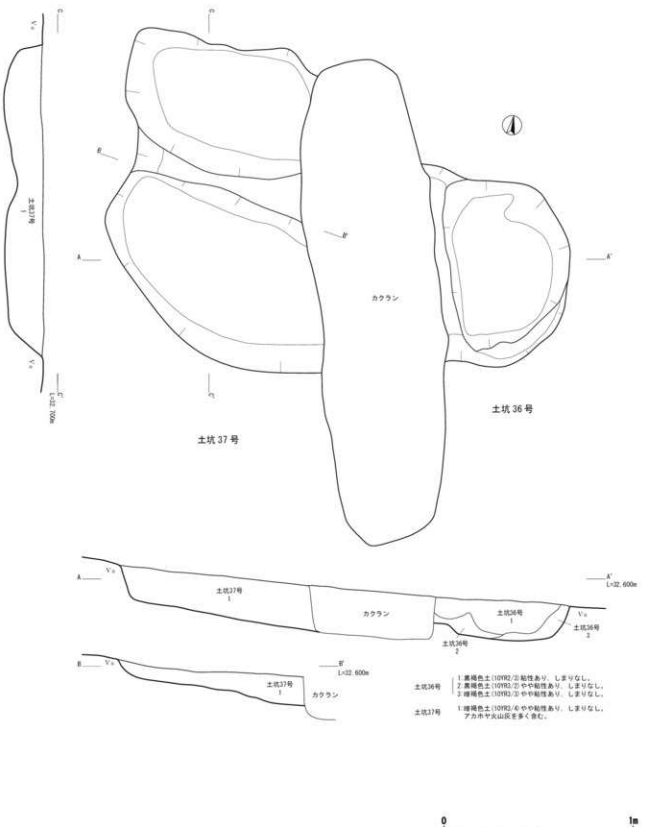
1:暗褐色土(10YR3/3)やや粘性あり、しまりなし。
2:黒褐色土(10YR2/3)やや粘性あり、ややしまりなし。炭化物小片を少量含む。
3:明赤褐色土(2.5YR5/6)やや粘性あり、しまりなし。焼土、炭化物等を含まない。
4:黒褐色土(5YR3/1)やや粘性あり、しまりなし。炭化物等を含まない。
5:にぶい黄橙色土(10YR6/3)やや粘性あり、ややしまる。明赤褐色土(2.5YR5/6)を部分的に含む。地山(Ⅴa層)であるが被熱している。
6:赤灰色土(2.5YR4/1)やや粘性あり、しまりなし。赤褐色(2.5YR4/6)の焼土を含み、炭化物が少量混じる。
7:にぶい黄橙色土(10YR6/3)やや粘性あり、しまりなし。地山(Ⅴa層)であるが被熱している。

土坑 34 号

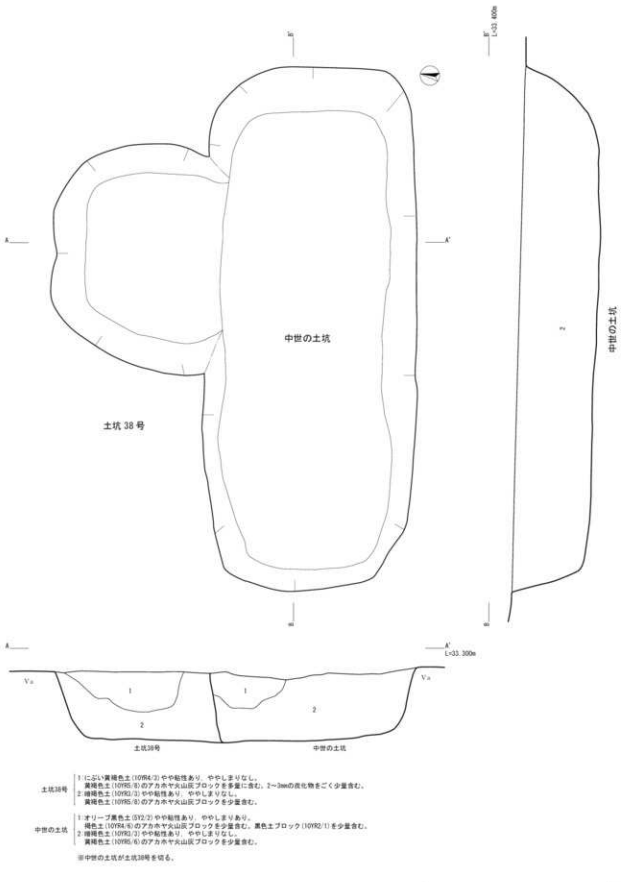
0 1m

第249図　古代の土坑 1

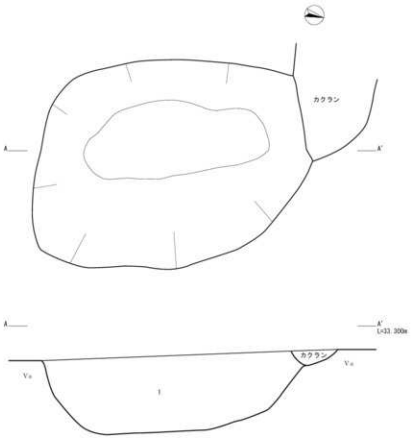
第250図　古代の土坑２



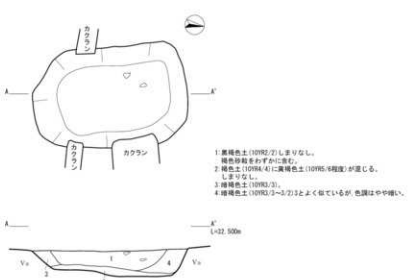
第251図　古代の土坑３



第252図　古代の土坑４

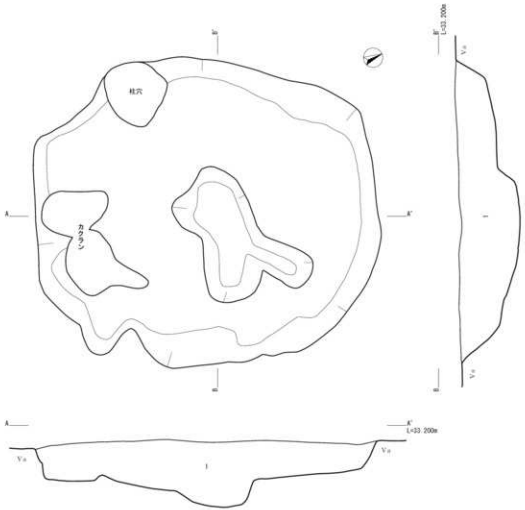


土坑 40 号

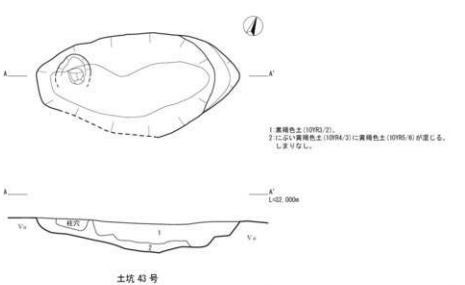


土坑 42 号

第253図　古代の土坑５

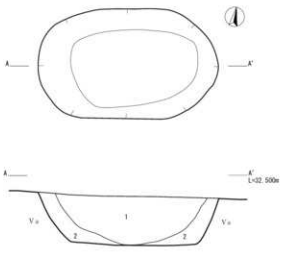


土坑 41 号



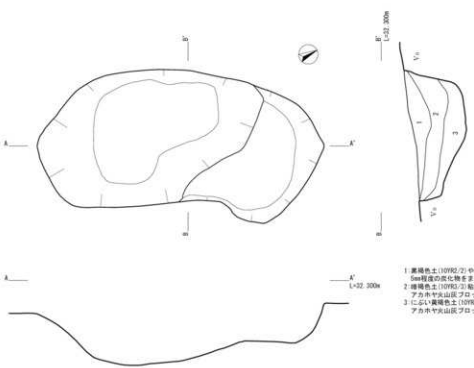
土坑 43 号

第254図　古代の土坑６



1 黒褐色土(10YR2/2)ややしまる。径0.5～1cm程度の小石、池田パミスを含む。
2 暗褐色土(10YR3/3)やや砂質。径5mm程度の小石を極少量含む。

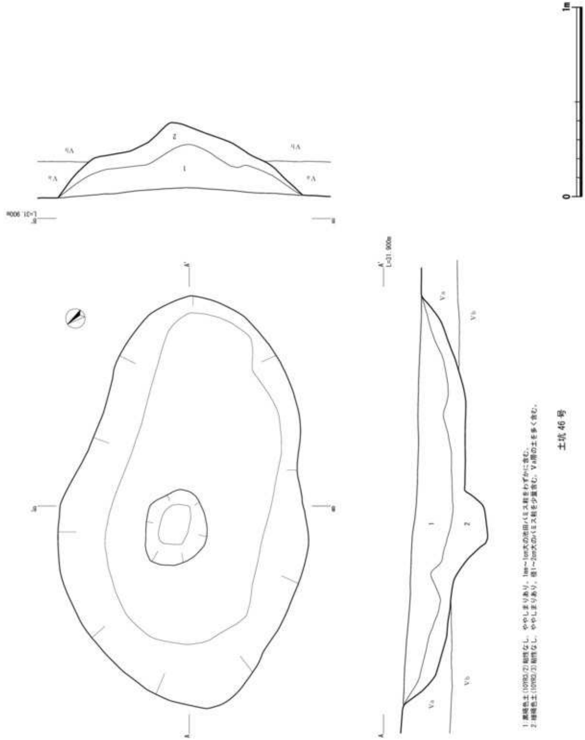
土坑 44 号



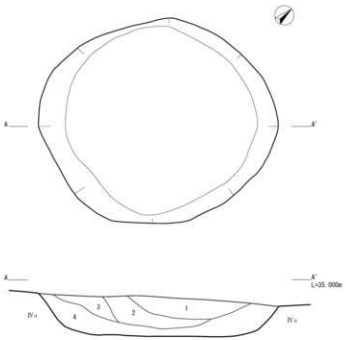
1 黒褐色土(10YR2/2)やや粘性あり、しまりなし。
5mm程度の炭化物をまばらに含む。橙色パミスをごくまばらに含む。
2 暗褐色土(10YR3/3)粘性なし、しまりなし。
アカホヤ火山灰ブロックを含む。1と3の混ざった土。
3 にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性なし、ややしまりあり。
アカホヤ火山灰ブロックを多く含む。下位に横砂シラスがみられる。

土坑 45 号

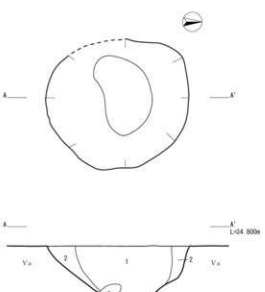
第255図　古代の土坑 7



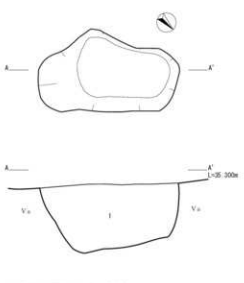
第256図　古代の土坑８



土坑 47 号

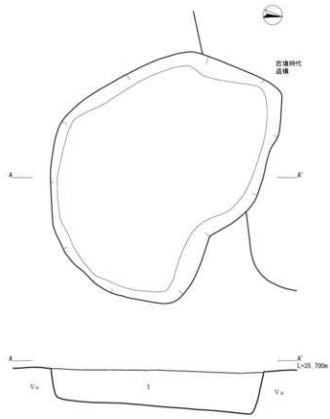


土坑 48 号



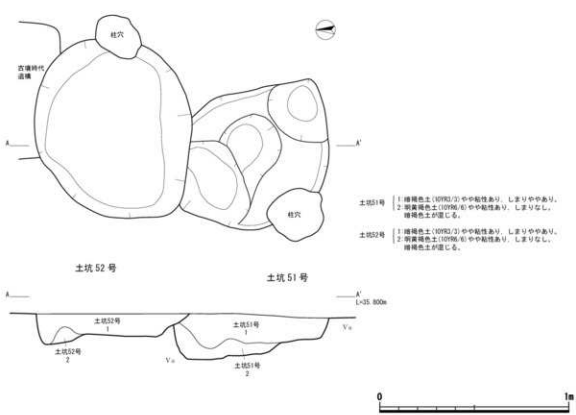
土坑 49 号

第257図　古代の土坑 9



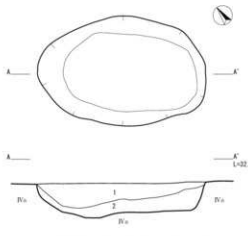
1：暗褐色土(10YR2/3)やや粘性あり、しまりややあり。焼土粒・炭化物粒と暗黄褐色土(10YR6/6)ブロックを含む。

土坑50号



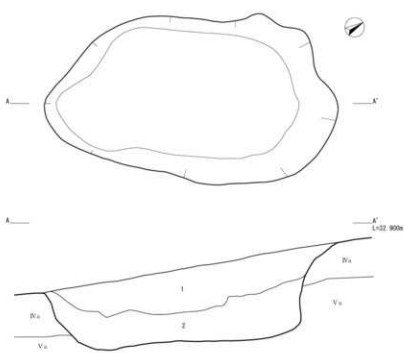
第258図　古代の土坑10

第259図　古代の土坑11



1:黒褐色土(10YR2/1)粘性あり、しまりあり、アカホヤ火山灰
ブロック土を含む。
2:暗褐色土(10YR3/3)粘性は弱く、しまりなし、アカホヤ火山灰
ブロック土を多く含む。

土坑54号



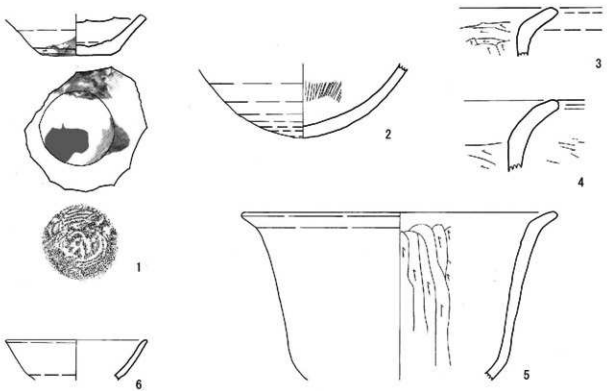
1:黒褐色土(10YR2/1)やや粘性あり、ややしまりあり。
2:暗褐色土(10YR3/3)やや粘性あり、ややしまりあり。橙色ブロック土のアカホヤ火山灰を多く含む。

土坑55号

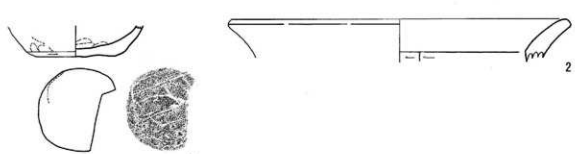
第260図　古代の土坑12

第46表　古代土坑一覧表

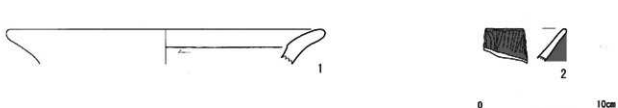
図版番号	遺構番号	区	層	検出位置	埋土	長さ（cm）		形状	出土遺物・備考
						長軸	短軸		
249	34	C34・35	Ⅴx	東側（北）	暗褐色	135	120	隅丸方形	土師甕，土師椀，土師器坏・鉢
250	35	CD34	Ⅴa		暗褐色	165	60-100	不定形	土師甕，土師器片
251	36	D34	Ⅴa		暗褐色・黒褐色	90	65	楕円形	
251	37	D34	Ⅴa		暗褐色	170	95	不定形	
252	38	C33	Ⅴa		暗褐色・黄褐色	(90)	120	楕円形	中世の土坑に切られている
250	39	E33	Ⅴa	東側（南）	暗褐色	160	130	隅丸方形	土師甕，土師器坏
253	40	F33	Ⅴa		暗褐色	150	110	楕円形	土師器片
254	41	F33・34	Ⅴa		暗褐色	180	160	隅丸方形	土師器片
253	42	G35	Ⅴa		暗褐色・黒褐色	80	50	隅丸長方形	土師器片
254	43	GH36	Ⅴa		黄褐色・黒褐色	105	55	楕円形	土師器片
255	44	G34	Ⅴa		暗褐色・黒褐色	95	60	楕円形	
255	45	H35	Ⅴa		黄褐色・暗褐色	150	70	楕円形	
256	46	I35	Ⅴa		暗褐色・黒褐色	220	130	楕円形	
257	47	B30	Ⅳa	北西部	暗褐色・黒褐色	120		円形	
257	48	C30・31	Ⅴa		暗褐色・黒褐色	70		円形	土師器片
257	49	B28	Ⅴa		暗褐色	75	35	隅丸長方形	須恵器，土師器片
258	50	D27・28	Ⅴa		暗褐色	140	100	楕円形	土師器坏，墨書土器
258	51	D27	Ⅴa		黄褐色・暗褐色	75		円形	土師甕，土師器片
258	52	D27	Ⅴa		黄褐色・暗褐色	95	85	楕円形	土師甕，土師器坏
259	53	BC26	Ⅴa		暗褐色・黒褐色	410	140	不定形	（長軸125cm，短軸85cm，楕円形）
260	54	H25	Ⅳa	谷部	暗褐色・黒褐色	90	60	楕円形	
260	55	H25	Ⅳa		暗褐色・黒褐色	155	80	楕円形	



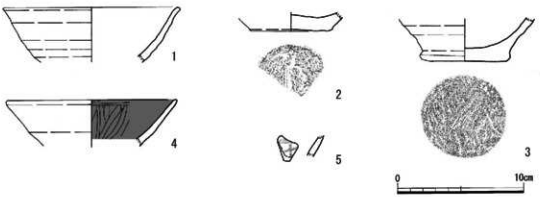
第261図　土坑34号出土遺物



第262図　土坑39号出土遺物



第263図　土坑40号出土遺物



第264図　土坑50号出土遺物

第47表　古代土坑出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	遺構名	種別	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 黒雲母	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第261図	1	C34・35	土坑34号	土師器	坏	底部	40	−	5.6	−	回転ナデ,回転ケズリ後ナデ	回転ナデ	○		○		○	浅黄橙色	橙色	良	回転ヘラ切り離し,口縁一部打ち欠き,赤色化・黒色化
	2	C34・35	土坑34号	土師器	鉢	底部	40	−	−	−	回転ミガキ	ナデ,ミガキ	○		○		○	橙色	橙色	良	
	3	C34・35	土坑34号	土師器	甕	口縁～胴部	破片	−	−	−	回転ナデ,ナデ	回転ナデ,ケズリ	○		○		○	橙色	にぶい橙色	良	
	4	C34・35	土坑34号	土師器	甕	口縁～胴部	破片	−	−	−	ナデ	ナデ,ケズリ	○			○	○	褐色	褐色	良	工具痕あり
	5	C34・35	土坑34号	土師器	甕	口縁～胴部	15	(25.0)	−	−	ナデ	ナデ,ケズリ	○				○	にぶい赤褐色	灰褐色	良	黒色化・ススの付着
	6	C34・35	土坑34号	須恵器	瓶または甕	口縁～胴部	10	(11.2)	−	−	回転ナデ	回転ナデ					○	橙色	橙色	良	
第262図	1	F34	土坑39号	土師器	坏	底部	30	−	6.2	−	回転ナデ,回転ケズリ後回転ナデ	回転ナデ,ナデ	○				○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	回転ヘラ切り離し,指頭圧痕,粘状圧痕,粘土板接合痕あり
	2	F34	土坑39号	土師器	甕	口縁～胴部	5	(27.2)	−	−	ナデ	ナデ,ケズリ	○			○	○	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	ススの付着あり
第263図	1	F33	土坑40号	土師器	鉢	口縁～胴部	5	(25.2)	−	−	ナデ	ナデ,ケズリ	○			○	○	明赤褐色	明赤褐色	良	
	2	F33	土坑40号	土師器	椀	口縁部	破片	−	−	−	回転ナデ	ミガキ	○		○		○	黒褐色	黒色	良	黒色土器B
第264図	1	D27・28	土坑50号	土師器	椀	口縁～胴部	15	(14.0)	−	−	回転ナデ	回転ナデ	○				○	橙色	橙色	良	
	2	D27・28	土坑50号	土師器	坏	底部	5	−	(6.6)	−	回転ナデ,ナデ	ナデ	○				○	橙色	浅黄橙色	良	ヘラ切り離し
	3	D27・28	土坑50号	土師器	坏	底部	30	−	6.6	−	回転ナデ,ナデ	回転ナデ,ナデ	○		○		○	橙色	橙色	良	充実高台
	4	D27・28	土坑50号	土師器	椀または甕	口縁部	10	(13.5)	−	−	回転ナデ	ミガキ	○				○	橙色	黒色	良	黒色土器A
	5	D27・28	土坑50号	土師器	不明	胴部	破片	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	○				○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	墨書土器

※()は復元・残存値

2　遺物

古代土師器（第267～272図）

土師器皿(400・401)

400は高台付皿で皿底部から脚基部まで残存する。器面調整は底部外面が回転ナデで沈線状の段が２条認められ，脚内はナデ調整をおこなう。内底面は摩耗が著しいがナデ調整と思われる。焼成は良好で，胎土はやや粗く赤色粒子と石英が多く含まれている。

401は体部から底部の一部が残存する。法量は復元口径15.6cm，復元底径13.0cm，器高1.6cmを測る。器形は底部の立ち上がりから外側に外反しながら開く器形を呈し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面および内底面は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，１～２mm大の砂粒が含まれている。

土師器坏(402～422)

402は口縁部から胴部が残存する。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はぼさぼさとしてやや粗く，白色粒子等の微粒子が含まれている。

403は胴部から底部が残存する。法量は復元底径8.2cmを測る。器形は底部が平底で，体部は底部から曲線的に立ち上がり，中位でわずかに外へ屈曲している。器面調整は外面下半を回転ヘラケズリ後，全体に回転ヘラミガキをおこなう。回転台は反時計回りである。内面は全体を手持ちによる丁寧なヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で白色粒子等の微粒子が含まれている。

404は全体の1/6が残存する。法量は復元口径12.8cm，復元底径8.4cm，器高3.1cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，中位でわずかに外へ屈曲し，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は体部は内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。体部外面にはロクロ目が残り，その下端部はヘラケズリ後，ナデ調整をおこなうがヘラケズリの痕跡が残る。外底面はナデ調整で板状圧痕がわずかに残る。内底面はロクロ成形後，静止ナデ調整をおこなう。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土はやや粗く，石英等の小粒が含まれている。

405は全体の1/10が欠損する。法量は口径12.2cm，底径6.8cm，器高3.7cmを測る。器形は体部が底部からやや曲線的に立ち上がり，体部の中位から内側へやや屈曲し，口縁部を外反させ，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整をおこなうがロクロ目がよく残る。外底面はヘラ切り離し後，ナデ調整をおこなう。内底面は不定方向のナデ調整をおこなう。回転台は時計回りである。焼成は良好で，胎土はやや粗く，黒色粒子，石英，金雲母等の小粒が含まれている。

406は体部下半から底部の1/2が残存する。法量は底径7.4cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で体部下端は回転ヘラケズリ後，未調整である。外底面は回転ヘラ切り離し後，ナデ調整をおこなう。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土はやや粗く，赤色粒子等の小粒が含まれている。体部外面に植物繊維状の圧痕が認められる。

407は体部下半から底部が残存する。法量は復元底径5.9cmを測る。器形は体部が底部から曲線的に立ち上がる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。体部外面にはロクロ目が残り，その下端部はヘラケズリ後，ナデ調整をおこなうがヘラケズリの痕跡が残る。外底面は回転ヘラ切り離し後，ナデ調整で板状圧痕がわずかに残る。内底面は不定方向の静止ナデ調整をおこない，その後櫛状の工具で十字状に線刻を施す。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子，石英，金雲母等の細粒が含まれている。

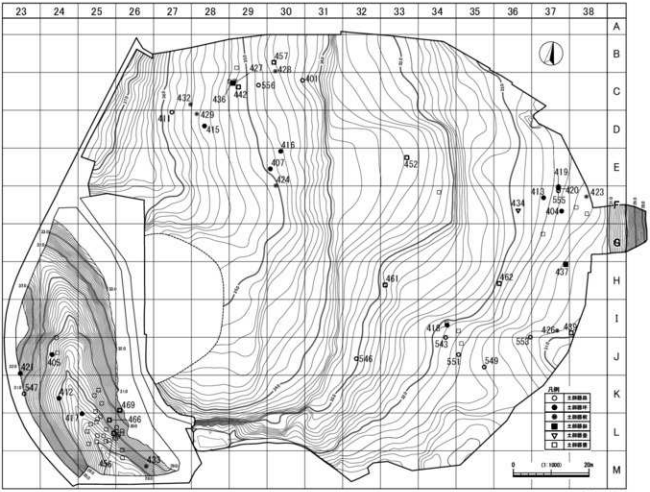
408は体部下半から底部が残存する。法量は底径6.1cmを測る。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，体部と底部の境には指頭圧痕が残る。外底面は回転ヘラ切り離し後，ナデ調整をおこなう。回転台は反時計回りである。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子，石英等の細粒が多く含まれている。体部外面に植物繊維状の圧痕が認められる。

409は全体の1/3が残存する。法量は復元口径13.2cm，復元底径5.4cm，器高4.1cmを測る。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は摩耗のため不明，内底面は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，砂粒の細粒が多く含まれている。

410は体部下半から底部が残存する。法量は底径5.7cmを測る。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で体部下端は回転ヘラケズリ後，一部ナデ調整をおこなう。外底面はヘラ切り離し後，ナデ調整をおこなうが板状圧痕が残る。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土は粗く，白色粒子，石英，金雲母等の小粒が多く含まれている。体部外面に植物繊維状の圧痕が認められる。

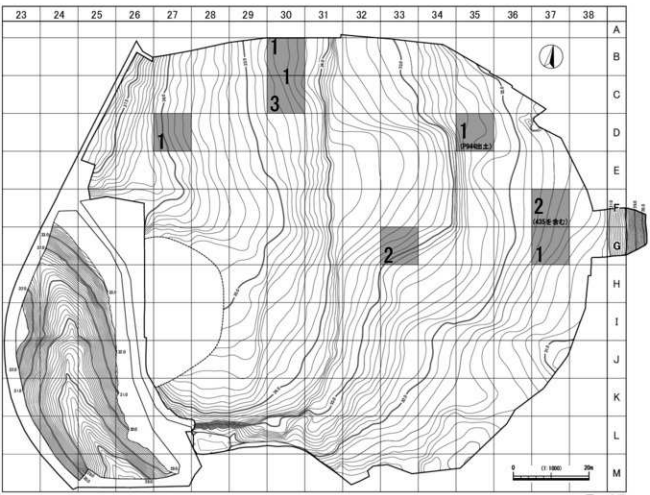
411は全体の1/4が残存する。法量は復元口径12.4cm，復元底径5.9cm，器高3.6cmを測る。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で体部外面下端にヘラケズリの痕跡が残る。外底面は著しく摩耗しているがナデ調整と思われ，内底面は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で，黒色粒子等の微粒が多く含まれている。

412は口縁部から底部の一部が残存する。法量は復元口径15.4cm，復元底径9.0cm，器高3.7cmを測る。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は残存



第265図　古代土師器分布図

Va層コンタ図



第266図　焼塩土器分布図

Va層コンタ図

部がわずかなため不明，内底面は静止ナデ調整が認められる。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土は粗く，黒・白色粒子，石英，角閃石等の細粒が多く含まれている。

413は全体の1/4が残存する。法量は復元口径15.2cm，復元底径9.0cm，器高3.6cmを測る。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は摩耗のため不明，内底面は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，砂粒の細粒が多く含まれている。

414は口縁部から底部の一部が残存する。法量は復元口径12.8cm，復元底径5.8cm，器高3.5cmを測る。器面調整は口縁部から体部の内外面が回転ナデ調整で，外底面は回転ヘラ切り離し，内底面は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

415は全体の1/4が残存する。法量は復元底径6.1cmを測る。器面調整は内外面ともに著しく摩耗しているが，体部は内外面ともに回転ナデ調整で体部外面下端にヘラケズリの痕跡が残り，外底面はナデ調整で，内底面は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成はやや不良で軟質である。胎土はやや粗く，白色粒子，石英，角閃石等の細粒を多く含みザラザラとした質感である。内底面に赤色化範囲が認められる。

416は2/3が欠損する。法量は口径13.2cm，底径6.2cm，器高5.4cmを測る。器形は体部が底部から直線的に立ち上がり，口縁部を外反させ，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部は内外面ともに回転ナデ調整でロクロ目が残り，体部外面下端にヘラケズリの痕跡が認められる。外底面はヘラ切り離し後，ナデ調整をおこなうがわずかに板状圧痕が認められる。内底面は渦巻き状のロクロ目が残り，回転台は時計回りである。焼成は良好で，内外面に黒煤またはススと思われる黒色化範囲が部分的に認められる。胎土はやや粗く，石英が多く認められ，その他に白色粒子，角閃石等の細粒が多く含まれている。

417は底部が欠損する。法量は復元口径13.2cm，復元底径6.2cm，器高4.6cmを測る。器形は体部が底部から直線的に立ち上がり，体部の中位からやや外側へ屈曲させ，口縁部はやや内湾し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部から体部の内外面が回転ナデ調整で，体部外面の下端はケズリ後は未調整である。外底面はわずかに残る部分からヘラ切り離し後は未調整と思われる。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土はやや粗く，赤・黒色粒子，石英，角閃石等の小粒が多く認められる。口縁部内外面の一部にススの付着が認められる。

418は全体の1/6が残存する。法量は復元口径14.0cm，復元底径10.0cm，器高3.0cmを測る。器形は体部が底部からやや曲線的に立ち上がり，口縁部は内湾し，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は口縁部から体部の内外面が回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後，ナデ調整をおこない，内底面は回転ナデ調整で体部との境に指頭圧痕が認められる。胎土は精良で，黒色粒子等の微粒が含まれている。体部内面に植物繊維状の圧痕が認められる。

419は体部の2/3が残存する。法量は復元口径11.5cm，底径8.4cm，器高3.6cmを測る。器形は体部が底部から直線的に立ち上がり，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめ，底部は円盤状に端部がわずかに突出する。器面調整は口縁部から体部の内外面が回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後，ナデ調整をおこない，内底面は回転ナデ調整で渦巻き状のロクロ目が残る。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土は精良で，石英等の微粒が含まれている。体部上半の外面に植物繊維状の圧痕が認められる。

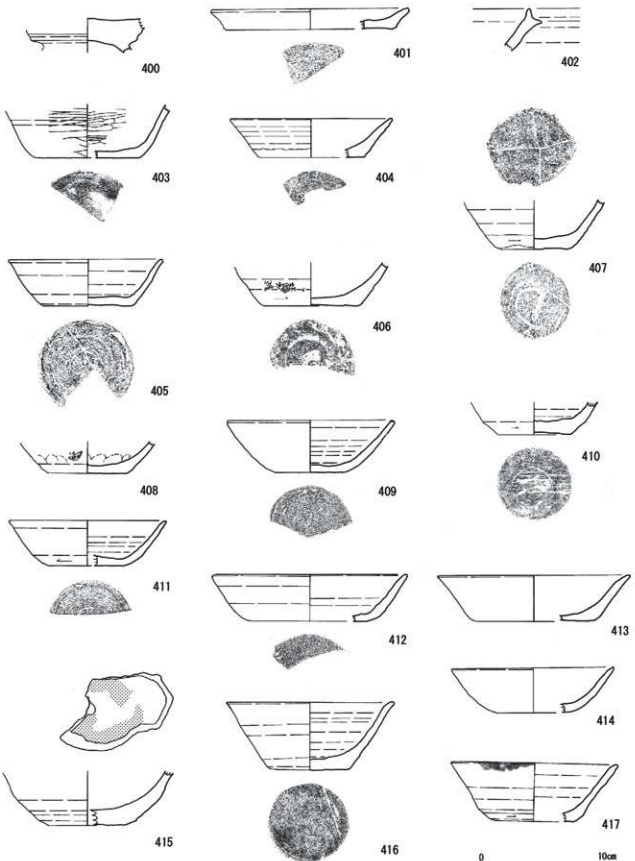
420はほぼ完形である。法量は口径12.8cm，底径8.4cm，器高3.1cmを測る。器形は体部が底部から曲線的に立ち上がり，口縁部は内湾し，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は口縁部から体部の内外面が回転ナデ調整で，外底面は回転ヘラ切り離し後，ナデ調整をおこない，内底面は回転ナデ調整で体部との境に指頭圧痕が認められる。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土は精良で黒色粒子，石英等の微粒が含まれている。体部外面に植物繊維状の圧痕が認められる。

421はほぼ完形であるが，粗雑なつくりで全体の歪みが著しい。法量は口径15.4cm，底径9.6cm，最大高4.1cmを測る。器形は体部が底部から直線的に立ち上がり，口縁部は内湾し，口縁端部は丸くおさめ，底部は端部をやや突出させる。器面調整は口縁部から体部の内外面が回転ナデ調整で，外底面は回転ヘラ切り離し後未調整で，内底面は回転ナデ調整後に静止ナデ調整をおこなうが，不十分なため渦巻き状のロクロ目が残る。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒・白・赤色粒子，石英等の細粒が含まれている。

422は全体の1/4が残存する。法量は復元口径13.3cm，復元底径9.8cm，器高3.6cmを測る。器形は体部が底部から直線的に立ち上がり，体部中位よりやや下方で内側にわずかに屈曲して口縁部で外反し，口縁端部は外側へわずかに突出させて丸くおさめ，全体の形状は箱型を呈する。器面調整は口縁部から体部の内外面が回転ナデ調整で，外底面はナデ調整をおこうが板状圧痕が残り，内底面は回転ナデ調整が認められる。焼成は良好である。胎土は精良で白色粒子等の微粒が認められる。

土師器椀(423～433)

423は口縁部から体部の1/4が残存する。法量は復元口径15.4cmを測る。器形は体部が底部から腰部までやや丸みを持って立ち上がり，胴部は直線的に立ち上がり，口



第267図　古代土師器　皿・坏

縁部はわずかに外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面が回転ナデ調整で，胴部は外面が斜位の工具ナデ調整で，内面が横位の工具ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，体部の内外面に黒斑が認められる。胎土は精良で黒・白色粒子，石英，角閃石等の微粒が含まれている。

424は口縁部から体部の1/6が残存する。法量は復元口径19.4cmを測る。器形は口縁部がわずかに外反し，口縁端部を外側にわずかに突出させ，丸くおさめる。器面調整は体部の内外面に回転ナデ調整をおこない，体部外面の一部にミガキが認められる。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白・黒色粒子，石英，角閃石等の微粒が含まれている。

425は口縁部から体部の1/6が残存する。法量は復元口径12.5cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁部がわずかに外反し，口縁端部をやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は体部の内外面に回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白・黒・赤色粒子，石英，角閃石，金雲母の細粒が含まれている。

426は全体の2/3が残存する。法量は口径16.1cm，復元底径9.4cm，器高7.1cmを測る。器形は体部が高台から直線的に立ち上がり，体部上半でわずかに外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部から体部および高台の内外面が回転ナデ調整で，内・外底面は静止ナデ調整をおこなう。回転台は時計回りである。焼成はやや不十分で，軟質である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子，石英等の細粒を含んでいる。体部の内外面に植物繊維状の圧痕が認められる。

427は底部と口縁部から体部の1/6が残存する。法量は復元口径14.0cm，底径8.0cm，器高6.0cmを測る。器形は体部が高台から直線的に立ち上がり，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は口縁部から体部および高台の内外面が回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後に静止ナデ調整をおこない，内底面は回転ナデ調整後に静止ナデ調整をおこなう。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子，石英，金雲母の微粒が含まれている。体部内外面の中位に帯状の黒色化範囲が認められ，同じく内面には筋状に赤色化した範囲が認められる。

428は体部下半から底部が残存する。法量は復元底径7.2cmを測る。器形は高台が「ハ」の字状に開き，高台から直線的に体部が立ち上がる。器面調整は体部の内外面が工具ナデ調整またはケズリ後に回転ナデ調整で，外底面は回転ヘラ切り離し後は未調整で，内底面は回転ナデ調整後に「井」と「×」を組み合わせたような線刻をおこなう。回転台は時計回りである。焼成は良好である。胎土は粗く，黒・白・赤色粒子，石英，金雲母の細粒が多く含まれている。

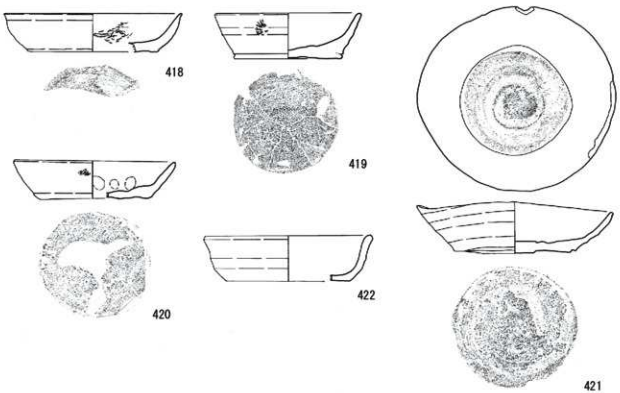
429は底部と口縁部から体部の1/2が残存する。法量は復元口径14.2cm，復元底径7.6cm，器高6.0cmを測る。器形は体部が高台から曲線的に立ち上がり，口縁部で外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部および高台の内外面が回転ナデ調整をおこない，高台下端部は未調整である。外底面はヘラ切り離し後に静止ナデ調整をおこない，内底面はナデ調整で体部の境に成形時の指頭圧痕が残る。回転台は時計回りである。焼成は良好でやや硬質である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子，石英等の細粒が含まれている。

430は口縁部から体部の1/6が残存する。法量は復元口径16.7cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁端部を丸くおさめる。器面調整は体部の内外面に回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，2㎜大の白色粒子や石英等の砂粒が含まれている。また，器面の剥落が著しい。

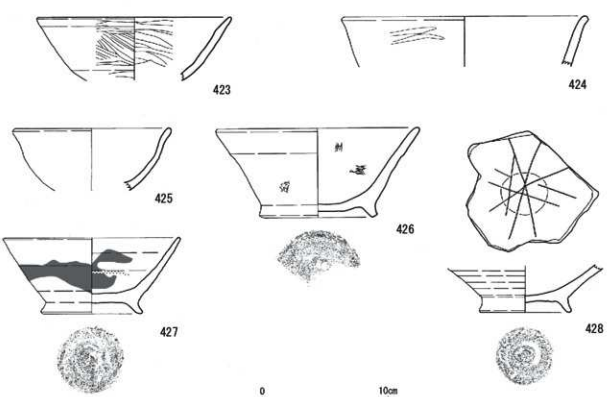
431は口縁部から体部の1/6が残存する。法量は復元口径15.2cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部の内外面に回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土は粗く，2～3㎜大の白・赤色粒子，石英，角閃石等の砂粒が多く含まれている。

432は体部下半から高台部が残存する。法量は復元高台径6.8cmを測る。器形は「ハ」の字状に開く高台から曲線的に体部が立ち上がる。器面調整は体部および高台部の内外面は回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後に静止ナデ調整をおこない，内底面は著しく摩耗しているがナデ調整と思われる。焼成は良好である。胎土は粗く，白・黒・赤色粒子，石英，角閃石の細粒が多く含まれている。

433は体部下端から高台部が残存する。法量は高台径9.0cmを測る。器形は「ハ」の字状に開く高台からやや曲線的に体部が立ち上がると思われる。器面調整は体部および高台部の内外面は回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後に中央付近はナデ調整で，その周縁は回転ナデ調整をおこなう。内底面は著しく摩耗しているがナデ調整と思われる。焼成は良好でススまたは黒斑と思われる黒色化範囲が認められる。胎土はやや粗く，白・黒・赤色粒子，石英，角閃石の細粒が多く含まれている。



第268図　古代土師器　坏



第269図　古代土師器　椀

土師器壺(434)

434は壺の破片と思われ，胴部下半から底部が残存する。法量は底径9.4cmを測る。器形は平底の底部からやや膨らみながら体部が立ち上がる。器面調整は胴部の内外面ともに不定方向の工具ナデ調整で，外底面は不定方向の工具等のナデ調整で一部ミガキのように光沢が認められる。内底面はナデ調整をおこない，胴部との境に指頭圧痕が認められる。焼成は良好でススまたは黒斑と思われる黒色化範囲が認められる。胎土はやや粗く，白・黒色粒子，石英，角閃石の細粒が多く含まれている。

焼塩土器(435)

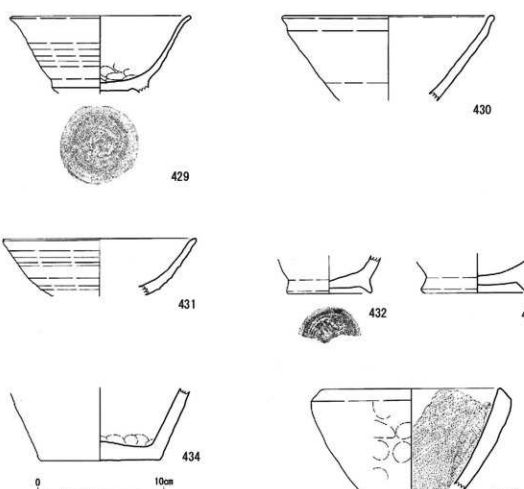
本遺跡では焼塩土器が数個体分出土しているが実測に耐えるものは1点のみであった。

435は口縁部から胴部下半が残存する。法量は口径15.7cmを測る。器形は底部を欠損しているが砲弾形を呈すると思われる。器面調整は外面がナデ調整で成形時の指頭圧痕が残り，内面は布目痕が認められ，縦方向の段差が残る。二次被熱によるためか器面が脆くザラザラとした質感である。胎土はやや粗く，白・黒色粒子，石英，角閃石の微粒が多く含まれている。

土師器鉢(436～438)

436は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は屈曲部で外反し口縁部は長く延びる。口縁端部はやや膨らみを持たせて丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，胴部の内面は残存がわずかであるが横位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられており屈曲部は明確な稜を持つ。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。外面にはススの付着が認められる。

437は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反し口縁部は長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともにナデ調整をおこない，胴部の内面は斜位のケズリ調整，屈曲部付近は横位のナデ調整をおこなう。胴部外面は横位，斜位のハケメ調整をおこなう。焼成はやや不良で，色調は内外面と



第270図　古代土師器　椀・壺・焼塩土器

もに浅黄橙色を呈する。胎土は粗く赤色粒子，石英，２～５㎜大の白色粒子が多く含まれる。

438は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径24.2cmを測る。器形は胴部外面から直線的に口縁部に至り，口縁部はやや短く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともにナデ調整をおこなう。胴部内面は横位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を形成する。胴部の外面はナデ調整をおこなう。器面の内外面ともにナデ調整時の指頭圧痕が残る。焼成は良好で，色調は外面が橙色，内面がにぶい橙色を呈し，胎土は赤・白色粒子をわずかに含む。口縁部の内外面にはススの付着と，被熱のためと思われる赤色化が認められる。

土師器甕（439～471）

439は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径24.4cmを測る。器形は残存がわずかであるが，胴部は器壁が薄くやや内湾しながら立ち上がり，頸部で外反して口縁部はやや長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整をおこない，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて胴部と口縁部の境に明確な稜を形成する部分と，上端が不揃いな部分の両方が認められる。胴部の外面はナデ調整をおこない，頸部は特に強い横位のナデをおこなう。焼成は良好で，色調は外面が明赤褐色，内面がにぶい褐色を呈し，胎土はやや粗く白色粒子，角閃石，金雲母を含む。口縁端部の内外面には黒色化が認められる。

440は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径22.4cmを測る。器形は残存がわずかであるが，胴部は直線的に立ち上がり，頸部で外反して口縁部はやや長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整をおこない，胴部の内面は斜位のケズリ調整で，その上端は揃えられて明確な稜を形成している。胴部の外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面が明赤褐色，内面が褐色を呈し，胎土はおおむね精良だが白色粒子，金雲母の微粒を多く含む。口縁部の内外面には部分的に黒色化が認められる。

441は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反して口縁部は長く延び，口縁端部は外面に若干の平坦面を持つ。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整をおこない，特に口縁端部は強いナデをおこなって外面には指頭圧痕が残る。胴部の内面は横位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を形成している。胴部の外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに橙色を呈する。胎土はおおむね精良だが赤・白色粒子をやや多く含む。口縁部内面には焼成前についた線状の痕跡が認められる。

442は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は残存がわずかであるが，胴部はほぼ直線的に立ち上がり，頸部で外反し口縁部は長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整をおこなう。胴部の内面は横位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を形成している。胴部の外面は縦位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに橙色を呈し，胎土はやや粗く３～７㎜大の赤・白色粒子を含む。胴部外面に一部黒色化が認められる。

443は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は残存がわずかであるが，胴部の器壁は薄く直線的に立ち上がり，頸部で外反して口縁部は長く延びる。口縁端部は外面に若干の平坦面を持つ。器面調整は内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は横位と斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を形成している。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに橙色を呈し，胎土はやや粗く１～２㎜大の白色粒子を含む。口縁端部の外面には一部黒色化が認められる。

444は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は残存がわずかであるが，胴部は直線的に立ち上がり，頸部で外反し口縁部はやや長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は縦位のケズリ調整をおこない，上端は不揃いで屈曲部の内面に明確な稜は持たない。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。残存部の内外面ともに部分的にススの付着が認められる。

445は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は残存がわずかであるが，胴部は直線的に立ち上がり，頸部で外反し口縁部はやや短く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面は横位のナデ調整，胴部の内面は屈曲部よりやや下がる位置に縦位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いで明確な稜は持たない。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面が褐色，内面は黒褐色を呈し，胎土は白色粒子をわずかに含む。残存部の内外面ともにススの付着と黒色化が認められる。

446は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反して口縁部は長く延び，口縁端部はわずかに平坦面を持つ。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて稜を形成している。胴部の外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で色調は外面がにぶい赤褐色，内面がにぶい褐色を呈し，胎土はやや粗く長石，

角閃石を多く含む。

447は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反し口縁部は長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面は回転ナデ調整，胴部の内面は縦位と横位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに橙色を呈し，胎土はやや粗く２～６㎜大の赤・白色粒子を含む。胴部の外面には一部黒色化が認められる。

448は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は胴部の器壁が薄く，頸部で外反し口縁部はやや短く延びる。口縁端部はわずかに平坦面を持つ。器面調整は口縁部の内外面は横位のナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を形成している。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し，胎土は白色粒子をわずかに含む。

449は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径20.2㎝を測る。器形は頸部で外反し口縁部はやや短く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面は回転ナデ調整，胴部の内面は横位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部の外面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面がにぶい赤褐色，内面が橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。外面にはススの付着が認められる。

450は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径18.8㎝を測る。器形は残存がわずかであるが，胴部は直線的に立ち上がると思われ，頸部で外反し口縁部は長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，胴部の内面は横位，斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を持つ。胴部の外面はナデ調整をおこない，下から上へ斜位方向の工具痕が認められる。焼成は良好で，色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈し，胎土は粗く石英，長石，金雲母が多く含まれている。残存部の内外面ともにススの付着と黒色化が認められる。

451は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径19.9㎝を測る。器形は頸部で緩やかに外反して口縁部はやや短く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を持つ。胴部の外面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で色調は外面が橙色，内面がにぶい橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。残存部の内外面ともにススの付着と黒色化が認められる。

452は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径19.6㎝を測る。器形は残存がわずかであるが，胴部の器壁は薄く，頸部で外反して口縁部はやや長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面は回転ナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を形成している。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で色調は外面が褐色，内面がにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや粗く石英，金雲母を多く含む。内面の一部と胴部外面にススの付着と黒色化が認められる。

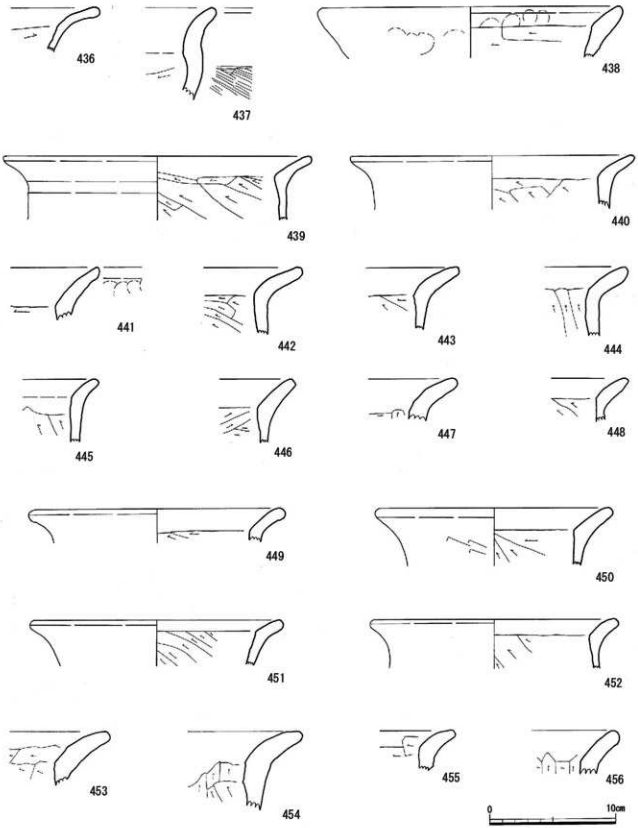
453は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反して口縁部が長く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面は回転ナデ調整，内面は胴部には横位と斜位のケズリ調整をおこなう。その上端はやや揃いである。胴部外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともににぶい褐色を呈し，胎土はやや粗く白色粒子，石英，金雲母が多く認められる。口縁部の内外面には黒色化が認められる。

454は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は胴部の器壁が厚く，頸部で外反して口縁部が長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，胴部内面は屈曲部よりやや下に縦位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部外面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面が明赤褐色，内面がにぶい橙色を呈し，胎土は赤・白色粒子をわずかに含む。口縁部と胴部の外面に黒色化が認められる。

455は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反して口縁部はやや短く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面は回転ナデ調整，胴部内面は横位のケズリ調整で一部口縁部までケズリ調整を行っている。残存がわずかであるがケズリ調整の上端は不揃いと思われる。胴部外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともににぶい橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。

456は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部から外反して口縁部は長く延び，口縁端部をやや外面側に突出させている。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部内面は横位，縦位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部外面は残存がわずかであるがナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。口縁端部には部分的に黒色化が認められる。

457は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径30.9㎝を測る。器形は頸部で外反し口縁部はやや短く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面はケズリ調整の後ナデ調整をおこない，明確な稜は持たない。胴部外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色



第271図　古代土師器　壺1

調は内外面ともに橙色を呈し，胎土は白色粒子，石英の微粒をわずかに含む。

458は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反し口縁部は長く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部外面は回転ナデ調整をおこなう。焼成はややや不良で，色調は橙色を呈し，胎土は１～５㎜大の赤・白色粒子をわずかに含む。

459は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径24.5cmを測る。器形は頸部で外反し口縁部は長く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，胴部内面は斜位のケズリ調整を施す。その上端は不揃いである。胴部外面はナデ調整をおこなうが，器表面に歪な箇所が認められるため，調整が比較的粗雑であると思われる。焼成は良好で，色調は橙色を呈し，胎土は赤・白色粒子をわずかに含む。口縁部の内外面に部分的に黒色化が認められる。

460は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反して口縁部はやや短く延び，口縁端部は丸くおさめる。屈曲部の外面には突帯状の段が認められるが，意図的もしくは調整時に形成されたものかは不明である。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，内面の胴部に縦位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。

461は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反し口縁部はやや短く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は横位のケズリをおこない，その上端は揃えられて明確な稜を形成する。胴部の外面は横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面が橙色，内面はにぶい橙色を呈し，胎土はやや粗く白色粒子，石英，金雲母を多く含む。口縁部の内面には部分的に黒色化が認められる。

462は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径28.7cmを測る。器形は残存部がわずかであるが，胴部の器壁は薄く内湾して立ち上がり，頸部で外反して口縁部は長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，胴部の内面は横位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を持つ。胴部の外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともににぶい褐色を呈し，胎土はやや粗く白色粒子，金雲母を多く含む。口縁部の内外面には部分的に黒色化が認められる。

463は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で外反し口縁部は長く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに回転ナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を持つ。胴部の外面は横位のナデ調整をおこない，特に屈曲部外面は強いナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面がにぶい橙色，内面はにぶい黄橙色を呈する。胎土は白・黒色粒子をわずかに含む。

464は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径29.2cmを測る。器形は頸部で外反し口縁部は長く延び，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を持つ。胴部の外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに明赤褐色を呈し，胎土はおおむね精良だが石英，金雲母の微粒を多く含む。口縁部の内外面には被熱のためと思われる赤色化が認められる。

465は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で強く外反し口縁部は長く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は揃えられて明確な稜を持つ。胴部の外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面がにぶい橙色，内面が橙色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。口縁部外面には黒色化が認められる。

466は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径30.0cmを測る。器形は胴部が直線的に立ち上がり，頸部で外反して口縁部は長く延びる。口縁端部は折りたたんだ玉縁状を呈する。また胴部外面の器表面に平滑でない部分が認められるため，調整が比較的粗雑であったものと思われる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部内面は斜位のケズリ調整をおこない，その上端は不揃いである。胴部の外面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面が黒褐色，内面がにぶい褐色を呈し，胎土は白色粒子，石英をわずかに含む。残存部の口縁端部と外面の全体に黒色化が認められる。

467は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は頸部で緩やかに外反し口縁部は短く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は外面にナデ調整，内面の胴部と口縁部の一部に横位のケズリ調整をおこない，屈曲部に明確な稜は持たない。焼成は良好で，色調は外面が明赤褐色，内面が暗赤褐色を呈し，胎土はやや粗く石英，角閃石を多く含む。

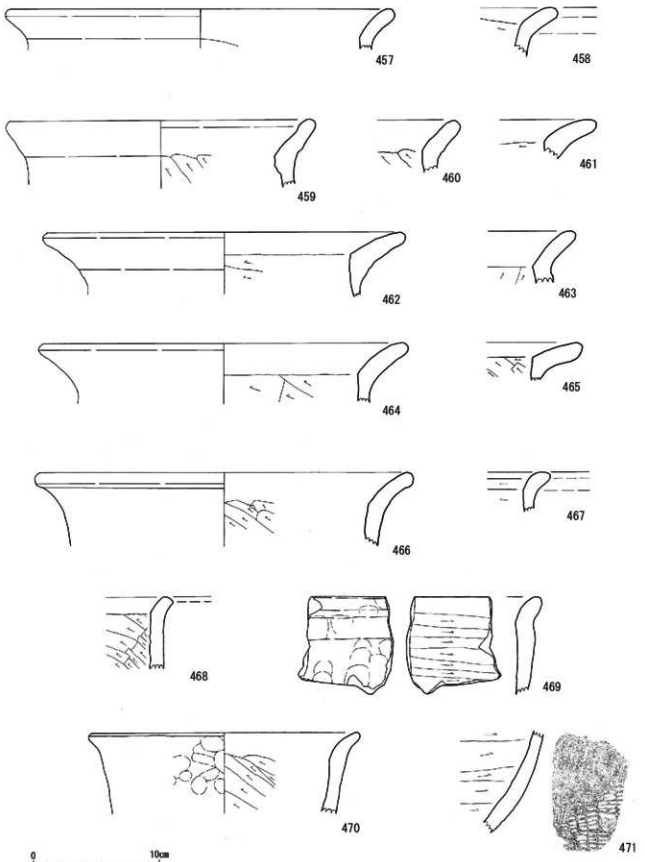
468は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は残存がわずかであるが，胴部は直線的に立ち上がり，頸部で外反して口縁部は短く延びる。口縁端部はわずかに平坦面を持つ。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整をおこない，屈曲部に明確な稜は持たない。胴部の外面はナデ調整を

おこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともに明赤褐色を呈し，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。外面にはススの付着が認められる。

469は口縁部から胴部上半の一部が残存する。器形は胴部がほぼ直線的に立ち上がり，頸部で外反して口縁部は短く延びる。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部内面は横位のケズリ調整で屈曲部は明確な稜を持たない。胴部外面はナデ調整をおこない，特に頸部は強い横位のナデ調整をおこなっており，成形時の指頭圧痕が多く残る。焼成は良好で，色調は外面が黒褐色，内面が橙色を呈し，胎土は砂粒をわずかに含む。残存部の外面全体にススの付着が認められる。

470は口縁部から胴部上半の一部が残存する。法量は復元口径21.4cmを測る。器形は頸部で外反して口縁部はやや短く延びる。器面調整は口縁部の内外面ともに横位のナデ調整，胴部の内面は斜位のケズリ調整，屈曲部付近は横位のナデ調整をおこなっており，頸部には明確な稜を持たない。胴部外面はナデ調整をおこない，指頭圧痕が多く残る。焼成は良好で，胎土は微細な砂粒を含むがおおむね精良である。色調は内外面ともに口縁部がにぶい黄橙色，屈曲部付近から胴部にかけて明赤褐色を呈する。これは被熱によるものか異なる胎土を使用しているためか不明である。器表には部分的に黒色化が認められる。

471は胴部片である。器面調整は外面の上半がナデ調整，下半がタタキをおこない，格子目が残る。内面は横位のケズリ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は外面がにぶい橙色，内面が浅黄橙色を呈し，胎土は粗く1～3mm大の赤色粒子を多く含む。外面には部分的に黒色化が認められる。



第272図　古代土師器　甕２

第48表　古代土師器観察表 1

掲載番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	胎土 石英	長石	角閃石	黒雲母	小礫	その他	色調 外面	内面	焼成	備考
第267図	400	I 29	表土	皿	底部	破片	–	–	–	回転ナデ、ナデ	ナデ	○					○	橙色	橙色	良	高台付皿
	401	C 30	Ⅳ a	皿	口縁～底部	10	(15.6)	(13.0)	1.6	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し
	402	B 36	表土	坏身	口縁～体部	破片	–	–	–	回転ナデ	回転ナデ	○		○			○	黒褐色	灰黄褐色	良	須恵器坏身の模倣品
	403	C 30	表土	坏	底部	10	–	(9.2)	–	回転ケズリ、回転ミガキ	ミガキ	○					○	橙色	明赤褐色	良	
	404	F 37	Ⅳ a	坏	口縁～底部	20	(12.8)	(9.4)	3.1	回転ナデ、ナデ、ケズリ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し 板状圧痕あり
	405	J 24	Ⅳ a	坏	口縁～底部	75	12.2	6.8	3.7	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、ナデ	○			○		○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	回転ヘラ切り離し
	406	D 27	Ⅳ a	坏	底部	25	–	7.4	–	回転ナデ、ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	○		○	○		○	浅黄橙色	にぶい橙色	良	回転ヘラ切り離し 植物繊維状圧痕
	407	E 30	Ⅳ a	坏	底部	50	–	(5.9)	–	回転ナデ、ナデ、回転ケズリ	回転ナデ、ナデ	○		○	○		○	にぶい橙色	浅黄橙色	良	回転ヘラ切り離し 十字状の線刻、板状圧痕
	408	A	表土	坏	底部	15	–	6.1	–	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○					○	橙色	橙色	良	回転ヘラ切り離し 指頭圧痕、植物繊維状圧痕
	409	D 26・31	表土	坏	口縁～底部	35	(13.2)	(5.4)	4.1	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	○					○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	ヘラ切り離し
	410	C 27・28	Ⅳ a	坏	底部	25	–	5.7	–	回転ナデ、ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	○		○	○		○	にぶい橙色	浅黄橙色	良	ヘラ切り離し 板状圧痕、植物繊維状圧痕
	411	D 27	Ⅳ a	坏	底部	25	(12.4)	(5.9)	3.6	回転ナデ、ナデ、ケズリ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し
	412	K 24	Ⅳ a	坏	口縁～底部	25	(15.4)	(9.6)	3.7	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し 板状圧痕
	413	F 37	遺構内	坏	口縁～底部	20	(15.2)	(9.0)	3.6	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	古墳時代竪穴建物内出土
	414	B 36	表土	坏	底部	破片	(12.8)	(5.8)	3.5	回転ナデ	回転ナデ、ナデ						○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	回転ヘラ切り離し
	415	D 28	Ⅳ a	坏	体部～底部	20	–	(6.1)	–	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	にぶい橙色	浅黄橙色	良	赤色化
	416	E 30	Ⅳ a	坏	口縁～底部	65	(13.2)	6.2	5.4	回転ナデ、ナデ、ケズリ	回転ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し 板状圧痕、黒色化
	417	L 25	Ⅳ a	坏	口縁～胴部	70	(13.2)	(6.2)	4.6	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し ススの付着
第268図	418	I 29	Ⅳ a	坏	口縁～底部	15	(14.4)	(10.0)	3.9	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	○		○			○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	ヘラ切り離し 指頭圧痕、植物繊維状圧痕
	419	F 37	Ⅳ a	坏	口縁～底部	60	(11.5)	8.4	3.6	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	○			○		○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	ヘラ切り離し 植物繊維状圧痕
	420	F 37	Ⅳ a	坏	口縁～底部	90	12.8	8.4	3.1	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	○		○			○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	回転ヘラ切り離し 指頭圧痕、植物繊維状圧痕
	421	J 23	畑	坏	口縁～底部	90	15.4	9.6	3.2～4.1	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	○					○	橙色	橙色	良	回転ヘラ切り離し
	422	I・J 25・26	表土	坏	口縁～底部	20	(13.3)	(9.8)	3.6	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	○					○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	板状圧痕
第269図	423	F 38	遺構内	椀	口縁～胴部	15	(15.4)	–	–	回転ナデ、工具ナデ	回転ナデ、工具ナデ	○		○			○	明褐灰色	浅黄橙色	良	古墳時代竪穴建物内出土 黒色化
	424	E 30	Ⅳ a	椀	口縁部	5	(19.4)	–	–	回転ナデ、ミガキ	回転ナデ	○		○			○	明赤褐色	明褐色	良	
	425	C 28	Ⅳ a	椀	口縁部	10	(12.5)	–	–	回転ナデ	回転ナデ	○		○	○		○	橙色	橙色	良	
	426	I 37・38	Ⅳ a	椀	口縁～底部	50	16.1	(9.4)	7.1	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	橙色	やや不良	植物繊維状圧痕
	427	C 29	Ⅳ a	椀	口縁～底部	40	(14.0)	8.0	6.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○			○		○	にぶい橙色	にぶい黄橙色	良	ヘラ切り離し 黒色化・赤色化
	428	B 36	Ⅳ a	椀	底部	30	–	7.2	–	回転ナデ、工具ナデ	回転ナデ、工具ナデ	○			○		○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	回転ヘラ切り離し 線刻あり
第270図	429	D 28	Ⅳ a	椀	口縁～底部	60	(14.2)	(7.6)	6.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○					○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し 指頭圧痕
	430	B 29	表土	椀	口縁～胴部	20	(16.7)	–	–	回転ナデ	回転ナデ	○		○	○		○	橙色	橙色	良	
	431	D 27	表土	椀	口縁～胴部	15	(15.2)	–	–	回転ナデ	回転ナデ	○		○			○	橙色	にぶい橙色	良	
	432	C 27	Ⅳ a	椀	底部	20	–	高台径(6.8)	–	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し
	433	M 26	畑	椀	胴部～底部	20	–	高台径9.0	–	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	○		○	○		○	にぶい橙色	橙色	良	ヘラ切り離し 黒色化
	434	F 36	遺構内	壺	底部	35	–	9.4	–	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	○		○			○	橙色	にぶい黄橙色	良	古墳時代竪穴建物内出土 指頭圧痕、黒色化
	435	F 37	Ⅳ a	焼塩土器	口縁～胴部	15	(15.7)	–	–	ナデ	布目痕	○	○	○			○	橙色	橙色	良	指頭圧痕

※( )は復元・残存値

第49表　古代土師器観察表２

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第271図	436	C-29	Ⅳa	鉢	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○			○	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	ススの付着
	437	H-37	遺構内	鉢	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ，ハケメ	ナデ，ケズリ	○		○			○	浅黄橙色	浅黄橙色	やや不良	古墳時代整穴建物内出土
	438	I-29	表土	鉢	口縁～胴部	5	(24.2)	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	橙色	にぶい橙色	良	指頭圧痕 ススの付着，赤色化
	439	I-36	Ⅴ	甕	口縁～胴部	5	(24.4)	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○	○		○	明赤褐色	にぶい褐色	良	黒色化
	440	A	表土	甕	口縁～胴部	10	(22.4)	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○	○		○	明赤褐色	褐色	良	黒色化
	441	C-27	Ⅴ	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○					○	橙色	橙色	良	指頭圧痕
	442	C-29	Ⅳa	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○					○	橙色	橙色	良	黒色化
	443	D-28	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○					○	橙色	橙色	良	黒色化
	444	C-28 -29	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○					○	橙色	橙色	良	ススの付着
	445	A	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○	○		○	褐色	黒褐色	良	黒色化・ススの付着
	446	B-29	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○	○	○	○		○	にぶい赤褐色	にぶい褐色	良	
	447	H-32 -33	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○			○	橙色	橙色	良	黒色化
	448	C-29	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○					○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	
	449	H-36 ～38	表土	甕	口縁～胴部	5	(20.2)	－	－	回転ナデ	回転ナデ，ケズリ	○					○	にぶい赤褐色	橙色	良	ススの付着
	450	A	表土	甕	口縁～胴部	5	(18.8)	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○	○		○		○	褐色	暗褐色	良	黒色化・ススの付着
	451	B-28	表土	甕	口縁～胴部	5	(19.9)	－	－	回転ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○			○	橙色	にぶい橙色	良	黒色化・ススの付着
	452	H-37	遺構内	甕	口縁～胴部	5	(19.6)	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○	○		○	褐色	にぶい黄橙色	良	古墳時代整穴建物内出土 黒色化・ススの付着
	453	J-32	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○			○		○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	黒色化
	454	B-30	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○			○	明赤褐色	にぶい橙色	良	黒色化
	455	A	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○			○	にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	456	L-25	Ⅲ	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	橙色	橙色	良	黒色化
第272図	457	B-30	Ⅳa	甕	口縁～胴部	5	(30.9)	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	橙色	橙色	良	
	458	C-35	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ，ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	橙色	橙色	やや不良	
	459	B-29	表土	甕	口縁～胴部	5	(24.5)	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○					○	橙色	橙色	良	黒色化
	460	B-30	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○			○	橙色	橙色	良	
	461	H-33	Ⅳa	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○			○		○	橙色	にぶい橙色	良	黒色化
	462	E-34	Ⅳa	甕	口縁～胴部	5	(28.7)	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○	○		○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	黒色化
	463	J-35 -36	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ケズリ	○		○			○	にぶい褐色	にぶい黄橙色	良	
	464	J・K-34-35	表土	甕	口縁～胴部	5	(29.2)	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○	○		○	明赤褐色	明赤褐色	良	赤色化
	465	B-30	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	にぶい橙色	橙色	良	黒色化
	466	L-25	Ⅲ	甕	口縁～胴部	5	(30.6)	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○					○	黒褐色	にぶい褐色	良	黒色化
	467	C-27	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ケズリ	○		○			○	明赤褐色	暗赤褐色	良	
	468	D-27	表土	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	明赤褐色	明赤褐色	良	ススの付着
	469	K-26	Ⅲ	甕	口縁～胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	黒褐色	橙色	良	指頭圧痕 ススの付着
	470	D-27	表土	甕	口縁～胴部	破片	(21.4)	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ	○		○			○	明赤褐色	明赤褐色	良	指頭圧痕，黒色化 口縁部はにぶい黄橙色
	471	A	表土	甕	胴部	破片	－	－	－	ナデ，タタキ	ケズリ	○		○			○	にぶい橙色	浅黄橙色	良	格子目痕 黒色化

＊（）は復元・残存値

黒色土器（第275・276図）

黒色土器皿（472～475）

472は底部片で坏の可能性もある。法量は復元底径8.8cmを測る。器面調整は外面に横位のヘラミガキ，内面に放射状のヘラミガキを隙間なくおこなう。外底面の砂粒は反時計回りに移動している。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子，石英，角閃石等の微粒が多く含まれている。

473～475は高台付皿の内黒土器である。

473は皿体部と高台部の1/2が欠損する。法量は復元口径13.0cm，復元底径6.9cm，器高4.7cmを測る。器形は「ハ」の字状に開く高台から直線的に体部が立ち上がり，口縁部はやや外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部外面が回転ヘラケズリ後に回転ナデ調整をおこない，砂粒は左方向に移動している。内面は口辺部に横位のヘラミガキ，体部から内底面にかけて放射状にヘラミガキをおこなう。高台部は内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は回転ヘラ切り離し後に丁寧な回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，黒・赤・白色粒子，石英，角閃石等の細粒が多く含まれている。

474は皿部の一部と高台部1/4が残存する。法量は復元口径12.6cm，底径6.3cm，器高4.0cmを測る。器形は「ハ」の字状に開くやや厚みのある高台から体部にかけて直線的に体部が立ち上がり，口縁部はわずかに外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部外面に回転ナデ調整をおこない，砂粒は左方向に移動している。内面は体部上半に横位のヘラミガキ，体部下半から内底面にかけて放射状にヘラミガキをおこなう。高台部は内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は回転ヘラ切り離し後にナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子等が含まれている。

475は皿部の底部片である。器形は体部が曲線的に立ち上がる。器面調整は体部外面が回転ヘラケズリ後に回転ナデ調整をおこない，砂粒は左方向に移動している。外底面は回転ナデ調整が認められる。内面は放射状のヘラミガキをおこなう。また，底部外面の下端に高台との接合のために3条の沈線が認められる。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子等が含まれている。

黒色土器椀（476～489）

476は体部上半と高台部の一部が欠損する。法量は復元口径16.0cm，高台径7.1cm，器高5.7cmを測る。器形は短く「ハ」の字状に開く高台からやや丸みをもって体部が立ち上がり，体部中位よりやや上方で外側へわずかに屈曲し，端部は丸くおさめる。器面調整は体部外面が回転ヘラケズリで，高台部との境は回転ナデ調整をおこない，砂粒は左方向に移動する。外底面は回転ヘラ切り離し後にナデ調整で高台部との境に強く回転ナデ調整をおこなう。内面は口縁部が横位のヘラミガキで体部から内底面にかけて放射状のヘラミガキをおこなう。体部外面の下半に植物繊維状圧痕が認められる。焼成は良好で外面に黒色化した範囲が一部認められる。胎土は粗く，1～5mm大の礫や白色粒子，石英等の小粒が多く含まれている。

477は1/6が残存し，坏の可能性もある。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに横位と斜位の丁寧なヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子等の微粒が多く含まれている。

478は1/6が残存する。法量は復元口径15.8cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁端部は尖り気味におさめる。器面調整は体部外面が回転ヘラミガキ後に斜位のヘラミガキをおこなう。また，口縁端部のやや下方に1条の沈線が認められる。内面は横位と斜位のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子等の微粒が多く含まれている。

479は1/6が残存する。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁端部は尖り気味におさめる。器面調整は体部外面が回転ナデで，器面の剥落が著しい。内面は放射状にヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子，石英，角閃石等の微粒が多く含まれている。

480は1/6が残存する。法量は復元口径18.6cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部外面がケズリ後に回転ヘラミガキで，体部下半にはさらに縦位のヘラミガキをおこなう。砂粒は左方向に移動する。内面は回転ヘラミガキ後に口辺部やや下方の縦位と斜位のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子，角閃石等の微粒が多く含まれている。

481は底部片である。器面調整は外底面がヘラ切り離し後に回転ナデ調整で，内底面は平行と放射状のヘラミガキをおこなう。また，底部外面の下端に高台との接合のために2～3条の沈線が認められる。焼成は良好である。胎土は粗く，白・黒色粒子，石英等の微粒が多く含まれている。

482は1/5が残存する。法量は復元口径17.2cmを測る。器形は体部がやや丸みをもって立ち上がり，胴部上位で外反し，大きく開く器形を呈する。器面調整は内外面ともに口辺部は回転ヘラミガキ，胴部は横位のヘラミガキをおこなう。焼成は良好で体部外面に黒斑が認められる。胎土はやや粗く，白色粒子，石英等の微粒が多く含まれている。

483は1/4が残存する。法量は復元口径14.6cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口辺部で外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部外面が回転ナデ

調整で，口縁端部のやや下方に強いナデ調整をおこない，口縁部を外反させる。内面は口辺部が横位のヘラミガキで，胴部は丁寧なヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや精良で，黒・白色粒子等の微粒が含まれている。

484は底部が残存する。法量は復元高台径7.2cmを測る。器形は高台が「ハ」の字状に開き，その端部が平坦面を成す。器面調整は高台部内外面が回転ナデ調整で，外底面は中央付近まで回転ナデ調整をおこない，内底面は平行と放射状のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で，黒・白色粒子，石英等の微粒が含まれている。

485は胴部から底部片で高台部の一部が欠損する。法量は復元高台径8.5cmを測る。器形は「ハ」の字状に開くやや厚めの高台から直線的に体部が立ち上がる。器面調整は胴部外面と高台部の内外面が回転ナデ調整で，外底部はナデ調整をおこなう。内面は放射状のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で，黒色粒子，石英等の微粒が含まれている。

486は胴部から底部が残存する。法量は高台径7.2cmを測る。器形は高台が「ハ」の字状に開き，その端部は丸くおさめ，やや外側へ突出する。器面調整は体部外面が胴部下端に回転ヘラケズリが認められ，高台部内外面は回転ナデ調整をおこなう。外底面は時計回りのヘラ切り離し後に回転ナデ調整で，内底面は平行のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で，石英の微粒が多く含まれている。

487は底部の1/2が残存する。法量は復元高台径7.6cmを測る。器形は「ハ」の字状に開く高台を有する。器面調整は高台部の内外面が回転ナデ調整で，外底部は放射状に指頭圧痕が残り，内底面は放射状のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子，石英等の微粒が多く含まれている。

488は1/4が残存する。法量は復元高台径6.6cmを測る。器形は「ハ」の字状に開く高台を有する。器面調整は高台部の内外面および外底部が回転ナデ調整で，内底面は放射状のヘラミガキをおこなうが器表面の剥落が著しい。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子，石英等の微粒が多く含まれている。

489は底部と高台1/2が残存する。法量は復元高台径7.8cmを測る。器形は器壁が厚く「ハ」の字状に開く低めの高台を有する。器面調整は高台部の内外面が回転ナデ調整で，外底部は回転ヘラ切り離し後に高台との境周辺を強めの回転ナデ調整，中央付近にナデ調整をおこなう。内底面は放射状のヘラミガキ後に放射状または平行のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子，石英，角閃石等の微粒が多く含まれている。

墨書土器（第277図）

本遺跡では墨書土器が17点出土しているが，そのほとんどが表土または包含層からの出土である。その内訳は表土・包含層から12点，遺構に伴うものが3点となっている。その分布域は本遺跡北東域のB～E・27～30区に集中している。今回出土した墨書土器は小破片で途中が欠損しているものがほとんどであった。このため明確に文字を判読できたものはないが，文字内に「田」の文字を含む等類似するもの数点が認められる。

「田」または「田」の文字を含むもの（490～494）

490はD27区のⅣaから出土した。体部外面に「田」の文字を含む墨書が認められる。内黒の黒色土器椀で口縁部から体部の破片である。口縁部がわずかしか残存していないが，体部がもう少し外側へ開く高台付皿の可能性がある。法量は復元口径15.2cmを測る。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，内面は体部に放射状のヘラミガキ後に口縁端部に横位のミガキをおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

491はB29区のⅣa層から出土した。土師器坏の口縁部から体部の破片で，体部外面に「田」の文字を含む墨書が認められる。法量は復元口径12.1cmを測る。器形は体部が直線的に開き，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

492はD28区のⅣa層から出土した。土師器皿で口縁部から体部の破片で，体部外面に「田」の文字を含む墨書が認められる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，白色粒子が含まれている。

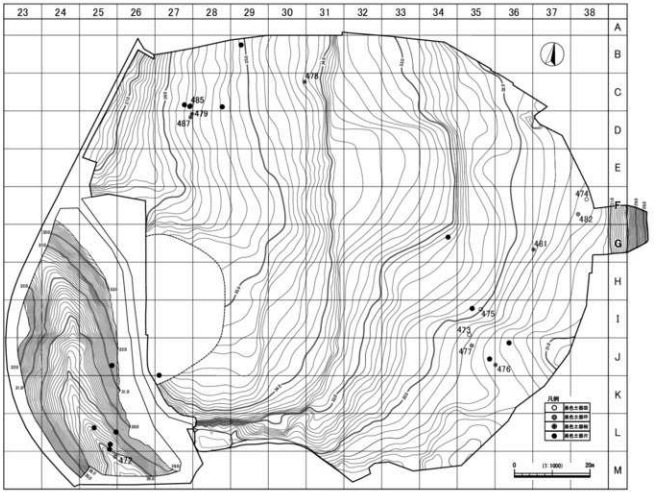
493はD28区のⅣa層から出土した。土師器坏または椀と思われる体部片で，体部外面に「田」の文字を含む墨書が認められる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，白色粒子が含まれている。

494はB30区の表土から出土した。体部外面に「田」の文字を含む墨書が認められる。土師器坏または椀と思われる体部片である。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，白色粒子，石英を含まれている。

その他判読不明なもの（495～502）

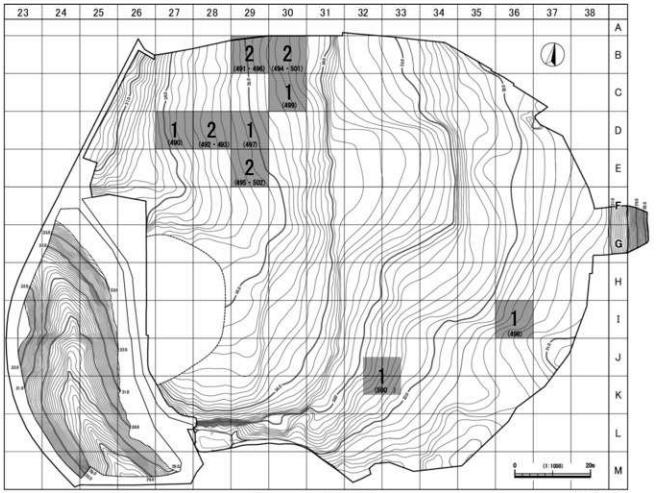
495はE29区の表土から出土した。土師器坏または椀と思われる体部片で，体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，白色粒子，石英が含まれている。

496はB29区のⅣa層から出土した。高台付皿，坏，



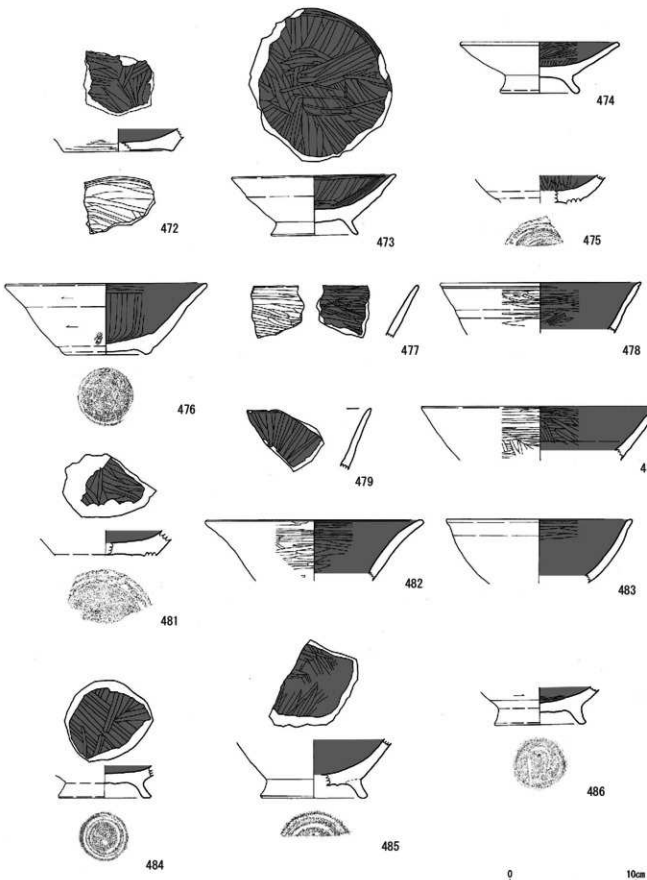
第273図　黒色土器分布図

Va層コンタ図



第274図　墨書土器分布図

Va層コンタ図


472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
0
10cm

第275図　黒色土器１

第50表　黒色土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第275図	472	M25	Ⅳa	坏	底部	15	−	(8.8)	−	ミガキ	ミガキ	○		○			○	橙色	黒色	良	黒色土器A
	473	I 35	Ⅳa	鉢	口縁～底部	75	(13.0)	(6.9)	4.7	回転ケズリ後回転ナデ	ミガキ	○		○			○	橙色	黒色	良	黒色土器A，高台付鉢 回転ヘラ切り離し 高台接合部に沈線あり
	474	F38	遺構内	鉢	口縁～底部	25	(12.6)	6.3	4.0	回転ナデ，ナデ	ミガキ	○					○	橙色	黒色	良	黒色土器A，高台付鉢 回転ヘラ切り離し，古墳時代竪穴建物内出土
	475	I 34	Ⅳa	鉢	胴部～底部	10	−	−	−	回転ナデ，回転ケズリ	ミガキ	○					○	浅黄橙色	黒色	良	黒色土器A 高台接合部に沈線あり
	476	J 35-36	Ⅳa	椀	口縁～底部	35	(16.0)	高台径7.1	5.7	回転ナデ，ナデ，回転ケズリ	ミガキ	○	○	○				橙色	黒色	良	黒色土器A 回転ヘラ切り離し 植物繊維状圧痕
	477	J 35	Ⅳa	椀または坏	口縁部	15	−	−	−	ミガキ	ミガキ	○		○			○	明赤褐色	黒色	良	黒色土器A
	478	C 30	Ⅳa	椀	口縁～胴部	15	(15.8)	−	−	回転ミガキ後ミガキ	ミガキ	○					○	橙色	黒色	良	黒色土器A 1条の沈線あり
	479	D 27	Ⅳa	椀	口縁～胴部	15	−	−	−	回転ナデ	ミガキ	○		○			○	にぶい黄橙色	黒色	良	黒色土器A
	480	G 34	一括	椀	口縁部	15	(18.6)	−	−	回転ミガキ後ミガキ，ケズリ	回転ミガキ後ミガキ	○		○			○	橙色	黒色	良	黒色土器A
	481	G 36	Ⅳa	椀	底部	5	−	−	−	回転ナデ	ミガキ	○		○			○	橙色	黒色	良	黒色土器A ヘラ切り離し 高台接合部に沈線あり
	482	F 38	Ⅳa	坏	口縁部	20	(17.2)	−	−	回転ミガキ，ミガキ	回転ミガキ，ミガキ	○						にぶい黄橙色	黒色	良	黒色土器A
	483	C・D 27-28	遺構内	椀	口縁～胴部	25	(14.6)	−	−	回転ナデ後ナデ	ミガキ	○						にぶい橙色	黒色	良	黒色土器A 古墳時代竪穴建物内出土
	484	F 33	遺構内	椀	底部	35	−	高台径(7.2)	−	回転ナデ	回転ナデ，ミガキ	○					○	橙色	黒色	良	黒色土器A 古墳時代竪穴建物内出土
	485	C 27	Ⅳa	椀	底部	25	−	高台径(8.5)	−	回転ナデ，ナデ	ミガキ	○		○			○	橙色	黒色	良	黒色土器A
	486	D・E 28-29	表土	椀	胴部～底部	35	−	高台径7.2	−	回転ケズリ，回転ナデ	ミガキ	○		○			○	にぶい黄橙色	黒色	良	黒色土器A 回転ヘラ切り離し
第276図	487	D 27	Ⅳa	椀	底部	35	−	高台径(7.6)	−	回転ナデ	ミガキ	○		○			○	橙色	黒色	良	黒色土器A 指頭圧痕
	488	J 33	表土	椀	底部	25	−	(6.6)	−	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ミガキ	○						浅黄橙色	黒色	良	黒色土器A 回転ヘラ切り離し
	489	G 30	Ⅳa	椀	底部	70	−	高台径(7.8)	−	回転ナデ	ミガキ	○		○			○	浅黄橙色	黒色	良	黒色土器A 回転ヘラ切り離し

＊()は復元・残存値

椀のいずれかの口縁部片と思われ，体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部外面が回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，赤・白色粒子，石英，角閃石等が多く含まれている。

497はD29区のⅣa層から出土した。土師器坏または皿の口縁部片と思われ，体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部内外面が回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，赤色粒子が多く含まれている。

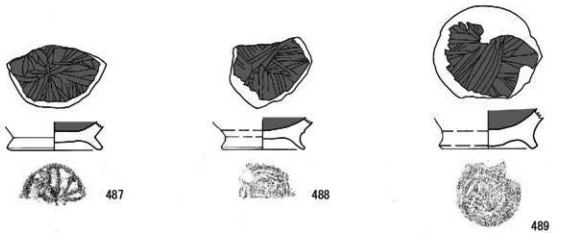
498はI36区のⅣa層から出土した。内黒の黒色土器の高台付皿の口縁部片と思われ，体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，内面は体部に放射状のヘラミガキ後に口縁部に横位のミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はおおむね精良で，白色粒子が含まれている。

499はC30区のⅣa層から出土した。土師器坏または椀と思われる体部片で，体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，白色粒子等が含まれている。

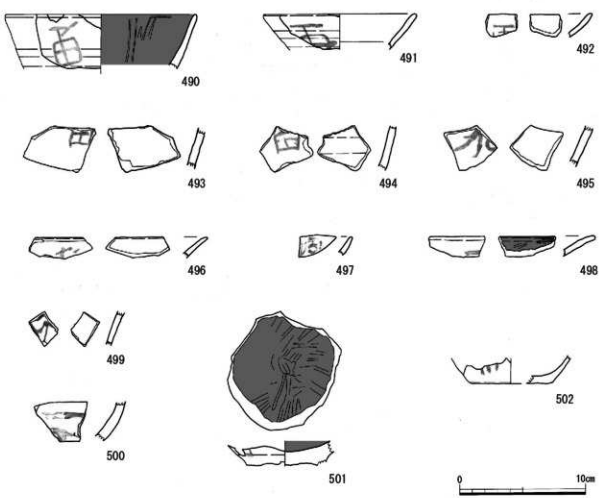
500はJ・K32・33区の包含層から出土した。器種不明の土師器の体部片で，体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部内外面がナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は粗く，白色粒子が多く含まれている。

501はB30区のⅣa層から出土した。内黒の黒色土器の高台付皿または椀の底部片と思われ，体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，内底面は放射状のヘラミガキをおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子，角閃石等が含まれている。

502はE29区のⅣa層から出土した。土師器坏の底部片で，復元底径は6.5cmを測る。体部外面に墨書が認められる。器面調整は体部内外面と内底面は回転ナデ調整で，外底面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土はやや粗く，黒色粒子等が含まれている。



第276図　黒色土器２



第277図　墨書土器

第51表　墨書土器観察表

第277図	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
	490	D27	Ⅳa	椀	口縁～胴部	15	(15.2)	－	－	回転ナデ	ミガキ					○	○	にぶい橙色	黒色	良	黒色土器A 「田」墨書あり
	491	E29	表土	坏	口縁～胴部	10	(12.1)	－	－	回転ナデ	回転ナデ					○	○	橙色	橙色	良	「田」墨書あり
	492	D28	Ⅳa	皿	口縁部	破片	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ					○	○	橙色	橙色	良	「田」墨書あり
	493	B30	表土	坏または椀	胴部	破片	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	○					○	浅黄橙色	にぶい橙色	良	「田」墨書あり
	494	D30, 31	表土	坏または椀	胴部	破片	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	○					○	橙色	にぶい黄橙色	良	「田」墨書あり
	495	E29	表土	坏または椀	胴部	破片	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ						○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	
	496	B29	Ⅳa	不明	口縁部	破片	－	－	－	回転ナデ	ナデ					○	○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	
	497	D29	Ⅳa	坏または皿	口縁部	破片	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	○				○	○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	
	498	I36	Ⅳa	皿	口縁部	破片	－	－	－	回転ナデ	ミガキ					○	○	橙色	黒色	良	黒色土器A 高台付皿
	499	C30	Ⅳa	坏または椀	胴部	破片	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ						○	明赤褐色	明赤褐色	良	
	500	J・K 32・33	遺構内	不明	胴部	破片	－	－	－	ナデ	ナデ	○		○			○	にぶい橙色	橙色	良	古墳時代竪穴建物内出土
	501	B30	Ⅳa	皿または椀	底部	破片	－	－	－	回転ナデ	ミガキ	○		○			○	にぶい橙色	黒色	良	黒色土器A
	502	E29	Ⅳa	坏	底部	15	－	(6.5)	－	回転ナデ, ナデ	回転ナデ					○	○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	

※()は復元・残存値

古代須恵器（第278～281図）

須恵器皿（503）

503は底部片である。法量は復元底径15.0cmを測る。器面調整は内面見込みが回転ナデ調整で中央付近が窪んでおり，外底面は回転台から切り離し後不定方向の丁寧なナデ調整をおこない，わずかに残る体部との境は不明瞭である。内面の砂粒の移動方向から回転台は時計回りである。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗めで1㎜以下～2㎜大の白色粒子等が器表面に多く認められる。

須恵器坏（504～506）

504は体部下半から底部まで残存する。法量は復元底径7.8cmを測る。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，体部外面の下端はナデ調整が不十分である。内面の見込みは回転ナデ調整がおこなわれ，外底面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。また体部外面から内面見込みにかけて火襷状の黒色化が認められる。体部内面の砂粒が左方向へ移動していることから回転台は時計回りである。焼成は良好でやや軟質である。胎土はやや粗めで1㎜大以下の白色粒子等が器表面に多く認められる。

505は体部下半から底部まで残存する。法量は復元底径6.4cmを測り，底部からの立ち上がりがやや外側に開く器形を呈する。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，体部外面の下端はヘラ切りにより粘土がはみ出すが未調整のままである。内面の見込みは回転ナデ調整と自然釉が認められ，外底面はヘラ切り離し後丁寧なナデ調整をおこなうが中央付近にはヘラ切り痕が残る。体部内面の砂粒が左方向へ移動していることから回転台は時計回りである。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗めで1㎜大以下の白色粒子等が器表面に多く認められる。

506は体部下半から底部まで残存する。法量は復元底径8.8cmを測る。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，底部はわずかな残存であるが内面の見込みは回転ナデ調整，外底面は不定方向のナデ調整がそれぞれ認められる。焼成は良好で締まる。胎土は精良で1㎜以下の白色粒子がまばらに含まれている。

須恵器壺（507～513）

507は口縁部～頸部が残存し，蹴の可能性がある。法量は復元口径11.2cmを測る。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。口縁の形態は二重口縁となっており，口縁上端の内面は斜めに面を成し，外面は丸くおさめ，口縁屈曲部は若干突出させ稜をなしている。内外面ともに自然釉がかかる。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く1㎜以下の白色粒子等が含まれている。

508は口縁部片である。法量は復元口径17.2cmを測る。口縁の形状はやや外反させ，口縁端部を肥厚させて口縁帯状の面を形成している。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好でやや軟質である。胎土は精良である。

509は胴部から底部まで残存する。法量は復元底径8.2

cmを測る。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整をおこない，底部をヘラ切り離し後は未調整で，高台を貼付け高台内と底部の境をナデによって接合している。高台は断面が台形状を呈し底部と体部の立ち上がり部分にやや外側に開くように貼付けている。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗めで1㎜以下～2㎜大の白色粒子等が器表面に多く認められる。

510の器面調整は外面が不定方向に格子状のタタキをおこない，内面は同心円の当て具をおこなった後，横位の平行タタキ痕が認められる。焼成は良好で硬質である。胎土は精緻で1㎜大の白色粒子が多く含まれている。

511・512は壺の胴部下半片で同一個体の可能性がある。器面調整は外面が横方向の平行タタキをおこない，内面はナデ調整で成形時の指頭圧痕が認められる。焼成は良好で硬質である。内外面の色調は赤味を帯びている。胎土はぼさぼさとして粗めで1㎜以下の黒・白粒子等が多く含まれている。

513の器面調整は外面が不定方向に格子状のタタキをおこない，内面はナデ調整で成形時の指頭圧痕が残る。焼成は良好で硬質である。胎土は精良で1㎜大の白色粒子がまばらに認められる。

須恵器甕（514～541）

514～516は小型の甕である。

514は口縁部から肩部まで残存する。法量は復元口径14.0cmを測る。口縁部はやや外反させ，口縁端部を肥厚させて口端上角は丸くおさめ，下角をやや突出させ幅の狭い口縁帯状を呈する。器面調整は外面の残存部の全体に自然釉がかかっているため判然としないが胴部に斜方向の平行または格子状のタタキ痕が認められ，内面の口縁部は回転ナデ調整で胴部には同心円の当て具痕が認められる。焼成は良好で硬質である。胎土には多くの黒色・白色粒子を含む。

515は頸部の立ち上がりがわずかに残る。器面調整は外面が横方向へ平行タタキがおこなわれ，内面が同心円の当て具痕が認められる。焼成は良好で硬く締まり，内外面ともに色調が赤味を帯びている。胎土は精緻で白・黒色粒子をわずかに含んでいる。

516は小型の甕で頸部から体部まで残存する。器面調整は外面が格子状のタタキ成形後，口頸部に回転ナデ調整をおこない，内面が回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で硬質である。胎土は精緻だが1㎜大の白色粒子が多く含まれている。

517・518は大型の甕である。

517は口縁部片で口縁端部が欠損している。法量は復元口径が38.3cmを測る。器面調整は内外面に工具ナデ調整またはカキ目調整と思われる調整がおこなわれる。焼成がやや不十分なためか軟質で，胎土はやや粗く1㎜以下の白色粒子が多く含まれており，2㎜大の黒色粒子がまばらに含まれている。

518は頸部片である。器面調整は外面にわずかに格子状のタタキ痕が認められ，その後カキ目調整がおこなわれる。内面はナデ調整またはカキ目と思われる調整をおこなう。焼成は良好で硬質である。胎土は精緻で1㎜以下の黒・白色粒子がまばらに認められる。

519は頸部片である。器面調整は外面が回転ナデ調整をおこない，内面の頸部が回転ナデ調整，胴部に同心円の当て具痕が残る。焼成は良好で硬質である。胎土は精緻だが器表面に1㎜大の白色粒子が多く含まれている。

520～527は胴部の上半部である。

520の器面調整は外面が斜方向の格子状のタタキで，内面は残存部の上半部が同心円の当て具をおこなった後に下半部の平行タタキをおこなっていることが切りあい関係から窺え，さらに下半には平行タタキを切って一部ケズリをおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土は精良で1㎜以下～2㎜大の白色粒子が断面と内面に目立って認められる。

521・522はともに器面調整は外面が格子状のタタキをおこない，内面は同心円の当て具痕が残る。焼成は良好で硬質である。胎土はともに1㎜以下～2㎜大の白色粒子が多く含まれている。

523の器面調整は外面が自然釉と剥離により不明で，内面は同心円の当て具痕が残る。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く1㎜以下の黒・白色粒子が多く含まれている。

524の器面調整は外面が縦方向へ平行タタキをおこない，内面は同心円の当て具痕が残る。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く胎土内および器表面に1㎜大の小穴があばた状に認められる。

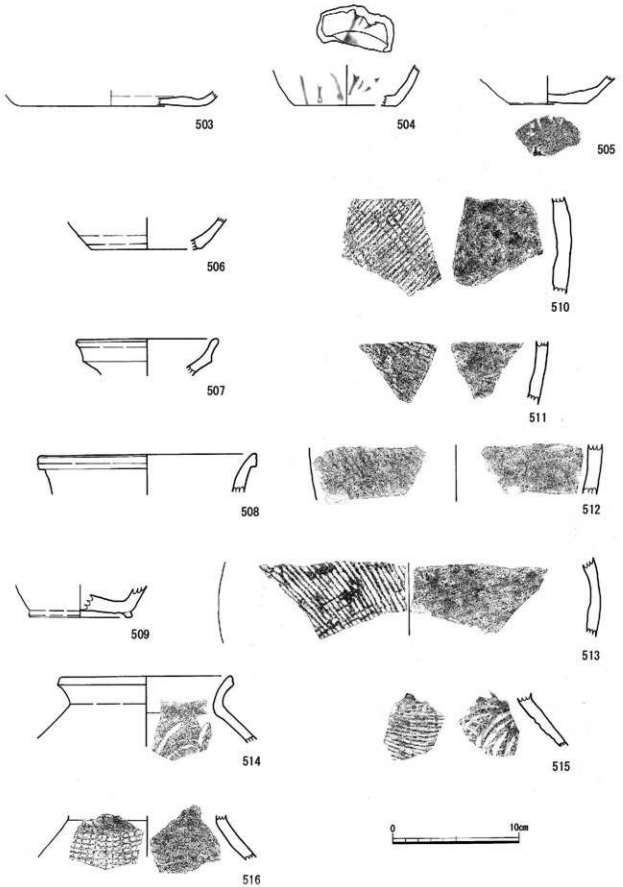
525の器面調整は外面が不定方向に格子状のタタキをおこない，内面は同心円の当て具をおこなった後，縦方向へ溝幅が広めの平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く1㎜大の白色粒子等が含まれている。

526・527は胴部上半部片である。ともに器面調整は外面が不定方向の格子状のタタキで，内面は同心円の当て具痕が残る。焼成は良好で硬質である。胎土は精緻で1㎜以下の黒・白色粒子が含まれている。

528～539は胴部の下半部である。

528の器面調整は外面が不定方向に格子状のタタキをおこない，内面は同心円の当て具をおこなった後，縦位の平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く1㎜大の白色粒子等が含まれている。

529の器面調整は外面が斜方向の平行タタキで，内面は残存部の上半が同心円の当て具痕が残り，下半が平行タタキをおこなっているが，同心円の当て具痕を平行タ



第278図　古代須恵器１

タキが切っていることから，同心円の当て具痕をおこなった後に平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く１㎜以下～４㎜大の橙色粒子，１㎜以下の黒・白色粒子が含まれている。

530の器面調整は外面が不定方向の格子状のタタキで，内面は残存部の上半が同心円の当て具痕が残り，下半が平行タタキをおこなっているが，同心円の当て具痕を平行タタキが切っている部分とその逆もみられることから，この一部に限られるかもしれないが交互に調整をおこなっている。また最終的に一部ナデ調整をおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土は精緻で２㎜以下の白色粒子がまばらに認められる。

531・532は同一個体の可能性があり，ともに器面調整は外面が格子状のタタキで，内面は縦位へ溝幅が広めの平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。体部外面の色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土はやや粗く，１㎜以下～２㎜大の黒・白色粒子が含まれている。

533の器面調整は外面が格子状のタタキで，内面は縦方向の平行タタキをおこなっている。焼成は不十分でやや軟質で，内外面ともににぶい赤褐色を呈する。胎土が粗く，１㎜以下～３㎜大の橙・白・黒色粒子が断面と内面に多く認められる。

534の器面調整は外面が格子状のタタキで，内面は斜位の平行タタキをおこなっている。焼成は不十分のためかやや軟質で，色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。胎土は粗く，１㎜以下の白色粒子がまばらに認められる。

535の器面調整は外面が不定方向の平行タタキで，内面は斜位の平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土は精緻で白色粒子がわずかに含まれている。

536の器面調整は外面が斜方向の平行タタキで，内面は縦位の平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。体部外面の色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土はやや粗く，１㎜以下～２㎜大の橙・白・黒色粒子が断面と内面に多く認められる。

537の器面調整は外面が不定方向の平行タタキで，内面は横位へ溝幅がやや広めの平行タタキをおこなっている。焼成は不十分なため軟質で，内外面ともに色調は灰黄褐色を呈する。胎土は粗く，１㎜以下～２㎜大の白色粒子，雲母が含まれている。

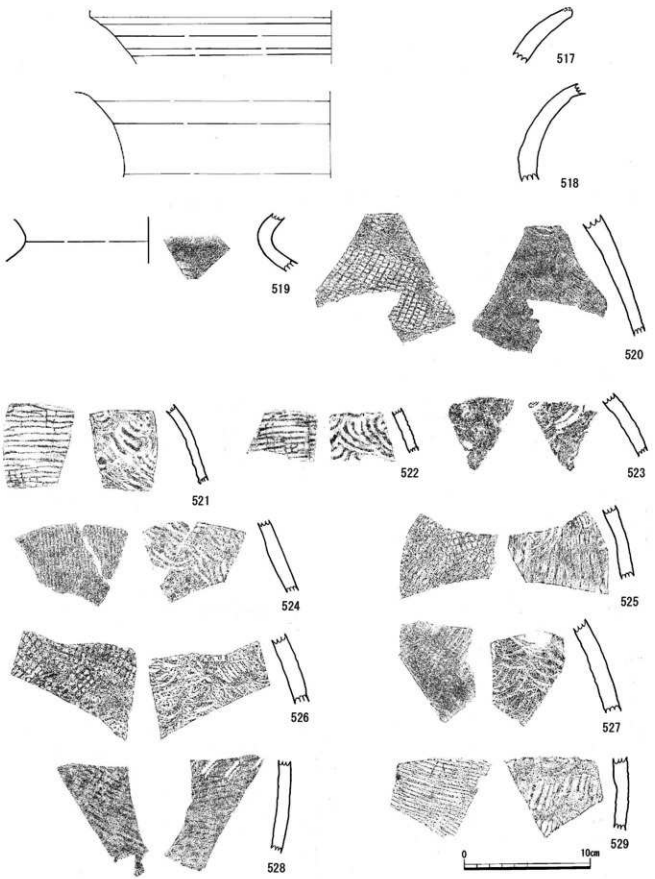
538の器面調整は外面が格子状のタタキで，内面は横位へ溝幅が広めの平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く，１㎜以下～２㎜大の白色粒子が多く含まれている。

539の器面調整は外面が格子状のタタキで，内面は斜位の平行タタキをおこなっている。焼成は不十分なため軟質で，内外面ともに色調はにぶい赤褐色を呈する。胎土はやや粗く，砂粒を多く含み，特に１㎜以下～２㎜大の橙・黒色粒子が多く含まれている。

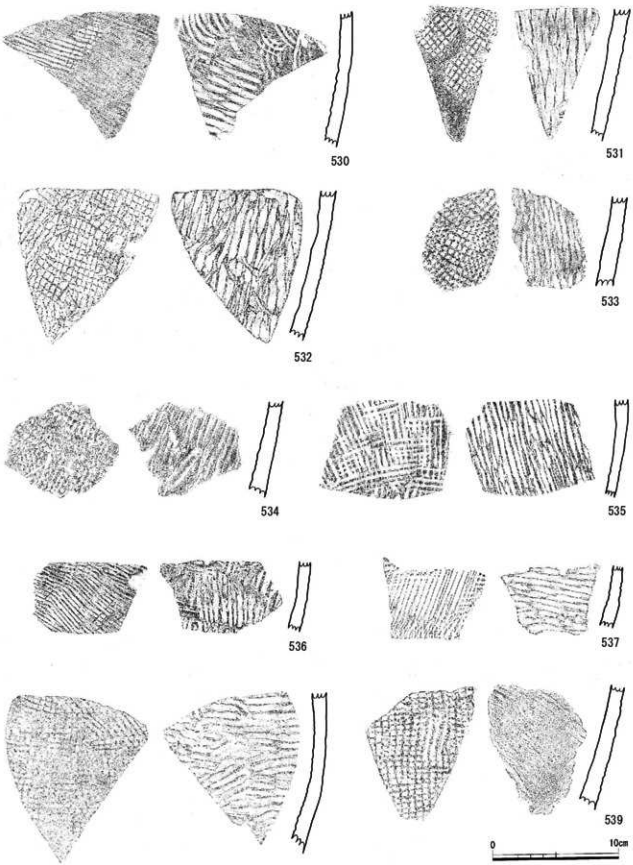
540・541は底部片である。

540の器面調整は外面がカキ目調整後「キ」の字状のヘラ記号を施し，内面は不定方向へナデ調整をおこなっており，成形時の指頭圧痕も残っている。焼成は不十分なためやや軟質で，色調は外面が褐灰色，内面が灰褐色を呈する。胎土は精緻で，１㎜以下～２㎜大の橙・白色粒子が含まれている。

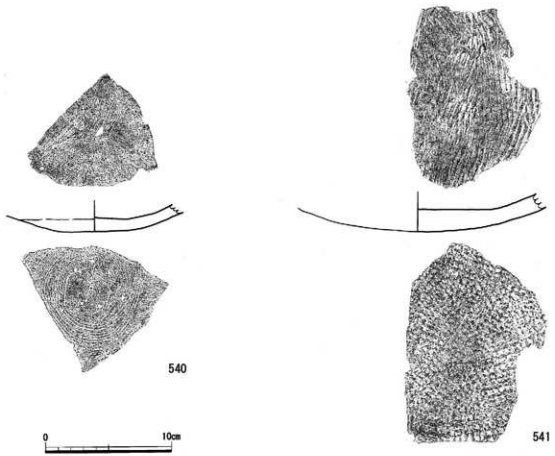
541の器面調整は外面が格子状のタタキで，内面は不定方向の平行タタキをおこなっている。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く，砂粒を多く含み，特に１㎜大の白色粒子が多く含まれている。



第279図　古代須恵器２



第280図　古代須恵器３



第281図　古代須恵器４

第52表　古代須恵器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第278図	503	E 36	表土	皿	底部	10	—	(15. 6)	—	ナデ	回転ナデ						○	灰色	灰色	良	
	504	D 29	表土	坏	底部	15	—	(8. 0)	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	灰黄色	灰黄色	良	ヘラ切り離し 穴痕あり
	505	H 34	Ⅳa	坏	底部	10	—	(6. 4)	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	黄灰色	灰黄色	良	ヘラ切り離し
	506	D 27	表土	坏	体部～底部	10	—	(8. 8)	—	回転ナデ, ナデ	回転ナデ						○	にぶい黄色	にぶい黄色	良	
	507	F 37	Ⅳa	壺	口縁部	5	(11. 2)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	灰色	灰色	良	自然釉がかかる
	508	B 29	表土	壺	口縁部	5	(17. 2)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	灰黄色	灰黄色	良	
	509	C・E 31	遺構内	壺	底部	5	—	(8. 2)	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	灰色	灰色	良	ヘラ切り離し 近世古道内出土
	510	E 25	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	黄灰色	黄灰色	良	
	511	I 35～38	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	平行タタキ	ナデ						○	にぶい赤褐色	褐色	良	
	512	H 32	表土	壺	胴部	5	—	—	—	平行タタキ	ナデ						○	褐色	橙色	良	
	513	F 30・31	表土	壺	胴部	5	—	—	—	格子状タタキ	ナデ						○	黄灰色	黄灰色	良	
	514	B 28	表土	壺	口縁～胴部	5	(14. 0)	—	—	格子状タタキ	回転ナデ 同心円						○	灰色	にぶい赤褐色	良	小型壺
	515	B 28	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	平行タタキ	同心円						○	にぶい赤褐色	褐色	良	小型壺
	516	E 37	Ⅳa	壺	胴部	5	—	—	—	格子状タタキ	回転ナデ						○	灰色	灰色	良	小型壺
第279図	517	F 31	表土	壺	口縁部	5	(38. 3)	—	—	工具ナデまたはカキ目	工具ナデまたはカキ目						○	褐灰色	にぶい黄褐色	やや不良	大型壺
	518	B 29	表土	壺	口縁部	5	—	—	—	格子状タタキ, カキ目	ナデまたはカキ目						○	灰褐色	にぶい黄褐色	良	大型壺
	519	I 36	Ⅳa	壺	頸部	5	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ, 同心円						○	灰色	灰色	良	
	520	J 32	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ, ケズリ						○	灰色	灰色	良	
	521	G・H 33	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	同心円						○	灰色	灰色	良	
	522	J 32・33	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	同心円						○	灰色	灰色	良	
	523	H～J 32-33	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	不明	同心円						○	灰黄色	黒褐色	良	自然釉がかかる
	524	I 36	Ⅲ	壺	胴部	破片	—	—	—	平行タタキ	同心円						○	黒褐色	黒褐色	良	
	525	E 30・31	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	同心円, 平行タタキ						○	褐灰色	灰黄色	良	
	526	J 37	Ⅳa	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	同心円						○	にぶい赤褐色	黄灰色	良	黒色化
	527	M 27	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	同心円						○	にぶい赤褐色	黄灰色	良	
	528	D 30	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	同心円, 平行タタキ						○	オリーブ黒色	灰色	良	
	529	I 35	Ⅳa	壺	胴部	破片	—	—	—	平行タタキ	同心円, 平行タタキ						○	黒褐色	灰褐色	良	
第280図	530	G 38	Ⅴa	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	同心円, ナデ, 平行タタキ						○	灰色	灰色	良	
	531	D・E 28-29	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	にぶい赤褐色	黄灰色	良	
	532	M 32	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	にぶい赤褐色	黄灰色	良	
	533	A	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	
	534	E 25	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	535	C 29	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	平行タタキ	平行タタキ						○	灰黄色	灰黄色	良	
	536	G 34	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	平行タタキ	平行タタキ						○	にぶい赤褐色	灰褐色	良	
	537	B・C 27-28	Ⅳa	壺	胴部	破片	—	—	—	平行タタキ	平行タタキ					○		灰黄褐色	灰黄褐色	良	
	538	H 36	Ⅴa	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	灰色	灰色	良	
	539	B 26	表土	壺	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	やや不良	
第281図	540	B・C 28-29	表土	壺	底部	5	—	—	—	カキ目	ナデ						○	褐灰色	灰褐色	良	
	541	D・E 28-29	表土	壺	底部	5	—	—	—	格子状タタキ	平行タタキ						○	橙色	橙色	良	

＊口は復元・残存値

第４節　中世の成果

１　遺構

中世の遺構としては，掘立柱建物跡34棟，竪穴建物跡３基，土坑墓３基，土坑68基，古道跡15条，溝跡16条が検出されている。中世における遺構全体の評価は総括でおこなうが，古道跡及び溝跡が規格的に整備され，そこに掘立柱建物跡群や土坑が，ある程度規則的に配置されているのが確認できる。

（１）掘立柱建物跡（第282～320・390図　掘立柱建物跡１～43号）

掘立柱建物跡は34棟検出されている。柱穴自体は5000基以上検出されているため，さらに多くの建物が建っていたと考えられる。掘立柱建物跡は東側（川側）・中央・西側と川久保遺跡の地形により３か所に分かれて検出されている。基本的には南北に軸を持つものが多く，柱穴の径は建物ごとの平均で25cm前後から30cm程度のものが多いが，掘立柱建物跡17号と33号のみは40～50cmとやや径が大きくなっている。柱穴の埋土は大まかに黒色土・黒褐色土・その他の３種類に分けられる。以下は柱穴から出土した遺物である。

掘立柱建物跡24号－１は土師器坏の底部片で柱穴８から出土した。法量は底径6.1cmを測る。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後に板状圧痕が認められ，内底面は回転ナデ調整後に静止ナデをおこなう。焼成は良好で，外面は被熱により黒色化と赤色化範囲が認められる。胎土はやや粗く，白色粒子，石英，金雲母などの微粒が含まれている。

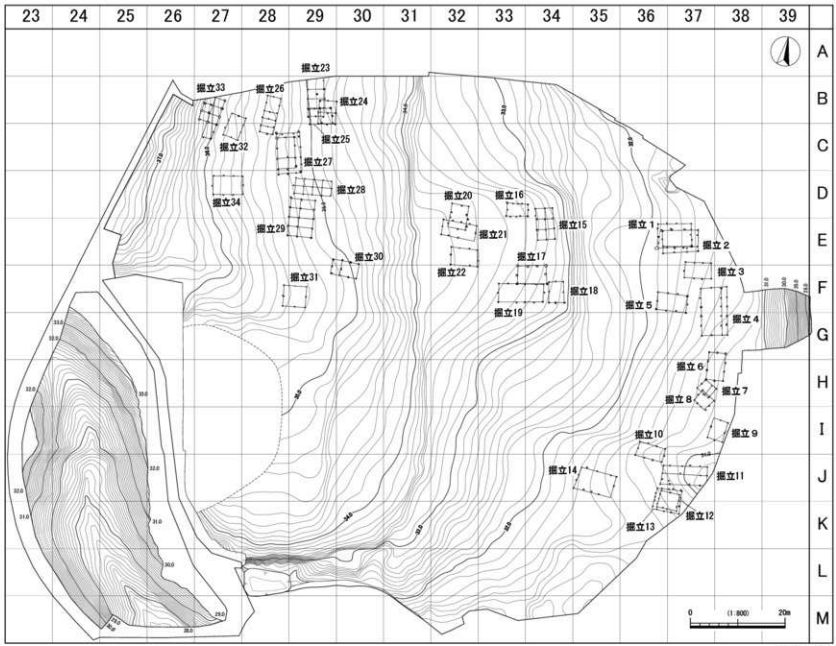
掘立柱建物跡25号－１は土師器坏の底部片で柱穴５から出土した。法量は底径6.4cmを測る。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後に板状圧痕が認められ，内底面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，白色粒子，石英，金雲母などの細粒が含まれている。

掘立柱建物跡25号－２は須恵器坏身の底部片で柱穴３から出土した。法量は復元高台径10.2cmを測る。器形は「ハ」の字状に開く高台を底部と体部の境に貼付け，高台接地面は平坦面を成し，高台端部はやや上方へわずかに跳ね上げる。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，外底面はナデ調整，内底面は回転ナデ調整と静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，硬質である。胎土はやや粗く，白色粒子などの小粒が多く含まれている。

掘立柱建物跡28号－１は白磁碗で柱穴７から出土した。腰部から高台までが残存する。法量は高台径6.2cmを測る。器形は高台が高く細く直立する。内面には櫛目で花文を描く。胎土は灰白色を呈し，硬質でわずかに気泡を含む。内面と高台外面まで施釉されており，釉調は灰黄色を呈する。

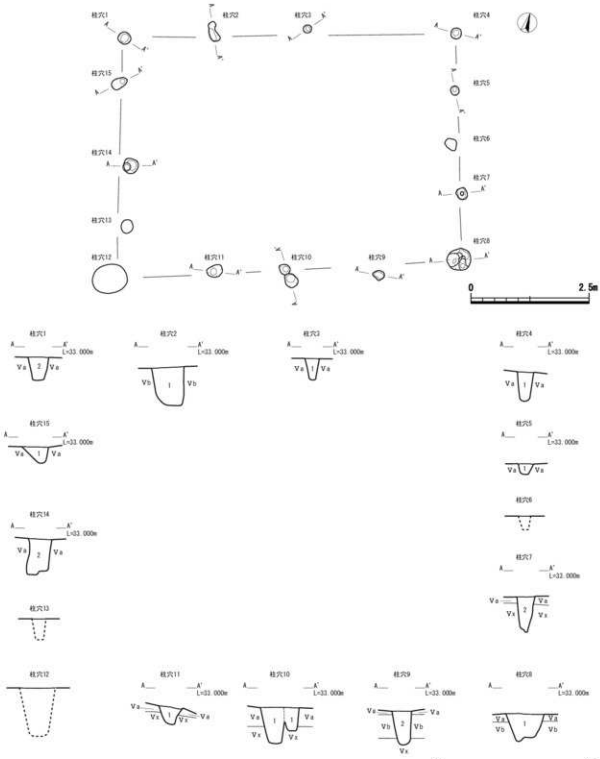
掘立柱建物跡28号－２は白磁碗で柱穴３から出土した。口縁部から胴部までが残存する。器形は口縁端部が外反する端反り碗である。器壁は比較的分厚い。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。残存部の内外面に施釉されており，釉調は灰黄色を呈し，表面に貫入が認められる。

掘立柱建物跡33号－１は土師器坏または椀の体部片で柱穴６から出土した。体部外面に墨書が認められるが，小片のため詳細は不明である。焼成は良好である。胎土はおおむね精良で，黒色粒子などの微粒が含まれている。



Va層コンタ図

第282図　掘立柱建物跡配置図



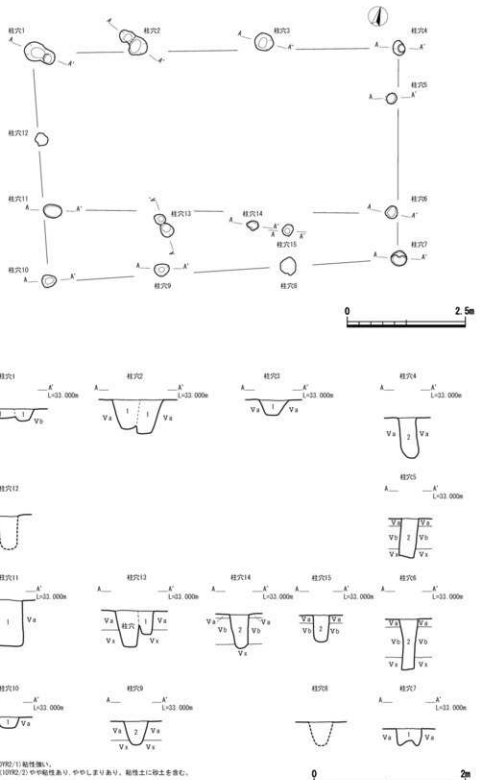
1：黒色土（10YR2/1）粘性強い。
2：黒褐色土（10YR2/2）やや粘性あり。ややしまりあり。粘性土に砂土を含む。

掘立柱建物跡１号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	26	31	1－2　184	黒褐
2	27	52	2－3　200	黒
3	18	29	3－4　(316)	黒
4	23	38	4－5　120	黒
5	19	15	5－6　112	黒
6	—	—	6－7　104	—
7	23	47	7－8　140	黒褐
8	47	37	8－9　176	黒

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
9	22	44	9－10　176	黒褐
10	38	48	10－11　176	黒
11	29	23	11－12　220	黒
12	—	—	12－13　120	—
13	—	—	13－14　136	—
14	33	49	14－15　160	黒褐
15	27	22	15－1　96	黒

第283図　掘立柱建物跡１号

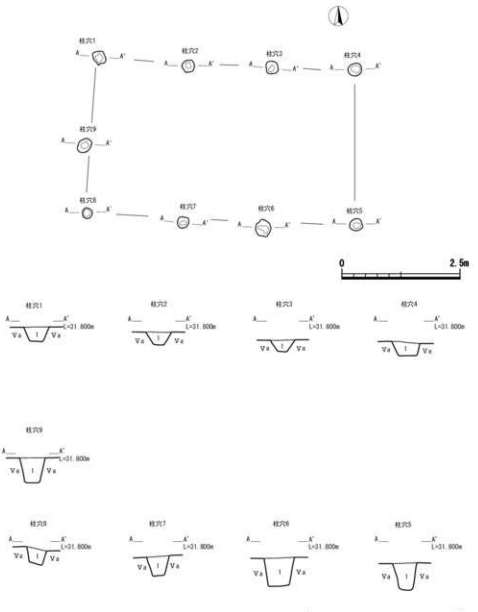


掘立柱建物跡２号柱穴一覧

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）	埋土
1	48	16	1－2	208	黒
2	46	45	2－3	268	黒
3	38	19	3－4	288	黒
4	28	54	4－5	148	黒褐
5	23	52	5－6	240	黒褐
6	26	67	6－7	100	黒褐
7	33	22	7－8	232	黒
8	—	—	8－9	368	—

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）	埋土
9	28	31	9－10	240	黒褐
10	26	14	10－11	148	黒
11	28	64	11－12	152	黒
12			12－1	184	
13	23	31	—	—	黒
14	22	45	—	—	黒褐
15	22	36	—	—	黒褐

第284図　掘立柱建物跡２号



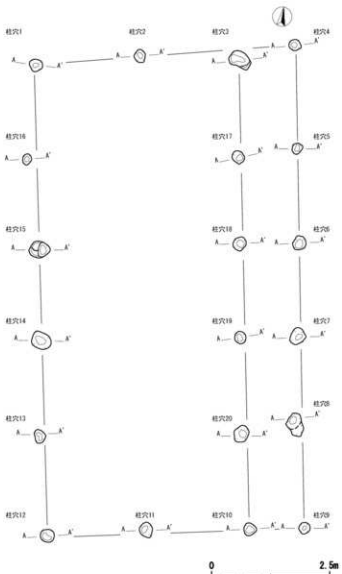
1：黒褐色土（2.5Y3/1）やわらかい。アカホヤ火山灰土が少量混ざる。

掘立柱建物跡３号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	27	15	1－2　192	黒褐
2	26	13	2－3　176	黒褐
3	27	12	3－4　176	黒褐
4	28	15	4－5　(332)	黒褐
5	26	29	5－6　196	黒褐

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
6	34	30	6－7　172	黒褐
7	25	21	7－8　206	黒褐
8	21	16	8－9　140	黒褐
9	30	27	9－1　188	黒褐

第285図　掘立柱建物跡３号

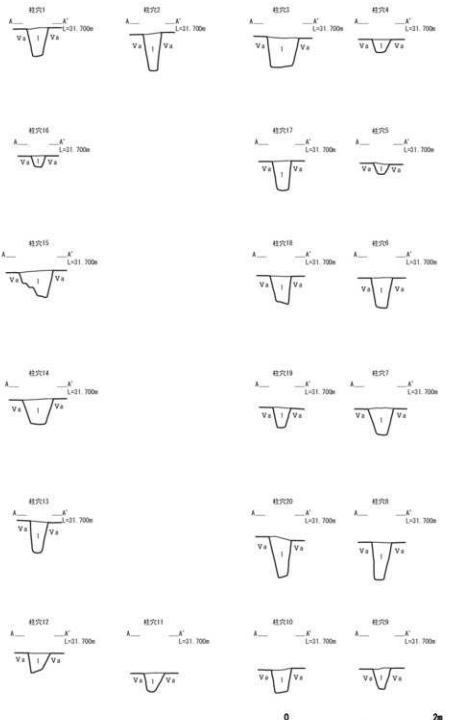


掘立柱建物跡４号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	26	36	1－2　220	黒
2	25	49	2－3　212	黒
3	39	40	3－4　116	黒
4	24	18	4－5　220	黒
5	21	14	5－6　202	黒
6	28	40	6－7　200	黒
7	31	35	7－8　188	黒
8	39	49	8－9　220	黒
9	24	27	9－10　116	黒
10	26	31	10－11　216	黒

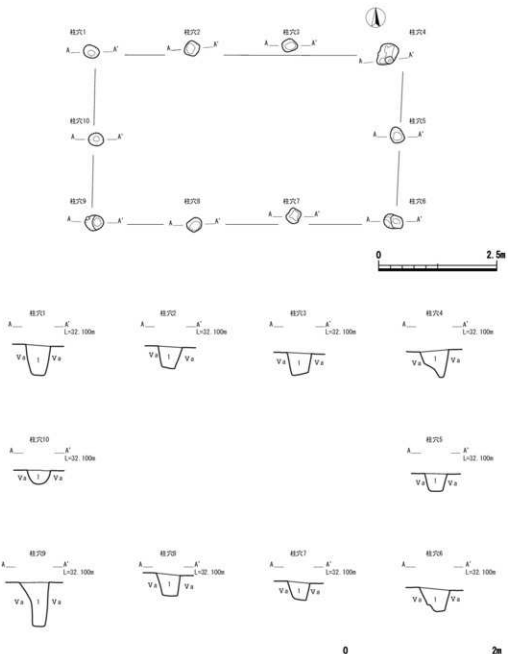
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
11	30	24	11－12　210	黒
12	28	26	12－13　212	黒
13	24	33	13－14　208	黒
14	38	32	14－15　192	黒
15	40	35	15－16　192	黒
16	21	15	16－1　200	黒
17	25	39	―	黒
18	27	36	―	黒
19	25	26	―	黒
20	33	52	―	黒

第286図　掘立柱建物跡４号１



1：黒色土（10YR2/1）粘性強い。

第287図　掘立柱建物跡４号２



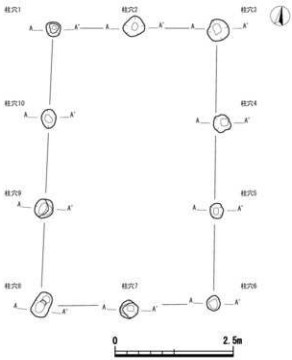
1：黒色土（10YR2/1）粘性強い。

掘立柱建物跡５号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	30	39	1－2　212	黒
2	31	28	2－3　206	黒
3	29	30	3－4　216	黒
4	44	36	4－5　168	黒
5	30	22	5－6　186	黒

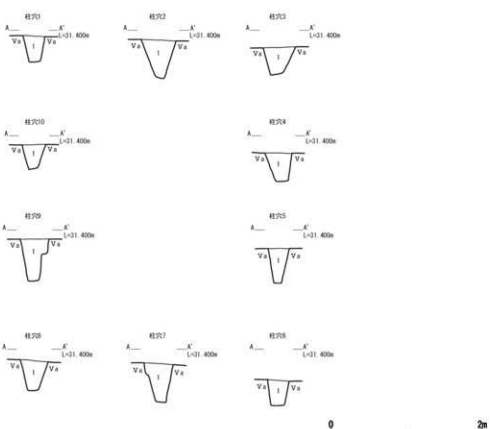
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
6	34	29	6－7　208	黒
7	29	22	7－8　212	黒
8	28	27	8－9　216	黒
9	34	57	9－10　176	黒
10	29	18	10－1　184	黒

第288図　掘立柱建物跡５号

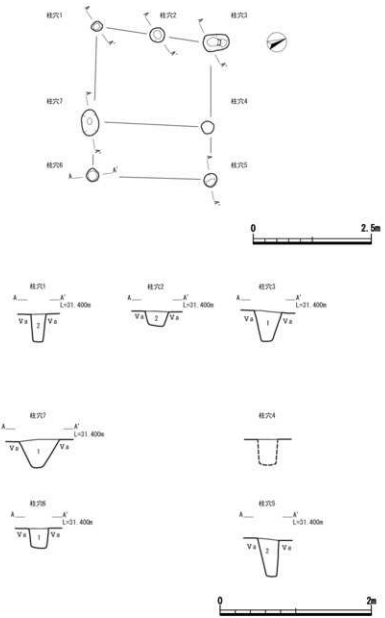


掘立柱建物跡６号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	32	55	1－2　172	黒
2	42	50	2－3　176	黒
3	43	36	3－4　200	黒
4	35	37	4－5　188	黒
5	29	46	5－6　196	黒
6	30	34	6－7　178	黒
7	38	50	7－8　184	黒
8	45	38	8－9　208	黒
9	40	56	9－10　194	黒
10	35	32	10－1　192	黒



第289図　掘立柱建物跡６号

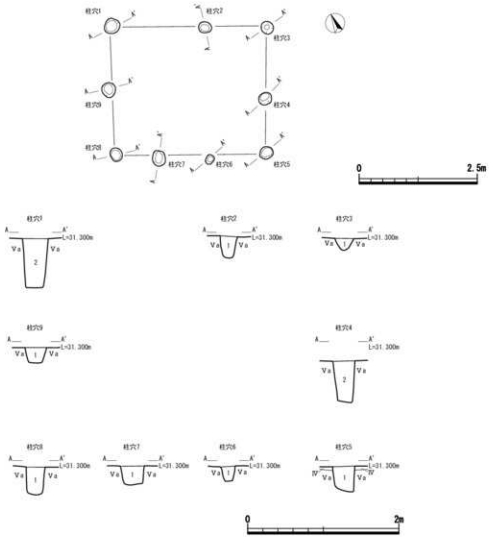


1：黒色土（10YR2/1）粘性強い。
2：黒褐色土（10YR2/2 やや粘性あり、ややしまりあり。粘性土に砂土を含む。

掘立柱建物跡７号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	22	36	1－2　128	黒褐
2	31	19	2－3　128	黒褐
3	45	40	3－4　176	黒
4	—	—	4－5　116	—
5	28	49	5－6　252	黒褐
6	27	26	6－7　116	黒
7	45	35	7－1　200	黒

第290図　掘立柱建物跡７号

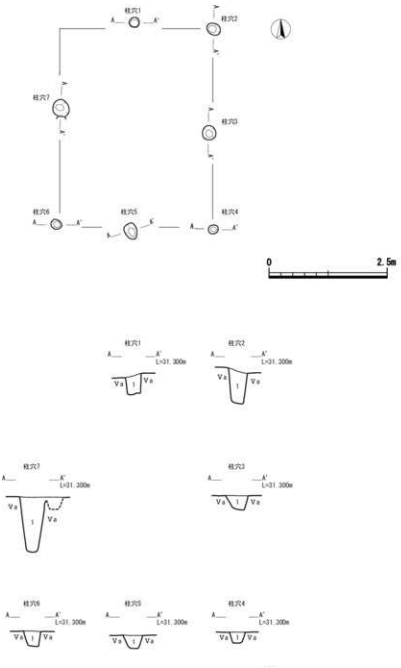


1：黒色土（10YR2/1）粘性強い。
2：黒褐色土（10YR2/2）やや粘性あり、ややしまりあり。粘性土に砂土を含む。

掘立柱建物跡８号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	32	66	1－2	196	黒褐
2	25	29	2－3	132	黒
3	24	16	3－4	152	黒
4	27	56	4－5	116	黒褐
5	28	34	5－6	120	黒
6	19	20	6－7	112	黒
7	31	26	7－8	92	黒
8	27	37	8－9	140	黒
9	31	20	9－1	136	黒

第291図　掘立柱建物跡８号

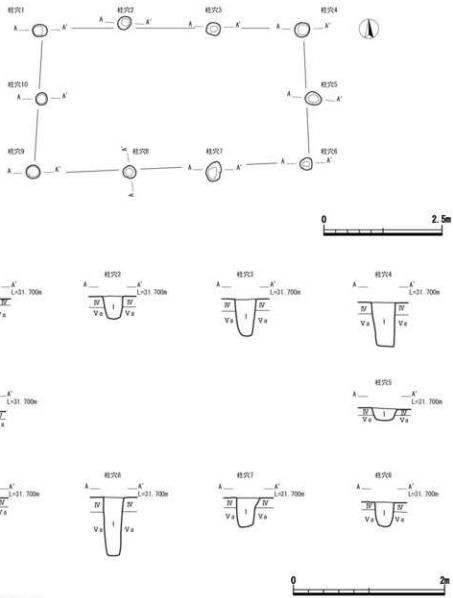


掘立柱建物跡９号柱穴一覧

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）		埋土
1	21	26	1－2	148	黒
2	27	43	2－3	176	黒
3	30	19	3－4	178	黒
4	20	14	4－5	148	黒

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）		埋土
5	31	18	5－6	128	黒
6	22	20	6－7	220	黒
7	36	72	—		黒

第292図　掘立柱建物跡９号

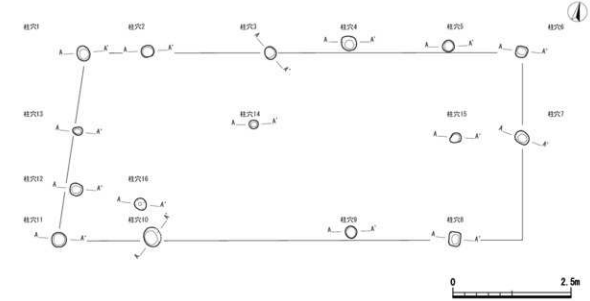


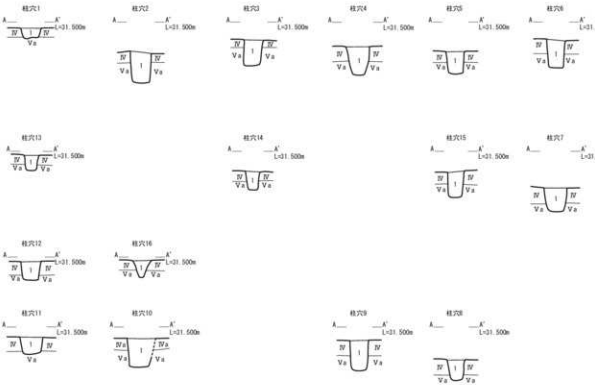
Ⅰ：黒色土（10YR2/1）粘性強い。

掘立柱建物跡10号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	28	33	1－2	184	黒
2	28	30	2－3	184	黒
3	28	47	3－4	186	黒
4	31	53	4－5	148	黒
5	30	15	5－6	144	黒
6	25	32	6－7	194	黒
7	35	38	7－8	180	黒
8	26	77	8－9	204	黒
9	30	24	9－10	162	黒
10	25	25	10－1	144	黒

第293図　掘立柱建物跡10号





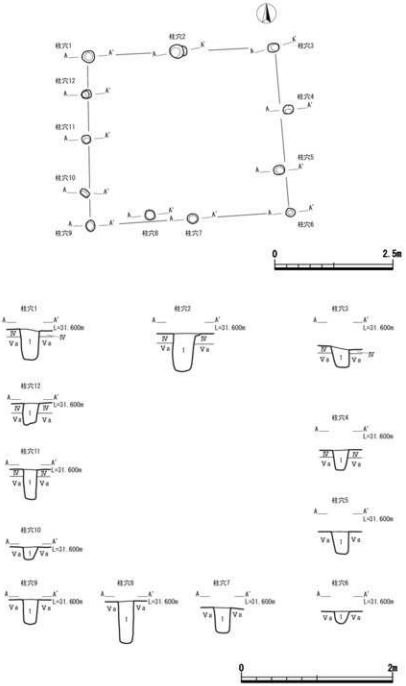
1：黒色土（10YR2/1）粘性強い。

掘立柱建物跡11号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	間距離(cm)	埋土
1	30	14	1－2　134	黒
2	26	40	2－3　220	黒
3	25	34	3－4　208	黒
4	32	39	4－5　208	黒
5	24	30	5－6　152	黒
6	26	38	6－7　188	黒
7	28	32	―	黒
8	29	27	8－9　220	黒

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
9	26	40	9－10　(412)	黒
10	37	38	10－11　200	黒
11	32	23	11－12　112	黒
12	27	25	12－13　120	黒
13	19	21	13－1　160	黒
14	19	25	―	黒
15	24	34	―	黒
16	25	23	―	黒

第294図　掘立柱建物跡11号

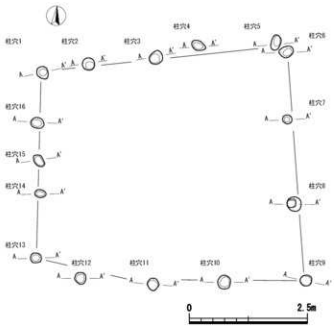


1 暗褐色土(10YR2/2)やや粘性あり、ややしまりあり。粘質土に砂土を含む。

掘立柱建物跡12号柱穴一覧

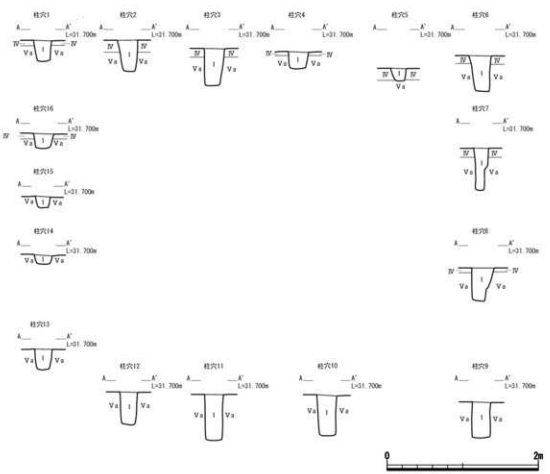
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	25	40	1－2　186	暗褐
2	28	49	2－3　208	暗褐
3	21	26	3－4　130	暗褐
4	20	27	4－5　128	暗褐
5	21	28	5－6　92	暗褐
6	19	16	6－7　(208)	暗褐
7	21	33	7－8　90	暗褐
8	22	51	8－9　126	暗褐
9	22	32	9－10　68	暗褐
10	17	17	10－11　116	暗褐
11	19	39	11－12　92	暗褐
12	18	28	12－1　78	暗褐

第295図　掘立柱建物跡12号



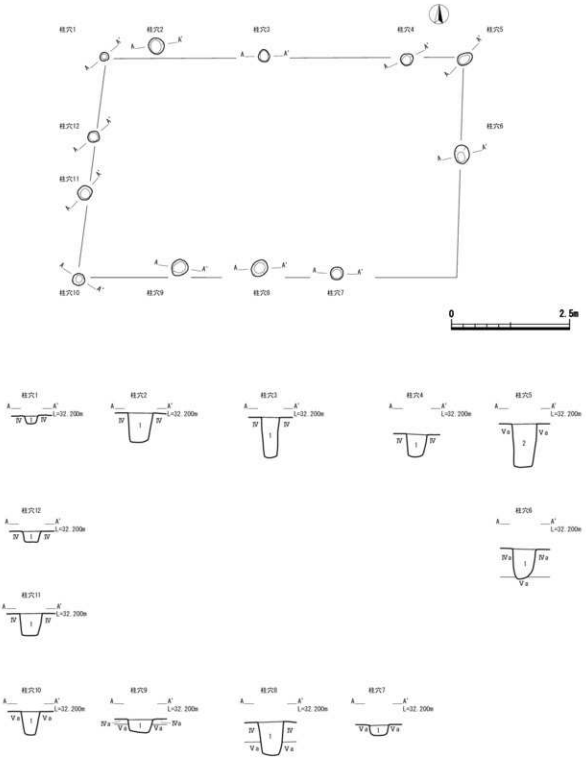
掘立柱建物跡13号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	25	28	1－2　96	黒褐
2	26	41	2－3　144	黒褐
3	28	49	3－4　98	黒褐
4	25	22	4－5　156	黒褐
5	27	17		黒褐
6	27	46	6－7　144	黒褐
7	30	56	7－8　(180)	黒褐
8	31	43	8－9　160	黒褐
9	23	47	9－10　172	黒褐
10	27	54	10－11　150	黒褐
11	25	60	11－12　152	黒褐
12	23	43	12－13　104	黒褐
13	22	27	13－14　132	黒褐
14	19	12	14－15　76	黒褐
15	24	15	15－16　76	黒褐
16	25	19	16－1　104	黒褐



1：黒褐色土（10YR2/2）やや粘性あり、ややしまりあり。粘性土に砂土を含む。

第296図　掘立柱建物跡13号

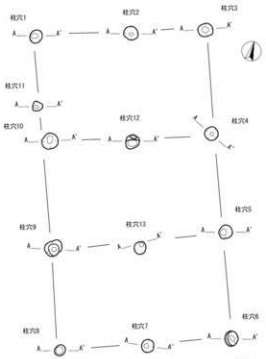


1 黒色土(10YR2/1)粘性強い。
2 黒褐色土(10YR2/2)中中粘性あり、ややしまりあり。粘性土に砂土を含む。

掘立柱建物跡14号柱穴一覧

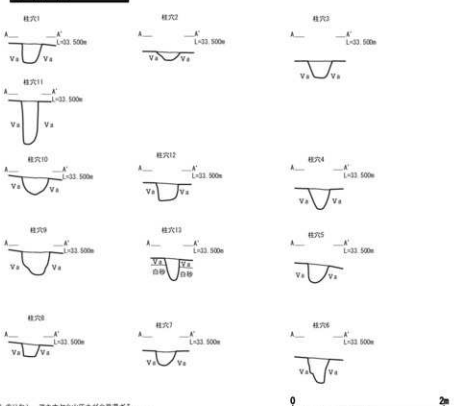
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	19	10	1-2 112	黒
2	34	33	2-3 228	黒
3	25	54	3-4 300	黒
4	28	30	4-5 124	黒
5	28	58	5-6 208	黒褐
6	36	60	—	黒
7	27	14	7-8 164	黒
8	35	44	8-9 168	黒
9	35	18	9-10 216	黒
10	26	32	10-11 180	黒
11	29	29	11-12 96	黒
12	34	15	12-1 172	黒

第297図　掘立柱建物跡14号



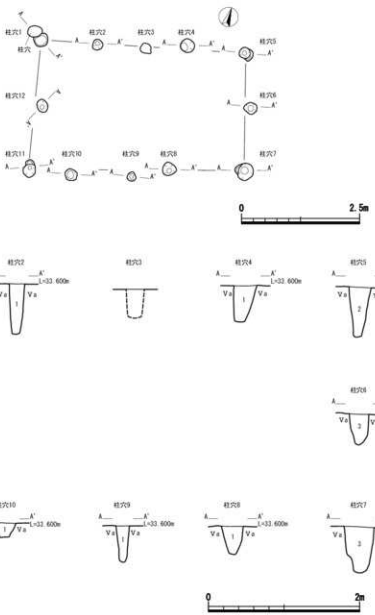
掘立柱建物跡15号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	27	25	1-2　212	黒褐
2	29	10	2-3　160	黒褐
3	34	22	3-4　(224)	黒褐
4	27	26	4-5　212	黒褐
5	28	24	5-6　228	黒褐
6	30	32	6-7　184	黒褐
7	27	18	7-8　188	黒褐
8	22	16	8-9　216	黒褐
9	32	30	9-10　232	黒褐
10	33	22	10-11　80	黒褐
11	21	56	11-1　148	黒褐
12	32	29	—	黒褐
13	26	35	—	黒褐



1.黒褐色土(7.5YR3/1)しまりなし。アカホヤ火山灰土が少量混ざる。
2.黒褐色土(10YR2/2)やや粘性あり、ややしまりあり。粘性土に粉土を含む。

第298図　掘立柱建物跡15号



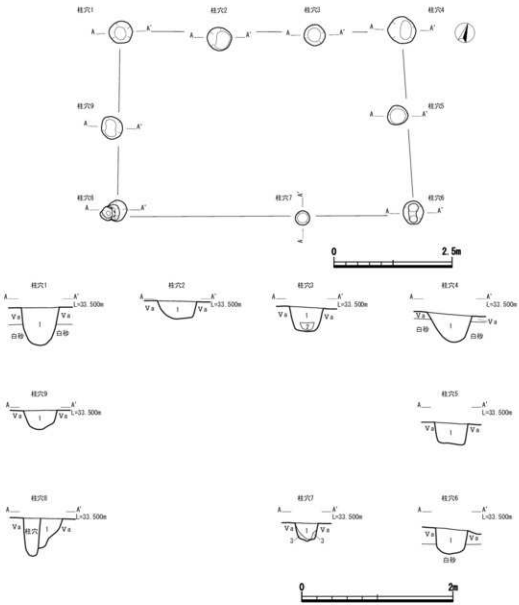
1：黒色土（10YR2/1）粘性強い。
2：黒色土に黄灰色土（2.5Y3/1）が混ざる。とても硬くしまる。炭化物がごく少量混ざる。
3：黒褐色土（2.5Y3/1）しまりなし。アカホや火山灰土が少量混ざる。

掘立柱建物跡16号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	30	33	1－2　120	黒
2	22	66	2－3　104	黒
3	—	—	3－4　88	—
4	30	48	4－5　128	黒
5	26	66	5－6　87	黒
6	25	41	6－7　136	黒褐

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
7	32	61	7－8　160	黒褐
8	28	37	8－9　80	黒
9	19	48	9－10　128	黒
10	25	20	10－11　88	黒
11	28	47	11－12　136	黒褐
12	26	37	12－1　140	黒

第299図　掘立柱建物跡16号

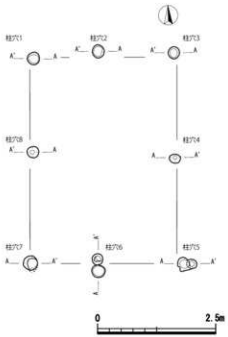


1 黄灰色土（2.5Y4/1）やわらかい。アカホヤ火山灰土が少量混ざる。
2 黒色土に黄灰色土（2.5Y3/1）が混ざる。とても硬くしまる。炭化物がごく少量混ざる。
3 黒褐色土（2.5Y3/1）しまりなし。アカホヤ火山灰が多く混ざる。

掘立柱建物跡17号柱穴一覧

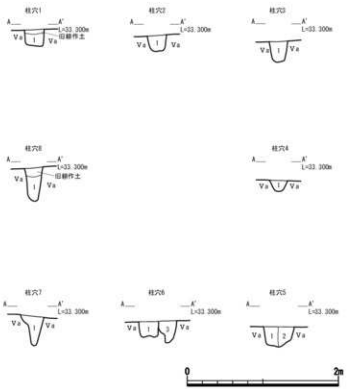
柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）	埋土
1	48	50	1－2　208	黄灰
2	50	23	2－3　200	黄灰
3	44	32	3－4　188	黄灰・黒
4	57	36	4－5　184	黄灰
5	42	28	5－6　204	黄灰
6	46	33	6－7　228	黄灰
7	30	24	7－8　（381）	黄灰・黒褐
8	42	39	8－9　176	黄灰
9	46	24	9－1　208	黄灰

第300図　掘立柱建物跡17号



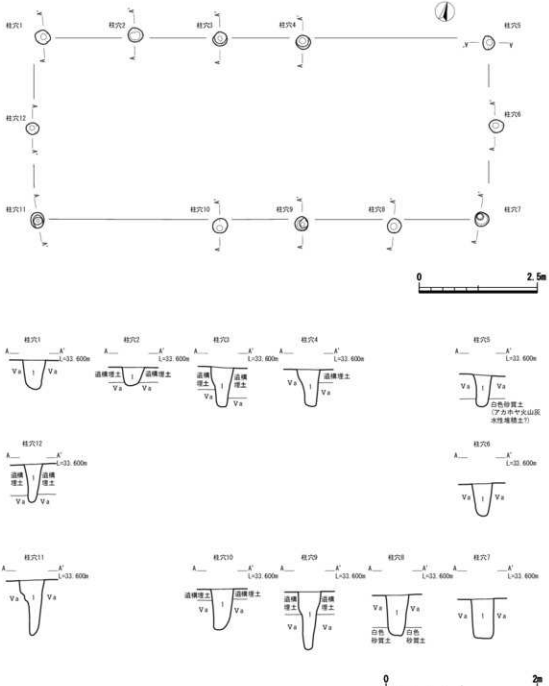
掘立柱建物跡18号柱穴一覧

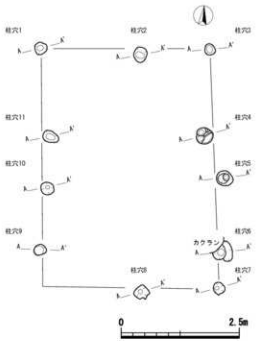
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	26	22	1－2　136	黒褐
2	27	21	2－3　160	黒褐
3	25	27	3－4　220	黒褐
4	22	14	4－5　220	黒褐
5	28・20	27・26	5－6　176	黒褐
6	28・23	21・29	6－7　144	黒褐
7	31	38	7－8　236	黒褐
8	25	44	8－1　200	黒褐

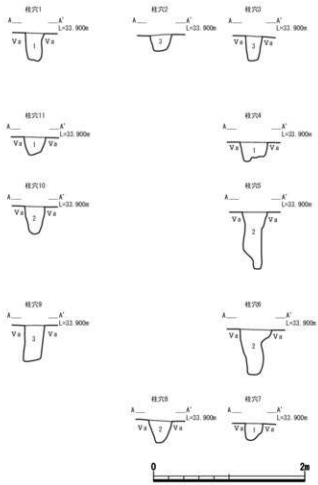


1：黒褐色土（2.5Y3/1）しまりなし。アカホヤ火山灰が少量まざる。
2：黒褐色土（2.5Y3/1）よりもやや黒色が強い。しまりなし。アカホヤ火山灰が少量まざる。
3：黒褐色土（2.5Y3/1）しまりなし。1よりも極わずかにアカホヤ火山灰の混ざりが強い。

第301図　掘立柱建物跡18号


柱穴1
柱穴2
柱穴3
柱穴4
柱穴5
柱穴6
柱穴7
柱穴8
柱穴9
柱穴10
柱穴11
柱穴12
0
2.5m
A
A'
L=33.600m
Va
1
Vb
Vc
Vd
Ve
Vf
Vg
Vh
Vi
Vj
Vk
Vl
Vm
Vn
Vo
Vp
Vq
Vr
Vs
Vt
Vu
Vv
Vw
Vx
Vy
Vz
Vaa
Vab
Vac
Vad
Vae
Vaf
Vag
Vah
Vai
Vaj
Vak
Vam
Vao
Vap
Vaq
Var
Vas
Vat
Vau
Vav
Vaw
Vax
Vay
Vaz
Vba
Vbb
Vbc
Vbd
Vbe
Vbf
Vbg
Vbh
Vbi
Vbj
Vbk
Vbl
Vbm
Vbn
Vbo
Vbp
Vbq
Vbr
Vbs
Vbt
Vbu
Vbv
Vbw
Vbx
Vby
Vbz
Vca
Vcb
Vcc
Vcd
Vce
Vcf
Vcg
Vch
Vci
Vcj
Vck
Vcl
Vcm
Vcn
Vco
Vcp
Vcq
Vcr
Vcs
Vct
Vcu
Vcv
Vcw
Vcx
Vcy
Vcz
Vda
Vdb
Vdc
Vdd
Vde
Vdf
Vdg
Vdh
Vdi
Vdj
Vdk
Vdl
Vdm
Vdn
Vdo
Vdp
Vdq
Vdr
Vds
Vdt
Vdu
Vdv
Vdw
Vdx
Vdy
Vdz
Vea
Veb
Vec
Ved
Vee
Vef
Veg
Veh
Vei
Vej
Vek
Vel
Vem
Ven
Veo
Vep
Veq
Ver
Ves
Vet
Veu
Vev
Vew
Vex
Vey
Vez
Vfa
Vfb
Vfc
Vfd
Vfe
Vff
Vfg
Vfh
Vfi
Vfj
Vfk
Vfl
Vfm
Vfn
Vfo
Vfp
Vfq
Vfr
Vfs
Vft
Vfu
Vfv
Vfw
Vfx
Vfy
Vfz
Vga
Vgb
Vgc
Vgd
Vge
Vgf
Vgg
Vgh
Vgi
Vgj
Vgk
Vgl
Vgm
Vgn
Vgo
Vgp
Vgq
Vgr
Vgs
Vgt
Vgu
Vgv
Vgw
Vgx
Vgy
Vgz
Vha
Vhb
Vhc
Vhd
Vhe
Vhf
Vhg
Vhh
Vhi
Vhj
Vhk
Vhl
Vhm
Vhn
Vho
Vhp
Vhq
Vhr
Vhs
Vht
Vhu
Vhv
Vhw
Vhx
Vhy
Vhz
Via
Vib
Vic
Vid
Vie
Vif
Vig
Vih
Vii
Vij
Vik
Vil
Vim
Vin
Vio
Vip
Viq
Vir
Vis
Vit
Viu
Viv
Viw
Vix
Viy
Viz
Vja
Vjb
Vjc
Vjd
Vje
Vjf
Vjg
Vjh
Vji
Vjj
Vjk
Vjl
Vjm
Vjn
Vjo
Vjp
Vjq
Vjr
Vjs
Vjt
Vju
Vjv
Vjw
Vjx
Vjy
Vjz
Vka
Vkb
Vkc
Vkd
Vke
Vkf
Vkg
Vkh
Vki
Vkj
Vkk
Vkl
Vkm
Vkn
Vko
Vkp
Vkq
Vkr
Vks
Vkt
Vku
Vkv
Vkw
Vkx
Vky
Vkz
Vla
Vlb
Vlc
Vld
Vle
Vlf
Vlg
Vlh
Vli
Vlj
Vlk
Vll
Vlm
Vln
Vlo
Vlp
Vlq
Vlr
Vls
Vlt
Vlu
Vlv
Vlw
Vlx
Vly
Vlz
Vma
Vmb
Vmc
Vmd
Vme
Vmf
Vmg
Vmh
Vmi
Vmj
Vmk
Vml
Vmm
Vmn
Vmo
Vmp
Vmq
Vmr
Vms
Vmt
Vmu
Vmv
Vmw
Vmx
Vmy
Vmz
Vna
Vnb
Vnc
Vnd
Vne
Vnf
Vng
Vnh
Vni
Vnj
Vnk
Vnl
Vnm
Vnn
Vno
Vnp
Vnq
Vnr
Vns
Vnt
Vnu
Vnv
Vnw
Vnx
Vny
Vnz
Voa
Vob
Voc
Vod
Voe
Vof
Vog
Voh
Voi
Voj
Vok
Vol
Vom
Von
Voo
Vop
Voq
Vor
Vos
Vot
Vou
Vov
Vow
Vox
Voy
Voz
Vpa
Vpb
Vpc
Vpd
Vpe
Vpf
Vpg
Vph
Vpi
Vpj
Vpk
Vpl
Vpm
Vpn
Vpo
Vpp
Vpq
Vpr
Vps
Vpt
Vpu
Vpv
Vpw
Vpx
Vpy
Vpz
Vqa
Vqb
Vqc
Vqd
Vqe
Vqf
Vqg
Vqh
Vqi
Vqj
Vqk
Vql
Vqm
Vqn
Vqo
Vqp
Vqq
Vqr
Vqs
Vqt
Vqu
Vqv
Vqw
Vqx
Vqy
Vqz
Vra
Vrb
Vrc
Vrd
Vre
Vrf
Vrg
Vrh
Vri
Vrj
Vrk
Vrl
Vrm
Vrn
Vro
Vrp
Vrq
Vrr
Vrs
Vrt
Vru
Vrv
Vrw
Vrx
Vry
Vrz
Vsa
Vsb
Vsc
Vsd
Vse
Vsf
Vsg
Vsh
Vsi
Vsj
Vsk
Vsl
Vsm
Vsn
Vso
Vsp
Vsq
Vsr
Vss
Vst
Vsu
Vsv
Vsw
Vsx
Vsy
Vsz
Vta
Vtb
Vtc
Vtd
Vte
Vtf
Vtg
Vth
Vti
Vtj
Vtk
Vtl
Vtm
Vtn
Vto
Vtp
Vtq
Vtr
Vts
Vtt
Vtu
Vtv
Vtw
Vtx
Vty
Vtz
Vua
Vub
Vuc
Vud
Vue
Vuf
Vug
Vuh
Vui
Vuj
Vuk
Vul
Vum
Vun
Vuo
Vup
Vuq
Vur
Vus
Vut
Vuu
Vuv
Vuw
Vux
Vuy
Vuz
Vva
Vvb
Vvc
Vvd
Vve
Vvf
Vvg
Vvh
Vvi
Vvj
Vvk
Vvl
Vvm
Vvn
Vvo
Vvp
Vvq
Vvr
Vvs
Vvt
Vvu
Vvv
Vvw
Vvx
Vvy
Vvz
Vwa
Vwb
Vwc
Vwd
Vwe
Vwf
Vwg
Vwh
Vwi
Vwj
Vwk
Vwl
Vwm
Vwn
Vwo
Vwp
Vwq
Vwr
Vws
Vwt
Vwu
Vwv
Vww
Vwx
Vwy
Vwz
Vxa
Vxb
Vxc
Vxd
Vxe
Vxf
Vxg
Vxh
Vxi
Vxj
Vxk
Vxl
Vxm
Vxn
Vxo
Vxp
Vxq
Vxr
Vxs
Vxt
Vxu
Vxv
Vxw
Vxx
Vxy
Vxz
Vya
Vyb
Vyc
Vyd
Vye
Vyf
Vyg
Vyh
Vyi
Vyj
Vyk
Vyl
Vym
Vyn
Vyo
Vyp
Vyq
Vyr
Vys
Vyt
Vyu
Vyv
Vyw
Vyx
Vyy
Vyz
Vza
Vzb
Vzc
Vzd
Vze
Vzf
Vzg
Vzh
Vzi
Vzj
Vzk
Vzl
Vzm
Vzn
Vzo
Vzp
Vzq
Vzr
Vzs
Vzt
Vzu
Vzv
Vzw
Vzx
Vzy
Vzz
Waa
Wab
Wac
Wad
Wae
Waf
Wag
Wah
Wai
Waj
Wak
Wal
Wam
Wan
Wao
Wap
Waq
War
Was
Wat
Wau
Wav
Waw
Wax
Way
Waz
Wba
Wbb
Wbc
Wbd
Wbe
Wbf
Wbg
Wbh
Wbi
Wbj
Wbk
Wbl
Wbm
Wbn
Wbo
Wbp
Wbq
Wbr
Wbs
Wbt
Wbu
Wbv
Wbw
Wbx
Wby
Wbz
Wca
Wcb
Wcc
Wcd
Wce
Wcf
Wcg
Wch
Wci
Wcj
Wck
Wcl
Wcm
Wcn
Wco
Wcp
Wcq
Wcr
Wcs
Wct
Wcu
Wcv
Wcw
Wcx
Wcy
Wcz
Wda
Wdb
Wdc
Wdd
Wde
Wdf
Wdg
Wdh
Wdi
Wdj
Wdk
Wdl
Wdm
Wdn
Wdo
Wdp
Wdq
Wdr
Wds
Wdt
Wdu
Wdv
Wdw
Wdx
Wdy
Wdz
Wea
Web
Wec
Wed
Wee
Wef
Weg
Weh
Wei
Wej
Wek
Wel
Wem
Wen
Weo
Wep
Weq
Wer
Wes
Wet
Weu
Wev
Wew
Wex
Wey
Wez
Wfa
Wfb
Wfc
Wfd
Wfe
Wff
Wfg
Wfh
Wfi
Wfj
Wfk
Wfl
Wfm
Wfn
Wfo
Wfp
Wfq
Wfr
Wfs
Wft
Wfu
Wfv
Wfw
Wfx
Wfy
Wfz
Wga
Wgb
Wgc
Wgd
Wge
Wgf
Wgg
Wgh
Wgi
Wgj
Wgk
Wgl
Wgm
Wgn
Wgo
Wgp
Wgq
Wgr
Wgs
Wgt
Wgu
Wgv
Wgw
Wgx
Wgy
Wgz
Wha
Whb
Whc
Whd
Whe
Whf
Whg
Whh
Whi
Whj
Whk
Whl
Whm
Whn
Who
Whp
Whq
Whr
Whs
Wht
Whu
Whv
Www
Whx
Why
Whz
Wia
Wib
Wic
Wid
Wie
Wif
Wig
Wih
Wii
Wij
Wik
Wil
Wim
Win
Wio
Wip
Wiq
Wir
Wis
Wit
Wiu
Wiv
Wiw
Wix
Wiy
Wiz
Wja
Wjb
Wjc
Wjd
Wje
Wjf
Wjg
Wjh
Wji
Wjj
Wjk
Wjl
Wjm
Wjn
Wjo
Wjp
Wjq
Wjr
Wjs
Wjt
Wju
Wjv
Wjw
Wjx
Wjy
Wjz
Wka
Wkb
Wkc
Wkd
Wke
Wkf
Wkg
Wkh
Wki
Wkj
Wkk
Wkl
Wkm
Wkn
Wko
Wkp
Wkq
Wkr
Wks
Wkt
Wku
Wkv
Wkw
Wkx
Wky
Wkz
Wla
Wlb
Wlc
Wld
Wle
Wlf
Wlg
Wlh
Wli
Wlj
Wlk
Wll
Wlm
Wln
Wlo
Wlp
Wlq
Wlr
Wls
Wlt
Wlu
Wlv
Wlw
Wlx
Wly
Wlz
Wma
Wmb
Wmc
Wmd
Wme
Wmf
Wmg
Wmh
Wmi
Wmj
Wmk
Wml
Wmm
Wmn
Wmo
Wmp
Wmq
Wmr
Wms
Wmt
Wmu
Wmv
Wmw
Wmx
Wmy
Wmz
Wna
Wnb
Wnc
Wnd
Wne
Wnf
Wng
Wnh
Wni
Wnj
Wnk
Wnl
Wnm
Wnn
Wno
Wnp
Wnq
Wnr
Wns
Wnt
Wnu
Wnv
Www
Wnx
Wny
Wnz
Woa
Wob
Woc
Wod
Woe
Wof
Wog
Woh
Woi
Woj
Wok
Wol
Wom
Won
Woo
Wop
Woq
Wor
Wos
Wot
Wou
Wov
Wow
Wox
Woy
Woz
Wpa
Wpb
Wpc
Wpd
Wpe
Wpf
Wpg
Wph
Wpi
Wpj
Wpk
Wpl
Wpm
Wpn
Wpo
Wpp
Wpq
Wpr
Wps
Wpt
Wpu
Wpv
Wpw
Wpx
Wpy
Wpz
Wqa
Wqb
Wqc
Wqd
Wqe
Wqf
Wqg
Wqh
Wqi
Wqj
Wqk
Wql
Wqm
Wqn
Wqo
Wqp
Wqq
Wqr
Wqs
Wqt
Wqu
Wqv
Wqw
Wqx
Wqy
Wqz
Wra
Wrb
Wrc
Wrd
Wre
Wrf
Wrg
Wrh
Wri
Wrj
Wrk
Wrl
Wrm
Wrn
Wro
Wrp
Wrq
Wrr
Wrs
Wrt
Wru
Wrv
Wrw
Wrx
Wry
Wrz
Wsa
Wsb
Wsc
Wsd
Wse
Wsf
Wsg
Wsh
Wsi
Wsj
Wsk
Wsl
Wsm
Wsn
Wso
Wsp
Wsq
Wsr
Wss
Wst
Wsu
Wsv
Wsw
Wsx
Wsy
Wsz
Wta
Wtb
Wtc
Wtd
Wte
Wtf
Wtg
Wth
Wti
Wtj
Wtk
Wtl
Wtm
Wtn
Wto
Wtp
Wtq
Wtr
Wts
Wtt
Wtu
Wtv
Wtw
Wtx
Wty
Wtz
Wua
Wub
Wuc
Wud
Wue
Wuf
Wug
Wuh
Wui
Wuj
Wuk
Wul
Wum
Wun
Wuo
Wup
Wuq
Wur
Wus
Wut
Wuu
Wuv
Www
Wux
Wuy
Wuz
Wva
Wvb
Wvc
Wvd
Wve
Wvf
Wvg
Wvh
Wvi
Wvj
Wvk
Wvl
Wvm
Wvn
Wvo
Wvp
Wvq
Wvr
Wvs
Wvt
Wvu
Wvv
Wvw
Wvx
Wvy
Wvz
Wwa
Wwb
Wwc
Wwd
Wwe
Wwf
Wwg
Wwh
Wwi
Wwj
Wwk
Wwl
Wwm
Wwn
Wwo
Wwp
Wwq
Wwr
Wws
Wwt
Wwu
Wwv
Www
Wwx
Wwy
Wwz
Wxa
Wxb
Wxc
Wxd
Wxe
Wxf
Wxg
Wxh
Wxi
Wxj
Wxk
Wxl
Wxm
Wxn
Wxo
Wxp
Wxq
Wxr
Wxs
Wxt
Wxu
Wxv
Wxw
Wxx
Wxy
Wxz
Wya
Wyb
Wyc
Wyd
Wye
Wyf
Wyg
Wyh
Wyi
Wyj
Wyk
Wyl
Wym
Wyn
Wyo
Wyp
Wyq
Wyr
Wys
Wyt
Wyu
Wyv
Wyw
Wyx
Wyy
Wyz
Wza
Wzb
Wzc
Wzd
Wze
Wzf
Wzg
Wzh
Wzi
Wzj
Wzk
Wzl
Wzm
Wzn
Wzo
Wzp
Wzq
Wzr
Wzs
Wzt
Wzu
Wzv
Www
Wzx
Wzy
Wzz
Xaa
Xab
Xac
Xad
Xae
Xaf
Xag
Xah
Xai
Xaj
Xak
Xal
Xam
Xan
Xao
Xap
Xaq
Xar
Xas
Xat
Xau
Xav
Xaw
Xax
Xay
Xaz
Xba
Xbb
Xbc
Xbd
Xbe
Xbf
Xbg
Xbh
Xbi
Xbj
Xbk
Xbl
Xbm
Xbn
Xbo
Xbp
Xbq
Xbr
Xbs
Xbt
Xbu
Xbv
Xbw
Xbx
Xby
Xbz
Xca
Xcb
Xcc
Xcd
Xce
Xcf
Xcg
Xch
Xci
Xcj
Xck
Xcl
Xcm
Xcn
Xco
Xcp
Xcq
Xcr
Xcs
Xct
Xcu
Xcv
Xcw
Xcx
Xcy
Xcz
Xda
Xdb
Xdc
Xdd
Xde
Xdf
Xdg
Xdh
Xdi
Xdj
Xdk
Xdl
Xdm
Xdn
Xdo
Xdp
Xdq
Xdr
Xds
Xdt
Xdu
Xdv
Xdw
Xdx
Xdy
Xdz
Xea
Xeb
Xec
Xed
Xee
Xef
Xeg
Xeh
Xei
Xej
Xek
Xel
Xem
Xen
Xeo
Xep
Xeq
Xer
Xes
Xet
Xeu
Xev
Xew
Xex
Xey
Xez
Xfa
Xfb
Xfc
Xfd
Xfe
Xff
Xfg
Xfh
Xfi
Xfj
Xfk
Xfl
Xfm
Xfn
Xfo
Xfp
Xfq
Xfr
Xfs
Xft
Xfu
Xfv
Xfw
Xfx
Xfy
Xfz
Xga
Xgb
Xgc
Xgd
Xge
Xgf
Xgg
Xgh
Xgi
Xgj
Xgk
Xgl
Xgm
Xgn
Xgo
Xgp
Xgq
Xgr
Xgs
Xgt
Xgu
Xgv
Xgw
Xgx
Xgy
Xgz
Xha
Xhb
Xhc
Xhd
Xhe
Xhf
Xhg
Xhh
Xhi
Xhj
Xhk
Xhl
Xhm
Xhn
Xho
Xhp
Xhq
Xhr
Xhs
Xht
Xhu
Xhv
Xhw
Xhx
Xhy
Xhz
Xia
Xib
Xic
Xid
Xie
Xif
Xig
Xih
Xii
Xij
Xik
Xil
Xim
Xin
Xio
Xip
Xiq
Xir
Xis
Xit
Xiu
Xiv
Xiw
Xix
Xiy
Xiz
Xja
Xjb
Xjc
Xjd
Xje
Xjf
Xjg
Xjh
Xji
Xjj
Xjk
Xjl
Xjm
Xjn
Xjo
Xjp
Xjq
Xjr
Xjs
Xjt
Xju
Xjv
Xjw
Xjx
Xjy
Xjz
Xka
Xkb
Xkc
Xkd
Xke
Xkf
Xkg
Xkh
Xki
Xkj
Xkk
Xkl
Xkm
Xkn
Xko
Xkp
Xkq
Xkr
Xks
Xkt
Xku
Xkv
Xkw
Xkx
Xky
Xkz
Xla
Xlb
Xlc
Xld
Xle
Xlf
Xlg
Xlh
Xli
Xlj
Xlk
Xll
Xlm
Xln
Xlo
Xlp
Xlq
Xlr
Xls
Xlt
Xlu
Xlv
Xlw
Xlx
Xly
Xlz
Xma
Xmb
Xmc
Xmd
Xme
Xmf
Xmg
Xmh
Xmi
Xmj
Xmk
Xml
Xmm
Xmn
Xmo
Xmp
Xmq
Xmr
Xms
Xmt
Xmu
Xmv
Xmw
Xmx
Xmy
Xmz
Xna
Xnb
Xnc
Xnd
Xne
Xnf
Xng
Xnh
Xni
Xnj
Xnk
Xnl
Xnm
Xnn
Xno
Xnp
Xnq
Xnr
Xns
Xnt
Xnu
Xnv
Xnw
Xnx
Xny
Xnz
Xoa
Xob
Xoc
Xod
Xoe
Xof
Xog
Xoh
Xoi
Xoj
Xok
Xol
Xom
Xon
Xoo
Xop
Xoq
Xor
Xos
Xot
Xou
Xov
Xow
Xox
Xoy
Xoz
Xpa
Xpb
Xpc
Xpd
Xpe
Xpf
Xpg
Xph
Xpi
Xpj
Xpk
Xpl
Xpm
Xpn
Xpo
Xpp
Xpq
Xpr
Xps
Xpt
Xpu
Xpv
Xpw
Xpx
Xpy
Xpz
Xqa
Xqb
Xqc
Xqd
Xqe
Xqf
Xqg
Xqh
Xqi
Xqj
Xqk
Xql
Xqm
Xqn
Xqo
Xqp
Xqq
Xqr
Xqs
Xqt
Xqu
Xqv
Xqw
Xqx
Xqy
Xqz
Xra
Xrb
Xrc
Xrd
Xre
Xrf
Xrg
Xrh
Xri
Xrj
Xrk
Xrl
Xrm
Xrn
Xro
Xrp
Xrq
Xrr
Xrs
Xrt
Xru
Xrv
Xrw
Xrx
Xry
Xrz
Xsa
Xsb
Xsc
Xsd
Xse
Xsf
Xsg
Xsh
Xsi
Xsj
Xsk
Xsl
Xsm
Xsn
Xso
Xsp
Xsq
Xsr
Xss
Xst
Xsu
Xsv
Xsw
Xsx
Xsy
Xsz
Xta
Xtb
Xtc
Xtd
Xte
Xtf
Xtg
Xth
Xti
Xtj
Xtk
Xtl
Xtm
Xtn
Xto
Xtp
Xtq
Xtr
Xts
Xtt
Xtu
Xtv
Xtw
Xtx
Xty
Xtz
Xua
Xub
Xuc
Xud
Xue
Xuf
Xug
Xuh
Xui
Xuj
Xuk
Xul
Xum
Xun
Xuo
Xup
Xuq
Xur
Xus
Xut
Xuu
Xuv
Xuw
Xux
Xuy
Xuz
Xva
Xvb
Xvc
Xvd
Xve
Xvf
Xvg
Xvh
Xvi
Xvj
Xvk
Xvl
Xvm
Xvn
Xvo
Xvp
Xvq
Xvr
Xvs
Xvt
Xvu
Xvv
Xvw
Xvx
Xvy
Xvz
Xwa
Xwb
Xwc
Xwd
Xwe
Xwf
Xwg
Xwh
Xwi
Xwj
Xwk
Xwl
Xwm
Xwn
Xwo
Xwp
Xwq
Xwr
Xws
Xwt
Xwu
Xwv
Xww
Xwx
Xwy
Xwz
Xxa
Xxb
Xxc
Xxd
Xxe
Xxf
Xxg
Xxh
Xxi
Xxj
Xxk
Xxl
Xxm
Xxn
Xxo
Xxp
Xxq
Xxr
Xxs
Xxt
Xxu
Xxv
Xxw
Xxx
Xxy
Xxz
Xya
Xyb
Xyc
Xyd
Xye
Xyf
Xyg
Xyh
Xyi
Xyj
Xyk
Xyl
Xym
Xyn
Xyo
Xyp
Xyq
Xyr
Xys
Xyt
Xyu
Xyv
Xyw
Xyx
Xyy
Xyz
Xza
Xzb
Xzc
Xzd
Xze
Xzf
Xzg
Xzh
Xzi
Xzj
Xzk
Xzl
Xzm
Xzn
Xzo
Xzp
Xzq
Xzr
Xzs
Xzt
Xzu
Xzv
Xzw
Xzx
Xzy
Xzz
Yaa
Yab
Yac
Yad
Yae
Yaf
Yag
Yah
Yai
Yaj
Yak
Yal
Yam
Yan
Yao
Yap
Yaq
Yar
Yas
Yat
Yau
Yav
Yaw
Yax
Yay
Yaz
Yba
Ybb
Ybc
Ybd
Ybe
Ybf
Ybg
Ybh
Ybi
Ybj
Ybk
Ybl
Ybm
Ybn
Ybo
Ybp
Ybq
Ybr
Ybs
Ybt
Ybu
Ybv
Ybw
Ybx
Yby
Ybz
Yca
Ycb
Ycc
Ycd
Yce
Ycf
Ycg
Ych
Yci
Ycj
Yck
Ycl
Ycm
Ycn
Yco
Ycp
Ycq
Ycr
Ycs
Yct
Ycu
Ycv
Ycw
Ycx
Ycy
Ycz
Yda
Ydb
Ydc
Ydd
Yde
Ydf
Ydg
Ydh
Ydi
Ydj
Ydk
Ydl
Ydm
Ydn
Ydo
Ydp
Ydq
Ydr
Yds
Ydt
Ydu
Ydv
Ydw
Ydx
Ydy
Ydz
Yea
Yeb
Yec
Yed
Yee
Yef
Yeg
Yeh
Yei
Yej
Yek
Yel
Yem
Yen
Yeo
Yep
Yeq
Yer
Yes
Yet
Yeu
Yev
Yew
Yex
Yey
Yez
Yfa
Yfb
Yfc
Yfd
Yfe
Yff
Yfg
Yfh
Yfi
Yfj
Yfk
Yfl
Yfm
Yfn
Yfo
Yfp
Yfq
Yfr
Yfs
Yft
Yfu
Yfv
Yfw
Yfx
Yfy
Yfz
Yga
Ygb
Ygc
Ygd
Yge
Ygf
Ygg
Ygh
Ygi
Ygj
Ygk
Ygl
Ygm
Ygn
Ygo
Ygp
Ygq
Ygr
Ygs
Ygt
Ygu
Ygv
Ygw
Ygx
Ygy
Ygz
Yha
Yhb
Yhc
Yhd
Yhe
Yhf
Yhg
Yhh
Yhi
Yhj
Yhk
Yhl
Yhm
Yhn
Yho
Yhp
Yhq
Yhr
Yhs
Yht
Yhu
Yhv
Yhw
Yhx
Yhy
Yhz
Yia
Yib
Yic
Yid
Yie
Yif
Yig
Yih
Yii
Yij
Yik
Yil
Yim
Yin
Yio
Yip
Yiq
Yir
Yis
Yit
Yiu
Yiv
Yiw
Yix
Yiy
Yiz
Yja
Yjb
Yjc
Yjd
Yje
Yjf
Yjg
Yjh
Yji
Yjj
Yjk
Yjl
Yjm
Yjn
Yjo
Yjp
Yjq
Yjr
Yjs
Yjt
Yju
Yjv
Yjw
Yjx
Yjy
Yjz
Yka
Ykb
Ykc
Ykd
Yke
Ykf
Ykg
Ykh
Yki
Ykj
Ykk
Ykl
Ykm
Ykn
Yko
Ykp
Ykq
Ykr
Yks
Ykt
Yku
Ykv
Ykw
Ykx
Yky
Ykz
Yla
Ylb
Ylc
Yld
Yle
Ylf
Ylg
Ylh
Yli
Ylj
Ylk
Yll
Ylm
Yln
Ylo
Ylp
Ylq
Ylr
Yls
Ylt
Ylu
Ylv
Ylw
Ylx
Yly
Ylz
Yma
Ymb
Ymc
Ymd
Yme
Ymf
Ymg
Ymh
Ymi
Ymj
Ymk
Yml
Ymm
Ymn
Ymo
Ymp
Ymq
Ymr
Yms
Ymt
Ymu
Ymv
Ymw
Ymx
Ymy
Ymz
Yna
Ynb
Ync
Ynd
Yne
Ynf
Yng
Ynh
Yni
Ynj
Ynk
Ynl
Ynm
Ynn
Yno
Ynp
Ynq
Ynr
Yns
Ynt
Ynu
Ynv
Ynw
Ynx
Yny
Ynz
Yoa
Yob
Yoc
Yod
Yoe
Yof
Yog
Yoh
Yoi
Yoj
Yok
Yol
Yom
Yon
Yoo
Yop
Yoq
Yor
Yos
Yot
You
Yov
Yow
Yox
Yoy
Yoz
Ypa
Ypb
Ypc
Ypd
Ype
Ypf
Ypg
Yph
Ypi
Ypj
Ypk
Ypl
Ypm
Ypn
Ypo
Ypp
Ypq
Ypr
Yps
Ypt
Ypu
Ypv
Ypw
Ypx
Ypy
Ypz
Yqa
Yqb
Yqc
Yqd
Yqe
Yqf
Yqg
Yqh
Yqi
Yqj
Yqk
Yql
Yqm
Yqn
Yqo
Yqp
Yqq
Yqr
Yqs
Yqt
Yqu
Yqv
Yqw
Yqx
Yqy
Yqz
Yra
Yrb
Yrc
Yrd
Yre
Yrf
Yrg
Yrh
Yri
Yrj
Yrk
Yrl
Yrm
Yrn
Yro
Yrp
Yrq
Yrr
Yrs
Yrt
Yru
Yrv
Yrw
Yrx
Yry
Yrz
Ysa
Ysb
Ysc
Ysd
Yse
Ysf
Ysg
Ysh
Ysi
Ysj
Ysk
Ysl
Ysm
Ysn
Yso
Ysp
Ysq
Ysr
Yss
Yst
Ysu
Ysv
Ysw
Ysx
Ysy
Ysz
Yta
Ytb
Ytc
Ytd
Yte
Ytf
Ytg
Yth
Yti
Ytj
Ytk
Ytl
Ytm
Ytn
Yto
Ytp
Ytq
Ytr
Yts
Ytt
Ytu
Ytv
Ytw
Ytx
Yty
Ytz
Yua
Yub
Yuc
Yud
Yue
Yuf
Yug
Yuh
Yui
Yuj
Yuk
Yul
Yum
Yun
Yuo
Yup
Yuq
Yur
Yus
Yut
Yuu
Yuv
Yuw
Yux
Yuy
Yuz
Yva
Yvb
Yvc
Yvd
Yve
Yvf
Yvg
Yvh
Yvi
Yvj
Yvk
Yvl
Yvm
Yvn
Yvo
Yvp
Yvq
Yvr
Yvs
Yvt
Yvu
Yvv
Yvw
Yvx
Yvy
Yvz
Ywa
Ywb
Ywc
Ywd
Ywe
Ywf
Ywg
Ywh
Ywi
Ywj
Ywk
Ywl
Ywm
Ywn
Ywo
Ywp
Ywq
Ywr
Yws
Ywt
Ywu
Ywv
Yww
Ywx
Ywy
Ywz
Yxa
Yxb
Yxc
Yxd
Yxe
Yxf
Yxg
Yxh
Yxi
Yxj
Yxk
Yxl
Yxm
Yxn
Yxo
Yxp
Yxq
Yxr
Yxs
Yxt
Yxu
Yxv
Yxw
Yxx
Yxy
Yxz
Yya
Yyb
Yyc
Yyd
Yye
Yyf
Yyg
Yyh
Yyi
Yyj
Yyk
Yyl
Yym
Yyn
Yyo
Yyp
Yyq
Yyr
Yys
Yyt
Yyu
Yyv
Yyw
Yyx
Yyy
Yyz
Yza
Yzb
Yzc
Yzd
Yze
Yzf
Yzg
Yzh
Yzi
Yzj
Yzk
Yzl
Yzm
Yzn
Yzo
Yzp
Yzq
Yzr
Yzs
Yzt
Yzu
Yzv
Yzw
Yzx
Yzy
Yzz
Zaa
Zab
Zac
Zad
Zae
Zaf
Zag
Zah
Zai
Zaj
Zak
Zal
Zam
Zan
Zao
Zap
Zaq
Zar
Zas
Zat
Zau
Zav
Zaw
Zax
Zay
Zaz
Zba
Zbb
Zbc
Zbd
Zbe
Zbf
Zbg
Zbh
Zbi
Zbj
Zbk
Zbl
Zbm
Zbn
Zbo
Zbp
Zbq
Zbr
Zbs
Zbt
Zbu
Zbv
Zbw
Zbx
Zby
Zbz
Zca
Zcb
Zcc
Zcd
Zce
Zcf
Zcg
Zch
Zci
Zcj
Zck
Zcl
Zcm
Zcn
Zco
Zcp
Zcq
Zcr
Zcs
Zct
Zcu
Zcv
Zcw
Zcx
Zcy
Zcz
Zda
Zdb
Zdc
Zdd
Zde
Zdf
Zdg
Zdh
Zdi
Zdj
Zdk
Zdl
Zdm
Zdn
Zdo
Zdp
Zdq
Zdr
Zds
Zdt
Zdu
Zdv
Zdw
Zdx
Zdy
Zdz
Zea
Zeb
Zec
Zed
Zee
Zef
Zeg
Zeh
Zei
Zej
Zek
Zel
Zem
Zen
Zeo
Zep
Zeq
Zer
Zes
Zet
Zeu
Zev
Zew
Zex
Zey
Zez
Zfa
Zfb
Zfc
Zfd
Zfe
Zff
Zfg
Zfh
Zfi
Zfj
Zfk
Zfl
Zfm
Zfn
Zfo
Zfp
Zfq
Zfr
Zfs
Zft
Zfu
Zfv
Zfw
Zfx
Zfy
Zfz
Zga
Zgb
Zgc
Zgd
Zge
Zgf
Zgg
Zgh
Zgi
Zgj
Zgk
Zgl
Zgm
Zgn
Zgo
Zgp
Zgq
Zgr
Zgs
Zgt
Zgu
Zgv
Zgw
Zgx
Zgy
Zgz
Zha
Zhb
Zhc
Zhd
Zhe
Zhf
Zhg
Zhh
Zhi
Zhj
Zhk
Zhl
Zhm
Zhn
Zho
Zhp
Zhq
Zhr
Zhs
Zht
Zhu
Zhv
Zhw
Zhx
Zhy
Zhz
Zia
Zib
Zic
Zid
Zie
Zif
Zig
Zih
Zii
Zij
Zik
Zil
Zim
Zin
Zio
Zip
Ziq
Zir
Zis
Zit
Ziu
Ziv
Ziw
Zix
Ziy
Ziz
Zja
Zjb
Zjc
Zjd
Zje
Zjf
Zjg
Zjh
Zji
Zjj
Zjk
Zjl
Zjm
Zjn
Zjo
Zjp
Zjq
Zjr
Zjs
Zjt
Zju
Zjv
Zjw
Zjx
Zjy
Zjz
Zka
Zkb
Zkc
Zkd
Zke
Zkf
Zkg
Zkh
Zki
Zkj
Zkk
Zkl
Zkm
Zkn
Zko
Zkp
Zkq
Zkr
Zks
Zkt
Zku
Zkv
Zkw
Zkx
Zky
Zkz
Zla
Zlb
Zlc
Zld
Zle
Zlf
Zlg
Zlh
Zli
Zlj
Zlk
Zll
Zlm
Zln
Zlo
Zlp
Zlq
Zlr
Zls
Zlt
Zlu
Zlv
Zlw
Zlx
Zly
Zlz
Zma
Zmb
Zmc
Zmd
Zme
Zmf
Zmg
Zmh
Zmi
Zmj
Zmk
Zml
Zmm
Zmn
Zmo
Zmp
Zmq
Zmr
Zms
Zmt
Zmu
Zmv
Zmw
Zmx
Zmy
Zmz
Zna
Znb
Znc
Znd
Zne
Znf
Zng
Znh
Zni
Znj
Znk
Znl
Znm
Znn
Zno
Znp
Znq
Znr
Zns
Znt
Znu
Znv
Znw
Znx
Zny
Znz
Zoa
Zob
Zoc
Zod
Zoe
Zof
Zog
Zoh
Zoi
Zoj
Zok
Zol
Zom
Zon
Zoo
Zop
Zoq
Zor
Zos
Zot
Zou
Zov
Zow
Zox
Zoy
Zoz
Zpa
Zpb
Zpc
Zpd
Zpe
Zpf
Zpg
Zph
Zpi
Zpj
Zpk
Zpl
Zpm
Zpn
Zpo
Zpp
Zpq
Zpr
Zps
Zpt
Zpu
Zpv
Zpw
Zpx
Zpy
Zpz
Zqa
Zqb
Zqc
Zqd
Zqe
Zqf
Zqg
Zqh
Zqi
Zqj
Zqk
Zql
Zqm
Zqn
Zqo
Zqp
Zqq
Zqr
Zqs
Zqt
Zqu
Zqv
Zqw
Zqx
Zqy
Zqz
Zra
Zrb
Zrc
Zrd
Zre
Zrf
Zrg
Zrh
Zri
Zrj
Zrk
Zrl
Zrm
Zrn
Zro
Zrp
Zrq
Zrr
Zrs
Zrt
Zru
Zrv
Zrw
Zrx
Zry
Zrz
Zsa
Zsb
Zsc
Zsd
Zse
Zsf
Zsg
Zsh
Zsi
Zsj
Zsk
Zsl
Zsm
Zsn
Zso
Zsp
Zsq
Zsr
Zss
Zst
Zsu
Zsv
Zsw
Zsx
Zsy
Zsz
Zta
Ztb
Ztc
Ztd
Zte
Ztf
Ztg
Zth
Zti
Ztj
Ztk
Ztl
Ztm
Ztn
Zto
Ztp
Ztq
Ztr
Zts
Ztt
Ztu
Ztv
Ztw
Ztx
Zty
Ztz
Zua
Zub
Zuc
Zud
Zue
Zuf
Zug
Zuh
Zui
Zuj
Zuk
Zul
Zum
Zun
Zuo
Zup
Zuq
Zur
Zus
Zut
Zuu
Zuv
Zuw
Zux
Zuy
Zuz
Zva
Zvb
Zvc
Zvd
Zve
Zvf
Zvg
Zvh
Zvi
Zvj
Zvk
Zvl
Zvm
Zvn
Zvo
Zvp
Zvq
Zvr
Zvs
Zvt
Zvu
Zvv
Zvw
Zvx
Zvy
Zvz
Zwa
Zwb
Zwc
Zwd
Zwe
Zwf
Zwg
Zwh
Zwi
Zwj
Zwk
Zwl
Zwm
Zwn
Zwo
Zwp
Zwq
Zwr
Zws
Zwt
Zwu
Zwv
Zww
Zwx
Zwy
Zwz
Zxa
Zxb
Zxc
Zxd
Zxe
Zxf
Zxg
Zxh
Zxi
Zxj
Zxk
Zxl
Zxm
Zxn
Zxo
Zxp
Zxq
Zxr
Zxs
Zxt
Zxu
Zxv
Zxw
Zxx
Zxy
Zxz
Zya
Zyb
Zyc
Zyd
Zye
Zyf
Zyg
Zyh
Zyi
Zyj
Zyk
Zyl
Zym
Z



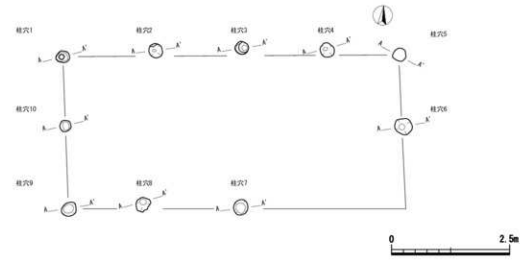


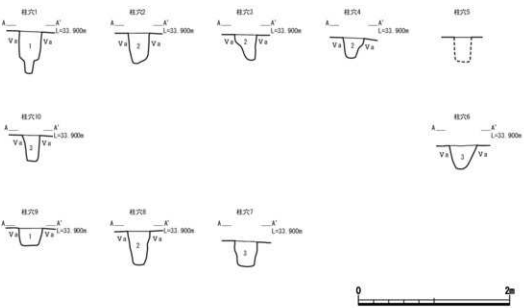
1. 黒褐色土（2.5Y3/1）やわらかい。アカホヤ火山灰土が少量混ざる。
2. 黒色土に黒灰色土（2.5Y3/1）が混ざる。とても硬くしまる。炭化物がごく少量混ざる。
3. 黒色土（10YR2/1）粘性強い。

掘立柱建物跡20号柱穴一覧

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）		埋土
1	26	37	1－2	172	黒褐
2	30	21	2－3	148	黒
3	23	33	3－4	184	黒
4	35	26	4－5	100	黒褐
5	33	75	5－6	160	黒
6	33	60	6－7	76	黒
7	25	23	7－8	168	黒褐
8	29	30		—	黒
9	24	47	9－10	132	黒
10	27	36	10－11	108	黒
11	28	24	11－1	192	黒褐

第303図　掘立柱建物跡20号



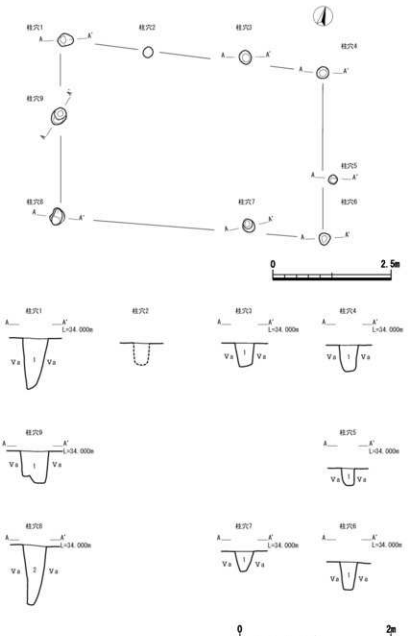


1：黒褐色土（2.5Y3/1）粘性あり。アカホヤ火山灰土が少量混ざる。
2：黒色土に黄灰色土（2.5Y3/1）が混ざる。とても硬くしまる。炭化物がごく少量混ざる。
3：黒色土（10YR2/1）粘性強い。

掘立柱建物跡21号柱穴一覧

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）		埋土
1	27	56	1－2	196	黒褐
2	29	40	2－3	184	黒
3	28	33	3－4	180	黒
4	30	27	4－5	156	黒
5			5－6	196	
6	35	31			黒
7	31	33	7－8	208	黒
8	29	45	8－9	160	黒
9	34	23	9－10	176	黒褐
10	24	35	10－1	148	黒

第304図　掘立柱建物跡21号

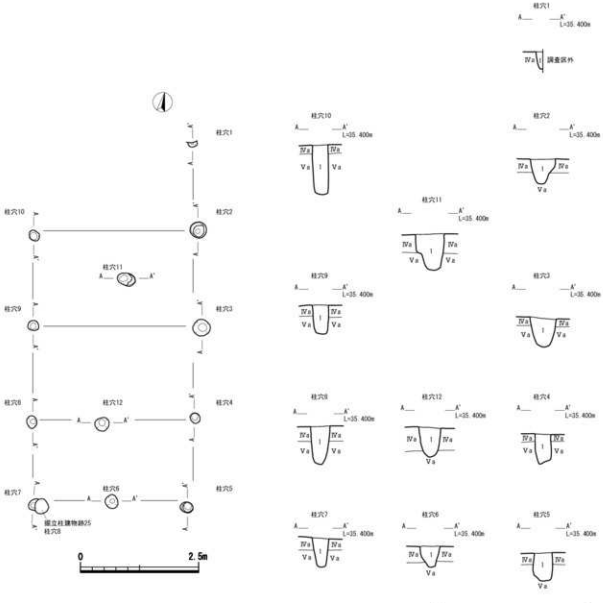


1：黒色土（9cm10YR2/1）粘性強い。
2：黒褐色土（9cm10YR2/2）やや粘性あり。ややしまりあり。粘性土に砂土を含む。

掘立柱建物跡22号柱穴一覧

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）	埋土
1	30	68	1－2　180	黒
2	—	—	2－3　208	—
3	27	32	3－4　168	黒
4	25	35	4－5　232	黒
5	19	22	5－6　128	黒
6	24	37	6－7　164	黒
7	28	27	7－8　（406）	黒
8	32	79	8－9　216	黒褐
9	34	42	9－1　164	黒

第305図　掘立柱建物跡22号



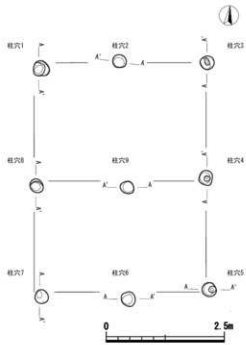
1：黒褐色土(10YR2/2)粘性ややあり、しまりなし。明黄褐色(10YR7/6)のアカホヤ火山灰粒をわずかに含む。

掘立柱建物跡23号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	18	23	1－2　184	黒褐
2	34	32	2－3　208	黒褐
3	36	38	3－4　192	黒褐
4	21	40	4－5　192	黒褐
5	25	37	5－6　160	黒褐
6	28	28	6－7　164	黒褐

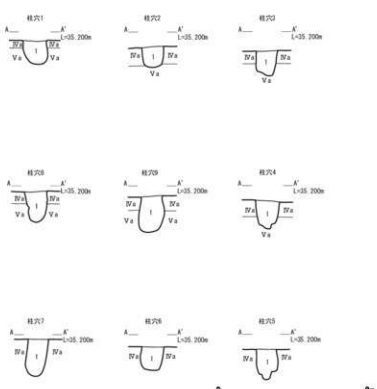
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
7	24	38	7－8　180	黒褐
8	24	50	8－9　204	黒褐
9	22	39	9－10　190	黒褐
10	22	66	10－2　(348)	黒褐
11	32	48	―	黒褐
12	29	39	―	黒褐

第306図　掘立柱建物跡23号



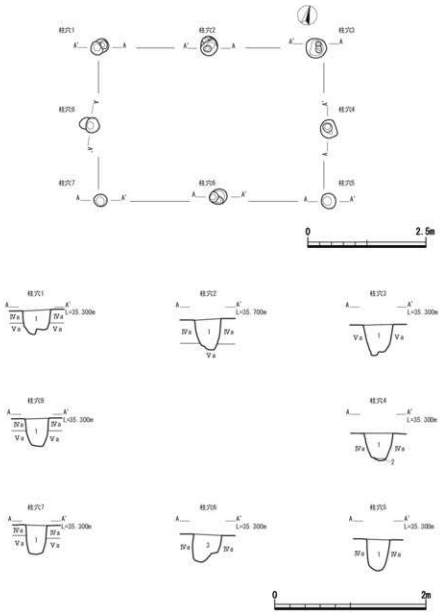
掘立柱建物跡24号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	34	30	1－2　168	黒褐
2	28	28	2－3　186	黒褐
3	29	33	3－4　244	黒褐
4	30	37	4－5　240	黒褐
5	29	40	5－6　172	黒褐
6	30	31	6－7　184	黒褐
7	29	49	7－8　232	黒褐
8	29	41	8－1　252	黒褐
9	28	47	—	黒褐



1 黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、しまりなし。アカホヤ火山灰ブロックが混ざる。

第307図　掘立柱建物跡24号

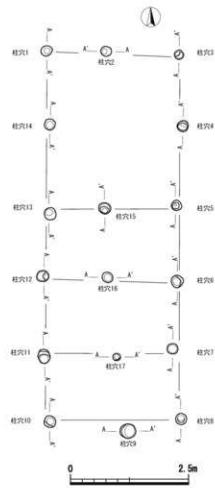


1 黒褐色土(10YR2/2) やや粘性あり、しまりなし。黄褐色(10YR7/8)パミスを少量含む。
2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性あり、しまりあり。硬化している。立て直しに伴う柱等か。
3 黒褐色土(2.5YR3/2) やや粘性あり、しまりなし。

掘立柱建物跡25号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	34	32	1－2　232	黒褐
2	39	41	2－3　228	黒褐
3	42	40	3－4　172	黒褐
4	36	36	4－5　152	黒褐・暗褐
5	32	42	5－6　236	黒褐
6	35	37	6－7　256	暗褐
7	27	38	7－8　160	黒褐
8	33	37	8－1　164	黒褐

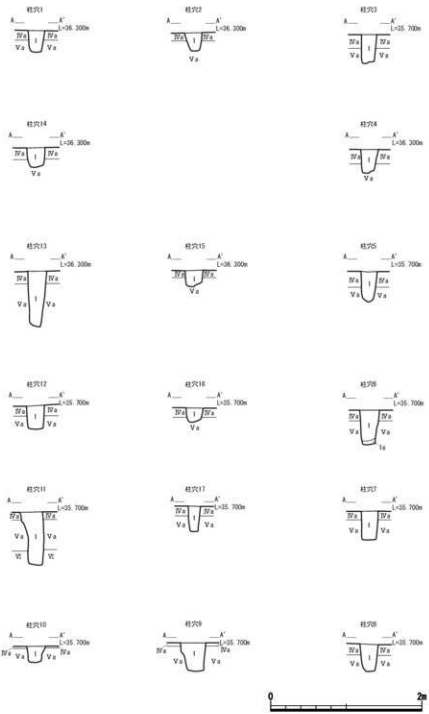
第308図　掘立柱建物跡25号



掘立柱建物跡26号柱穴一覧

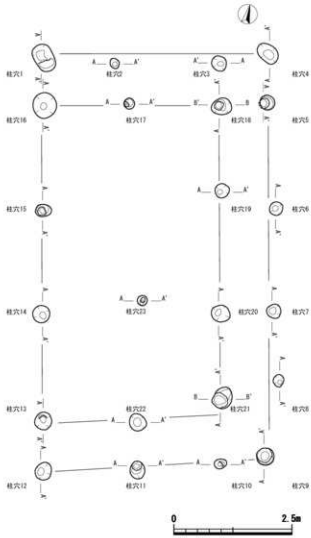
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	23	28	1－2　128	黒褐
2	22	24	2－3　154	黒褐
3	19	38	3－4　148	黒褐
4	24	31	4－5　170	黒褐
5	22	40	5－6　164	黒褐
6	25	45	6－7　144	黒褐
7	22	38	7－8　144	黒褐
8	23	36	8－9　114	黒褐
9	32	38	9－10　166	黒褐
10	25	22	10－11　131	黒褐
11	27	20	11－12　168	黒褐
12	25	31	12－13　144	黒褐
13	25	23	13－14　176	黒褐
14	23	26	14－1　164	黒褐
15	25	21	—	黒褐
16	23	19	—	黒褐
17	16	33	—	黒褐

第309図　掘立柱建物跡26号１



Ⅰ：黒褐色土（10YR2/2）やや粘性あり、ややしまり、粘性土に砂土を含む。
Ⅰa：黒褐色土（10YR2/2）硬化している。

第310図　掘立柱建物跡26号２

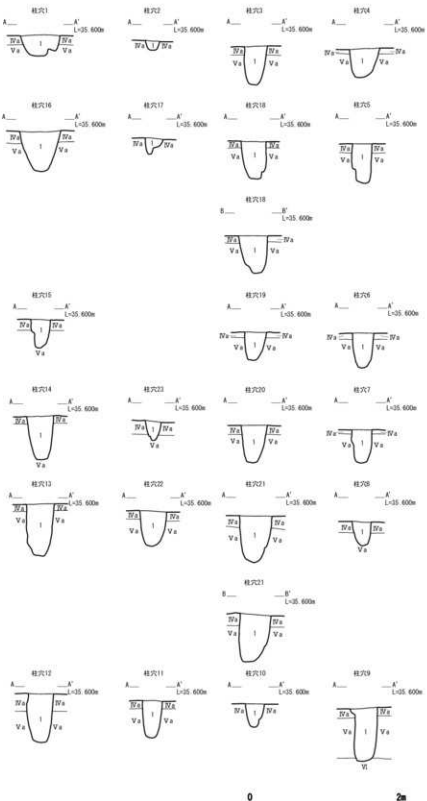


掘立柱建物跡27号柱穴一覧

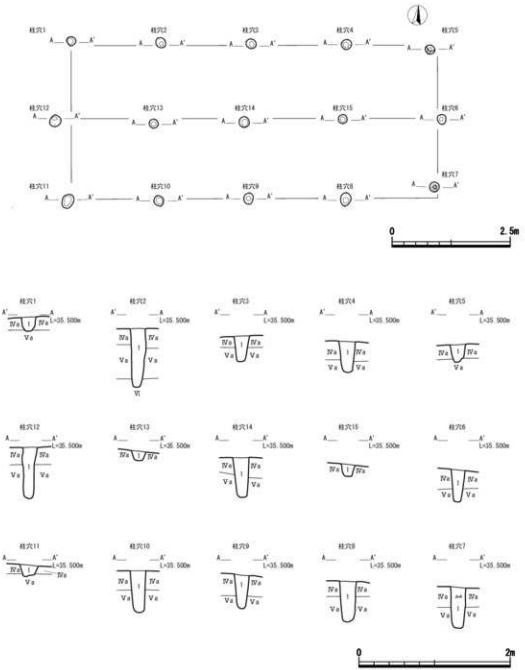
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	50	28	1-2 150	黒褐
2	21	12	2-3 222	黒褐
3	32	51	3-4 108	黒褐
4	42	38	4-5 108	黒褐
5	31	52	5-6 225	黒褐
6	29	46	6-7 216	黒褐
7	30	44	7-8 150	黒褐
8	25	31	8-9 168	黒褐
9	37	69	9-10 96	黒褐
10	23	31	10-11 180	黒褐
11	34	49	11-12 201	黒褐
12	36	64	12-13 108	黒褐

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
13	36	69	13-14 228	黒褐
14	37	57	14-15 222	黒褐
15	30	38	15-16 222	黒褐
16	53	53	16-1 104	黒褐
17	23	22	—	黒褐
18	39	50	—	黒褐
19	31	37	—	黒褐
20	38	49	—	黒褐
21	43	63	—	黒褐
22	36	46	—	黒褐
23	22	25	—	黒褐

第311図　掘立柱建物跡27号 1



第312図　掘立柱建物跡27号２

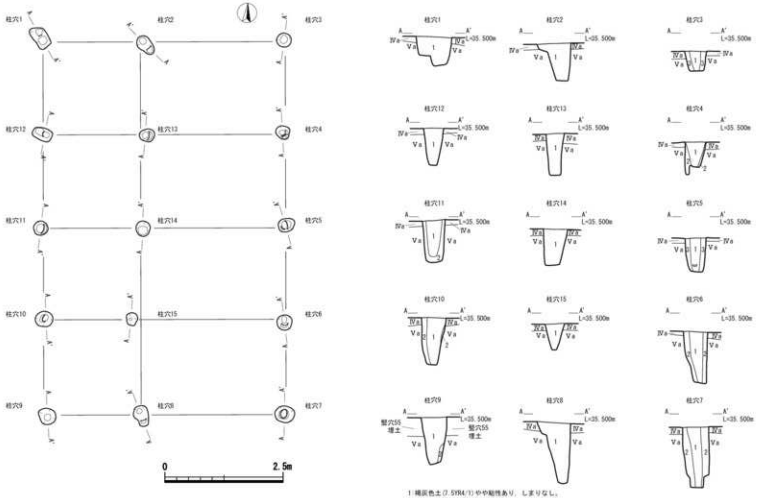


1 黒褐色土(10YR2/2)粘性弱い。しまりなし。

掘立柱建物跡28号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	19	18	1-2 190	黒褐
2	22	76	2-3 190	黒褐
3	21	33	3-4 200	黒褐
4	21	40	4-5 178	黒褐
5	20	22	5-6 150	黒褐
6	20	41	6-7 140	黒褐
7	20	53	7-8 190	黒褐
8	26	52	8-9 205	黒褐
9	22	44	9-10 190	黒褐
10	22	54	10-11 193	黒褐
11	27	16	11-12 175	黒褐
12	24	66	12-1 172	黒褐
13	19	12	—	黒褐
14	22	51	—	黒褐
15	19	16	—	黒褐

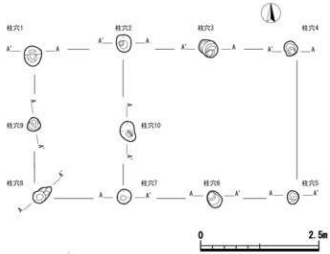
第313図　掘立柱建物跡28号



第314図　掘立柱建物跡29号

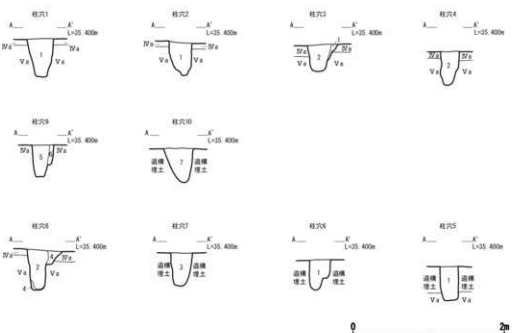
掘立柱建物跡29号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	40	34	1－2　220	褐灰
2	34	50	2－3　295	褐灰
3	30	27	3－4　198	褐灰
4	28	43	4－5　195	褐灰・炭粒
5	32	45	5－6　205	褐灰
6	32	68	6－7　200	褐灰・炭粒
7	38	80	7－8　300	褐灰・炭粒
8	33	80	8－9　203	褐灰
9	36	62	9－10　210	褐灰・炭粒
10	36	63	10－11　124	褐灰・炭粒
11	31	56	11－12　200	褐灰・炭粒
12	34	49	12－1　205	褐灰
13	29	55	—	褐灰
14	30	48	—	褐灰
15	25	35	—	褐灰



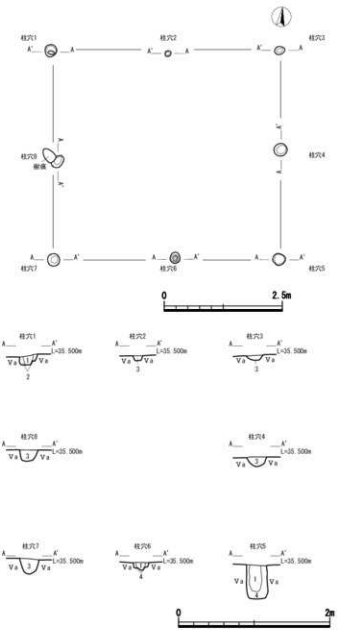
掘立柱建物跡30号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	39	51	1－2　174	黒褐
2	35	43	2－3　180	黒褐
3	37	35	3－4　172	黒褐
4	29	44	4－5　(316)	黒褐
5	25	45	5－6　166	黒褐
6	33	40	6－7　192	黒褐
7	29	43	7－8　174	黒褐
8	35	54	8－9　150	黒褐
9	27	42	9－1　144	黒褐
10	37	46	—	黒褐



1:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、しまりなし。アカホヤ火山灰ブロックとが混ざる。
2:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、しまりなし。
3:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、ややしまりあり。
4:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、しまりあり、アカホヤ火山灰ブロックとが混ざる。
5:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性弱い、しまりなし。
6:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、ややしまりあり、アカホヤ火山灰ブロックとが混ざる。
7:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、しまりなし。アカホヤ火山灰ブロックとが多く混ざる。

第315図　掘立柱建物跡30号



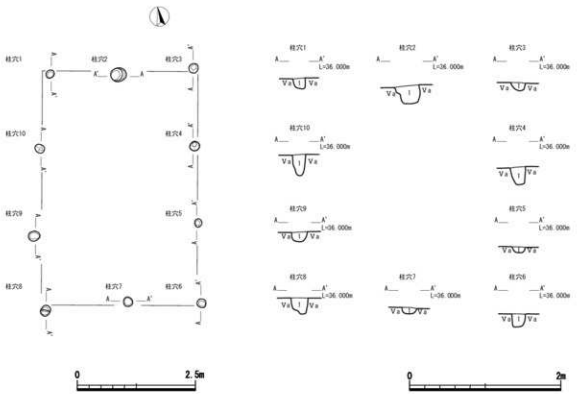
1：黒褐色土(10YR2/2)粘性弱い、しまりなし。柱痕の可能性あり。
2：黒褐色土(10YR2/2)と明黄褐色土(10YR6/8)ブカホヤ火山灰との混土。
粘性弱い、ややしまりあり。掘り方埋土の可能性あり。
3：黒褐色土(10YR2/2)粘性弱い、しまりなし。
4：黒褐色土(10YR2/2)と明黄褐色土(アカホヤ10YR6/8)との混土。
粘性弱い、しまりあり。堀方埋土の可能性あり。

掘立柱建物跡31号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	26	12	1－2　248	黒褐
2	13	7	2－3　236	黒褐
3	20	7	3－4　214	黒褐
4	27	13	4－5　228	黒褐

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
5	25	45	5－6　220	黒褐
6	23	10	6－7　260	黒褐
7	26	20	7－8　208	黒褐
8	25	15	8－1　232	黒褐

第316図　掘立柱建物跡31号

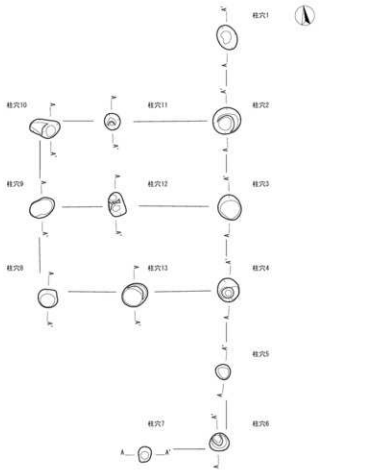


1:黒褐色土(10YR2/2)粘性弱い、しまりなし。

掘立柱建物跡32号柱穴一覧

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	埋土
1	17	14	1-2 140	黒褐
2	31	24	2-3 160	黒褐
3	20	11	3-4 164	黒褐
4	20	23	4-5 164	黒褐
5	17	8	5-6 168	黒褐
6	19	13	6-7 156	黒褐
7	20	8	7-8 172	黒褐
8	21	22	8-9 160	黒褐
9	22	8	9-10 184	黒褐
10	19	28	10-1 156	黒褐

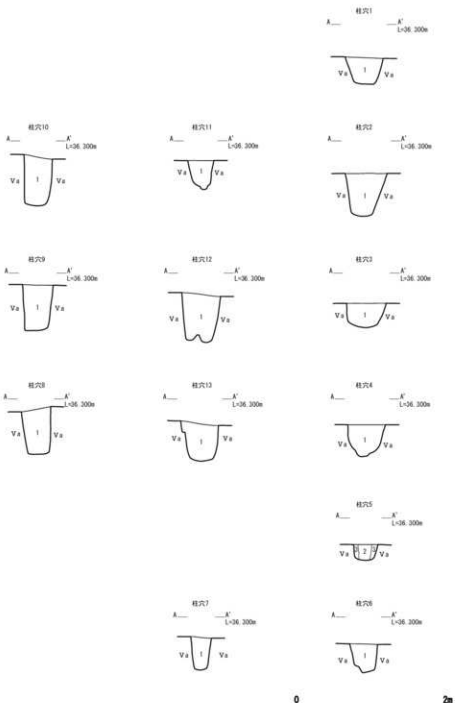
第317図　掘立柱建物跡32号



掘立柱建物跡33号柱穴一覧

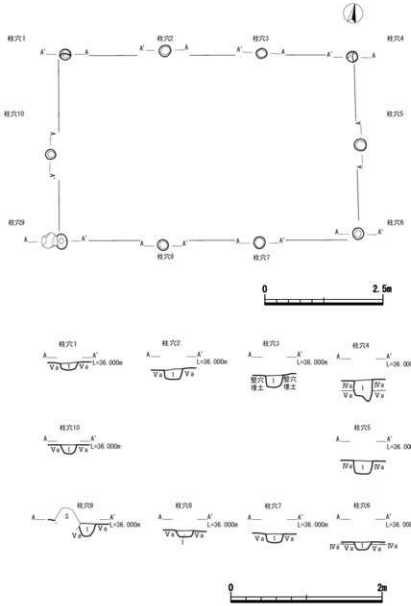
柱穴番号	直径 (cm)	深さ (cm)	柱間距離 (cm)	埋土
1	47	35	1－2　180	暗褐
2	57	57	2－3　185	暗褐
3	52	32	3－4　175	暗褐
4	48	42	4－5　173	暗褐
5	32	21	5－6　150	暗褐
6	39	38	6－7　164	暗褐
7	31	43	―	暗褐
8	41	61	8－9　190	暗褐
9	46	61	9－10　175	暗褐
10	50	65	10－11　140	暗褐
11	35	38	11－2　240	黒褐・暗褐
12	41	63	―	暗褐
13	52	49	―	暗褐

第318図　掘立柱建物跡33号１



1:暗褐色土(10YR2/3)粘性あり、しまりあり。
2:黒褐色土(10YR2/2)粘性あり、しまりあり。
3:暗褐色土(10YR3/4)粘性あり、しまりあり。

第319図　掘立柱建物跡33号２



1：黒褐色土（10YR2/2）粘性弱い、しまりなし。

掘立柱建物跡34号柱穴一覧

柱穴番号	直径（cm）	深さ（cm）	柱間距離（cm）	埋土
1	23	9	1－2　210	黒褐
2	24	14	2－3　204	黒褐
3	22	16	3－4　192	黒褐
4	23	28	4－5　192	黒褐
5	26	17	5－6　192	黒褐
6	24	10	6－7　208	黒褐
7	25	12	7－8　200	黒褐
8	23	8	8－9　216	黒褐
9	28	12	9－10　184	黒褐
10	32	12	10－1　212	黒褐

第320図　掘立柱建物跡34号

（２）竪穴建物跡・土坑墓・土坑（第321図）

竪穴建物跡（第322～324・389図　竪穴建物跡１～３号）

竪穴建物跡は南東部から２基，中央よりやや西側で１基の計３基が検出されている。

竪穴建物跡１号は，Ｊ37区Ⅳａ層上面で検出された。長軸約260㎝，短軸約200㎝の隅丸方形状を呈しているが，南側がやや突出している。検出面からの深さは45㎝であり，埋土は黒褐色土を主体とし，レンズ状堆積をしており，堆積状況から南側より埋まったことが分かる。平坦に掘られた床面は広さが，長軸180㎝，短軸140㎝の隅丸長方形状を呈する。角部３か所と，床面短辺際の中央にそれぞれ１か所の計５基の柱穴が掘り込まれており，最深のもので深さ約40㎝を測る。柱穴の径から考えると，直径10㎝程度の柱が埋められていたことが想定できる。また，床面長辺際には，際に沿った形で細長い掘り込みが掘られており，壁帯溝の可能性も考えられる。遺構内からは土師器片数点とともに，11世紀末から12世紀初頭と考えられる東播系須恵器片１点が出土している。焼土や炭化物等は検出されていない。

竪穴建物跡１号－１は東播系須恵器の擂鉢片で口縁部から体部が残存する。法量は復元口径31.8㎝を測る。器形は体部の成型が粗雑なため凹凸が著しく，体部下半は直線的で体部上半が丸みをもって立ち上がっている。口縁部は口縁帯を有し，口縁帯の上下端部はわずかに突出させる。器面調整は体部外面が横位のナデ調整で成形時の指頭圧痕が顕著に残り，口縁帯はハケメによる調整痕が認められる。内面は剥落が著しいが，横位・斜位方向のハケメによる調整後にスリメを施す。スリメは４条が残存するが，破片のため一単位の条数は不明である。焼成はおおむね良好である。胎土はやや粗く，１～３㎜大の白色粒子等が多く含まれている。

竪穴建物跡２号はＪ35区Ⅴａ層上面で検出された。隅丸方形状を呈し，西側には張り出しのような構造をもつ。検出面からの深さは約45㎝である。床面からは柱穴が６基検出されており，３基ずつの柱穴が直線的に並ぶ配置をしている。柱穴は「ハ」の字状に建物の中央寄りの床面に掘られている。柱穴は直径20～25㎝であり，深さはどれも約10㎝である。この特異な柱穴の配置状況から，竪穴建物跡３号は居住空間ではなく，作業場所として利用されていたと考えられる。焼土・炭化物等は検出されていない。埋土中からは青磁片が出土している。

竪穴建物跡２号の埋土中からは，建物の西側からのみ粘土塊が多く出土している。この粘土塊は床面からも出土しているが，多くは西側から流れ込んだように出土しており，埋土の堆積状況と一致しており，各埋土より出土している。このことから，竪穴建物跡２号は，廃棄時に西側方向から粘土塊を含めた土で埋め戻され，埋土１の堆積状況より，一気に埋め戻されたと考えられる。

竪穴建物跡３号は，Ｈ29区Ⅴａ層中で検出された。川久保遺跡では，谷部を除く南西部は，近代では墓域が，現代では住居が建てられていた場所であり，最も撹乱が酷い範囲であり，この竪穴建物跡２号も表土直下で見つかっている。形状はやや歪ではあるが，１辺が約270㎝の正方形を呈し，検出面からの深さは約25㎝である。遺構の東西角部には，深さ30㎝の柱穴が１基ずつ掘られている。遺構内からは，土師器片が多数出土したほか，東側の柱穴付近では用途不明の礫がまとまって出土している。なお，遺構の東側角部は古墳時代の竪穴建物跡を切っている。

土坑墓（第325・326・388図　土坑墓１～３号）

土坑墓は遺跡の南東部から１基，北西部から２基検出されている。特に北西部の２基の土坑墓に関しては，周辺で掘立柱建物跡が整然と検出されていることからも，屋敷墓の可能性が高い。

土坑墓１号はＪ37区Ⅳａ層上面で検出された。竪穴建物跡１号と隣接して検出されている。長軸163㎝，短軸125㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約50㎝である。床面は平坦には作られず，遺構のほぼ中央に直径約35㎝，深さ約40㎝の小土坑が掘られている。小土坑の埋土は土坑墓の埋土と同一埋土（埋土１）であったため，同じような時期に作られ，埋められたと考えられる。小土坑内からは遺物の出土は見られなかった。土坑墓１号の埋土からは，北側から玉縁口縁の白磁碗の完形品が出土したほか，11世紀末から12世紀初頭と考えられる東播系須恵器片が１点，黒色土器を含む土師器片が６点，滑石製石鍋片が１点，礫が１点出土しており，主として北側から出土している。白磁碗の検出状況からすると，ほぼ床面に沿った形で検出されており，床面の傾斜に沿った形で埋納されたと考えられる。埋土は黒褐色土を主体としており，堆積状況から北側から埋められたと考えられる。

土坑墓１号－１は土師器坏の底部片である。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，内底面は回転ナデ調整でロクロ目が残り，外底面はナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，赤色粒子，石英等の微粒が含まれている。

土坑墓１号－２は東播系須恵器の捏鉢片で口縁部から体部が残存する。器形は体部下半から直線的に立ち上がり体部中位で外反する。口縁部は断面が矩形を呈し，口縁端部は上方へわずかに突出させる。

器面調整は体部内外面が回転ナデ調整で，その後の部分的に不定方向のナデ調整をおこなう。焼成は良好で硬く締まる。胎土はやや粗く，白色粒子等の細粒が多く含まれている。

土坑墓１号－３は白磁碗の完形品である。法量は口径16.9cm，高台径7.5cm，器高7.1cmを測る。器形は浅く削り出された畳付が幅広の高台を有し，体部は高台部から直線的に立ち上がり，口縁部は肉厚な玉縁状を呈する。器面調整は外面が口縁部直下から底部にかけて回転ヘラケズリで，外底面は高台と外底面の境に回転ナデ調整をおこなう。内面は内底面と体部境に1条の沈線が認められる。施釉範囲は内面から体部外面上半にかけて施釉され，体部外面下半から外底面は露胎である。

土坑墓２号は$B28区IV_a$層上面から検出された。長軸205cm，短軸110cmの隅丸長方形状を呈し，検出面からの深さは14cmである。埋土は黒褐色土の単一埋土である。遺構内からは北側床面から，嘴（くちばし）状口縁の白磁碗が１点出土している。また南側からは土師器片が３点出土している。

土坑墓２号－１は須恵器の坏で口縁部から底部まで残存する。法量は復元口径12.8cm，復元底径7.8cm，器高4.4cmを測る。器形は底部から口縁部に至るまで直線的に立ち上がる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，体部外面の下端はナデ調整が不十分な部分がある。内面見込みは回転ナデ調整が認められ，外底面はヘラ切り離し後に丁寧なナデ調整で仕上げる。また体部外面から内面見込みにかけて焼成時に生成されたと思われる火襷状の黒色化が認められる。体部外面の砂粒は右方向へ移動している。胎土はやや粗めで１mm以下～３mmの白色粒子等が器表面に多く認められる。

土坑墓２号－２は白磁碗の完形品である。法量は口径17.1cm，高台径5.8cm，器高7.3cmを測る。器形は細く高く直立する高台を有し，体部は高台部から曲線的に立ち上がり，口縁部は口縁端部を外側へ屈曲させ，上端部は水平となり，その端部は嘴状に尖る形状を呈する。器面調整は外底面から口縁端部直下まで回転ヘラケズリ痕が認められる。施釉範囲は内面から体部外面と高台部との境まで施釉され，高台部から外底面は露胎である。内面は内底面と体部境に１条の沈線が認められる。

土坑墓３号はE・F28区IVa層上面から検出された。長軸180cm，短軸70cmが残存しているが，遺構の南側が撹乱を受けているため，実際の長軸の長さは不明である。ただし，床面はすぼまり始めており，また撹乱の反対側には遺構は延びていないため，長軸の長さが200cmを超えることはない。形状は隅丸長方形状を呈すが，短辺は曲線を描く。検出面からの深さは30cmである。遺構の北側は撹乱を受けているが，その撹乱部分の南側から土師器が４点出土している。土師器は床面からやや浮いた状態で出土している。

土坑墓３号－１～４は土師器皿で，器形は全て共通しており，体部が底部から丸みをもって立ち上がり，外側に開く器形を呈する。口縁端部外面は面取りをおこなっているが，端部が尖り気味になる部分と丸くなる部分とがある。

土坑墓３号－１は完形品で，法量は口径9.2 cm，底径6.8 cm，器高1.2 cmを測る。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は時計回りのヘラ切り離し痕が残る。内底面は体部との境周辺が回転ナデ調整で，中央付近は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，内外面の1/2に灰色化範囲が認められる。胎土はおおむね精良で，赤・白色粒子，石英，角閃石等の微粒が含まれている。また体部外面と内面の数カ所に植物繊維状の圧痕が残る。

土坑墓３号－２は完形品で，法量は口径9.6 cm，底径6.5 cm，器高1.0 cmを測る。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は時計回りのヘラ切り離し痕が残る。内底面は体部との境周辺が回転ナデ調整で，中央付近は強めに不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，内外面の一部に灰色化範囲が認められる。胎土はおおむね精良で，赤・白色粒子，石英，角閃石等の微粒が含まれている。また体部外面と内面の数カ所に植物繊維状の圧痕が残る。

土坑墓３号－３は体部の1/5が欠損する。法量は口径9.4 cm，底径6.6 cm，器高1.1 cmを測る。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は時計回りの回転ヘラ切り離し後の板状圧痕が残る。内底面は体部との境周辺まで回転ナデ調整で，中央付近は強めに静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，内外面の一部に灰色化範囲が認められる。胎土はおおむね精良で，赤・黒色粒子，石英，金雲母等の微粒が含まれている。また体部外面と内面の数カ所に植物繊維状の圧痕が残る。

土坑墓３号－４は1/2が残存する。法量は復元口径9.5 cm，復元底径6.8 cm，器高1.2 cmを測る。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は時計回りの回転ヘラ切り離し痕が残る。内底面は体部との境周辺が回転ナデ調整で，中央付近は不定方向の静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，内外面の中央付近に灰色化範囲が認められる。胎土はおおむね精良で，赤・白色粒子，石英，角閃石等の微粒が含まれている。また内面の数カ所に植物繊維状の圧痕が残る。

土坑（第327～353・391図　土坑56～123号）

中世の土坑としては，Va層を主として68基の土坑が検出された。基本的には黒褐色土を埋土としている。検出地点は大きく分けると，遺跡の北側，中央から南側，西側の谷部の３か所から検出されている。北側の土坑群については，西側で土坑が集中する状況が見られ，東側には土坑はほとんど検出されていない。

遺跡の中央から南側にかけての土坑群は，北側の土坑とは異なり，単独のものもあるが，多くは５基前後の土

坑が集中し点在する状況が見られる。

西側の谷部で検出された土坑群はH24～26区に，谷を横断するように点在している。

調査区北側東検出土坑群（土坑56～87号）

土坑56～87号は調査区北側の中央から東部にかけて集中して検出された土坑群である。これらの土坑群の南側と西側には，掘立柱建物跡群が整然と並ぶ区域があり，そこでは土坑の確認されない，もしくは極端に基数が少なくなる傾向が見られる。

土坑56～59号は，C・D35・36区Ⅴa層上面で検出された。C・D36区より東側は，鬼界カルデラの爆発に伴うと考えられる地震により発生した液状化現象により噴出した噴砂シラスが厚く堆積し，場所によってはⅤa層の堆積が見られない範囲のある区域である。2本の古道跡が合流する部分，古道が二叉状になった部分に作られた土坑群であり，ほぼ等間隔に4基の土坑が並んでいる。4基ともにⅤa層上面で検出され，形状は円形もしくは，隅丸方形状を呈する。56・57号，58・59号でそれぞれ埋土が異なるが，ほぼ同時期の一連の土坑と考えられ，またちょうど古道の分岐部分に作られていることからも，古道跡との関連性も大きい。土坑56・58号から土師器片が出土している。

土坑60・61号は，C35区・D34区で検出された土坑である。10m程離れて検出されているが，ほぼ同じ大きさ・深さ・形状をもつ土坑である。埋土は異なり，特に土坑61号は暗褐色土の埋土であることから，当初は古墳時代もしくは古代の土坑と考えていたが，埋土中から玉縁口縁の白磁片が出土したことから中世の土坑とした。

土坑62号はD34・35区で検出された土坑である。北側は現代の撹乱の影響を受けている。遺物は出土していない。

土坑63号はD34区で検出された不定形の土坑である。東側を柱穴により切られている。この柱穴も埋土は黒褐色土であり，ほぼ同時期の遺構であると考えられる。遺物は出土していない。

土坑64号はB・C34区で検出された土坑である。長軸約115cm，短軸約50cmの楕円形状を呈し，検出面からの深さは25cmである。底面はほぼ平坦に整形されており，長軸約60cm，短軸約30cmの楕円形状になる。遺物は出土していない。

土坑65・66号は重なりあって検出された土坑である。土坑66号が土坑65号に切られている。土坑65号は直径約200cmの，やや歪な円形を呈する。検出面からの深さは約30cmである。南西から北東に傾斜する斜面に作られているため，土坑の床面も同じ方向に傾斜している。埋土中からは縄文時代晩期の土器片と陶磁器片が出土している。

土坑66号は，南西側を土坑65号に切られているため，正確な形状は分からないが，長軸約300cm，短軸約220cmの不定形の土坑である。平面形状は歪ではあるが，床面は北東方向へ傾斜するものの平坦に整形されている。土坑66号には，平面形状が内側に抉れる場所が2・3か所あり，その部分では柱穴の有無に関して，特に慎重に調査をおこなったが，柱穴は検出されなかった。埋土はアカホヤ火山灰の混じる明褐色土が堆積しているが，床面の深さが土坑65号と全く同じであることから考えても，土坑65号と大きな時期差はないと考えられる。埋土中から遺物は出土していない。

土坑67号はC33区Ⅴa層上面で検出された。長軸約120cm，短軸約80cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは約20cmである。埋土中からは炭化物が3点出土しているが，どれも床面から5cm程浮いた位置からの出土である。遺物は出土していない。

土坑68号は土坑67号に隣接して検出された土坑であり，C33区Ⅴa層上面で検出された。長軸約410cm，短軸約170cmのやや歪な長楕円形の土坑である。検出面からの深さは約20cmである。東側の上面を近世以降の土坑に切られており，また他に2か所，現代のイモ穴などの撹乱を受けている。埋土からは土師器片や陶磁器片が出土している。また，炭化物が3点出土しているが，3点ともに埋土1からの出土であり，流れ込みの可能性も考えられる。やや大きめの土坑であるため，竪穴建物の可能性も考え，周辺も含めて関連しそうな柱穴を精査したが確認できなかった。

土坑69号はC33区Ⅴa層で検出された土坑である。直径約135cmの円形を呈し，検出面からの深さは約50cmとやや深めの土坑である。埋土からは土師器片と陶磁器片が出土している。

土坑70号はB32区Ⅴa層上面で検出された土坑である。長軸約125cm，短軸約90cmの楕円形状を呈し，検出面からの深さは約45cmである。埋土中からは土師器片が出土している。

土坑71号はB31区の調査区北側際で検出された土坑であり，遺構の西側は調査区外へ延びている。検出面はⅤa層上面である。形状は長軸160cm以上，短軸約80cmの不定形状を呈し，検出面からの深さは約10cmと浅い。遺物は出土していない。この土坑71～74号までは，調査区の北側にややまとまって検出されている。

土坑72号は土坑71号と隣接して，B32区Ⅴa層で検出された。長軸約105cm，短軸約75cmの，やや歪ながら楕円形状を呈しており，検出面からの深さは約20cmである。東側はやや大きめではあるが，柱穴と考えられる土坑により切られている。柱穴埋土から考えると，あまり時間差はみられない。遺物の出土は見られなかった。

土坑73号はB32区Ⅴa層で検出された。西側を柱穴に

より切られているが，長軸約85cm，短軸約50cmの楕円形状を呈しており，検出面からの深さは約20cmである。遺物は出土していない。

土坑74号はB32区Ⅴa層で検出された。長軸約120cm，短軸約60cmの不定形状を呈する。検出面からの深さは約30cmである。埋土中からは，小鍛冶（鍛錬鍛冶）に関連すると考えられる轍の羽口の破片1点が出土しているが，流れ込みと考えられ，土坑74号が鍛冶関連の遺構となる可能性は低い。

土坑75号はC31区Ⅴa層上面で検出された。長軸約110cm，短軸約80cmの不定形状で，検出面からの深さは約10cmと浅い。

土坑76～78号はC32区Ⅴa層上面で検出された円形もしくは楕円形の土坑である。3基ともに同じにぶい黄褐色土を埋土としており，土坑58号・59号・70号と同じ埋土の堆積状況をしていることや，土坑77号が中世の柱穴を2基切っていることから，中世の土坑とした。柱穴とはあまり時間差は無いものと考えられる。土坑76号と77号は並んで検出され，形状・大きさ・深さがほぼ同じ土坑であり，関連性が高いと考えられる。土坑78号は長軸約160cm，短軸約120cmの楕円形を呈し，検出面からの深さは約70cmである。埋土は単一埋土であり，遺構の深さから考えても，自然堆積とは考えにくく，人為的に埋められた土坑である可能性が高い。3基ともに埋土中からの遺物の出土は見られなかった。

土坑79～83号は調査区の北側にまとまって検出された土坑群である。東側に集中している土坑71～74号の位置からは，60cmほどの小さな斜面を登った所に位置している。5基ともにB32区Ⅴa層上面で検出されている。

土坑79・80号は隣接して検出されている。土坑70号は北側を柱穴に切られているが楕円形状を呈し，深さは約50cmと深い。土師器片が4点出土している。土坑80号は，西側を樹痕による攪乱を受けているが，長軸約70cm，短軸約40cmの小型の楕円形状の土坑である。検出面からの深さは約15cmと浅いが，こちらも埋土中から土師器片が4点出土している。

土坑81号は長軸約110cm，短軸約60cmの隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さは約10cmと浅く，埋土中から遺物の出土は見られなかった。

土坑82・83号は非常に近接して検出された土坑である。ともに一部を樹痕による攪乱を受けている。土坑82号は南側に攪乱を受けているが，推定長軸約90cm，短軸約45cmの隅丸長方形の土坑である。北側は別の遺構と考えられる柱穴の掘り込みが確認されている。検出面からの深さは約10cmと浅く，埋土中からは土師器の坏の破片が1点出土している。

土坑83号は長軸約90cm，短軸約60cmの楕円形の土坑である。南側の一部は樹痕による攪乱を受けている。検出面からの深さは約15cmと浅く，遺物は出土していない。

土坑84・85・86号はD30区Ⅴa層上面から重なり合って検出された土坑である。土坑84号・86号は土坑85号を切っている。土坑84号と土坑86号の新旧関係は分からないが，堆積している埋土からすると，3基ともにあまり時間差は無いと考えられる。

土坑84号は直径約85cmの円形を呈し，検出面からの深さは約25cmである。

土坑85号は直径約115cmの円形を呈し，検出面からの深さは約15cmである。

土坑86号は直径約95cmの円形を呈し，検出面からの深さは約15cmである。3基ともに埋土中からは少量の炭化物が出土している。遺物は時期不明の土器細片が出土しているが，流れ込みの可能性が高い。

土坑87号はD30区Ⅴa層上面で検出された。長軸約275cm，短軸約100cmの長楕円形を呈し，検出面からの深さは約15cmである。床面は西側にわずかな傾斜面を作るが，それ以外はほぼ平坦に整形されている。遺物の出土は見られなかった。

調査区北側西検出土坑群（土坑88～90号）

土坑88～90号は調査区北側の西部で検出された土坑群である。東部の土坑群のように集中することはなく，散在して単独で検出されている。この西部は掘立柱建物跡が整然と並ぶ範囲であり，土坑は掘立柱建物跡を避けるような位置に掘られている。

土坑88号はC29区Ⅴa層上面で検出された。直径約60cmの小型の円形土坑であり，検出面からの深さは約5cmしかない。遺物は出土していない。

土坑89号はD27・28区Ⅴa層上面で検出された。直径約105cmの円形土坑であり，検出面からの深さは約40cmである。埋土の堆積状況を見ると，自然堆積もしくは人為的に埋めた後に，埋土1・2部分を掘り返して再び埋めたように見られる。遺物の出土は見られなかった。

土坑90号は遺跡の西端であるD・E25区から単独で検出された土坑である。検出面はⅤa層上面である。長軸約250cm，短軸約205cmを測る大型の土坑であり，検出面からの深さも約70cmと深い。土坑の南側には階段状の段のような構造が確認されている。竪穴建物跡を想定したが，柱穴等は検出されなかった。埋土中からは遺物が出土しており，最下層の埋土3からは，床から10cmほど浮いた状態であるが鉄滓が2点，埋土2からは白磁皿1点や土師器1点，埋土3からは砥石が数点出土している。いずれも流れ込みにより流入した遺物と考えられる。また，床面からは炭化物が3点出土している。焼土は検出されていない。

調査区中央～南側検出土坑群（土坑91～118号）

土坑91～118号は調査区中央から南側で検出された土坑群である。土坑91号のように単独で検出されているものもあるが，多くは５基前後の土坑が集中して検出されている状況が見られる。

土坑91号はＦ38区Ⅴａ層上面で検出されている。遺跡の東端で単独で検出されており，あと５ｍ程東に行くと，串良川へと下る急斜面の落ち際となる。長軸約80㎝，短軸約60㎝の楕円形の小型の土坑であり，検出面からの深さは約45㎝である。埋土中からは土師器片が２点出土している。

土坑92～94号は遺跡の南東部で検出された土坑群である。集中するわけではなく，５～７ｍ程度の間隔を空けて検出されており，周囲には竪穴建物跡１号や土坑墓１号が検出されている。

土坑92号はＪ36区Ⅴａ層上面で検出された。長軸約140㎝，短軸約75㎝の楕円形を呈す。土坑の断面を見ると，西側が深く掘り込まれており，検出面からの深さは約45㎝である。東側は浅く深さ約10㎝である。埋土の堆積状況からすると，東側の深い掘り込み部分は，自然堆積もしくは人為的に埋めた後で掘り返され，再度埋められたと考えられる。埋土５の堆積状況から見ると，土坑92号の形状自体は，再度の掘り込みにより改変されたわけではなく，当初からこの形状であった可能性が高い。埋土中からは龍泉窯系の青磁片が出土している。

土坑93号はＪ36区Ⅳａ層上面で検出された。長軸約75㎝，短軸約50㎝の楕円形を呈す。検出面からの深さは約15㎝を測るが，土坑の床面中央に直径約20㎝の小土坑が掘られており，土坑の床面からさらに20㎝掘り込まれている。埋土の堆積状況から，この小土坑は土饅頭形に土が盛られており，人為的に埋められたことが分る。また，興味深いことに，土坑93号は土坑墓１号と距離が近く，土坑自体の大きさは土坑墓１号の1／2程度の大きさであるが，土坑床面に小土坑を掘り込むという形状が共通する。遺物は出土していない。

土坑94号はＫ36区Ⅴａ層上面で検出された。長軸約75㎝，短軸約45㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約40㎝である。遺物の出土は見られなかった。

土坑95・96号は隣接して検出された土坑である。２基の土坑が検出された区域は，地層の堆積の変化が激しい場所であり，一部に下位のⅥ層が露出している。

土坑95号はＧ34区Ⅴａ層上面で検出された。長軸約80㎝，短軸約70㎝の不定形状を呈し，検出面からの深さは約15㎝である。遺物の出土はない。

土坑96号はＧ34区Ⅴａ層上面で検出されているが，土坑の東側はⅥ層が露出している。長軸約110㎝，短軸約65㎝の，やや歪ではあるが隅丸長方形に近い形状を呈している。検出面からの深さは約75㎝と深い。埋土の堆積状況は，埋土６～８が不自然な堆積を呈しており，さらに埋土４・５が東側から，埋土１～３が西側からの土の流入により埋まっている。遺構の立地する場所は，西から東へ緩やかに傾斜する緩斜面であり，標高の低い東側からの土の流入にはやや疑問が残る。埋土６～８の堆積状況から考えて，人為的に埋められた可能性が高いと考えられる。土坑96号は，その形状から落とし穴の可能性も視野に入れて調査をおこなったが，床面に逆茂木等の痕跡は確認できなかった。また，下位に堆積している黒褐色土は主にⅦ層起因の埋土であるが，上位に堆積している黒褐色土及び黒色土は中世以降の埋土であるため，ここでは中世の土坑という判断をしている。

土坑97～104号は１34・35区周辺に集中して検出された土坑群である。検出面であるⅤａ層からの測定値となるが，深く掘り込まれた土坑が多く検出されている。

土坑97・98号はＨ34区Ⅴａ層上面より重なり合って検出された土坑である。土坑97号は長軸約120㎝，短軸約100㎝を測り，東側はやや丸みを帯びるが，隅丸方形状を呈している。検出面からの深さは約50㎝である。土坑98号は長軸約135㎝，短軸約80㎝と東西に長い楕円形状を呈しており，検出面からの深さは約60㎝である。埋土４の堆積状況より，土坑97号がより古い土坑と考えられる。埋土中からは土坑97号で糸切底の土師器片，土坑98号で白磁の口縁部片や土師器片が出土しており，いずれも12世紀の遺物と考えられることから，２基の土坑はほぼ同時期の遺構と考えられる。

土坑99号はＨ34区Ⅴａ層上面で検出された。土坑97号・98号とは隣接している。長軸約120㎝，短軸約80㎝を測り，西側はやや丸みを帯びるが，隅丸長方形状を呈している。検出面からの深さは約25㎝である。埋土の堆積状況はレンズ状堆積を呈しており，埋土中からは時期不明の土器細片が出土しているが，流れ込みと考えられる。

土坑100号はＨ・Ｉ34区Ⅴａ層で検出された。直径約95㎝の円形を呈し，検出面からの深さは約40㎝である。埋土中からは時期不明の土器細片が出土しているが，流れ込みと考えられる。

土坑101・102号はＨ・Ｉ34区Ⅴａ層上面から隣接して検出された土坑である。土坑101号はやや歪ながら直径約145㎝の円形を呈す。検出面からの深さは約60㎝である。遺構の東側は撹乱の影響を受けている。埋土の堆積状況はレンズ状堆積を呈しているが，埋土１の堆積状況は方形状の断面が確認でき，人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは時期不明の土器細片が出土しているが，流れ込みと考えられる。

土坑102号は長軸約150㎝，短軸約115㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは約40㎝である。埋土中からは土師器片が５点出土している。

土坑103号はⅠ35区Ⅴａ層上面で検出された。遺構の東側は上面が大きく撹乱の影響を受けている。推定される大きさは長軸約140cm，短軸約95cmであり，楕円形状を呈すると考えられる。検出面からの深さは約70cmと深い。埋土中からは黒色土器を含む土師器片や，時期不明の土器細片が出土している。また，上位からは大型の礫が複数出土しているが，こちらは流れ込み，もしくは土坑が埋まる過程で廃棄された礫と考えられる。

土坑104号はⅠ35区Ⅴａ層上面で検出された。遺構の東側は上面が大きく撹乱の影響を受けている。推定される大きさは長軸約165cm，短軸約100cmである。遺構の西側上部は大きく抉れており，この部分を崩落したと考えると，形状は長軸約120cmの隅丸長方形状となる。検出面からの深さは約70cmである。埋土中からは時期不明の土器細片が出土しているが，流れ込みと考えられる。土坑103号と104号は３ｍ程の距離に隣接して作られており，形状・深さが類似することからも，同じような機能を持った土坑であったと考えられる。

土坑105・106号は遺跡の南端で検出された土坑である。ともにＬ33区Ⅴａ層上面で検出されている。形状は土坑106号がやや歪ではあるが，ともに楕円形状を呈し，長軸約95cm，短軸約50cmと大きさも類似する。遺構の深さは異なり，検出面からの深さは，土坑105号で約10cm，土坑106号で約25cmを測る。ともに埋土中からは遺物の出土は見られなかった。

土坑107～109号は遺跡の中央部で検出された土坑群である。集中せず，遺構間は５～10ｍ程離れている。

土坑107号はＦ32・33区Ⅴａ層上面で検出された。土坑107号の周辺は樹木の痕跡が多く残る場所であり，土坑107号も北東角部と，西側は樹痕の影響を受けていると考えられ，推定ではあるが本来は長軸約300cm，短軸約200cmの隅丸長方形状を呈していたと考えられる。検出面からの深さは約40cmである埋土中からは，縄文時代前期の曽畑式土器１点，縄文時代晩期の黒川式土器12点，古墳時代の成川式土器１点，土師器片２点が出土しており，いずれも流れ込みと考えられる。土坑107号はその形状から，竪穴建物跡である可能性が考えられたため，床面及び遺構周辺の精査をおこなったが，関連すると考えられる柱穴は検出されなかった。また，焼土・炭化物等も検出されていない。

土坑108号はＧ33区Ⅴａ層上面で検出された。遺構の北側は黒褐色土の埋土を持つ柱穴に切られている。直径約55cmの円形を呈し，検出面からの深さは約10cmである。土坑上面には礫が３つ出土しており，本来は土坑内に埋まっていた可能性が高い。埋土からは時期不明の土器細片が出土しているが，流れ込みと考えられる。

土坑109号はＧＨ32区Ⅴａ層上面で検出された。直径約90cmの円形を呈し，検出面からの深さは約45cmである。遺物の出土は見られなかった。

土坑110～116号は調査区の中央より南寄りの位置に集中して検出された土坑群であり，やや傾斜の緩くなった場所に，南北方向に並んで検出されている。

土坑110号はⅠ32区Ⅴａ層上面で検出された。長軸約110cm，短軸約55cmのきれいな隅丸長方形状を呈し，検出面からの深さは約35cmである。埋土中からは遺物の出土は見られなかった。

土坑111号はⅠ32区Ⅴａ層上面で検出された。遺構の北西部分は，現代の耕作による撹乱を受けている。形状は長軸約220cm，短軸約90cmの隅丸長方形状を呈すると考えられ，検出面からの深さは約10cmと浅い。柱穴・焼土・炭化物はない。

土坑112号はⅠ32区Ⅴａ層で検出された。撹乱により遺構の南側は削平を受けている。埋土中からは土師器の皿が１点，土師器片が１点の計２点が出土している。

土坑112号－１は土師器皿で1/6が残存する。復元口径10.7cm，復元底径9.0cm，器高0.9cmを測る。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後ナデ調整をおこなう。内底面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はおおむね精良で，赤・白色粒子，石英等の微粒が含まれている。

土坑113号はＪ32区Ⅴａ層で検出された。遺構の東側を現代の耕作によると考えられる撹乱により大きく削平されている。形状は残存部分からの推定で，縦横300cmの隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約10cmである。

土坑114～116号はＪ32区Ⅴａ層で検出された円形の土坑である。大きさは３基ともに直径約90～95cmとほぼ同じ大きさである。検出面からの深さは約15cm～30cmと違いが見られる。３基とも埋土中からの遺物の出土は見られなかった。

土坑117・118号は遺跡の中央より南西寄りの位置で検出された土坑である。

土坑117号はⅠ31区Ⅴｂ層で検出された。この土坑117号が検出された地点は，現代の造成によりⅤａ層より上位は削平を受けている場所である。遺構は南東側に樹痕による撹乱を受けているが，長軸約115cm，短軸約65cmの楕円形状を呈する。土坑の西側は一段深く掘り込まれており，掘り込みの上位からは礫が検出されている。礫は掘り込み部分を埋めた後に配置された可能性も考えられるが，それにしては雑然とした配置状況である。須恵器片や土師器片が出土しているが，撹乱の影響による流れ込みと考えられ，土坑117号と関連すると考えられる遺物の出土は見られなかった。

土坑118号はⅠ29・30区Ⅴａ層上面で検出された。長軸約490cm，短軸約430cmの楕円形状を呈する。２条の溝状遺構に遺構の東西の一部を削平されている。また，北

西角部では古墳時代の土坑の一部を切っている。検出面からの深さは約70㎝である。床面は平坦ではなく，柱穴は検出されていない。また，焼土や炭化物の出土も見られなかった。埋土中からは，縄文時代晩期の黒川式土器１点，古墳時代の成川式土器の小片が数点，青磁片２点，白磁片２点，土師器片２点のほか，土師器と考えられる土器小片が200点以上出土している。

土坑118号－１は白磁の小碗で口縁部から腰部の1/6が残存する。復元口径8.6㎝を測る。器形は体部下半からやや丸みをもって立ち上がり，胴部中位で緩やかに屈曲し，口縁部はやや外反して，口縁端部を丸くおさめる。施釉範囲は外面の腰部を除いて施釉されており，白化粧土を内面から外面腰部まで施し，釉は内面から外面体部下半までかけられ，釉のかからない白化粧土部分には細かな貫入が認められる。

調査区西側谷部検出土坑群（土坑119～123号）

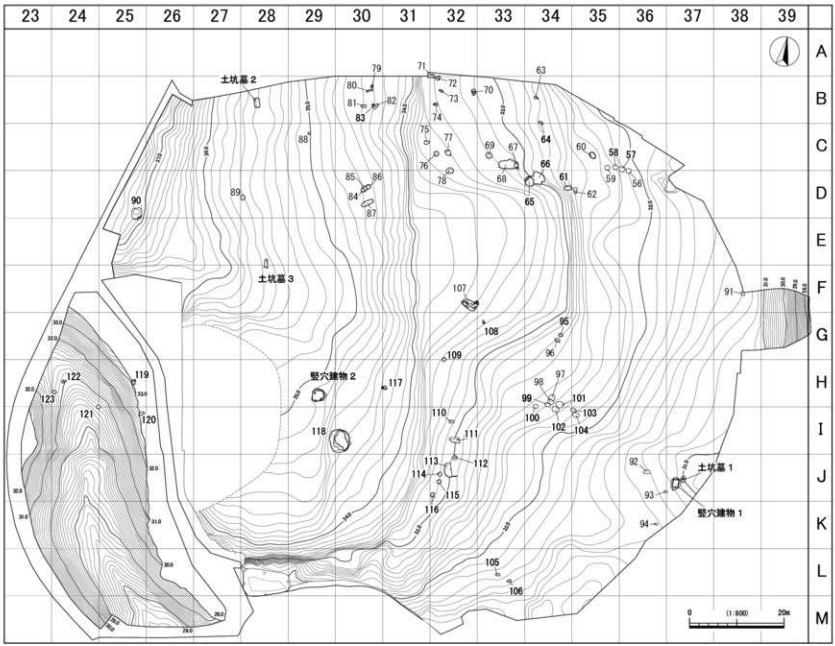
土坑119～123号は遺跡の西側にある谷部で検出された土坑である。土坑119・120号は谷の上の部分で検出され，土坑121～123は谷底の位置で検出されている。すべての土坑で遺物の出土は見られなかった。

土坑119号はH25区Ⅴａ層上面で検出された。長軸115㎝，短軸80㎝の楕円形に近い形状を呈する。検出面からの深さは約20㎝であるが，北側が一段高くなる形状をしている。

土坑120号はⅠ24区Ⅴａ層上面で検出された。南側中央部分がやや抉れるが，長軸約125㎝，短軸約55㎝の楕円形状を呈し，検出面からの深さは約15㎝である。礫が３点出土しているが，自然礫であり，また流れ込みと考えられる。

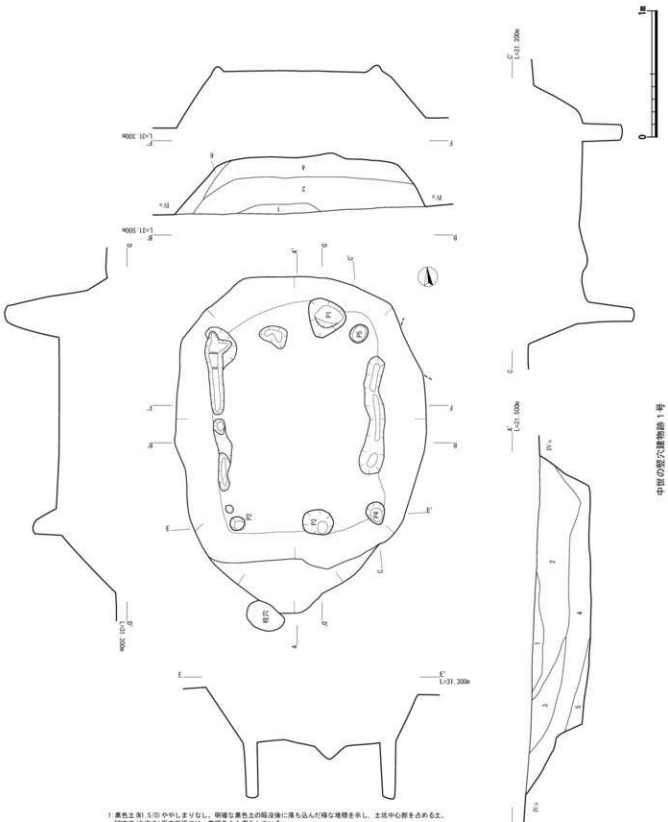
土坑121号はⅠ23区Ⅳａ層上面で検出された。形状は縦横約75㎝の隅丸方形状を呈し，検出面からの深さは約５㎝と浅い。

土坑123号はH24区Ⅳａ層上面で検出された。長軸約100㎝，短軸約60㎝の楕円形状を呈し，検出面からの深さは約10㎝である。

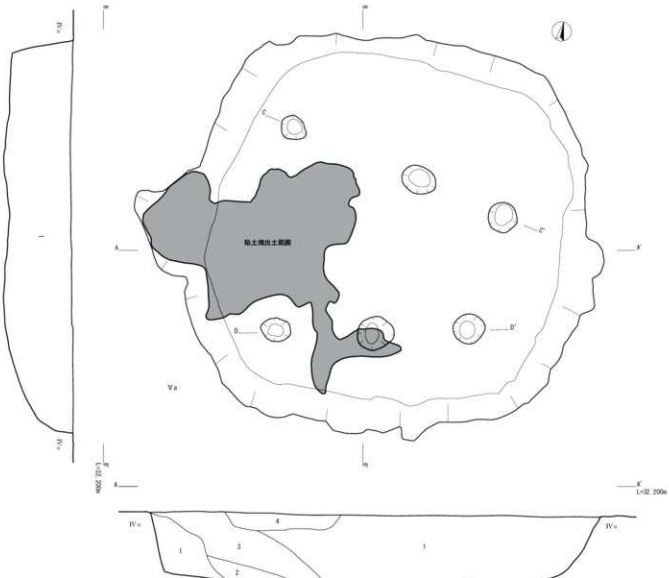


第321図　竪穴建物跡・土坑墓・土坑配置図

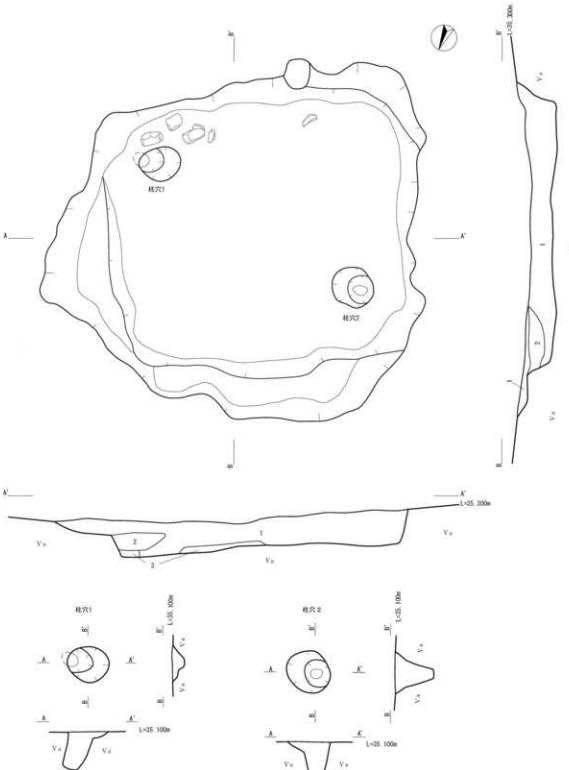
Va層コンタ図



第322図　中世の竪穴建物跡 1



第323図　中世の竪穴建物跡２

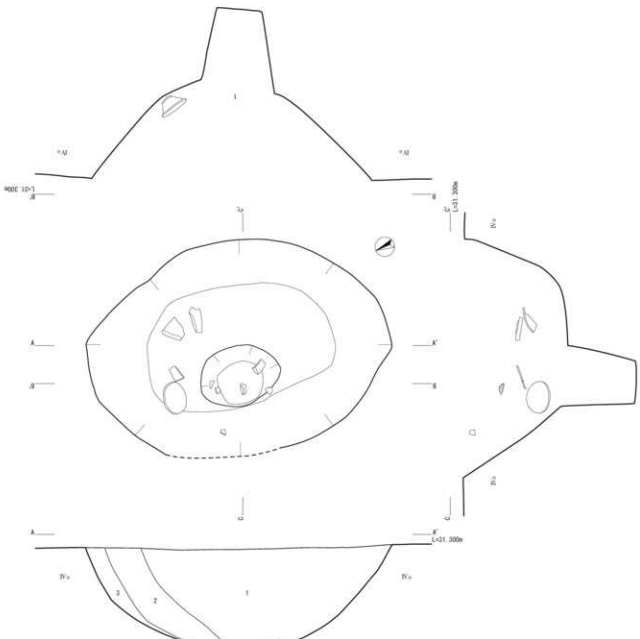


1：黒褐色土（7.5YR3/2）の中に赤褐パミス（5～10mm）やアカホヤ火山灰ブロックを含む。
ブロック等のまざり具合などから、一度に埋められた可能性がある。
2：アカホヤ火山灰（Vs層相当）。壁面からの流れ込みと考えられる。
3：暗色土（7.5YR4/3）。しまりなし。1と2がまざったような土。
＊柱穴1、柱穴2とも1と同様（単層）の土がはいっている。

竪穴建物跡３号

0　1m

第324図　中世の竪穴建物跡３

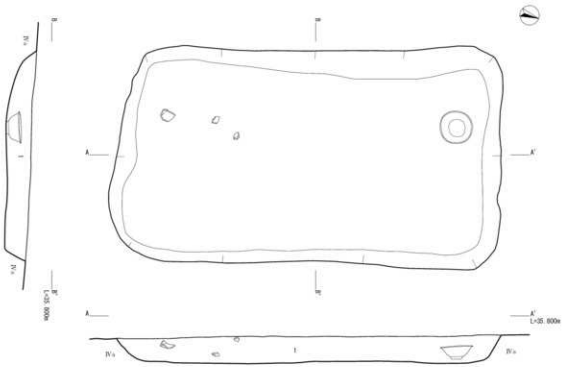


1 黒褐色土(7.5YR3/2)しまりなし。最大3×3cm程度の明黄褐色土(10YR6/6に近い)が混入している。
2 黒色土(7.5YR2/1)しまりなし。
3 暗褐色土(10YR3/3)しまりなし。2と接する部分では黒褐色に近い。

土坑墓1号

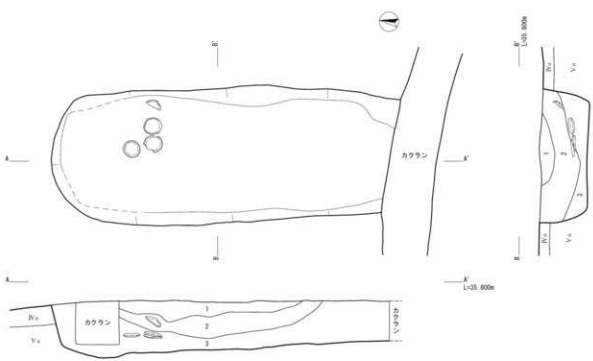
0 1m

第325図　中世の土坑墓1



1 黒褐色土（2.5YR2/1）を多量に含む。暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）を含む。アカホヤ火山灰Ⅴa層を含む。しまりなし。粗らかい。

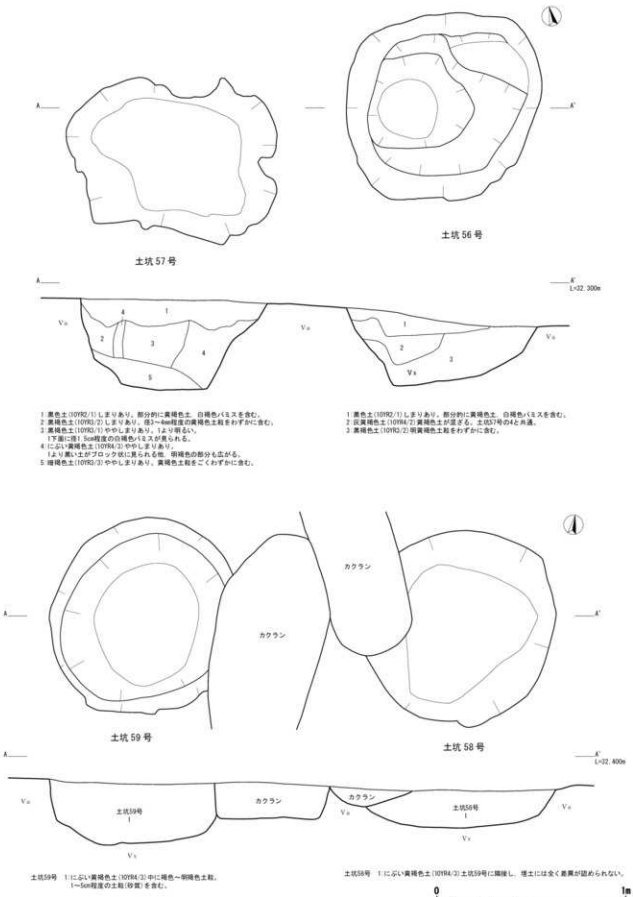
土坑墓２号



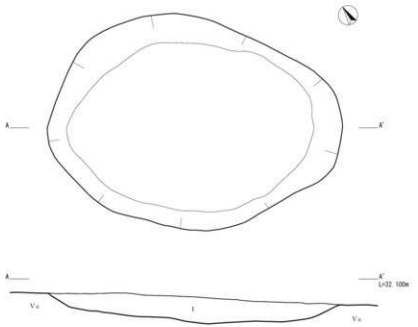
1 褐灰色土（10YR4/1）粘性あり。しまりあり。
2 暗褐色土（10YR2/3）粘性あり。しまりあり。径5cm程度の黄褐色土ブロックを少量含む。径5cm程度の黄褐色粒を含む。
3 黒褐色土（10YR2/3）粘性あり。しまりあり。径5cm程度の黄褐色土ブロックを少量含む。

土坑墓３号

第326図　中世の土坑墓２

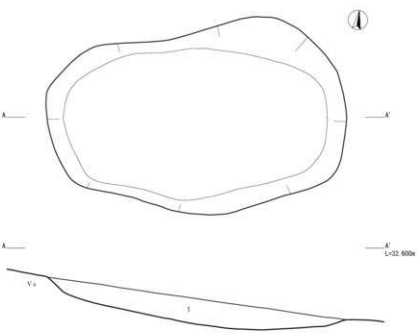


第327図　中世の土坑１



1：黒褐色土(10YR2/1)。黄橙褐色(10YR7/8)のアカホヤ火山灰ブロックを少量含む。

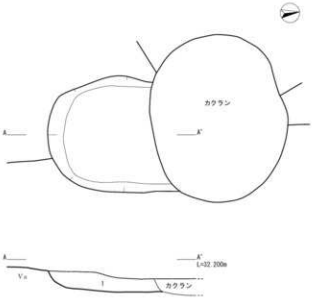
土坑60号



1：暗褐色土(10YR3/3)粘性なし、ややしまりあり。

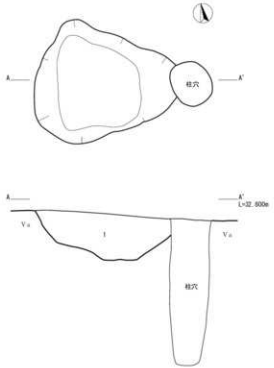
土坑61号

第328図　中世の土坑２



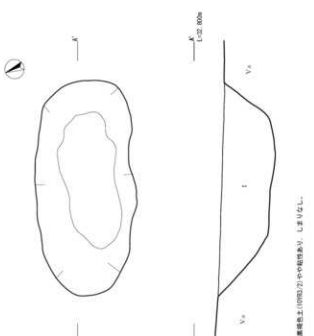
1：黒褐色土（10YR2/2）5mm程の褐色粒とアカホヤ火山灰ブロック土を含む。

土坑 62 号



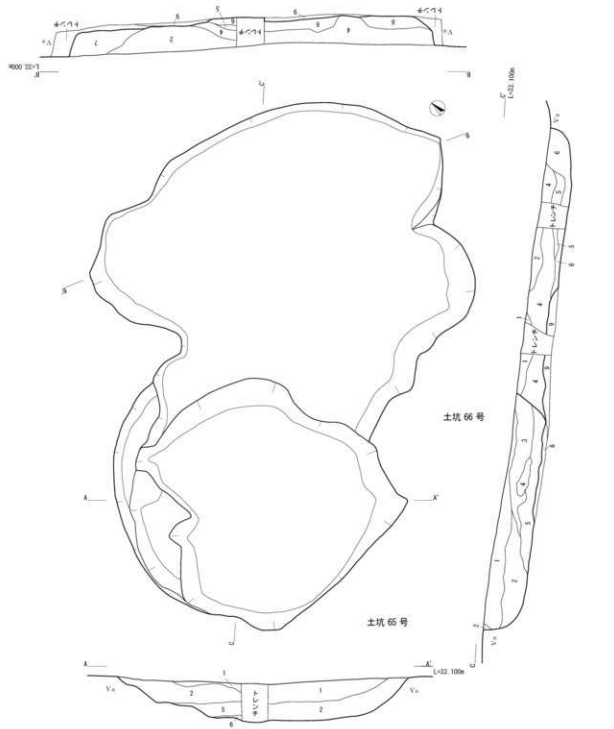
1：黒褐色土（10YR2/2）やや粘性あり、しまりなし。褐色土（10YR4/6）ブロックを少量含む。

土坑 63 号



土坑 64 号

第329図　中世の土坑３

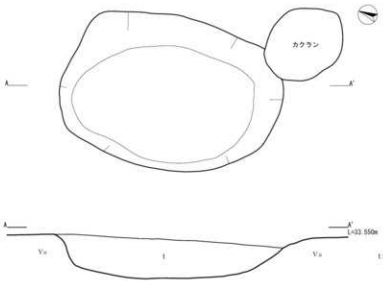


土坑65号　1.黒褐色土(7.5YR2/2)やや粘性あり、しまりなし。径5mm程の炭化物片を少量含む。
2.にぶい黄褐色土(10YR4/3)やや粘性あり、しまりなし。径2cm程の赤褐パミス粒を2つ含む。
3.灰黄褐色土(10YR4/2)やや粘性あり、しまりなし。
4.褐色土(7.5YR4/3)やや粘性あり、しまりなし。明褐色土(7.5YR5/6)のアカホヤ火山灰ブロックを含む。
5.黒褐色土(10YR2/1)やや粘性あり、しまりなし。
6.明黄褐色土(10YR6/6)やや粘性強い、ややしまる。切居の土層。

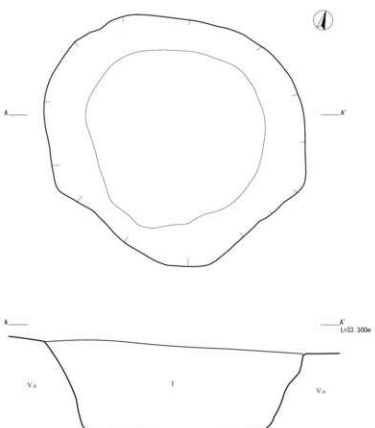
土坑66号　1.黒褐色土(10YR2/3)やや粘性あり、しまりなし。
2.黒褐色土(10YR2/1)やや粘性あり、しまりなし。径3～5mm程の炭化物小片を少量含む。
3.黄褐色土(10YR5/8)やや粘性あり、しまりなし。アカホヤ火山灰の混れ込み。
4.黒色土(10YR2/1)やや粘性あり、しまりなし。褐色土(10YR4/4)を少量含む。
5.暗褐色土(10YR3/3)やや粘性あり、しまりなし。
6.黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり、しまりなし。
7.黒褐色土(10YR2/2)やや粘性あり、しまりなし。明黄褐色土(10YR6/8)のアカホヤ火山灰ブロックを少量含む。
8.暗褐色土(10YR3/3)やや粘性あり、しまりなし。
9.にぶい黄褐色土(10YR4/3)やや粘性強い、ややしまる。切居包含層。

0　1m

第330図　中世の土坑４



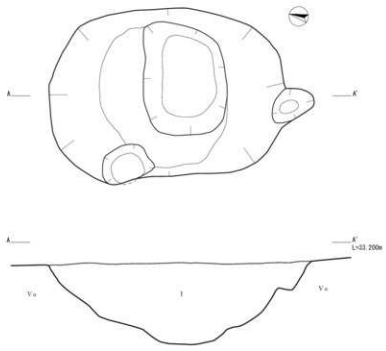
土坑67号



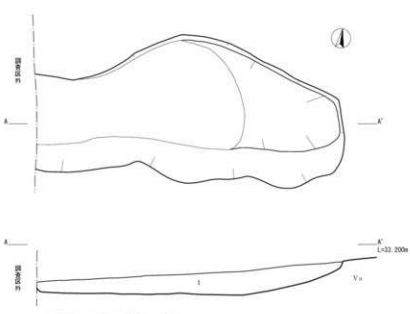
土坑69号

第331図　中世の土坑５

第332図　中世の土坑６

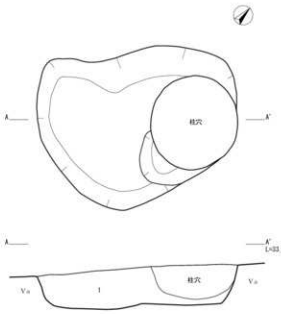


土坑 70 号



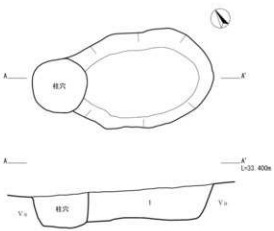
土坑 71 号

第333図　中世の土坑 7



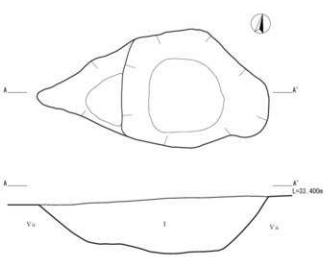
I 黒褐色土(10YR3/2) やや粘性あり、しまりなし。

土坑 72 号



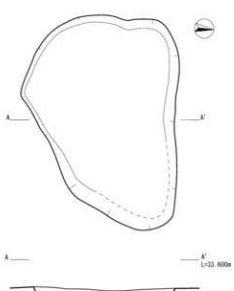
I 黒色土(7.5YR2/1) やや粘性あり、しまりなし。

土坑 73 号



I 黒色土(7.5YR2/1) やや粘性あり、しまりなし。

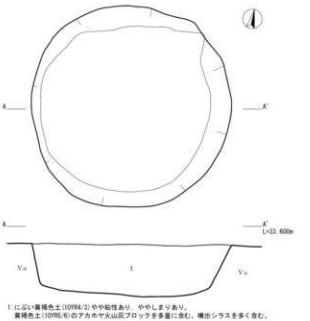
土坑 74 号



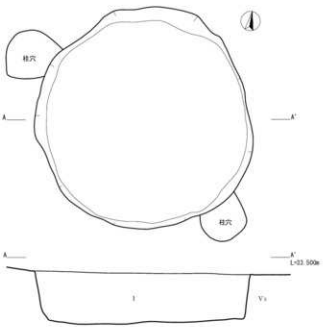
I 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり、しまりなし。
暗灰黄色土(2.5Y4/2) を含む。

土坑 75 号

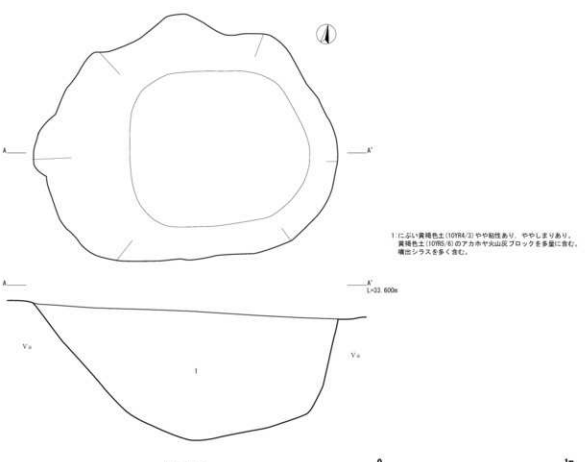
第334図　中世の土坑 8



土坑 76 号

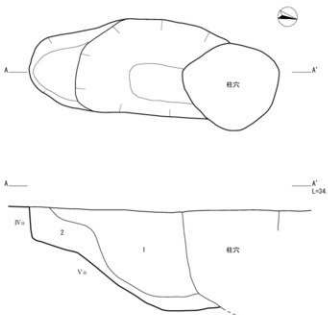


土坑 77 号



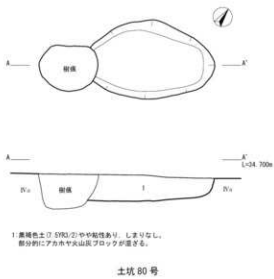
土坑 78 号

第335図　中世の土坑 9



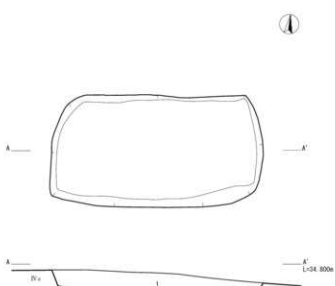
1：黒褐色土（7.5YR2/2）やや粘性あり，しまりなし。アカホヤ火山灰ブロックを多く含む。
2：黒褐色土（7.5YR2/2）やや粘性あり，しまりなし。1に比べアカホヤ火山灰の量が少ない。

土坑 79 号



1：黒褐色土（7.5YR3/2）やや粘性あり，しまりなし。
部分的にアカホヤ火山灰ブロックが混ざる。

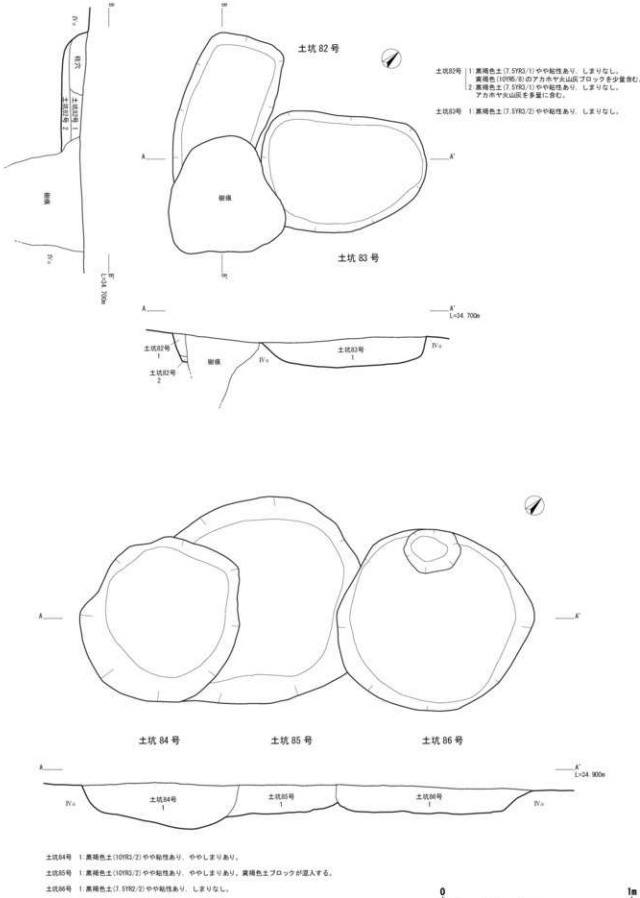
土坑 80 号



1：黒褐色土（2.5Y3/2）やや粘性あり，しまりなし。
明黄色（10YR6/6）のアカホヤ火山灰ブロックを少量含む。

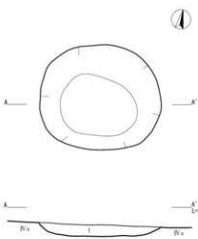
土坑 81 号

第336図　中世の土坑10



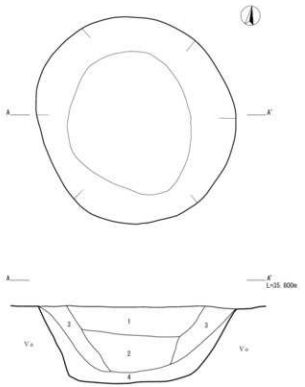
第337図　中世の土坑11

第338図　中世の土坑12



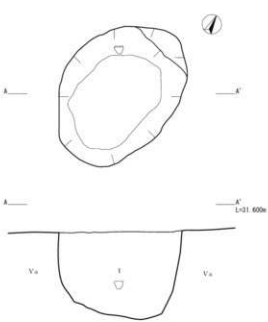
1 黒褐色土(2.5Y3/2)粘性ややあり、しまりなし。
アカホヤ火山灰(にぶい黄褐色(10YR5/4)ブロックが混じる。

土坑 88 号



1 黒褐色土(2.5Y3/1)やや粘性あり、しまりなし。明黄褐色(2.5Y6/8)のアカホヤ火山灰粒を多く含む。
2 黒褐色土(2.5Y3/1)やや粘性あり、しまりなし。明黄褐色(2.5Y6/8)のアカホヤ火山灰粒を少量含む。
3 黒褐色土(2.5Y3/1)やや粘性あり、しまりなし。径2～4cmの明黄褐色(2.5Y6/8)の
アカホヤ火山灰ブロックを少量と地山時下粒石をわずかに含む。
4 黒褐色(2.5Y3/1)やや粘性あり、しまりなし。1～3より明るい。
径5cm程の明黄褐色(10YR6/8)のアカホヤ火山灰ブロックと明黄褐色(2.5Y6/8)のアカホヤ火山灰粒を非常に多く含む。

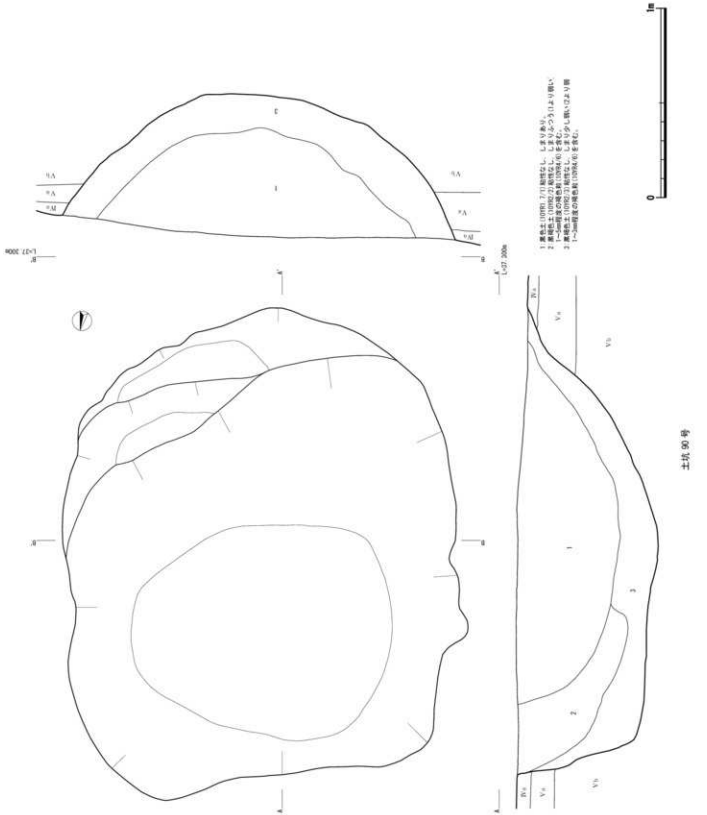
土坑 89 号



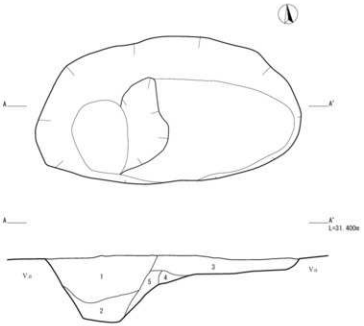
1 黒褐色土(2.5Y3/1)やや粘性あり、ややしまりなし。

土坑 91 号

第339図　中世の土坑13

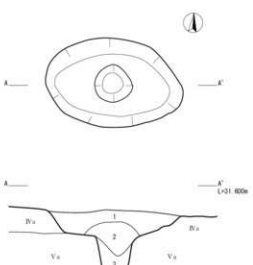


第340図　中世の土坑14



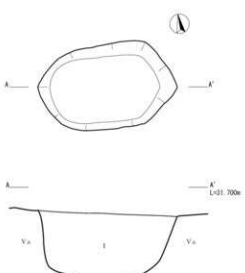
1:黒色土(10YR1.7/1)粘性弱い、ややしまり強い、径0.5～1mm程度のパミスを少量含む。
2:暗褐色土(10YR3/4)を基調とし、粘性少し強い、しまり少し強い、アカホヤ火山灰(Va層)を多く含む。
3:黒褐色土(10YR2/2)を基調とし、粘性少し強い、しまり少し強い、アカホヤ火山灰(Va層)を多く含む。
4:暗褐色土(10YR3/3)粘性弱い、ややしまり強い。
5:暗色土(10YR4/4)を基調とし、粘性少し強い、しまり少し強い、
アカホヤ火山灰(Va層)および1層の黒色土を多く含む。

土坑 92 号



1:黒褐色土(10YR2/2)粘性弱い、しまり弱い、
にぶい黄褐色(10YR4/3)のアカホヤ火山灰を若干含む。
2:暗褐色土(10YR3/3)粘性弱い、しまり弱い。
3:黒褐色土(10YR2/1)粘性弱い、しまり弱い、
にぶい黄褐色(10YR5/4)のアカホヤ火山灰を多く含む。

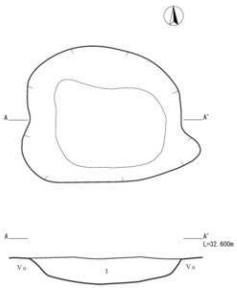
土坑 93 号



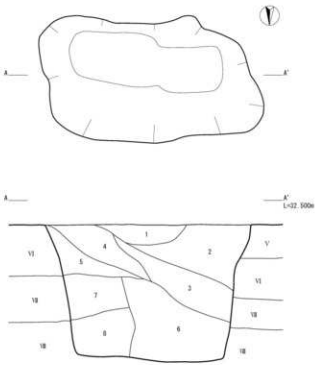
1:黒褐色土(10YR2/2)やや粘性あり、しまり弱い、
にぶい黄褐色土(10YR5/4)ブロック、径0.5～1cmのパミスを少量含む。

土坑 94 号

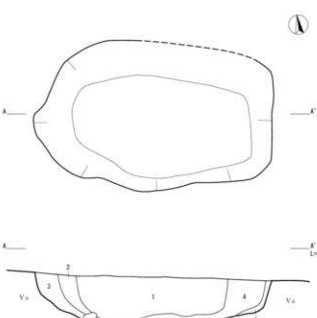
第341図　中世の土坑15



土坑 95 号

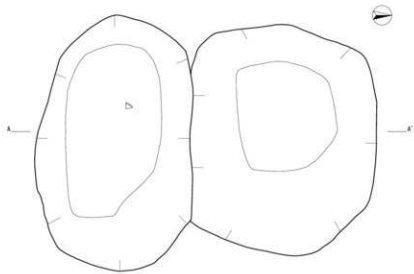


土坑 96 号



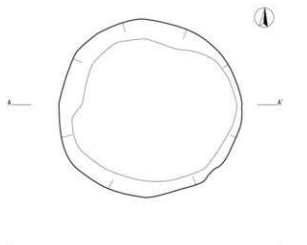
土坑 99 号

第342図　中世の土坑16



土坑 98 号　　土坑 97 号

1.黒褐色土(10YR2/1~2/1)径5cm程度の明黄褐色土粒を点々と含む。
2.炭黄褐色土(10YR4/2)。
3.にぶい黄褐色土(10YR5/2)径4cm程度の明黄褐色土ブロックが全体的に混入している。
4.暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土粒が全体に混入している。

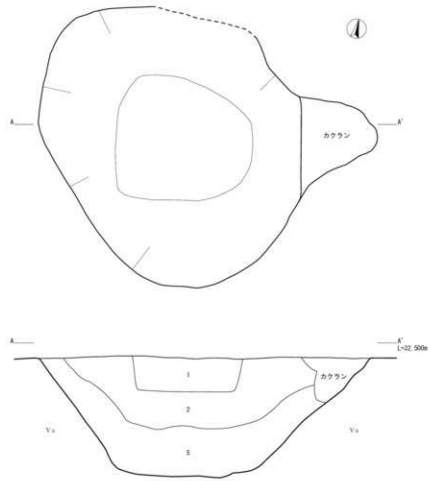


1.黒褐色土(5YR2/1)ややしまりなし。1×3cm程度のブロック状の明黄褐色土(5YR6/8)を含む。
2.黒赤褐色土(5YR2/2)ややしまりなし。最下部でブロック状の明黄褐色土の混入が見られる他全体に同色土が混入しているため、1に比して明るい。

土坑 100 号

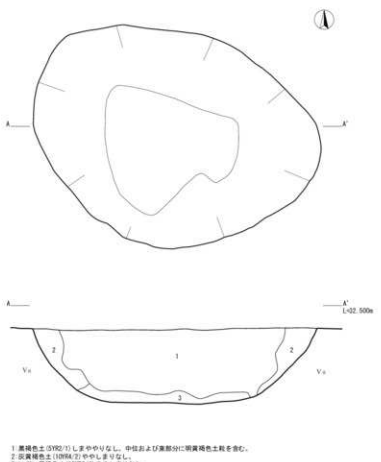
0　　1m

第344図　中世の土坑18



1：黒褐色土（10YR3/2）。
2：黒褐色土（5YR2/1）隣接する土坑102号のと同じと思われるが、暗色系土の混入が少ない。
3：暗灰色土（10YR4/1）ややしまりなし。黄褐色土（10YR5/6）のブロックを含む。

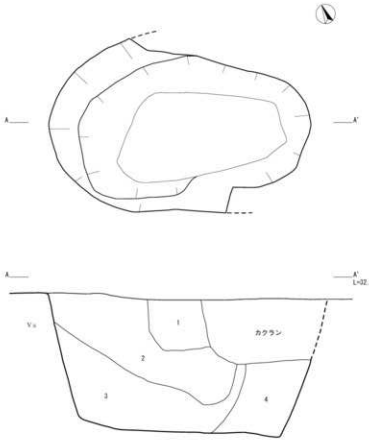
土坑 101 号



1：黒褐色土（5YR2/1）しまややりなし。中位および東部分に明黄褐色土粒を含む。
2：灰黄褐色土（10YR4/2）ややしまりなし。
3：にぶい黄橙色土（10YR6/4）ややしまりなし。
　1の黒褐色土ブロックに加えて、黒褐色（10YR2/1）に近いブロック土の混合。

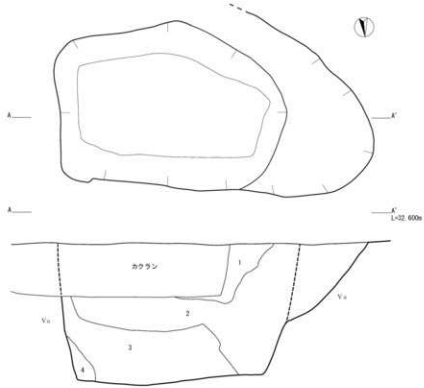
土坑 102 号

0　1m



1:黒色土(7.5YR2/1)しまりなし。上面5cm程は黒色が強い。特に混入土等はない。
2:黒褐色土(7.5YR3/2)しまりなし。混入土はみられない。
3:黒褐色土(7.5YR3/2)2と大差ないが、黒色の度合いに差あり。2より黒いか。
4:黒褐色土(10YR3/2)しまりなし。全体に薄く黒褐色土が入るため、明るく感じられる。
2、3の土色にも近い。

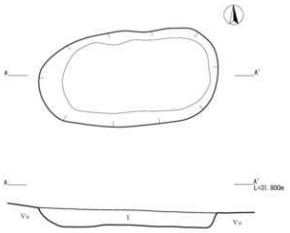
土坑 103 号



1:黒色土(10YR2/1)ややしまりなし。黄褐色土粒をわずかに含む。
2:暗褐色土(10YR3/4)しまりなし。西側傾斜部では褐色がより強く、平坦地積部分では微分黒色が強い。
3:黒色土(10YR1/7)しまりなし。1に似ているが、より黒色に近い。部分的に暗褐色のシミが広がるところも見られる。
4:黒褐色土(10YR3/2)ややしまりなし。色調として3/2に分けられるが、情実的には温茶褐色でも良い。

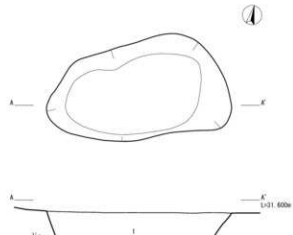
土坑 104 号

第345図　中世の土坑19



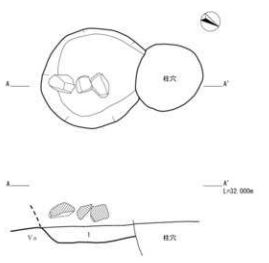
1：黒褐色土（10YR2/2）やや粘性あり、しまりなし。

土坑 105 号



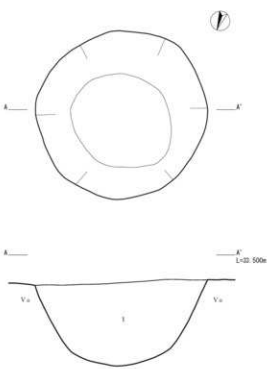
1：黒褐色土（10YR3/2）やや粘性あり、しまり弱い。
2：暗褐色土（10YR3/3）粘性なし、しまり弱い。アカホヤ火山灰粒をやや含む。

土坑 106 号



1：黒色土（10YR1.7/1）ややしまる。1～5cm程のアカホヤ火山灰ブロックを含む。炭粒パミス、黒色粒を含む。

土坑 108 号

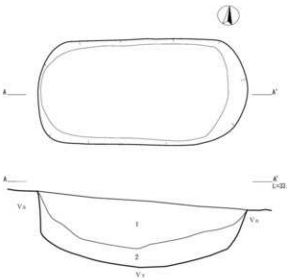


1：黒褐色土（10YR2/2）粘性なし、しまりあり、径1～5mm程度の白色の小石と径1～10mm程度の暗色（10YR4/6）のアカホヤ火山灰を少量含む。

土坑 109 号

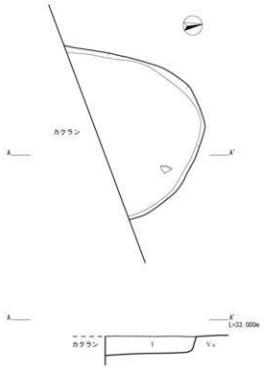
第346図　中世の土坑20

第347図　中世の土坑21



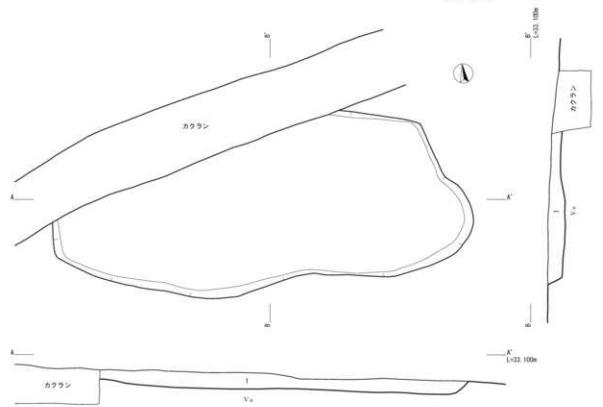
1:黒褐色土(10YR2/2)しまりあり、やや砂質。
1~2cmの暗色砂(10YR4/6)アカホヤ火山灰を含む。
2:黒褐色土(10YR2/2)しまりあり、やや砂質。

土坑 110 号



1:黒褐色土(10YR2/3)粘性なし、しまり弱い、
1cm程のアカホヤ火山灰(10YR4/6)(Vu層)を含む。

土坑 112 号

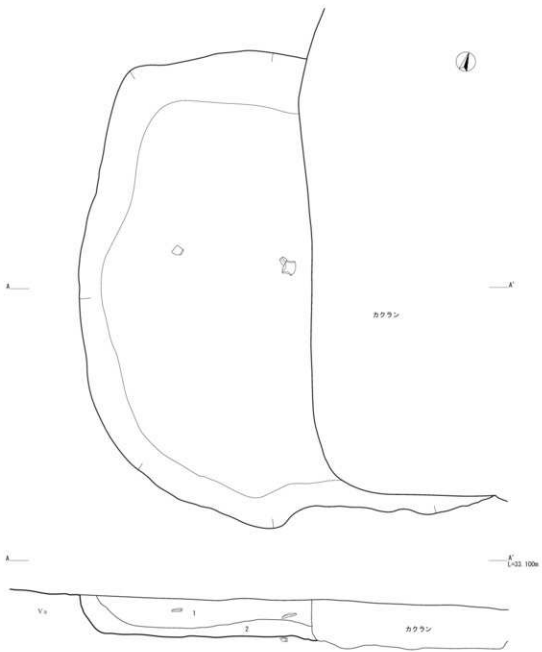


1:黒褐色土(10YR2/2)粘性なし、しまり弱い、径1cm程のアカホヤ火山灰(10YR4/6)(Vu層)を含む。

土坑 111 号

0 1m

第348図　中世の土坑22

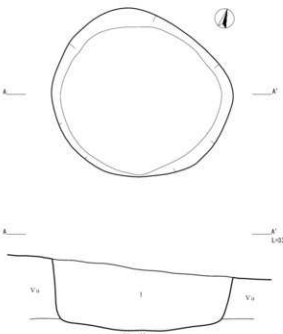


1 黒褐色土(10YR2/2)粘性なし、しまりあり。径1mm～1cm程度の褐色(10YR4/6)のアカホヤ火山灰を含む。SH67。
2 暗褐色土(10YR3/4)粘性なし、しまりあり。径1～2cm程度の褐色(10YR4/6)のアカホヤ火山灰を多く含む。1より明るい。SH67。

土坑113号

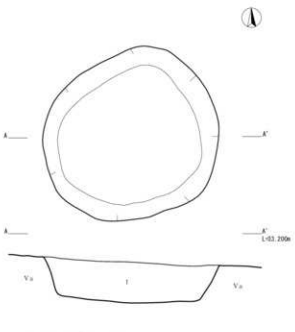
0 1m

第349図　中世の土坑23



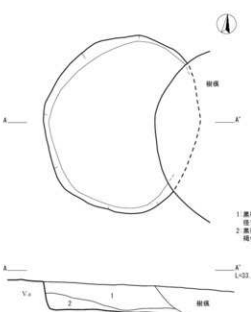
1：黒褐色土（10YR3/2）粘性なし、しまりあり。
径1～5cm程度の褐色砂（10YR4/6）（Ⅴc層）を少量含む。

号土坑 114



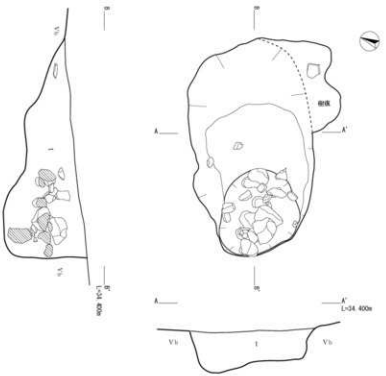
1：黒褐色土（10YR3/2）粘性なし、しまりあり。
径1～3cm程度の褐色砂（10YR4/6）（Ⅴc層）を少量含む。

土坑 115 号



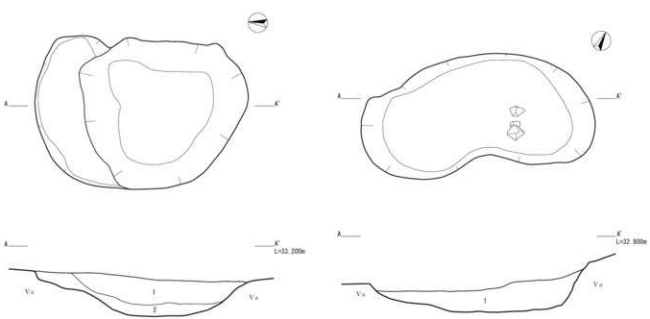
土坑 116 号

第350図　中世の土坑24



1:黒褐色土(10YR2/3)粘性あり、しまりふつう。
1mm～2mm大のアカホヤ火山灰を少量含む。

土坑 117 号



1:黒褐色土(10YR2/1)粘性弱い、しまりなし。アカホヤ火山灰(橙色)ブロックを少量含む。

土坑 120 号

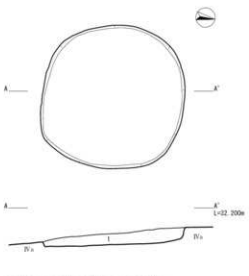
1:黒褐色土(10YR2/1)やや粘性あり、しまり弱い、径1～3cmの小礫を含む。
2:灰黄褐色土(10YR5/2)やや粘性あり、しまり弱い、橙色ブロック土が多く混入する。

土坑 119 号

0 1m

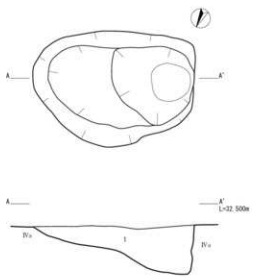
第351図　中世の土坑25

第352図　中世の土坑26



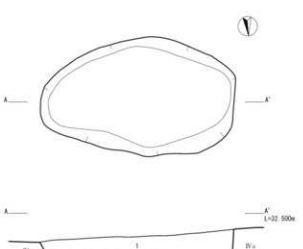
1 黒褐色土(10YR2/1)やや粘性あり、ややしまりあり。

土坑 121 号



1 黒褐色土(7.5YR2/1)やや粘性あり、ややしまりあり。
灰黄褐色土が混じる。

土坑 122 号



1 黒褐色土(10YR2/1)やや粘性あり、ややしまりあり、褐色ブロック土を含む。

土坑 123 号

第353図　中世の土坑27

第53表　中世竪穴建物跡一覧表

図版番号	遺構番号	区	層	検出位置	埋土	長さ(cm)		深さ(cm)	形状	出土遺物・備考
						長軸	短軸			
322	1	J37	Ⅳa	—	黒褐色	267	195	45	隅丸方形	東播系須恵器・土師器
323	2	J35	Va	—	黒褐色	313	264	45	隅丸方形	
324	3	H29	Va	—	黒褐色	280	270	24	正方形	

第54表　中世土坑墓一覧表

図版番号	遺構番号	区	層	検出位置	埋土	長さ(cm)		深さ(cm)	形状	出土遺物・備考
						長軸	短軸			
325	1	J37	Ⅳa	—	黒褐色	163	125	50	楕円形	白磁碗（完形）・東播系須恵器ほか
326	2	I28	Ⅳa	—	黒褐色	205	110	14	隅丸長方形	白磁碗（完形）・土師器
326	3	EF28	Ⅳa	—	黒褐色	(180)	70	30	隅丸長方形	土師器

第55表　中世土坑一覧表 1

図版番号	遺構番号	区	層	検出位置	埋土	長さ(cm)		深さ(cm)	形状	出土遺物・備考
						長軸	短軸			
327	56	CD34・35	Va	北(東)集中区	黒褐色	100		40	円形	
327	57	CD34・35	Va		黒褐色	115	72	48	隅丸方形	
327	58	CD35	Va		にぶい黄褐色	100		20	円形	
327	59	CD35	Va		にぶい黄褐色	105		30	円形	
328	60	C35	Va		黒褐色	155	105	14	楕円形	
328	61	B34	Va		暗褐色	158	100	14	楕円形	
329	62	B34・35	Va		黒褐色	(55)	60	10	楕円形	
329	63	B34	Va		黒褐色	(80)	55	25	不定形	
329	64	BC34	Va		黒褐色	114	50	25	楕円形	
330	65	B34	Va		黒褐色	200		29	円形	陶磁器片
330	66	B34	Va		黒褐色	300	220	20	不定形	
331	67	C33	Va		黒褐色	118	82	20	楕円形	
332	68	C33	Va		黒褐色	410	170-210	20	楕円形	炭化物
331	69	C33	Va		黒褐色	135		48	円形	
333	70	B32	Va		にぶい黄褐色	125	90	44	楕円形	
333	71	B31	Va		黒褐色	(160)	80	11	不定形	
334	72	B32	Va		黒褐色	105	75	20	(楕円形)	
334	73	B32	Va		黒色	85	50	20	楕円形	
334	74	B32	Va		黒色	120	60	30	不定形	
334	75	C31	Va		黒褐色	110	80	7	不定形	
335	76	C32	Va		にぶい黄褐色	105		26	円形	
335	77	C32	Va		にぶい黄褐色	115		25	円形	中世の柱穴を切る
335	78	CD32	Va		にぶい黄褐色	160	120	68	楕円形	
336	79	B30	Va		黒褐色	(105)	50	52	楕円形	
336	80	B30	Va		黒褐色	(70)	40	13	楕円形	
336	81	B30	Va		黒褐色	110	60	10	隅丸長方形	

第56表　中世土坑一覧表２

図版番号	遺構番号	区	層	検出位置	埋土	長さ(cm) 長軸	長さ(cm) 短軸	深さ(cm)	形状	出土遺物・備考
337	82	B30	Va	北(東)集中区	黒褐色	(90)	45	10	隅丸長方形	
337	83	B30	Va		黒褐色	87	60	15	楕円形	
337	84	D30	Va		黒褐色	85		25	円形	炭化物少量
337	85	D39	Va		黒褐色	(120)	110	15	楕円形	炭化物少量
337	86	D30	Va		黒褐色	95		15	円形	炭化物少量
338	87	D39	Va		黒褐色	275	100	15	楕円形	
339	88	C29	Va	北(西)	黒褐色	60		6	円形	
339	89	D27・28	IVa		黒褐色	105		40	円形	
340	90	DE25	Va		黒褐色	250	205	70	(隅丸方形)	
339	91	F38	Va	中央～南側	黒褐色	82	60	46	楕円形	
341	92	J36	Va		暗褐色	140	75	34	楕円形	
341	93	J36	IVa		黒褐色	75	50	15-35	楕円形	
341	94	K36	Va		黒褐色	75	45	40	楕円形	
342	95	G34	Va		黒褐色	80	70	15	不定形	
342	96	G34	Va		黒褐色	110	65	75	(隅丸長方形)	
343	97	H34	Va		黒褐色	120	(100)	52	隅丸方形	
343	98	H34	Va		黒褐色	134	82	62	楕円形	
342	99	H34	Va		黒褐色	120	80	25	(隅丸長方形)	
343	100	H134	Va		黒褐色	95		40	円形	
344	101	H134	Va		黒褐色	145		62	円形	
344	102	I34	Va		黒褐色	153	115	40	楕円形	
345	103	I35	Va		黒褐色	(140)	(95)	70	楕円形	
345	104	I35	Va		黒色	(165-120)	(100)	72	(隅丸長方形)	
346	105	L33	Va		黒褐色	95	50	8	楕円形	
346	106	L33	Va		黒褐色	98	52	25	(楕円形)	
347	107	F32・33	Va		黒褐色	345	200	38	不定形	(推定：隅丸長方形)
346	108	G33	Va		黒色	55		9	円形	
346	109	GH32	Va		黒褐色	90		44	円形	
348	110	I32	Va		黒褐色	110	56	35	隅丸長方形	
348	111	I32	Va		黒褐色	223	(90)	8	(隅丸長方形)	
348	112	J32	Va		黒褐色	(90)	(70)	10	楕円形	
349	113	J32	Va		黒褐色	300	(300)	12	隅丸方形	床面から白磁片出土
350	114	J32	Va		黒褐色	95		32	円形	
350	115	J32	Va		黒褐色	90		20	円形	
350	116	J32	Va		黒褐色	90		14	円形	
351	117	I31	Vb		黒褐色	115	63	42	楕円形	
352	118	I29・30	Va		黒褐色	490	430	70	(隅丸長方形)	
351	119	H25	Va	西側谷部	黒褐色	115	80	20	(楕円形)	
351	120	I24	Va		黒褐色	123	53	15	(楕円形)	
353	121	I23	Va		黒褐色	75	75	5	隅丸方形	
353	122	H25	Va		黒褐色	85	60	24	(楕円形)	
353	123	H24	Va		黒褐色	102	61	11	楕円形	

（３）古道・溝（第354～387図　古道１～15，溝１～16）

中世の古道は15条，溝は16条が検出されている。その多くが南北や東西軸に沿って造られており，それ以外の遺構は地形に沿って造られている。

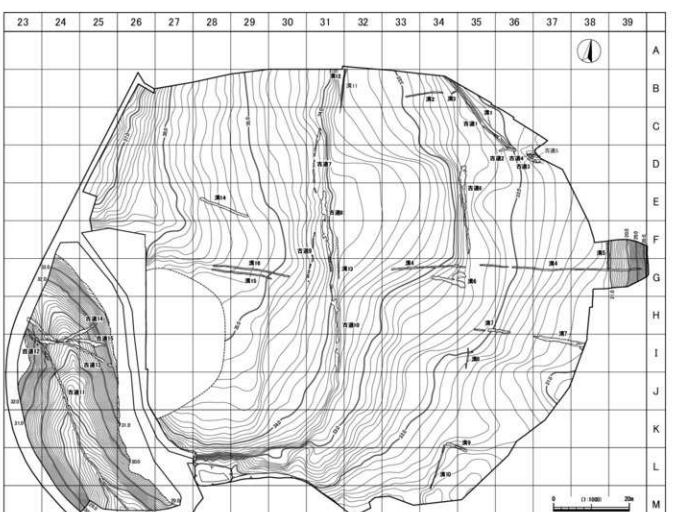
古道１は溝１に一部切られているが，ほぼ同時期の遺構と考えられる。古道２は古道１と合流する。古道３・４・５の東側は急な斜面になっており，古道５はこの斜面に沿って造られた道である。川に下る道と考えられる。

溝４は遺跡の中央から東側へ約65mの長さが検出された溝である。G39区では斜面に沿って掘り込まれている。溝５は溝４から北側に垂直に掘り込まれた溝であり，溝４とほぼ同時期の遺構である。時代は異なるが溝４の南側にはG33～37区にかけて，溝４に沿って50m程の長さで近世の古道跡も確認されている。

古道６の西側は幅約３m，高さ約80cm程の斜面になっており，その斜面の下に造られた古道である。掘り込みとしては確認されていないが，古道６から古道２につながるようなカーブを描いた形で，土色の変化が検出されており，古道２・６はつながる可能性も考えられる。

古道７・８・９，溝11・12・13も地形に沿って造られた遺構であり，周辺から見ると，30～50cm程の高低差を生む斜面の周辺に造られており，古道は斜面の上，溝は斜面の下に造られている。

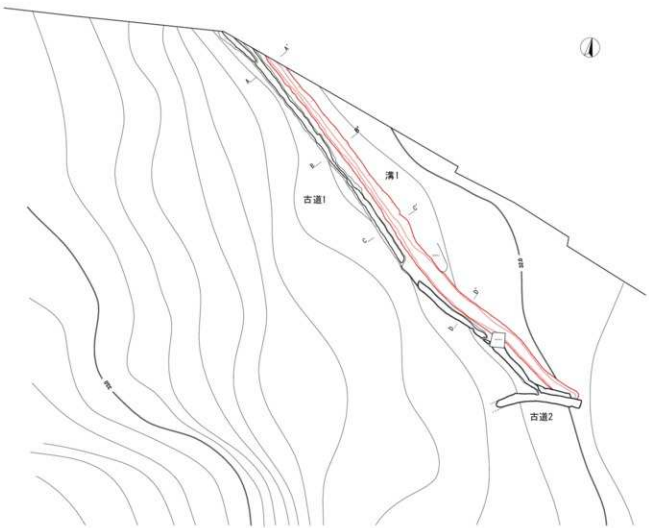
古道11～15は遺跡の西側の谷部に造られた遺構である。古道11・12は谷地形に沿って，古道13・14・15は谷を横断する形で造られている。

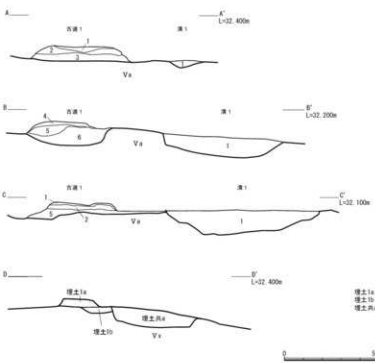


Va層コンタ図

第354図　中世溝・古道全体配置図

第355図　中世溝・古道配置図1



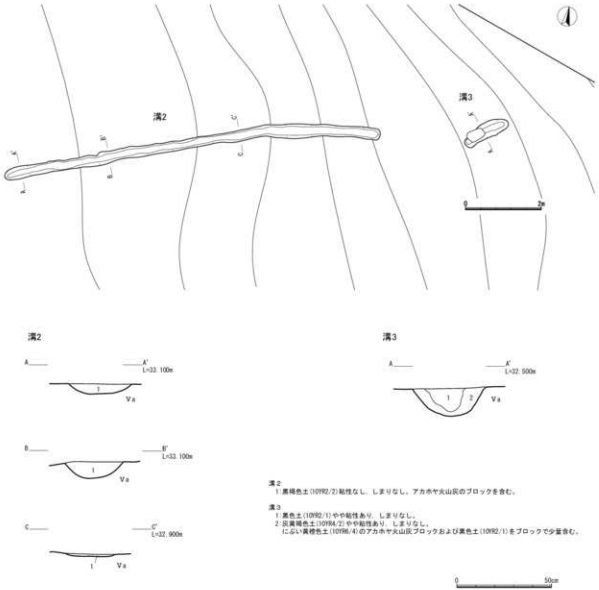


古道1
1 灰黄褐色土（10YR4/2）やや粘性あり、かたくしまる。
2 褐灰色土（10YR5/1）やや粘性あり、かたくしまる。
この際の上・下位に灰褐色土（7.5YR4/2）が2～5cm程の厚さ堆積している。
3 灰黄褐色土（10YR5/2）やや粘性あり、かたくしまる。
4 褐灰色土（7.5YR4/1）やや粘性あり、かたくしまる。
灰褐色土（7.5YR4/2）をブロック状に少量含む。
5 黒褐色土（10YR3/1）やや粘性あり、ややしまりなし。
6 にぶい黄褐色土（10YR4/3）やや粘性あり、しまりなし。7層（Va層）上に部分的に堆積している土もしくは7層（Va層）が部分的に変色している土と考えられる。

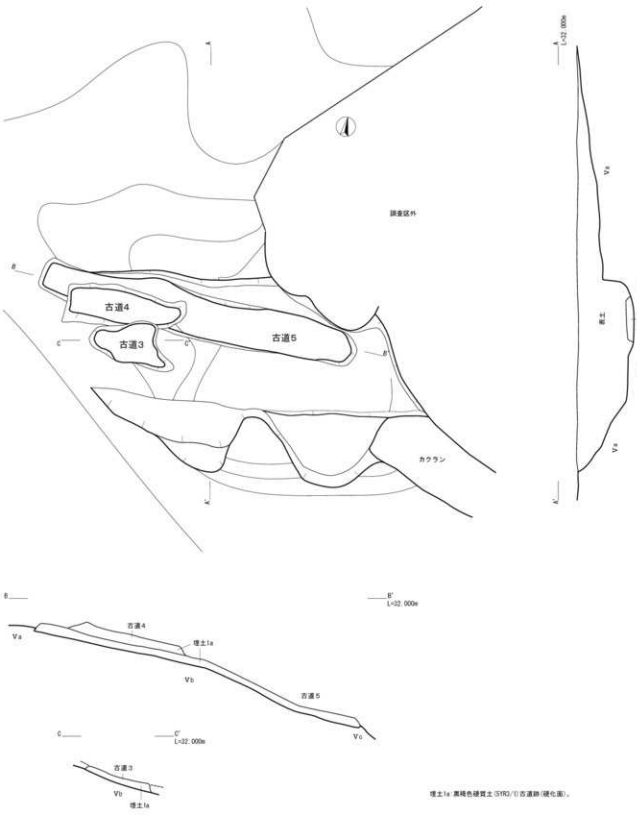
溝1
1 黒褐色土（10YR3/2）、やや粘性あり。しまりなし。

埋土1a：黒褐色硬質土（5YR3/1）古道跡（硬化面）。
埋土1b：埋土1aと同じ。
埋土1c：共通埋土a。中世の包含層の埋土と考えらえる黒色土。
川久保道跡にはわずかに一部分の区でしか残存していないが並層の土である。

第356図　中世溝１及び古道１・２

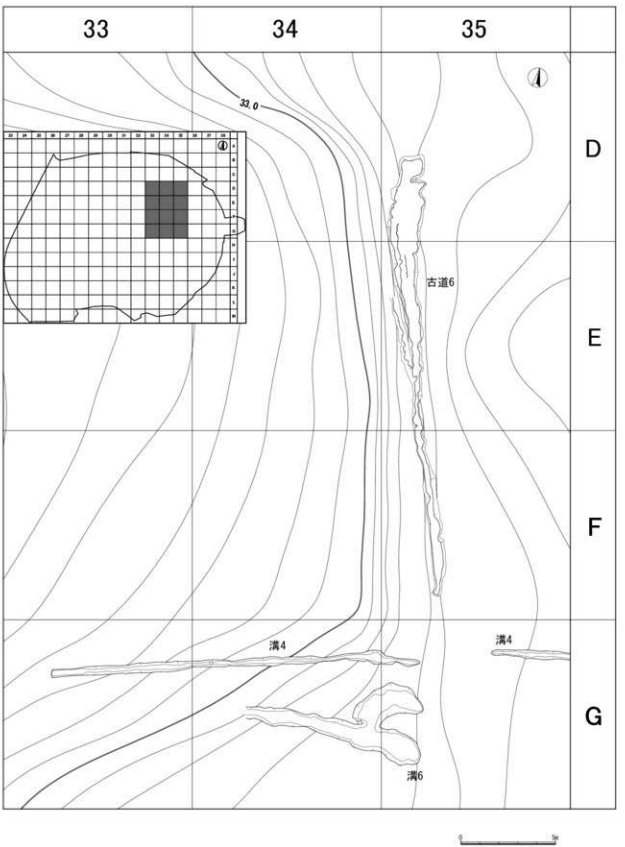

溝2
溝3
溝2
A
A'
L=33.100m
1
Va
B
B'
L=33.100m
1
Va
C
C'
L=32.900m
1
Va
溝3
A
A'
L=32.500m
1
2
Va
溝2
1黒褐色土(10YR2/2)粘性なし、しまりなし、アカホヤ火山灰のブロックを含む。
溝3
1黒色土(10YR2/1)やや粘性あり、しまりなし。
2灰黄褐色土(10YR4/2)やや粘性あり、しまりなし。
にぶい黄橙色土(10YR6/4)のアカホヤ火山灰ブロックおよび黒色土(10YR2/1)をブロックで少量含む。
0
50cm

第357図　中世溝２・３

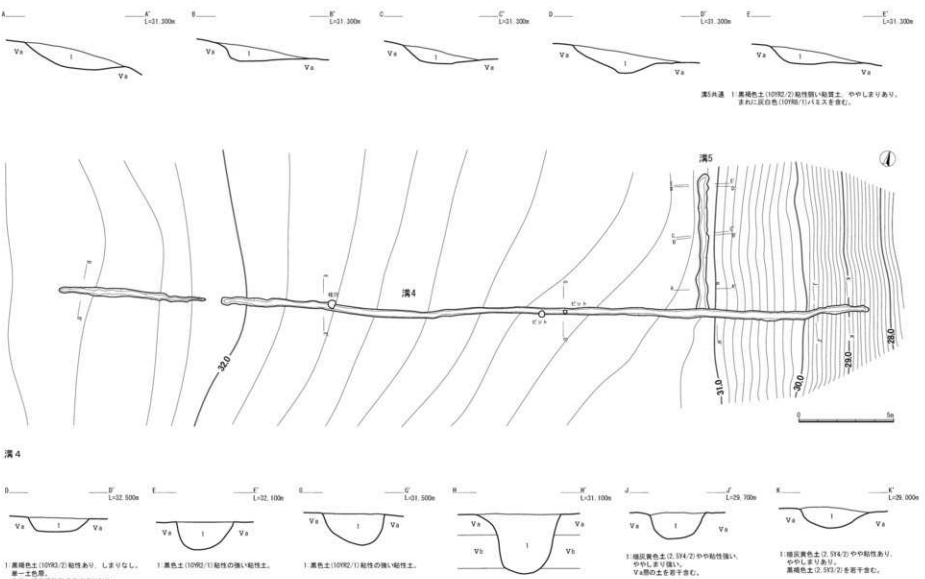


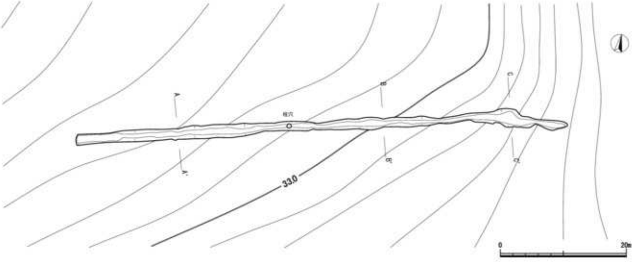
第358図　中世古道３・４・５

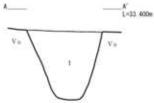
第359図　中世溝・古道配置図２



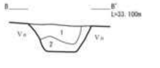
第360図　中世溝・古道配置図３


溝5
A
A'
L=31.300m
Va
I
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
溝5共通　I：黒褐色土(10YR2/2)粘性弱い粘質土。ややしまりあり。
まれに灰白色(10YR8/1)パミスを含む。
溝5
溝4
ピット
32.0
31.0
30.0
29.0
28.0
0
5m
溝4
G
G'
L=31.500m
H
H'
L=31.100m
J
J'
L=29.700m
K
K'
L=29.000m
Vb
I：黒色土(10YR2/1)粘性の強い粘性土。
I：褐灰黒色土(2.5Y4/2)やや粘性強い。
ややしまり強い。
Va層の土を若干含む。
I：褐灰黒色土(2.5Y4/2)やや粘性あり。
ややしまりあり。
黒褐色土(2.5Y3/2)を若干含む。
0
50cm

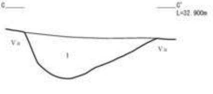




1:黒色土(10YR2/1)粘性あり、しまりなし。
単一土色としているが下層面は、黒褐色土(10YR3/2)を呈している。
分層までには至らない。層中に褐色系の土粒を全く含まない。



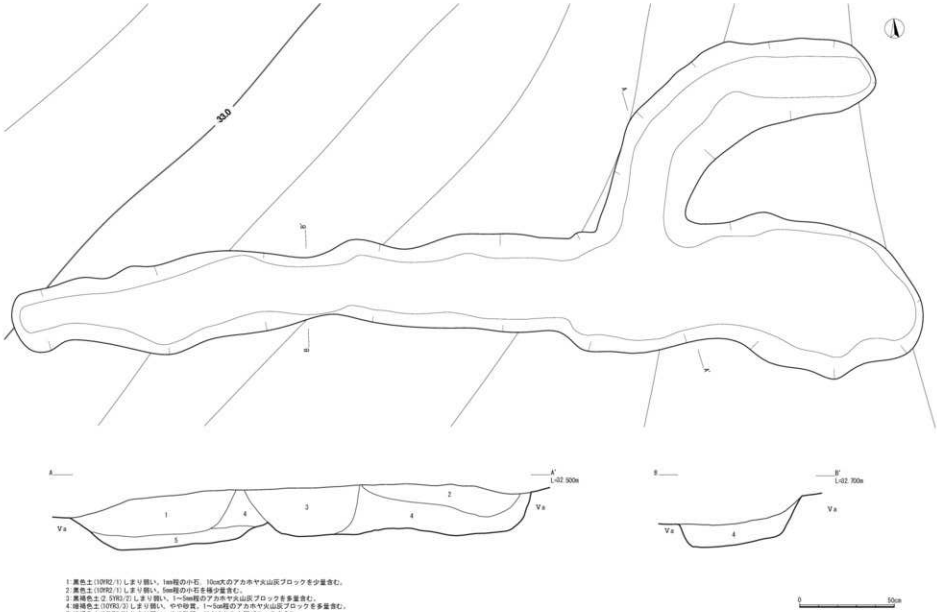
1:黒色土(10YR2/1)粘性あり、しまりなし。
褐色系土の混入により、部分的に黒褐色を呈している。
2:褐色土(10YR4/4)粘性あり、しまりなし。
全体としては褐色、1の層土に近い黒色土がまだらに入る。



1:黒褐色土(10YR3/1)土層中に径2cmの褐色の淡いブロックを含む。

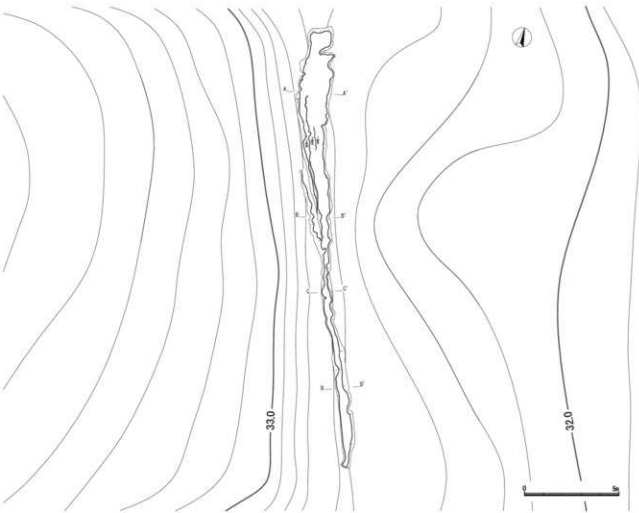
0　50cm

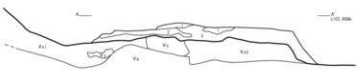
第362図　中世溝４



1:黒色土(10YR2/1)しまり弱い。1mm程の小石、10cm大のアカホヤ火山灰ブロックを少量含む。
2:黒色土(10YR2/1)しまり弱い。5mm程の小石を極少量含む。
3:黒褐色土(2.5YR3/2)しまり弱い。1～5mm程のアカホヤ火山灰ブロックを多量含む。
4:暗褐色土(10YR3/3)しまり弱い、やや砂質。1～5cm程のアカホヤ火山灰ブロックを多量含む。
5:暗褐色土(10YR3/3)しまり弱い、やや砂質。アカホヤ火山灰ブロックを含む。

第363図　中世溝６





1:オリーブ灰色土(7.5Y3/1)に近い色調の厚さ中間に挟み、暗赤褐色土(2.5YR3/2)の層が上下にみられ、鉄分を含んでいるのか補度に硬化している。
最上面の硬化した層で、断面5cm程の厚さに三層構造をなしている。
2:オリーブ黒色土(5Y3/1)に近い色調でやや灰色ががっている。
三層構造を有していない硬化面で構造に硬い。
3:黒色土(10YR2/1)に近い色調、しまり強い、黒塗り部分で黄褐色砂粒が少量混入している。
Vx層:にぶい黄橙色(10YR6/4)構砂、サラサラの砂。
Vx層1:にぶい黄褐色(10YR4/3)構砂。
Vx層2:褐色土(10YR4/6)から黄に向けて、にぶい黄橙色(10YR6/3)に色が薄く変化している。
硬化面の土層直下層で5と同一条件下の層であるが土色に差異がある。

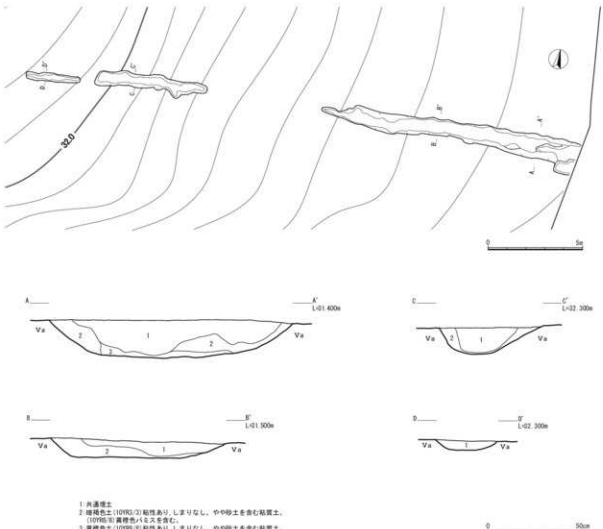
1:黒色土(5Y2/1)2枚目の硬化面、非常に硬い。
2:黒褐色土(10YR2/1)に近い色調で、鉄分を含んでいると思われ、
その分、赤褐色系が混じる。3枚目の硬化面、2枚目より硬いか。
3:黒色土(10YR2/1)しまり強い、A断面の3の層にあたる。

2:黒褐色土(10YR2/1)に近い色調、鉄分を含む。B断面の2と同じとみて良い。
3:黒色土(10YR2/1)、A断面の3、B断面の2と同じ。

3:表面のみ硬化している。A断面の3、B断面の1、C断面の2と同じ。

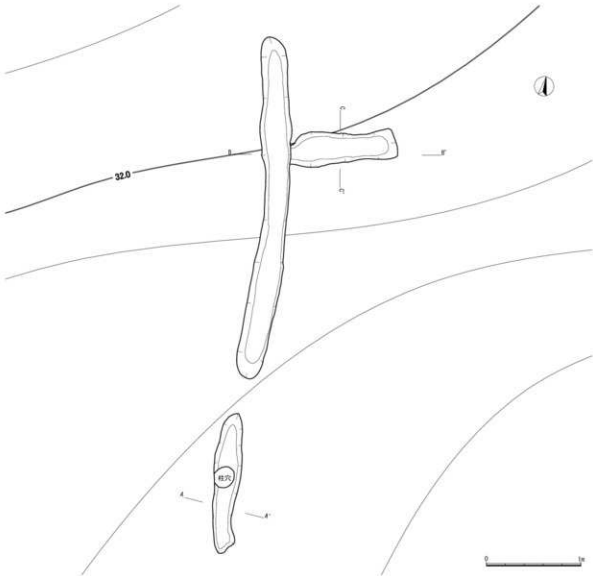
第364図　中世古道6

第365図　中世溝・古道配置図４



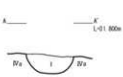
1：共通埋土
2：暗褐色土（10YR3/3）粘性あり、しまりなし。やや砂土を含む粘質土。
（10YR6/8）黄橙色パミスを含む。
3：黄橙色土（10YR8/8）粘性あり、しまりなし。やや砂土を含む粘質土。
アカホヤ火山灰ブロック(2)二次堆積。4mm程度の（10YR8/3）浅黄橙色土パミスを含む。

第366図　中世溝７



1:黒褐色土(10YR2/2)粘性少し強く、しまり弱い。径1~2mmのパミスを少量含む。(溝状埋土)
2:黒褐色土(10YR2/3)を基調とし、Ⅳa層の土を多く含む。やや粘性強く、ややしまり強い。
3:暗褐色土(10YR3/3)を基調とし、Ⅳa層の土を多く含む。粘性少し強く、しまり強い。

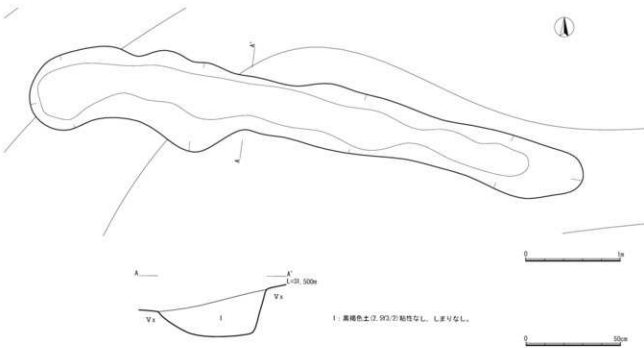
2:黒褐色土(10YR2/3)
3:暗褐色土(10YR3/3)



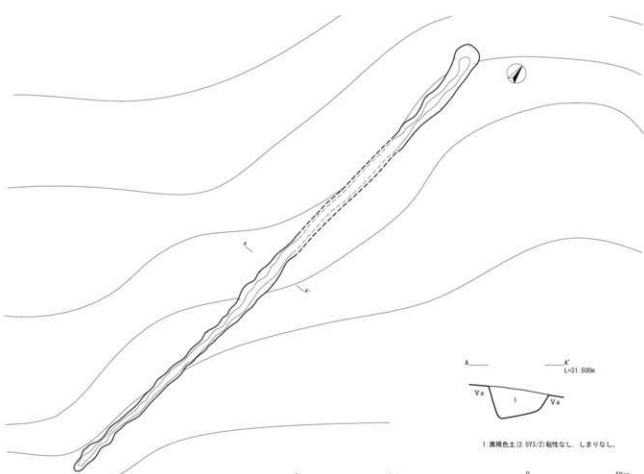
1:黒褐色土(10YR2/2)(溝埋土)

第367図　中世溝8

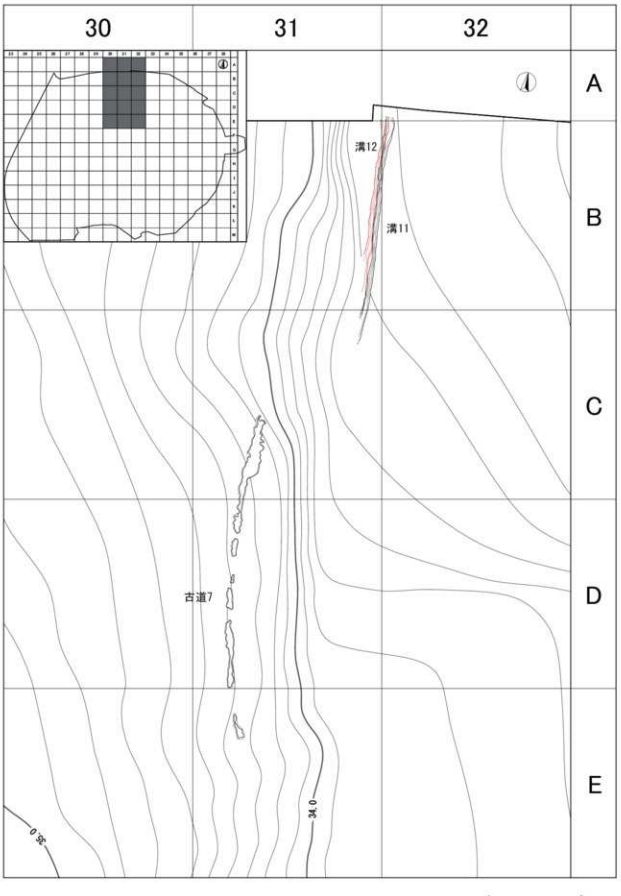
第368図　中世溝・古道配置図5



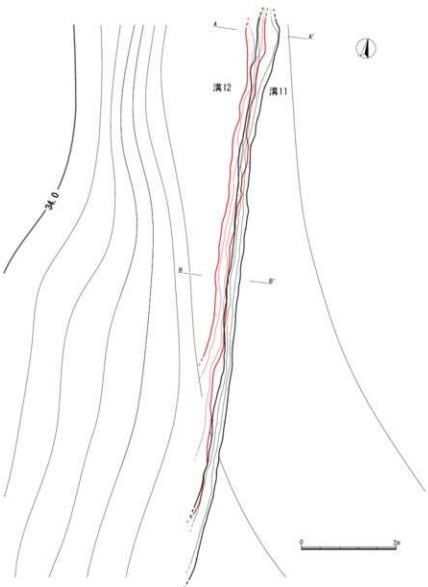
第369図　中世溝９

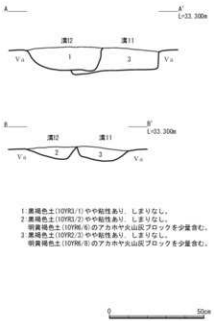


第370図　中世溝10

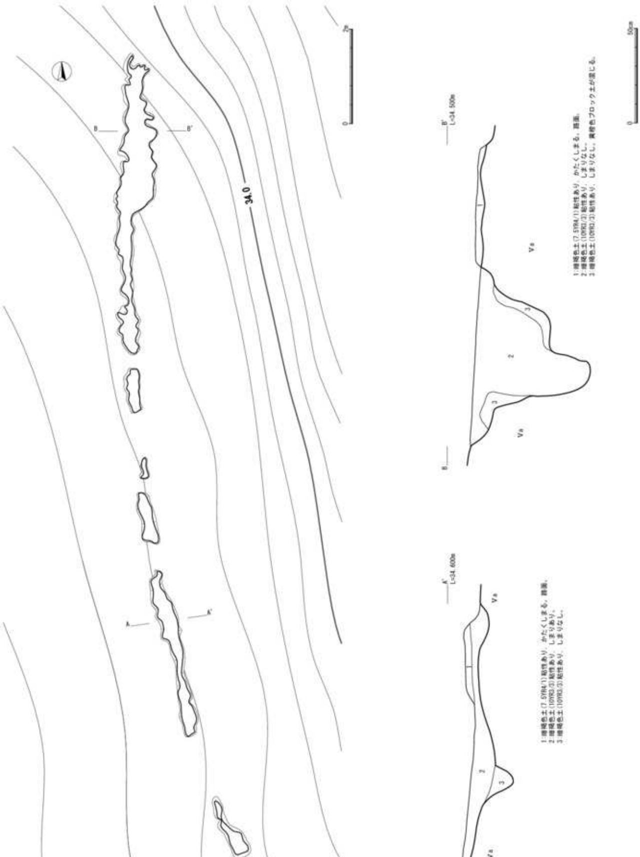


第371図　中世溝・古道配置図6

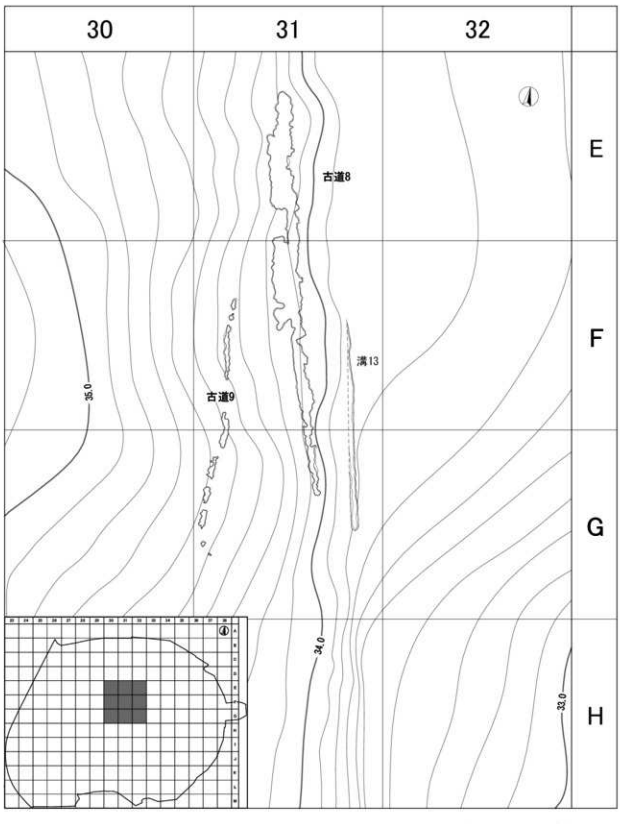




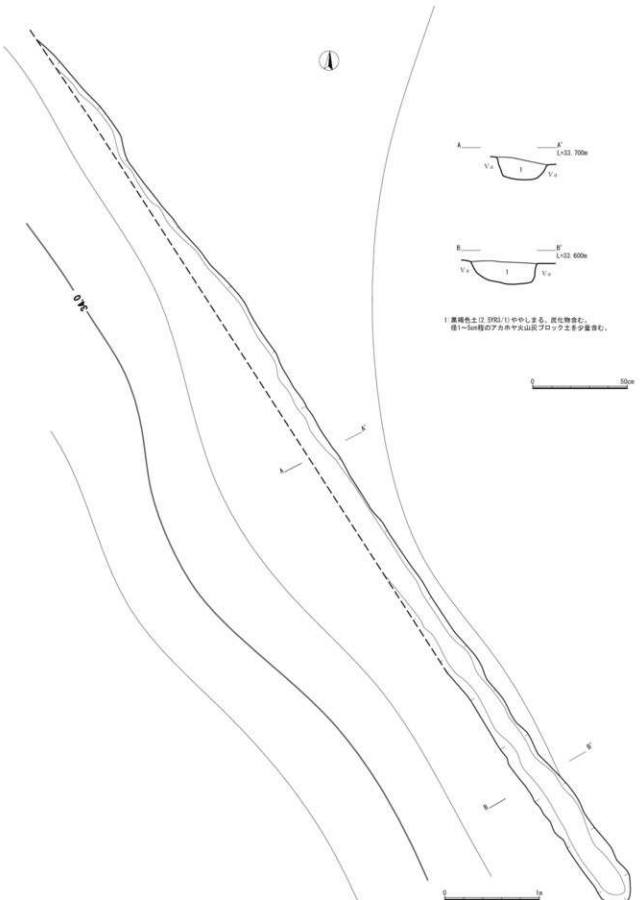
第372図　中世溝11・12



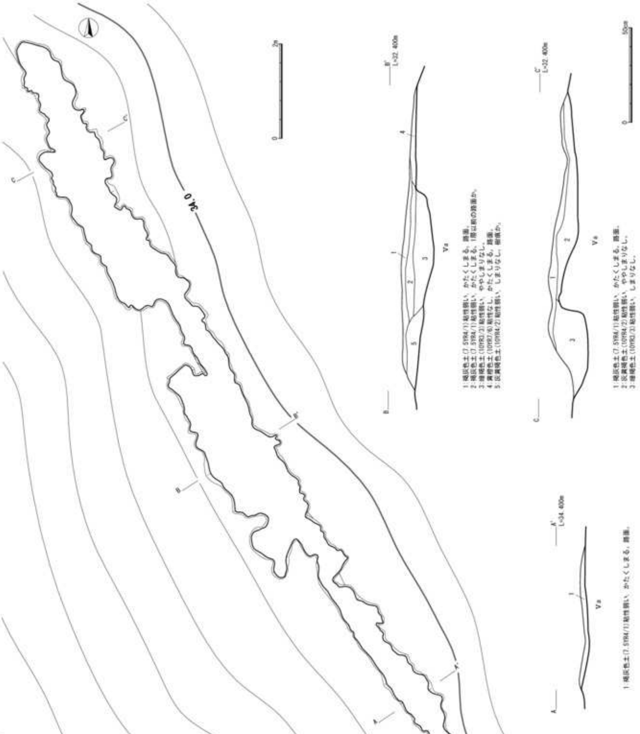
第373図　中世古道７



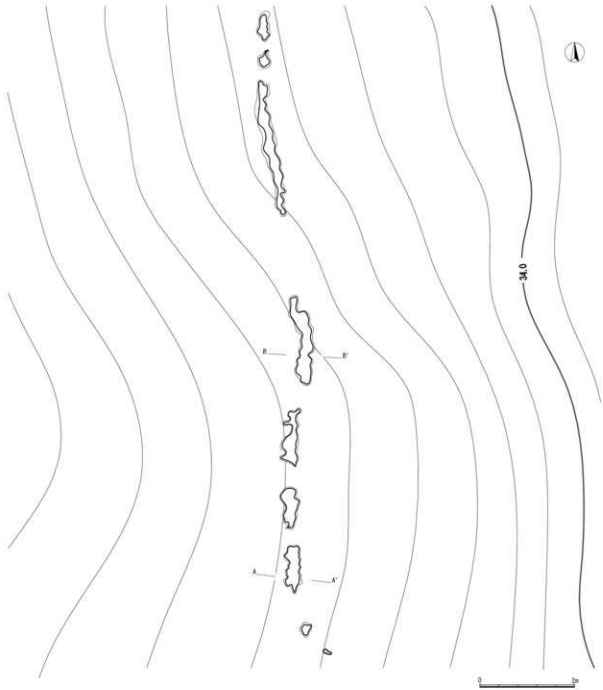
第374図　中世溝・古道配置図７


A
A'
L=33. 700m
Va
1
Va
B
B'
L=33. 600m
Va
1
Va
1: 黒褐色土(2.5YR3/1)ややしまる。炭化物含む。
径1～5cm程のアカホヤ火山灰ブロック土を少量含む。
0
50cm
34.0
A'
A
B'
B
0
1m

第375図　中世溝13


34.0
A
A'
B
B'
C
C'
L=34.400m
L=32.400m
Va
1:褐灰色土(7.5YR4/1)粘性弱い、かたくしまる。路面。
2:褐灰色土(7.5YR4/1)粘性弱い、かたくしまる。1層以前の路面か。
3:暗褐色土(10YR3/3)粘性弱い、ややしまりなし。
4:黄橙色土(10YR7/6)粘性なし、かたくしまる。路面。
1:褐灰色土(7.5YR4/1)粘性弱い、かたくしまる。路面。
2:灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱い、ややしまりなし。
3:暗褐色土(10YR3/3)粘性弱い、しまりなし。
1:褐灰色土(7.5YR4/1)粘性弱い、かたくしまる。路面。
0
2m
50cm

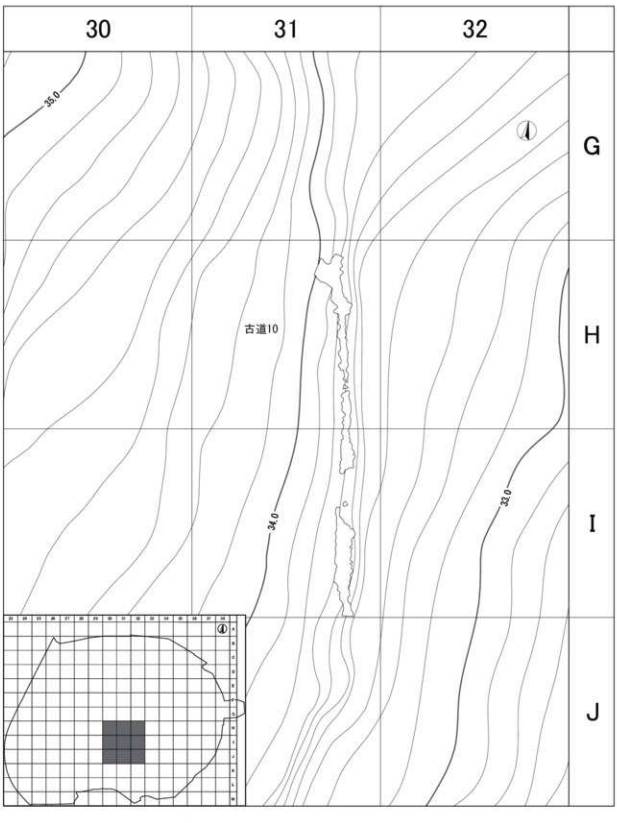
第376図　中世古道８



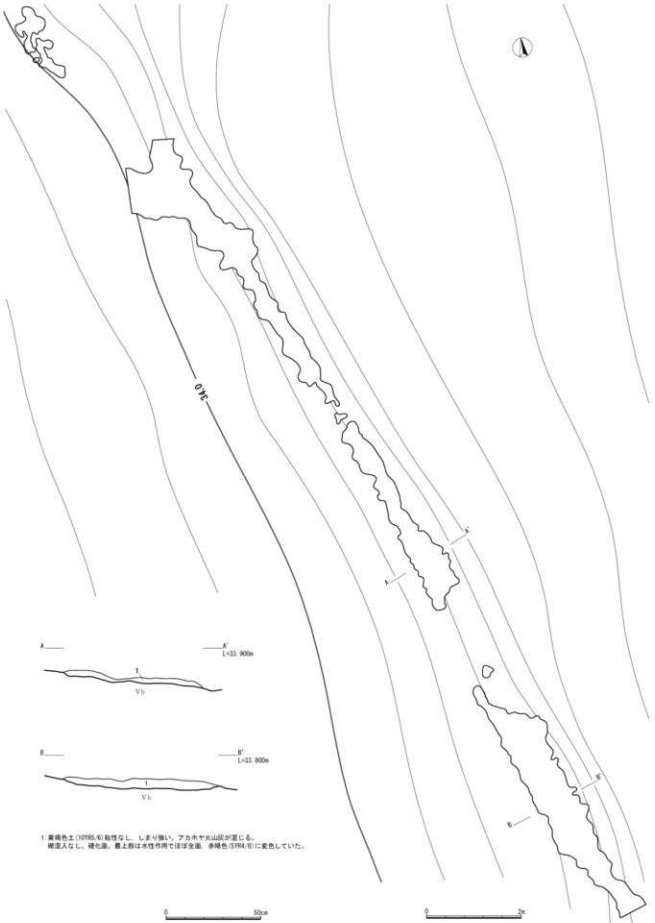
1:暗灰色土(7.5YR4/1)粘性弱い、かたくしまる。路面。
2:灰褐色土(7.5YR4/2)粘性弱い、しまりなし。

1:暗灰色土(7.5YR4/1)粘性弱い、かたくしまる。路面。
2:灰褐色土(7.5YR4/2)粘性弱い、しまりなし。

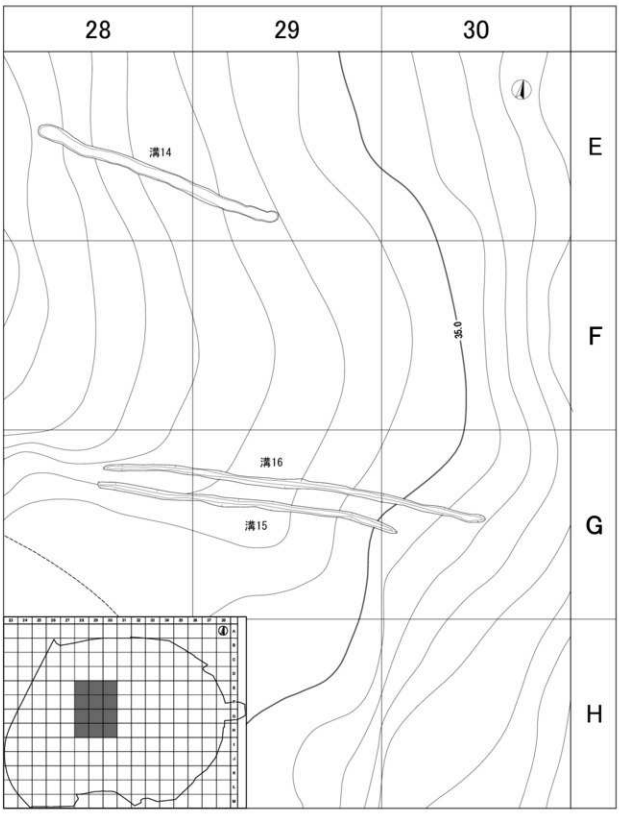
第377図　中世古道９



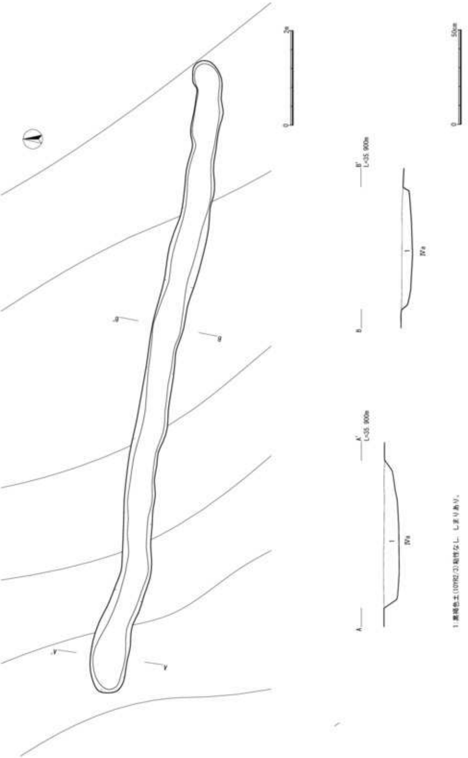
第378図　中世溝・古道配置図８



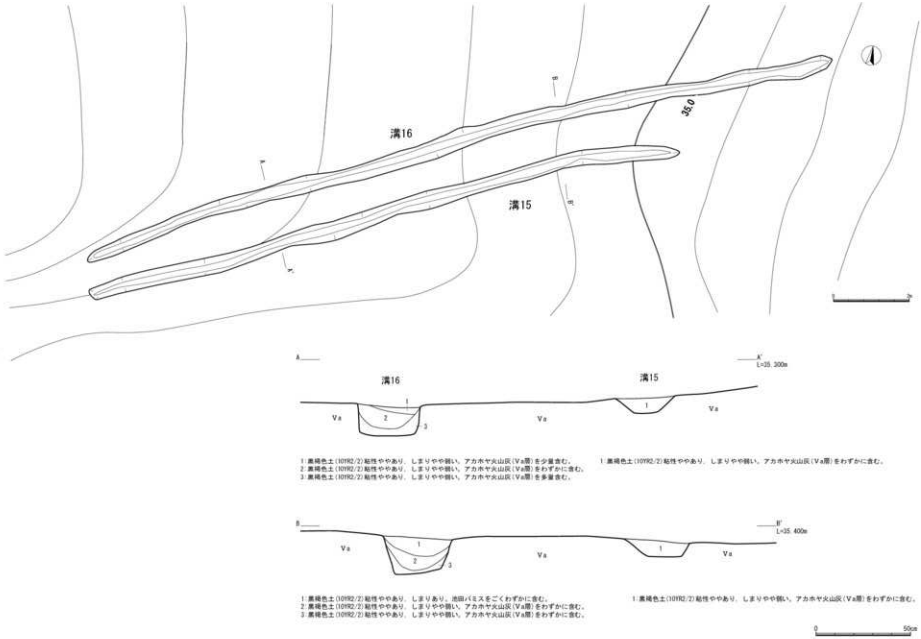
第379図　中世古道10



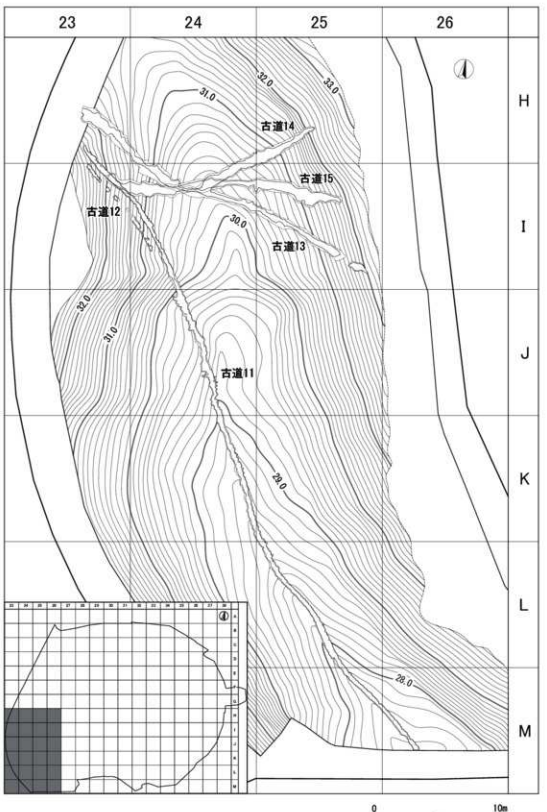
第380図　中世溝・古道配置図９



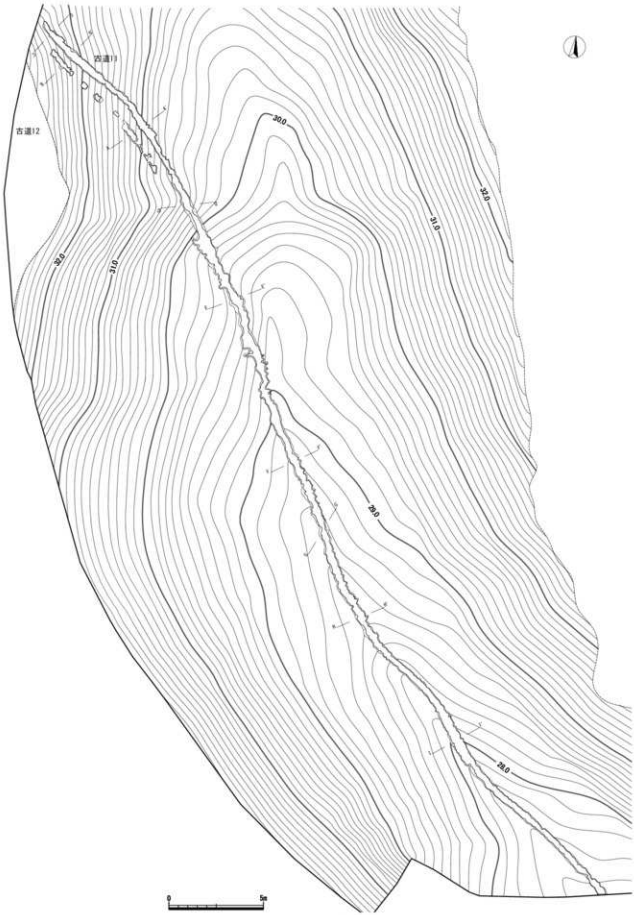
第381図　中世溝14



第382図　中世溝15・16



第383図　中世溝・古道配置図10



第384図　中世古道11・12

古道11　A-A'
古道12　A-A'

古道65-1 灰黄褐色土(10YR5/2)粘性あり、かたくしまり硬化する。道路面(硬化面)。
古道66-1 灰黄褐色土(10YR5/2)粘性あり、かたくしまり硬化する。道路面(硬化面)。

古道11　B-B'
古道12　B-B'

古道65-1 灰黄褐色土(10YR5/2)粘性あり、かたくしまり硬化する。道路面(硬化面)。
古道66-1 灰黄褐色土(10YR5/2)粘性あり、かたくしまり硬化する。道路面(硬化面)。

古道11　C-C'

1 灰黄褐色土(10YR5/2)粘性あり、かたくしまり硬化する。道路面(硬化面)。

古道11　D-D'

1 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性あり、かたくしまる。
古道69路面。
2 暗褐色土(10YR3/3)粘性弱い、かたくしまる。
IVa層が1層路面の転管により硬化している。

古道11　E-E'

1 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱い、かたくしまり硬化する。
暗灰色ブロック土が混じる。上面は古道69路面。

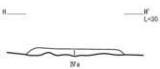
古道11　F-F'

1 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱い、かたくしまり硬化する。
暗灰色ブロック土が混じる。上面は古道69路面。

古道11　G-G'

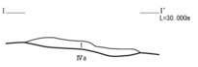
古道65-1 灰黄褐色土(10YR5/2)やや粘性あり、かたくしまり硬化する。
暗灰色ブロック土が混じる。上面は古道65路面。
古道80-1 にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性弱い、かたくしまり硬化する。
古道65に先行する古道80の路面形成層。

古道11　H-H'



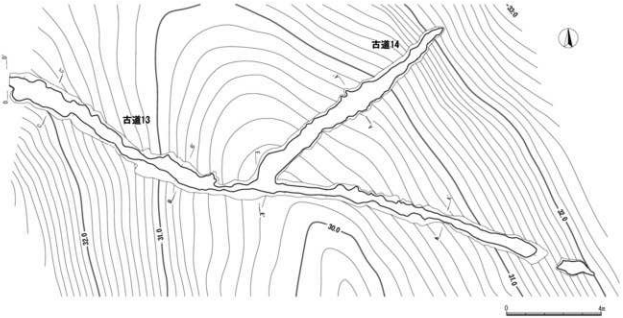
1 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱い、かたくしまる。
暗灰色ブロック土が路面に散在する。上面は古道69路面。

古道11　I-I'

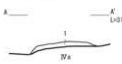


1 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱い、かたくしまる。
暗灰色ブロック土が混じる。上面は古道69路面。

第385図　中世古道11・12

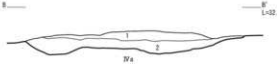


古道13　A-A'



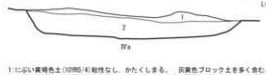
1：にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性なし、かたくしまる。
　灰黄褐色ブロック土を多く含む。道路面。

古道13　B-B'



1：にぶい黄褐色土(10YR5/4)やや粘性あり、かたくしまる。
　灰黄褐色ブロック土を多く含む。道路面。
2：にぶい黄褐色土(10YR5/4)やや粘性あり、ややかたくしまる。
　灰黄色ブロック土がまばらに含まれる。
　1層の影響により硬化した基本土層IVa層と思われる。

古道13　C-C'



1：にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性なし、かたくしまる。　灰黄色ブロック土を多く含む。道路面。
2：にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性弱い、ややかたくしまる。灰黄色ブロック土をまばらに含む。
　IVa層が古道13・1層の影響により硬化したものと思われる。

古道13　D-D'

1：にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性なし、かたくしまる。
　灰黄色ブロック土を多く含む。道路面。
2：にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性なし、ややかたくしまる。
　灰黄色ブロック土がまばらに混入する。
　IVa層が古道13・1層の影響により硬化したものと思われる。

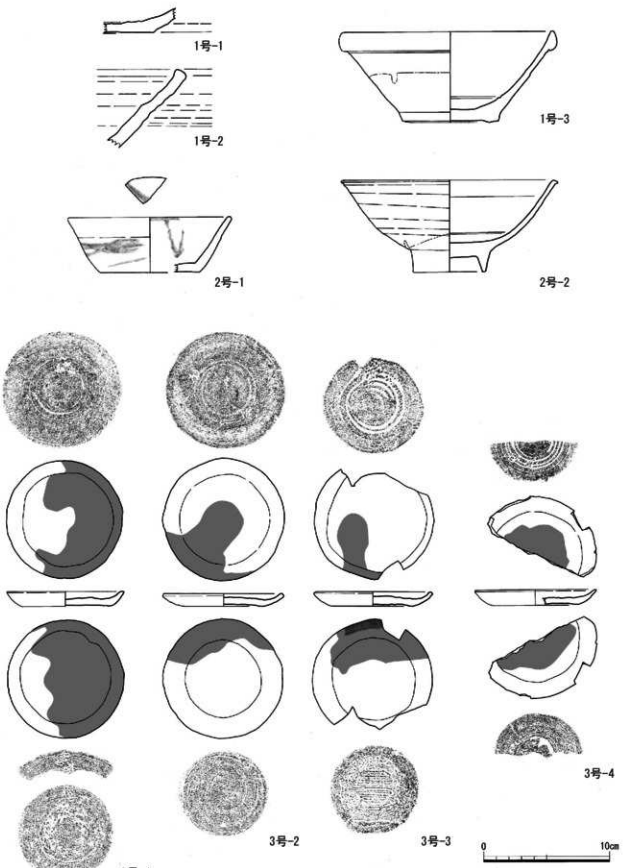
古道13　E-E'
古道14　E-E'

1：暗褐色土(10YR3/3)粘性あり、かたくしまる。灰黄褐色ブロック土、炭化物粒、小礫を含む。
　古道13、14の道路面形成層で古道13と14の切り合いは不明瞭である。
　白色、黄色のパミスが人為ブロックが混ざっている。

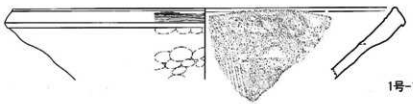
古道14

1：暗褐色土(10YR3/3)粘性あり、かたくしまる。砂質土が部分的に混じる。
　古道14道路面形成層。

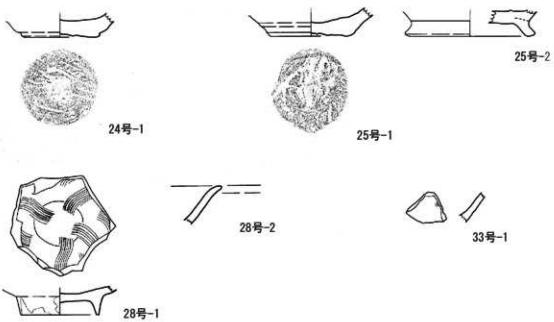
第387図　中世古道15



第388図　土坑墓出土遺物



第389図　竪穴建物跡出土遺物



第390図　掘立柱建物跡柱穴出土遺物

第391図　土坑内出土遺物

第57表　中世遺構出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	遺構名	種別	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第388図	1号-1	J 36	土坑墓1号	土師器	坏	底部	破片	−	−	−	回転ナデ，ナデ	回転ナデ	○					○	にぶい黄橙色	浅黄橙色	良	−
	1号-2	J 36	土坑墓1号	須恵器	提鉢	口縁～胴部	破片	−	−	−	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	○					○	灰色	黄灰色	良	東播系，森田編年Ⅰ－1類
	2号-1	B 29	土坑墓2号	須恵器	坏	口縁～底部	15	(12.8)	(7.8)	4.4	回転ナデ，ナデ	回転ナデ	○					○	灰黄色	黄色	良	ヘラ切り離し 外底面を除く全面に火襷状の痕跡あり
	3号-1	E・F 28	土坑墓3号	土師器	皿	完形	100	9.2	6.8	1.2	回転ナデ	回転ナデ，ナデ	○		○	○		○	明褐灰色	明褐灰色	良	ヘラ切り離し 植物繊維状の圧痕あり
	3号-2	E・F 28	土坑墓3号	土師器	皿	完形	100	9.6	6.5	1.0	回転ナデ	回転ナデ，ナデ	○		○			○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	回転ヘラ切り離し 植物繊維状の圧痕あり
	3号-3	E・F 28	土坑墓3号	土師器	皿	完形	90	9.4	6.6	1.1	回転ナデ	回転ナデ，ナデ	○			○		○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	回転ヘラ切り離し 植物繊維状の圧痕，板状圧痕あり
	3号-4	E・F 28	土坑墓3号	土師器	皿	口縁～底部	50	(9.5)	(6.8)	1.2	回転ナデ	回転ナデ，ナデ	○		○			○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	回転ヘラ切り離し 植物繊維状の圧痕あり
第389図	1号-1	J 37	竪穴建物1号	須恵器	鉢	口縁～胴部	5	(31.8)	−	−	ナデ，ハケメ	ハケメ	○					○	黄灰色	黄灰色	良	東播系 指頭圧痕あり
第390図	24号-1	B・C 29･30	掘立24号	土師器	坏	底部	30	−	6.1	−	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	○			○		○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	ヘラ切り離し，板状圧痕
	25号-1	B・C 29	掘立25号	土師器	坏	底部	25	−	6.4	−	回転ナデ	回転ナデ	○			○		○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	ヘラ切り離し 板状圧痕
	25号-2	B・C 29	掘立25号	須恵器	坏身	底部	5	−	高台径(10.2)	−	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ナデ	○					○	灰色	灰色	良	中村編年Ⅳ型式3・4段階
	33号-1	C 27	掘立33号	土師器	鉢または坏	胴部	破片	−	−	−	ナデ	ナデ	○					○	橙色	橙色	良	墨書土器
第391図	112号-1	J 32	土坑112号	土師器	皿	口縁～底部	25	(10.7)	(9.0)	0.9	回転ナデ，ナデ	回転ナデ	○					○	橙色	橙色	良	ヘラ切り離し

※()は復元・残存値

第58表　中世遺構出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	遺構名	種別	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	胎土	焼成	黄人	発色	色調 胎土	色調 釉薬	分類	備考
第388図	1号-3	J 37	土坑墓1号	白磁	碗	完形	完形	16.9	7.5	7.1	外面下半	良	有	良	灰白色	灰黄色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産 Ⅱ緩碗
	2号-2	B 28	土坑墓2号	白磁	碗	完形	完形	17.1	5.8	7.3	外面腰部下半	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅴ－4ａ類	福建省産 端反碗
第390図	26号-1	D 29	掘立26号	白磁	碗	腰部～胴部	30	−	6.2	−	高台内面	良	無	良	灰白色	灰黄色	大宰府編年Ⅴ－4ａ類	福建省産
第390図	28号-2	D 29	掘立28号	白磁	碗	口縁～胴部	破片	−	−	−	−	有	有	良	灰白色	灰黄色	大宰府編年Ⅴ・Ⅵ類	福建省産 端反碗
第391図	118号-1	I 29	土坑118号	白磁	小碗	口縁部～腰部	5	(8.6)	−	−	腰部外面	良	有	良	灰白色	灰白色	−	化粧土を施す 若狭陶器の可能性あり

※()は復元・残存値

2　遺物

中世土師器（第393図）

土師器皿（542～555）

542は全体の1/6が残存する。法量は復元口径9.8cm，復元底径7.6cm，器高1.5cmを測る。器形は体部が外反しながら開き，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後ナデ調整をおこない，内面は見込みと体部の境付近を回転ナデ調整，中央付近に静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

543は全体の1/6が残存する。法量は復元口径8.5cm，復元底径7.1cm，器高1.2cmを測る。器形は体部が直線的に短く立ち上がる扁平な器形を呈し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し痕が残り，内面は中央付近を静止ナデ調整をおこなう。外面の体部から内面の口縁部にかけて黒色化が認められる。また見込みと体部の境に植物繊維状の圧痕が残る。焼成は良好で，胎土は精良である。

544は全体の1/6が残存する。法量は復元口径9.6cm，復元底径7.1cm，器高1.5cmを測る。器形は体部が曲線的に内湾しながら立ち上がり，口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面はナデ調整で，内面は渦巻き状のロクロ目が残る。焼成は良好で，胎土は精良である。

545は全体の1/6が残存する。法量は復元口径9.6cm，復元底径7.9cm，器高1.1cmを測る。器形は底部から丸みを持って立ち上がり，体部は外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し後ナデ調整，内底面はナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

546は全体の1/4が残存する。法量は復元口径7.8cm，復元底径6.8cm，器高1.0cmを測る。器形は体部が底部から角をもって垂直に立ち上がり，体部の中位よりやや下から内湾し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面はヘラ切り離し痕が残り，内底面の中央付近は静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で赤色粒子，石英が含まれている。

547は全体の1/3が残存する。法量は復元口径9.8cm，復元底径6.8cm，器高1.8cmを測る。器形は体部が直線的に開いて立ち上がり，体部上半で外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は糸切り離し後ナデ調整で，内底面は静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。口縁部に赤・黒色化した範囲が認められ，体部と底部の内外面にタール状の染みが認められる。また，内底面には植物繊維の圧痕が残る。

548は全体の1/2が残存する。法量は復元口径7.4cm，復元底径5.7cm，器高1.4cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，体部上半で外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は静止糸切り離し後ナデ調整，内底面は静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土はやや粗く，赤色粒子，石英，角閃石等が含まれている。

549は全体の1/3が残存する。法量は復元口径8.2cm，復元底径6.7cm，器高1.6cmを測る。器形は体部が直線的に開いて立ち上がり，体部上半でわずかに外反し，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は回転糸切り離し後ナデ調整，内底面は静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で，黒色粒子等が含まれている。

550は全体の1/2が残存する。法量は復元口径7.6cm，復元底径6.0cm，器高1.4cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は回転糸切り離し痕が残り，内底面はロクロ成形後に未調整である。焼成は良好である。胎土はやや粗く，黒色粒子，石英，角閃石の微粒子が含まれている。

551は底部が残存する。法量は底径7.8cmを測る。器面調整は外底面を回転糸切り離し後不定方向のナデ調整をおこない，内底面は回転ナデ調整でロクロ目が残る。焼成は良好である。胎土はやや粗く，赤・黒色粒子，石英等の微粒子が含まれている。内外面に植物繊維状の圧痕が認められる。また，口縁部から体部は一定間隔で欠損しており，人為的に打ち欠いた可能性がある。

552は底部が残存する。法量は復元口径8.0cm，底径5.0cm，器高1.4cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は回転台が時計回りの回転糸切り離し痕が残り，内底面は摩耗が著しいがロクロ成形後，中央付近に静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好である。胎土は精良で石英などの微粒子が含まれている。口縁端部の内面側は摩耗のため不明だが，外面側が黒色化している。

553は全体の1/3が残存する。法量は復元口径7.6cm，復元底径6.0cm，器高1.5cmを測る。器形は体部が直線的に開いて立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は回転糸切り離し痕が残り，内底面はロクロ成形後，中央付近に静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面で異なっており，外面は橙色，内面はにぶい橙色を呈する。胎土は精良である。

554は全体の2/3が残存する。法量は口径8.2cm，底径6.4cm，器高1.1cmを測る。器形は体部が直線的に開いて立ち上がり，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，外底面

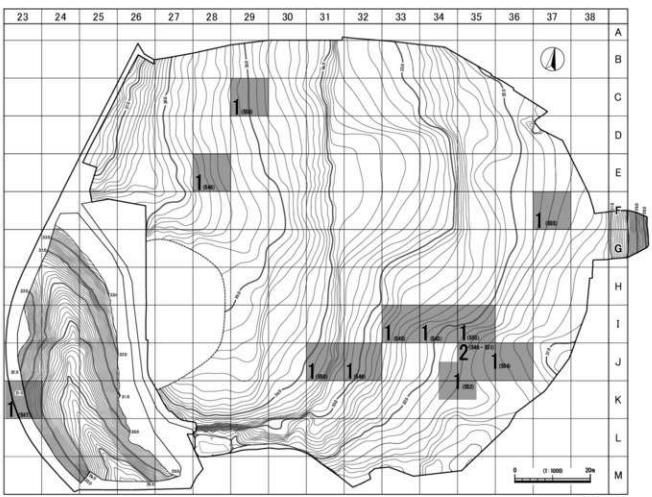
は回転台が時計回りの回転糸切り離し痕が残り，内底面は回転ナデ調整後中央付近に静止ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，胎土は精良である。

555は全体の1/6が残存する。法量は復元口径8.2cm，復元底径5.6cm，器高1.2cmを測る。器形は体部がやや直線的に開いて立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。器面調整は体部が内外面ともに回転ナデ調整で，外底面は回転糸切り離し痕が残り，内底面は回転ナデ調整をおこなう。焼成は良好で，色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。胎土は精良である。

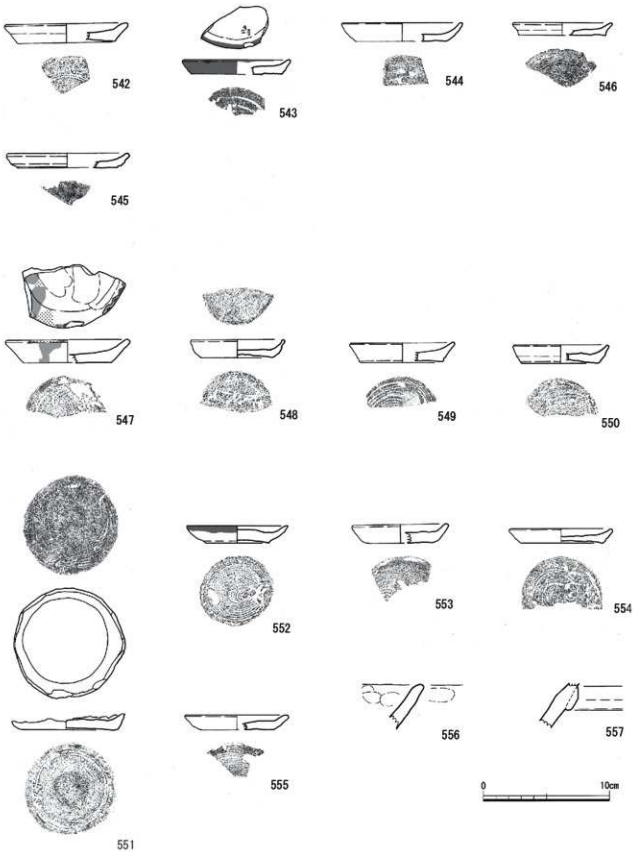
土師器鍋（556・557）

556は口縁部片である。器形は口縁部が素口縁でやや外側へ丸くおさめる。器面調整は内外面ともに横位のナデ調整で成形時の指頭圧痕が残る。焼成は良好で，体部外面は使用時の黒色化が認められる。胎土はやや粗く，白色粒子や石英等の細粒が含まれている。

557は口縁部片で，口端部は欠損する。器形は口縁部が口端よりやや下方に粘土帯を貼り付けて，玉縁状を呈する。器面調整は内外面ともに横位のナデ調整をおこなう。焼成は良好で，体部外面は使用時の黒色化が認められる。胎土はやや粗く，白色粒子や石英等の小粒が含まれている。



第392図　中世土師器（皿）分布図


542
543
544
546
545
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
0
10cm

第393図　土師器皿・鍋

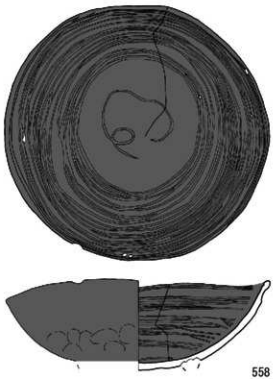
第59表　中世土師器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 黒雲母	胎土 小礫	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第393図	542	I 34	Ⅳa	皿	口縁～底部	10	(9.8)	(7.6)	1.5	回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	ヘラ切り離し
	543	A	表土	皿	口縁～底部	35	(8.5)	(7.1)	1.2	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	ヘラ切り離し 植物繊維状圧痕
	544	I 33	表土	皿	口縁～底部	10	(9.4)	(7.1)	1.5	ナデ，回転ナデ	回転ナデ	○					○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	ヘラ切り離し
	545	J 32	Va	皿	口縁～底部	10	(9.6)	(7.9)	1.1	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	ヘラ切り離し
	546	K23	Ⅳa	皿	口縁～底部	30	(7.8)	(6.8)	1.0	回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	ヘラ切り離し
	547	E28	表土	皿	口縁～底部	35	(9.8)	(6.8)	1.8	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	糸切り離し 植物繊維状圧痕，黒色化
	548	J 35	Ⅳa	皿	底部	45	(7.4)	(5.7)	1.4	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○		○			○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	糸切り離し
	549	J 31	表土	皿	口縁～底部	35	(8.2)	(6.7)	1.6	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	回転糸切り離し
	550	J 35	Ⅳa	皿	口縁～底部	35	(7.6)	(6.0)	1.4	回転ナデ	回転ナデ	○		○			○	橙色	橙色	良	回転糸切り離し
	551	J・K 34・35	表土	皿	胴部～底部	80	—	7.8	—	ナデ	回転ナデ	○					○	浅黄橙色	浅黄橙色	良	回転糸切り離し 植物繊維状圧痕 口縁部打ち欠き?
	552	I 35	Ⅳa	皿	口縁～底部	80	(8.0)	5.0	1.4	回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	回転糸切り離し 灯明皿か?
	553	J 35 -36	表土	皿	口縁～底部	20	(7.6)	(6.0)	1.5	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	○					○	橙色	にぶい橙色	良	回転糸切り離し
	554	F37	Ⅳa	皿	口縁～底部	65	8.2	6.4	1.1	回転ナデ	回転ナデ，回転ナデ後ナデ	○			○		○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	回転糸切り離し
	555	C29	Ⅳa	皿	口縁～底部	15	(8.2)	(5.6)	1.2	回転ナデ	回転ナデ	○					○	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	回転糸切り離し
	556	F31	表土	鍋	口縁～胴部	破片	—	—	—	ナデ	ナデ	○					○	灰黄褐色	にぶい橙色	良	指頭圧痕 黒色化
	557	E27	Va	鍋	口縁～胴部	破片	—	—	—	ナデ	ナデ	○					○	にぶい黄橙色	浅黄橙色	良	黒色化

＊（）は復元・残存値

瓦器椀（第394図　558）

558はE37区のⅣa層から出土した。高台部を欠損しており，法量は口径14.0cmを測る。器形は体部が緩やかに内湾して口縁部は直立し，器壁の厚みは4㎜程度である。器面調整は外面の体部上半は回転ナデ調整をおこない，体部下半は静止ナデをおこなって指頭圧痕が多く残



第394図　瓦器椀

る。内面は体部全体に回転ナデ調整をおこなった後，幅１㎜程度の圏線状のミガキをおこない，ミガキの間には隙間が目立つ。内底面には同一方向に静止ナデをおこなった後，連結輪状が崩れたような暗文を施す。内面の口縁端部やや下に1条の沈線を巡らせる。焼成は良好で，色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土はおおむね精良で黒色粒子と１～２㎜大の砂粒をごくわずかに含む。口縁部から内底面にかけて粘土板の結合痕が残る。また外面の一部には器表面の灰色が淡くなっている部分が認められる。

第60表　瓦器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm)			調整		胎土						色調		焼成	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第394図	558	E37	Ⅳa	椀	体部	90	14.0	－	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ナデ，圏線状のミガキ						○	灰色	灰色	良	楠葉型，橋本編年Ⅲ－１期 沈線１条・暗文あり 指頭圧痕，粘土板接合痕

＊○は復元・残存値

中世須恵器（第397・398図）

須恵器鉢（559～574）

559～569は東播系須恵器鉢の口縁部から胴部までの破片である。

559は捏鉢片で，法量は復元口径23.0cmを測る。器形は体部下半から直線的に外側へ開き，体部中位でさらに外反する。口縁部は断面が矩形を呈し，口縁端部は上方へわずかに突出させる。器面調整は回転ナデ調整後に不定方向のナデ調整を部分的におこなう。体部内外面には成形時のロクロ目が良く残る。焼成は良好で硬く締まる。胎土はやや粗く，白・黒色粒子等の細粒が多く含まれている。

560は捏鉢片で，法量は復元口径29.8cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり外側へ開き，外面側の口縁端部からやや下方で内側へ丸みを持って屈曲し口端面をなし，口縁端部は上方へ尖り気味に仕上げる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整後に不定方向のナデ調整を部分的におこなう。体部内外面には成形時のロクロ目が残る。焼成は良好で，口縁端部外面を灰色化させる。胎土はやや粗く，１㎜以下～５㎜大の白色粒子が多く認められ，その他に１㎜大の砂粒が含まれている。

561は捏鉢片で，法量は復元口径21.8cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり外側へ開き，外面側の口縁端部からやや下方で内側へ屈曲し口端面をなし，口縁端部は上方へ尖り気味に仕上げる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で体部内面には成形時のロクロ目が残る。焼成は良好で，口縁端部外面を灰色化させる。胎土はおおむね精良で，わずかに白色粒子等の微粒が含まれている。

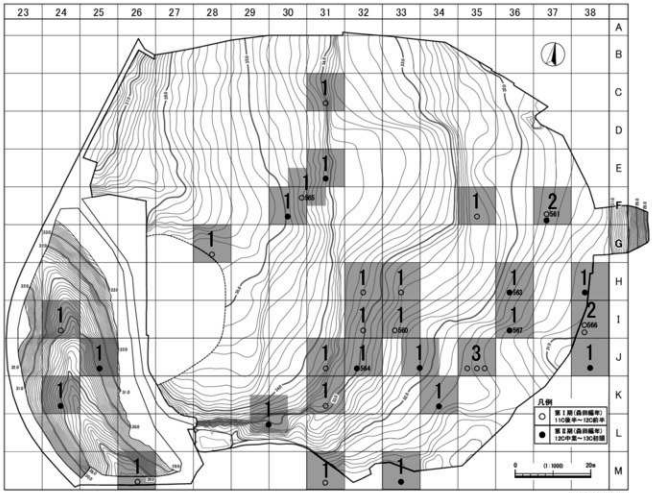
562は捏鉢片で，法量は復元口径23.9cmを測る。器形は体部下半から直線的に立ち上がり，口辺部からわずかに外側へ膨らみ，口縁部を肥厚させて，口縁端部は上方へ突出させ丸みを持っておさめる。器面調整は体部内外面が回転ナデ調整の後に部分的に不定方向のナデ調整をおこなう。焼成は良好で硬く締まる。胎土はやや粗く，１㎜以下～１㎝大の白色粒子が多く認められ，その他にも１㎜以下の砂粒が多く含まれている。

563は捏鉢片で，法量は復元口径20.3cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁部は外面側の口縁端部からやや下方で屈曲して口端面をなし，口縁端部は上方へ突出させ丸みを持っておさめる。器面調整は回転ナデ調整で，体部内外面に成形時のロクロ目が残る。焼成は良好で硬く締まり，口縁端部外面が黒色化している。胎土はやや粗く，白色粒子等の細粒が多く含まれている。

564は捏鉢片で，注口部が残存する。器形は口縁端部が欠損するが，残存する注口端部の形状より外面側の口縁端部からやや下方で屈曲して口端面をなし，口縁端部は上方へ突出させる形状を呈すると思われる。器面調整は回転ナデ調整をおこない，注口部周辺に成形時の指頭圧痕が認められる。焼成は良好で硬く締まり，口縁端部外面が黒色化している。胎土はおおむね精良で，白色粒子等の微粒が含まれている。

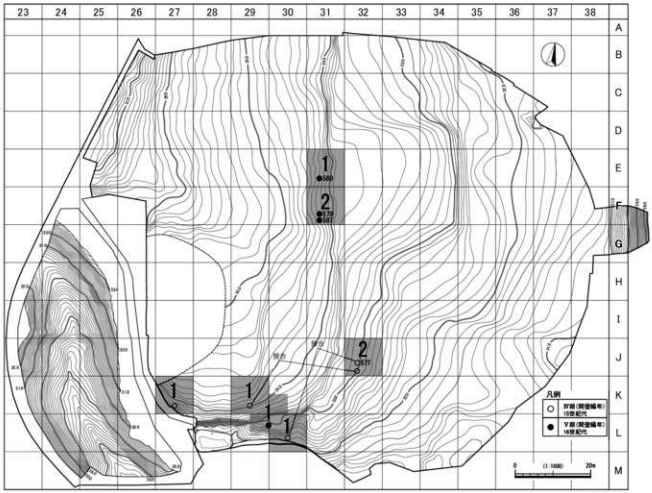
565は捏鉢片で，法量は復元口径24.9cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁部は外面側の口縁端部からやや下方でわずかに角を持って屈曲し口端面をなし，口縁端部は上方へ尖り気味に仕上げる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，体部外面に成形時の粘土紐巻上げの接合痕と成形時の凹凸が著しいロクロ目が残る。焼成は良好だがやや軟質な印象をうけ，口縁端部外面が灰色化している。胎土はやや粗く，白色粒子等の細粒が含まれている。

566は捏鉢片である。器形は外面側の口縁端部からやや下方でわずかに角を持って屈曲しやや内反りの口端面をなし，口縁端部は上方へ尖り気味に仕上げる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，体部外面に成形時のロクロ目が残る。焼成は良好で，口縁端部内外面が



Va層コンタ図

第395図　中世須恵器（東播系捏・擂鉢）分布図



Va層コンタ図

第396図　国内産陶器（備前焼擂鉢）分布図

灰色化している。胎土はやや粗く，黒・白色粒子等の微粒が含まれている。

567は捏鉢片で，法量は復元口径27.0cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁部のやや下方からわずかに外反し，口縁部は外面側の口縁端部からやや下方で角を持って屈曲し口端面をなし，口縁端部は上方へ丸みを持って仕上げる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，体部外面に成形時のロクロ目が残る。焼成は良好だがやや軟質な印象をうけ，口縁端部外面が灰色化している。胎土はやや粗く，白色粒子等の細粒が含まれている。

568は捏鉢片で，法量は復元口径24.2cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁部は外面側の口縁端部からやや下方でわずかに角を持って屈曲し口端面をなし，口端面の上端は丸みをもって仕上げ，口端面下端はわずかに突出させる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整をおこなう。焼成はおおむね良好だがやや軟質な印象をうけ，口縁端部外面が灰色化している。胎土はやや粗く，白色粒子等の小粒が多く含まれている。

569は擂鉢片で，注口部が残存する。器形は口縁部外面の口縁端部からやや下方で屈曲し口端面をなし，口端面の上端は丸みを持って仕上げ，口端面下端はわずかに突出させる。器面調整は体部外面が横位のナデ調整で注口部周辺に指頭圧痕が残り，器面の凹凸が顕著である。内面は横位のハケ目調整後にスリメを施す。スリメの1単位は現状で4本が残存する。焼成はおおむね良好である。胎土は粗く，白色粒子等の小粒が多く含まれている。

570～574は東播系須恵器鉢の底部片である。

570は擂鉢で，法量は復元底径11.1cmを測る。器形は外底面が平底を呈する。器面調整は体部外面がナデ調整で外底面は工具によるナデ調整をおこない，内面は剥落が著しいが内底面と体部の境にハケ目状の工具による調整後に1単位4本以上と思われるスリメを施し，内底面の中央付近にはナデ調整が認められる。また，体部内面には接合痕が認められ，破損状況から円盤状の底部側面から粘土紐を巻き上げている状況が確認できる。焼成はおおむね良好であるが，やや軟質である。胎土はやや粗く，1～3㎜大の白色粒子等の小粒が多く含まれている。

571は捏鉢で，法量は復元底径10.0cmを測る。器形は外底面が平底を呈する。器面調整は体部外面と内底面は不定方向のナデ調整をおこなう。焼成はおおむね良好であるが，やや軟質である。胎土はやや粗く，1～3㎜大の黒・白色粒子等の小粒が多く含まれている。

572は捏鉢で，法量は復元底径10.9cmを測る。器形は外底面が平底を呈する。器面調整は体部外面が回転ナデ調整後に不定方向のナデ調整で，外底面は不定方向のナデ調整をおこなう。内底面は回転ナデ調整後に不定方向のナデ調整をおこなう。焼成はおおむね良好であるが，やや軟質である。胎土は粗く，1～3㎜大の黒・白色粒子等の小粒が多く含まれている。

573は捏鉢で，法量は復元底径11.0cmを測る。器形は外底面が平底を呈する。器面調整は体部外面と外底面は不定方向のナデ調整をおこなう。体部内面は横位のナデ調整で，内底面は回転ナデ調整後に不定方向のナデ調整をおこなう。焼成はおおむね良好であるが，やや軟質である。胎土はやや粗く，1～2㎜大の黒・白色粒子等の小粒が多く含まれている。

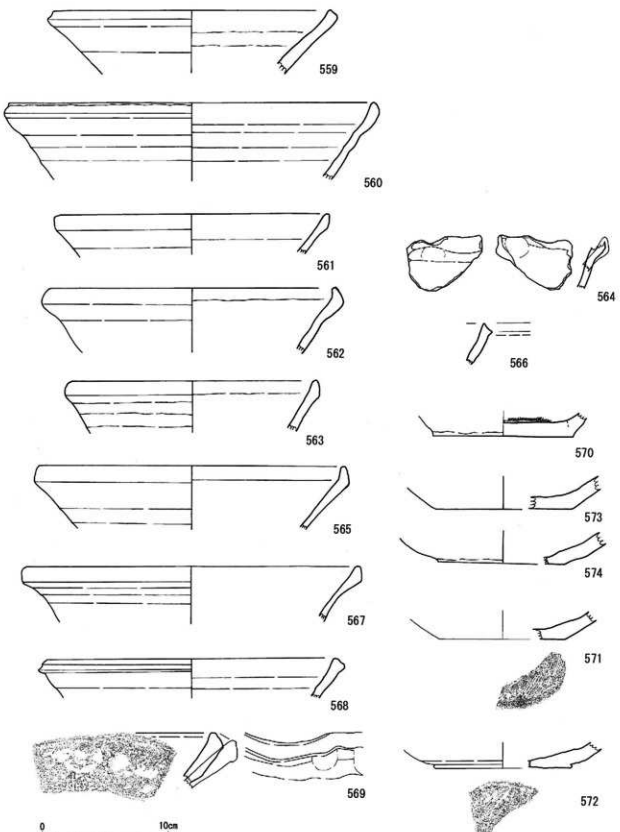
574は捏鉢で，法量は復元底径9.9cmを測る。器形は外底面が平底を呈する。器面調整は体部外面が不定方向のナデ調整で，体部内面は回転ナデ調整後に不定方向のナデ調整をおこなう。また，体部外面は残存部全体が黒色化している。焼成はおおむね良好であるが，やや軟質である。胎土はやや粗く，黒・白色粒子等の微粒が多く含まれている。

須恵器甕（575・576）

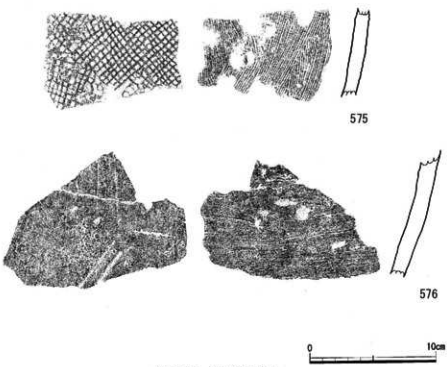
575・576は甕の胴部下半である。

575の器面調整は外面が不定方向に格子状のタタキをおこない，内面は斜・縦位のハケ目調整をおこなう。焼成は良好で硬質である。胎土はやや粗く，白色粒子等の細粒を多く含んでいる。

576の器面調整は外面が縦位の丁寧なヘラケズリで，内面は横位の粗めのヘラケズリをおこなう。焼成は良好である。胎土は粗く，1㎜以下～4㎜大の白色粒子等の小粒を多く含んでいる。



第397図　中世須恵器 1



第398図　中世須恵器2

第61表　中世須恵器観察表

掲図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	黒雲母	小石	その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第397図	559	A	Ⅳa	捏鉢	口縁～胴部	5	(23.0)	—	—	回転ナデ，回転ナデ後ナデ	回転ナデ，回転ナデ後ナデ						○	灰黄褐色	灰黄褐色	良	東播系 森田編年Ⅰ－1期
	560	I 33	表土	捏鉢	口縁～胴部	5	(29.8)	—	—	回転ナデ，回転ナデ後ナデ	回転ナデ，回転ナデ後ナデ						○	灰白色	灰白色	良	東播系 森田編年Ⅰ－1期
	561	F 37	Ⅳa	捏鉢	口縁～胴部	5	(21.8)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	明褐灰色	褐灰色	良	東播系 森田編年Ⅰ期
	562	A	表土	捏鉢	口縁～胴部	5	(23.9)	—	—	回転ナデ，回転ナデ後ナデ	回転ナデ，回転ナデ後ナデ						○	灰色	灰色	良	東播系 森田編年Ⅱ期
	563	H 36	Va	捏鉢	口縁～胴部	5	(20.3)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	褐灰色	褐灰色	良	東播系，森田編年Ⅱ期 口縁端部の黒色化
	564	J 32	Ⅳa	捏鉢	口縁部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	灰白色	灰白色	良	東播系，森田編年Ⅱ期 口縁端部の黒色化
	565	E・F 30・31	表土	捏鉢	口縁～胴部	5	(24.9)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	灰黄色	灰黄色	良	東播系，森田編年Ⅱ期 口縁端部の灰色化
	566	I 38	Ⅳa	捏鉢	口縁部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	黄灰色	黄灰色	良	東播系，森田編年Ⅰ－2期 口縁端部の灰色化
	567	I 36	Ⅳa	捏鉢	口縁～胴部	5	(27.0)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	灰白色	灰白色	良	東播系，森田編年Ⅱ期 口縁端部の灰色化
	568	A	Ⅳa	捏鉢	口縁～胴部	5	(24.2)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	灰黄色	灰黄色	良	東播系，森田編年Ⅱ期 口縁端部の黒色化
	569	A	表土	擂鉢	口縁部	破片	—	—	—	回転ナデ	ハケメ	○					○	灰黄色	黄色	良	東播系 森田編年第Ⅱ－2期
	570	J 37	Ⅳa	擂鉢	底部	5	—	(11.1)	—	工具ナデ，ナデ	ハケメ，ナデ						○	灰白色	灰白色	良	東播系
	571	K 26	表土	捏鉢	底部	5	—	(10.0)	—	ナデ	ナデ						○	灰黄色	灰黄色	良	東播系
	572	J 32	Ⅳa	捏鉢	底部	10	—	(10.9)	—	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	○					○	灰黄色	灰黄色	良	東播系
	573	K 34	表土	捏鉢	底部	5	—	(11.0)	—	ナデ	回転ナデ，ナデ						○	灰黄色	灰黄色	良	東播系
	574	J 37	Ⅳa	捏鉢	底部	5	—	(9.9)	—	ナデ	回転ナデ後ナデ						○	灰白色	褐灰色	良	東播系
第398図	575	L 32	表土	甕	胴部	破片	—	—	—	格子状タタキ	ハケメ						○	灰色	灰色	良	
	576	K 31	表土	甕	胴部	破片	—	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ						○	黄灰色	灰色	良	

＊0は復元・残存値

国内産陶器（第399図）

備前焼擂鉢（577～585）

577は口縁部から胴部の破片である。法量は復元口径31.3cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり外側へ開き，外面側の口縁端部からやや下方で内側へ屈曲し口端面をなし，口端面に強めのナデ調整によりロ端面上角を尖り気味に仕上げ，口端面下角はわずかに突出させる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で体部内面に８条のスリメが確認できる。焼成は良好で，口端面には降灰が認められる。胎土はやや粗く，１～５mm大の白色粒子等の細粒が含まれている。

578は口縁部から胴部上半部の破片である。法量は復元口径28.4cmを測る。器形はやや内傾する口縁帯を有し，口端面上角および下角はともにやや丸みをもって仕上げる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で体部内面に１単位が５条以上のスリメが確認できる。焼成は良好で硬く締まる。胎土はやや粗く，１～３mm大の白色粒子等の小粒が含まれている。

579は口縁部から胴部上半の破片である。法量は復元口径20.8cmを測る。器形は口縁帯が真上に立ち上がる。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，口縁帯にやや浅めの２条の凹線が認められる。焼成は良好で硬く締まる。胎土はおおむね精良で，白色粒子等の微粒が含まれている。

580は口縁部から胴部上半の破片である。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，口縁帯に２条の凹線と体部内面には２条のスリメを確認できるが，破片のため全体の条数は不明である。焼成は良好で硬く締まり，口縁部外面は口縁帯と体部で色調差が認められる。胎土は精良で，白色粒子等の微粒がわずかに含まれている。

581は注口部である。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で口縁帯に２条の凹線が認められる。焼成は良好で硬く締まる。胎土はおおむね精良で，白色粒子等の微粒が含まれている。

582は口縁部から胴部上半が残存する。器形は口縁帯がやや内傾し立ち上がり，口縁端部は口端内面に面取りをおこない，口端からやや下方に稜線をもたせ，口端は尖り気味となっている。器面調整は体部内外面ともに回転ナデ調整で，口縁帯に２条の凹線が認められ，体部内面には１単位６条のスリメが認められる。焼成は良好で硬く締まる。胎土はおおむね精良で，白色粒子等の微粒が含まれている。

583は底部片である。法量は復元底径13.2cmを測り，器形は体部が曲線的に立ち上がり，丸みを帯びる。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，外底面はナデ調整をおこなう。内面は体部が回転ナデ調整後に１単位が７条のスリメを施し，内底面はナデ調整をおこなう。焼成はおおむね良好である。胎土は粗く，１～３mm大の白色粒子等の小粒が多く含まれている。

584は底部片である。法量は復元底径10.6cmを測る。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，外底面は不定方向のナデ調整をおこなう。内面は体部を回転ナデ調整後に６条で１単位のスリメを施し，内底面はナデ調整をおこなう。焼成はおおむね良好である。胎土はやや粗く，白色粒子等の細粒が多く含まれている。

585は底部片である。器形は体部が直線的に立ち上がる。器面調整は体部外面が回転ナデ調整で，外底面はナデ調整をおこなう。内面は体部が回転ナデ調整後に体部から底部にかけてスリメを施し，14条が残存するが１単位は不明である。焼成はおおむね良好である。胎土はおおむね精良で，白・黒色粒子等の微粒が含まれている。

備前焼壺（586）

586は胴部片で底部がわずかに確認できる。法量は復元底径10.0cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，丸みを帯びている。器面調整は体部内外面が回転ナデ調整で，その後に体部外面に斜位のナデ調整が認められる。焼成は良好で体部外面に黒斑が認められる。胎土はおおむね精良で，白・黒色粒子等の微粒が含まれている。

瀬戸・美濃系陶器皿（587）

587は皿の底部片である。器形は底部が平底で外面の底部と体部の境に段が認められる。体部内外面に灰釉を施し，内底面は露胎で体部との境は環状に錆色化が認められ，外底面は露胎で体部との境が環状に剥離しており，焼着した環状の窯道具から取り外した痕跡と思われる。

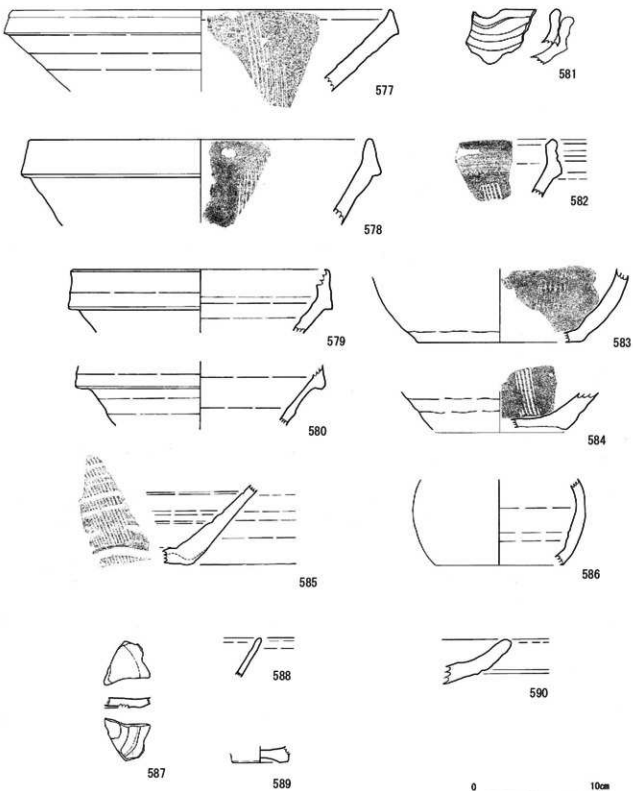
瀬戸・美濃系陶器碗（588・589）

588は天目茶碗または平碗で，口縁部から体部上半が残存する。器形は体部が直線的に立ち上がる。器面調整は口縁端部よりやや下方を強めのナデ調整をおこない，端部は丸くおさめる。焼成は良好で，内外面ともに黒色釉を施釉する。胎土はおおむね精良で，軟質である。

589は天目茶碗または平碗で，口縁部から体部上半が残存する。法量は復元高台径4.4cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がる。器面調整は口縁端部よりやや下方を強めのナデ調整をおこない，端部は丸めにおさめる。焼成は良好で，内外面ともに黒色釉を施釉する。胎土はおおむね精良で，軟質である。

陶器鉢（590）

590は平鉢で，口縁部から体部の破片である。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整で，体部外面中位に１条の沈線を施す。焼成はおおむね良好で内面に降灰と思われる付着物が認められる。胎土は粗く，多くの砂粒が含まれている。産地不明で近世の可能性もある。



第399図　国内産陶器

第62表　国内産陶器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm)			調整		胎土						色調		焼成	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第399図	577	J32	Ⅳa	擂鉢	口縁～胴部	5	(31.3)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	備前焼 間壁ⅣA期
	578	—	表土	擂鉢	口縁～胴部	破片	(28.4)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	備前焼 間壁ⅣB期
	579	F31	表土	擂鉢	口縁～胴部	破片	(20.8)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	褐灰色	褐灰色	良	備前焼，間壁Ⅴ期 凹線2条あり
	580	E31	Ⅴa	擂鉢	口縁～胴部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	灰色・橙色	灰色・橙色	良	備前焼 間壁Ⅴ期
	581	F31	表土	擂鉢	注口部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	紫灰色	黄灰色	良	備前焼 凹線2条あり
	582	E～G31	遺構内	擂鉢	口縁～胴部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	褐灰色	褐灰色	良	備前焼，間壁編年Ⅴ期 凹線2条あり 近世古道内出土
	583	M27	表土	擂鉢	底部	5	—	(13.2)	—	回転ナデ，ナデ	回転ナデ						○	にぶい赤褐色	褐灰色	良	備前焼
	584	F31	表土	擂鉢	底部	10	—	(10.6)	—	回転ナデ，ナデ	回転ナデ後ナデ						○	橙色	橙色	良	備前焼
	585	L31	表土	擂鉢	胴部～底部	破片	—	—	—	回転ナデ，ナデ	回転ナデ						○	にぶい褐色	橙色	良	備前焼
	586	J・K32・33	遺構内	壺	胴部	5	—	(10.0)	—	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	○					○	にぶい赤褐色	褐灰色	良	備前焼 古墳時代竪穴建物内出土
	587	A	表土	皿	底部	破片	—	—	—	—	—						○	黄褐色	黄褐色	やや不良	瀬戸・美濃系 窯道具痕，貫入あり
	588	J32	表土	碗	口縁部	破片	—	—	—	—	—						○	オリーブ黒色	オリーブ黒色	良	瀬戸・美濃系 天目茶碗または平碗
	589	A	表土	碗	底部	破片	—	高台径4.4	—	—	—	○					○	灰白色	赤黒色	良	瀬戸・美濃系 天目茶碗または平碗
	590	D31	Ⅳa	平鉢	口縁部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	にぶい赤褐色	褐灰色	良	沈線1条あり，降灰の付着 近世の可能性あり

＊()は復元・残存値

青磁（第401～403図）

同安窯系青磁（591～597）

青磁皿（591～593）

591は1/2が残存する。法量は口径10.0cm，底径5.2cm，器高2.1cmを測る。器形は上げ底気味の底部から直線的に体部が開き，体部中位やや下方で屈曲し，体部上半は外反させ，口縁端部は薄く尖らせる。内底面にはヘラ描き文とジグザグ状の櫛点描を施す。内外面ともに施釉され，外底面のみ露胎とし，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で，黒色粒子がわずかに含まれている。

592は1/6が残存する。法量は復元口径9.7cm，復元底径5.4cm，器高2.4cmを測る。**591**と同一の製品で，釉調のみオリーブ黄色で相違する。

593は底部片である。法量は復元底径4.6cmを測る。器形は上げ底気味の底部を呈する内底面にヘラ描き文とジグザグ状の櫛点描を施す。釉は内外面ともに施され，腰部から外底面を露胎とする。釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で，黒色粒子がわずかに含まれている。

青磁碗（594～599）

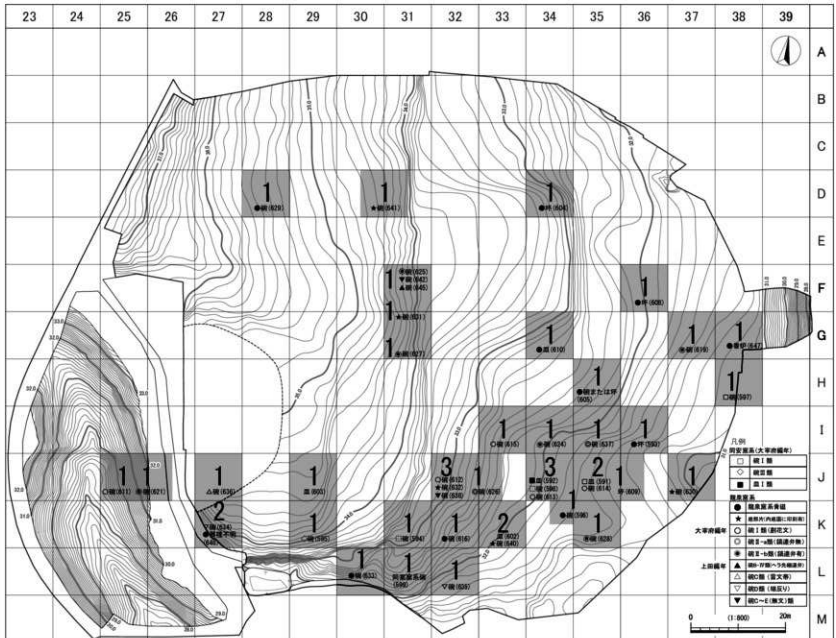
594は口縁部片である。器形は体部がやや内湾気味で，口縁端部はやや尖らせる。体部外面に粗めの櫛目文，内面には横方向に並行して２本のヘラ描きが認められる。釉は内外面ともに施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

595は口縁部片である。器形は口縁部がわずかに外反し，口縁端部はやや尖らせ気味におさめる。体部外面に粗めの櫛目文，内面にはヘラ描き文を施し，口縁部やや下方に沈線1条が認められる。釉は内外面ともに施され，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で，黒色粒子がわずかに含まれている。

596は口縁部片で，器壁が薄いことから小碗または坏の可能性がある。器形は口縁部が外反し，口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面の屈曲部に１条の沈線を巡らし，体部外面に細い櫛目文を施す。釉は内外面ともに施され，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

597は腰部片である。外面に細かい縦の櫛目文，内面にはヘラ描き文とジグザグ状の櫛点描を施す。釉は内外面ともに施され，外面の腰部下半は露胎で，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で，黒色粒子がわずかに含まれている。

598は腰部片である。外面にやや粗めの櫛目文，内面にはやや細めの櫛目文を施す。釉は内外面ともに施され，外面の腰部下半は露胎で，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土はおおむね精良だが，色調が胎土内で相違しており，腰部外面から底部にかけて橙色，腰部上半と内面が灰白



第400図　青磁分布図

Vα層コンタ図

色を呈する。

599は底部が残存する。法量は高台径5.0cmを測る。器形は高台部の外面が直立し，内面は斜め方向にケズリだされており，断面は逆台形状を呈する。外底面はケズリ出しにより中央付近が突き出る兜巾状を呈する。外面体部はわずかに櫛目文が残り，内底面の体部との境には1条の沈線を施す。釉は内面と外面体部の腰部まで施され，高台および外底面は露胎である。釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で，黒色粒子がわずかに含まれている。

龍泉窯系青磁（600～648）

青磁皿（600～603）

600は口縁部から腰部の破片である。法量は復元口径11.1cmを測る。器形は体部が丸く立ち上がり，口縁端部はやや尖り気味におさめる。内底面に工具による界線と文様が認められる。釉は残存部の全面に施され，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で，黒色粒子がわずかに含まれている。

601は底部片である。法量は復元底径3.5cmを測る。器形は底部がやや上げ底である。釉は全面に施釉後に底部の釉を掻きとっている。釉調は灰黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

602は口縁部から腰部の破片である。器形は口縁部が外反し，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。内面の体部下半に２条の界線と思われる沈線状の施文が認められる。釉は内面から口縁部外面までかけられ，体部外面は露胎となっている。釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。産地は龍泉窯系と思われるが，白磁の可能性もあり，また大宰府編年の青磁・白磁の中にも該当するものがなく，明確に判別することはできていない。

603は口縁部から腰部の破片である。法量は復元口径13.8cmを測る。器形は体部が丸く立ち上がり，口縁部で外反し，口縁端部はやや尖り気味におさめる。体部外面にロクロ目が残る。釉は残存部の全面に施され，釉調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。龍泉窯系としているが時期や産地は明確に判別できていない。

青磁坏（604～610）

604は口縁部から腰部の破片である。法量は復元口径14.6cmを測る。器形は体部が丸く立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。釉は残存部の全面に施され，釉調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子が含まれている。

605は口縁部片である。器形は口縁部で外反し，口縁端部は丸くおさめる。体部が外側へやや開くことから坏としたが，碗の可能性もある。釉は残存部の全面に施され，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

606は底部片である。法量は復元高台径7.6cmを測る。高台は低く断面形状が方形を呈する。釉は内底面が施釉後に環状に釉を掻き取り，外底面は体部外面から高台畳付まで施釉する。釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子が含まれている。

607～609は体部外面に連弁文を有する口縁部片である。器形は丸みのある体部で，口縁部をほぼ水平に屈曲させ口折れとし，口縁上端は平坦面を成し，口縁端部は丸くおさめる。釉は残存部の全面に施され，釉調は607が灰オリーブ色，608・609がオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

610は底部片である。法量は復元高台径5.8cmを測る。器形は体部が腰部を「く」の字状に屈曲させ，斜め上方に立ち上がる腰折れの形状で，高台は低く断面形状が方形を呈する。釉は内底面と体部から高台内面まで施釉が認められ，外底面は環状に釉を掻き取る。釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で白色粒子等が含まれている。

青磁碗（611～645）

611は口縁部片である。法量は復元口径17.2cmを測る。器形は体部が直線的に開き，口縁端部は直口となる。体部内面に櫛目等の工具によって分割線を施す。釉は体部内外面に施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

612は口縁部片である。器形は口縁端部を丸くおさめる直口となる。体部内面は片彫りにより施文するが文様は不明である。釉は体部内外面に施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

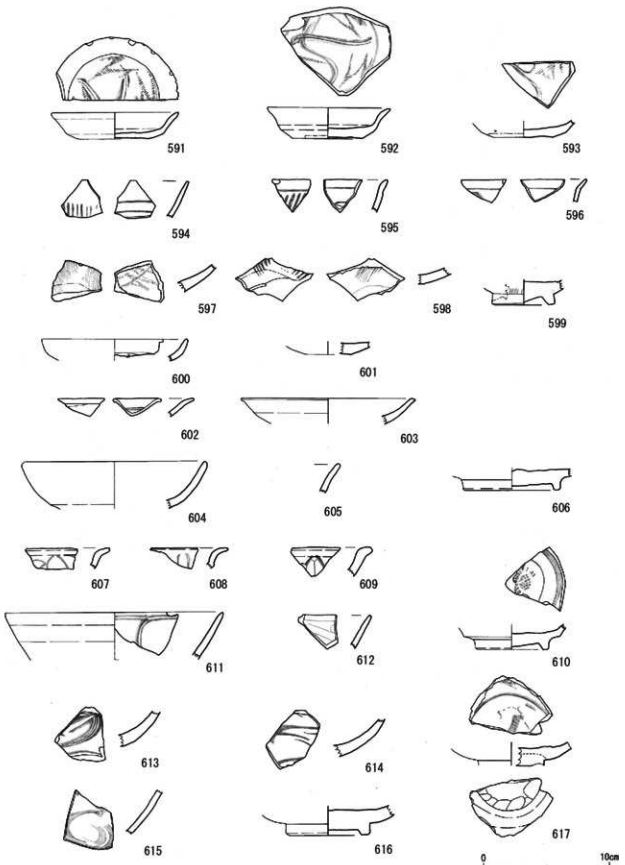
613は腰部片で，体部内面に片彫りの連花文，内底面に界線を施す。釉は体部内外面に施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

614は体部片で，体部内面に片彫りの連花文を施す。釉は体部内外面に施され，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

615は体部片で，体部内面に片彫りの連花文を施す。釉は体部内外面に施され，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

616は底部片である。法量は復元底径6.7cmを測る。器形は腰部が張り，底部は内部の抉りが浅く肉厚で，高台は低く断面形状が方形を呈する。釉は体部内面と体部外面から高台外面まで施され，外底面には釉垂れによる溜着物が認められる。釉調は淡黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

617は底部片である。器形は体部と高台部の端部が人


591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
0
10cm

第401図　青磁 1

為的に打欠かれたと思われ，不明である。内面は櫛目文を施す。釉は体部内面と体部外面から高台外面まで施され，外底面は露胎となっている。釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は体部と底部で色調が相違しており，高台脇から底部高台にかけて灰黄色，体部と内底面が灰白色を呈する。

618～621・623～629 は体部外面に連弁文を有する破片である。

618～621・623は口縁部から胴部片である。

618の器形は体部がやや丸みをもって立ち上がり，口縁部は直口をなし，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。体部に焼成前の箆孔が認められる。釉は体部内外面ともに施され，釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

619の器形は口縁部でわずかに外反し，口縁端部は丸くおさめる。釉は体部内外面ともに施され，釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

620の器形は口縁部でわずかに外反し，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。釉は体部内外面ともに施され，釉調は青みがかった灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

621の器形は口縁部でわずかに外反し，口縁端部は丸くおさめる。釉は体部内外面ともに施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

623の器形は口縁部が直口をなし，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。釉は体部内外面ともに施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

624～629は体部から底部片である。

624は体部下半の破片である。器形は体部がやや丸みをもって立ち上がる。釉は体部内外面ともに施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

625は体部下半から底部の破片である。法量は高台径5.2cmを測る。器形は高台が低く，断面逆台形状を呈し，体部はやや丸みを持って立ち上がる。内底面には片彫りまたは印刻の列点文が円形に施されている。釉は体部内外面ともに施され，高台畳付から内底面は露胎となっている。釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土の色調は体部と高台部で相違しており，体部が灰白色，高台部がにぶい黄橙色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

626は体部下半から底部の破片である。法量は復元高台径5.6cmを測る。器形は高台が低く，断面逆台形状を呈し，体部はやや丸みを持って立ち上がる。釉は体部内外面ともに施され，高台畳付から内底面は露胎となっている。釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は精良で，黒色粒子が含まれている。胎土の色調は灰黄色で，露胎となる外底面は赤褐色を呈する。

627は高台脇から底部の破片である。法量は復元高台径6.0cmを測る。器形は高台が低めで，直立する高台の外面端部を斜めに面取りし，高台畳付も平坦に仕上げる。釉は体部内外面から高台内まで施され，内底面は露胎となっている。釉調は緑色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

628は体部下半から底部の破片である。法量は復元高台径5.1cmを測る。高台が断面方形を呈し，体部がやや丸みを持って立ち上がる。釉は体部内外面ともに施され，高台内から内底面は露胎となっている。釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子が含まれている。

629は胴部片で，青磁としているが白磁の可能性もあり，明確に判別できなかった。器面調整は体部外面には文様と思われる片彫り痕と縦方向に幅広の櫛目状の工具痕が認められる。片彫りは幅広の連弁文とも思われるが小片のため不明である。釉は体部内外面ともに施され，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

630～632は底部片で，底部の高台断面が方形や逆台形で高台内の刳りが浅く肉厚な形状を呈する。

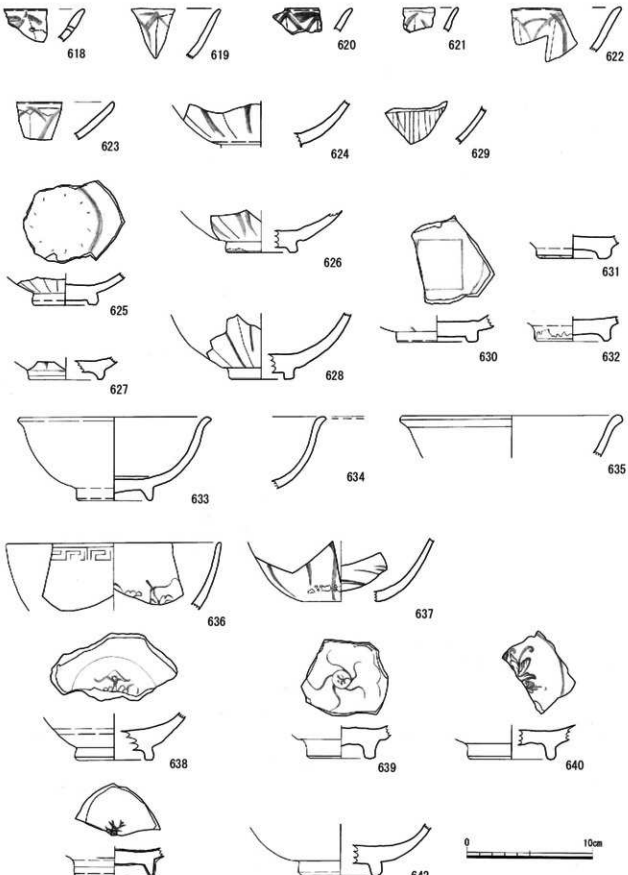
630は法量が復元高台径6.4cmを測る。高台は内部の抉りがかなり浅く断面が方形で高台畳付内外面の角と端部の面取りをおこなう。体部外面に片彫りの痕跡が認められ，連弁の一部と思われるが欠損のため明確ではない。また内底面には方形枠の印刻が認められるが，枠内には文字や文様は確認できない。釉は内面と体部外面から高台外面まで施され，高台畳付から内底面は露胎で，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は精良で黒色粒子をわずかに含み，色調は体部と高台部で相違しており，体部が灰黄色，高台部が灰白色を呈する。

631は復元高台径5.8cmを測る。高台が断面逆台形で高台畳付外面の角と端部の面取りをおこない，高台内面を斜めに削り出している。釉は内面と体部外面から高台外面まで施され，高台畳付から内底面は露胎で，釉調はにぶい黄色を呈する。胎土は浅黄橙色を呈し，精良で黒色粒子が含まれている。

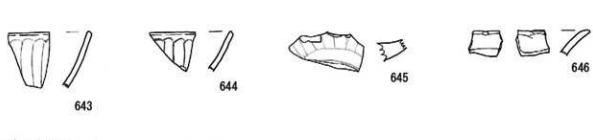
632は法量が復元高台径6.0cmを測る。高台が断面逆台形で高台畳付内外面の角に面取りをおこない，高台内面を斜めに削り出している。釉は内面と体部外面から高台外面まで施され，高台畳付から内底面は露胎で，釉調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子が含まれている。

633～637は口縁部が外反する碗である。

633は1/5が残存する。法量は復元口径15.2cm，復元高台径6.0cm，器高6.6cmを測る。器形は高台が「ハ」の字状にやや開き，端部は丸くおさめ，体部は曲線的に立ち


618
619
620
621
622
623
624
629
625
626
631
627
628
630
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
0
10cm

第402図　青磁２



第403図　青磁３

上がり，口縁部は外反し，口縁端部は丸くおさめる。内底面に浅い沈線状の凹みが認められる。釉は内面から高台畳付まで施され，高台内面から内底面は露胎で，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

634は口縁部から高台脇の破片である。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁部は外反し，口縁端部は丸くおさめる。釉は体部内外面に施され，釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

635は法量が復元口径17.6cmを測る。口縁部から体部上半の破片である。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁部は外反し，口縁端部はやや厚みがあり丸くおさめる。釉は体部内外面に施され，釉調は緑色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

636は口縁部から体部下半が残存する。法量は復元口径17.0cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁部は直口で，口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面に雷文帯，内面には草花文を施す。釉は体部内外面に施され，釉調は緑色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子がわずかに含まれている。

637は胴部片で，器形は体部が曲線的に立ち上がり，体部外面に幅広の連弁文を片彫りで施す。内面にも片彫りで文様と思われる痕跡が認められるが欠損により明確ではない。釉は体部内外面に施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は褐灰色を呈し，精良で白・黒色粒子がわずかに含まれている。

638～642は底部片で，638～641は内底面に印刻を施すもので，642は無文である。

638は法量が復元高台径6.2cmを測る。器形は高台が断面逆台形状で，高台外面は面取りにより竹節状を呈し，高台畳付は平坦面を成し，高台内面は直立気味に成形される。体部は曲線的に立ち上がる形状を呈する。体部外面にはロクロ目が残り，内底面に草花文の印刻を施す。釉は内面と体部外面から高台内面まで施され，内底面は露胎で，釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で白色粒子が含まれている。

639は高台径5.4cmを測る。器形は高台が高めで断面方形状を呈し，高台畳付は平坦面を成し，外底面は成形時の削り出しにより中央部が兜巾状を呈する。内底面の中央部に「太」の字状を配する花文状の印刻を施す。釉は内面と体部外面から高台内面途中まで施され，内底面は露胎で，釉調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は精良で白色粒子を含み，色調は体部が灰白色で，外面の露胎部は褐色を呈する。

640は法量が復元高台径6.9cmを測る。器形は高台が高台畳付外面の面取りをおこなうことで，高台畳付はやや尖り気味に丸くおさめ，外底面の中央部はわずかに突出して兜巾状を呈する。内底面に草花文の印刻を施す。釉は全面に施釉後に外底面の釉を環状に掻き取る。釉調は緑色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒・白色粒子が含まれている。

641は法量が復元高台径6.4cmを測る。器形は高台が高台畳付外面の面取りをおこなうことで，高台畳付はやや尖り気味に丸くおさめ，内底面の中央部はわずかに盛り上がり，外底面の中央部はわずかに突出して兜巾状を呈する。内底面に草花文の印刻を施す。釉は全面に施釉後に外底面の釉を環状に掻き取り，中央に砂の付着が認められる。釉調は緑色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒・白色粒子が含まれている。

642は法量が復元高台径6.5cmを測る。器形は高台外面

が面取りにより竹節状を呈し，高台畳付は狭小な平坦面を成す。釉は内面と体部外面から高台外面まで施され，高台畳付から内底面は露胎となっており，釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土はにぶい黄橙色を呈し，やや粗く，黒・白色粒子が含まれている。

643～645はヘラ先による細線の線描連弁文を有する。

643・644は口縁部から体部下半の破片である。器形は体部がやや丸みを持って立ち上がる。体部外面に線描連弁文を施す。釉調は**643**が明るめのオリーブ灰色，**644**は暗めのオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で白色粒子が含まれている。

645は体部下半の破片である。器形は体部に丸みのある形状を呈する。体部外面に連弁の細線が認められる。釉は内外面に施され，釉調は緑色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で白色粒子が含まれている。

青磁稜花皿（646）

646は口縁部片で，口縁端部に稜をもつ稜花皿である。内外面に線刻が認められる。釉は内外面に施され，釉調は灰オリーブ色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや粗い。

青磁香炉（647）

647は香炉の口縁部片で，体部外面に突帯状の突出部を削り出し，竹節状の器面を呈する。釉は内外面に施され，釉調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子が含まれている。

青磁不明品（648）

648は器種不明の青磁または青白磁である。

器形は平面形が円形を呈し，底面は平坦面を成す。釉は内外面に施され，底面は露胎で砂が付着する。釉調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は精良で黒色粒子を含み，色調は灰白色で，露胎部はにぶい橙色を呈する。残存状況から箇状また透かしの入る蓋や置物等が想定される。

第63表　青磁観察表 1

種別	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	露胎	焼成	貫入	発色	色調 胎土	色調 釉薬	分類	備考
第401図	591	J 35	Ⅲ	皿	口縁～底部	50	10.0	5.2	2.1	外面の底部	良	有	有	灰白色	灰白色	大宰府編年 Ⅰ－2類	同安窯系 内底面：ヘラ描き文，鶴点描
	592	J 34	Ⅳ a	皿	胴部～底部	40	(9.7)	5.4	(2.4)	外面の体部下半以下	良	有	有	灰白色	オリーブ黄色	大宰府編年 Ⅰ－1類	同安窯系 内底面：ヘラ描き文，鶴点描
	593	I 36	Ⅳ a	坏	底部	5	－	(4.6)	－	外面の底部下半以下	良	有	有	灰白色	オリーブ黄色	大宰府編年 Ⅰ－1類	同安窯系 内底面：ヘラ描き文，鶴点描
	594	K31	表土	碗	口縁部	－	－	－	－	－	良	有	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 Ⅰ－1類	同安窯系 外面：櫛目文，内面：ヘラ描き文
	595	K29	Ⅳ a	碗	口縁部	－	－	－	－	－	良	有	有	灰白色	オリーブ黄色	大宰府編年 龍泉	同安窯系 外面：櫛目文，内面：ヘラ描き文
	596	J・K 34・35	表土	碗	口縁～胴部	－	－	－	－	－	良	無	有	灰白色	オリーブ黄色	－	同安窯系 外面：櫛目文
	597	H38	Ⅳ a	碗	体部	－	－	－	－	外面の櫛部～底部	良	無	有	灰白色	オリーブ黄色	大宰府編年 Ⅰ－1類	同安窯系，外面：櫛目文 内面：ヘラ描き文，鶴点描
	598	J 34	Ⅳ a	碗	体部	－	－	－	－	外面の櫛部～底部	良	有	有	灰白色／橙色	オリーブ黄色	大宰府編年 Ⅰ－1類	同安窯系 内外面：櫛目文
	599	L31	表土	碗	底部	20	－	高台径 5.0	－	外面の体部下半以下	良	無	有	灰白色	オリーブ黄色	－	同安窯系 外面：櫛目文
	600	J 35～38	表土	皿	口縁～胴部	－	(11.1)	－	－	－	良	無	有	灰白色	オリーブ黄色	－	龍泉窯系 内底面：界線，文様あり
	601	J 35～38	表土	皿	底部	10	－	(3.5)	－	外底面	良	有	有	灰白色	灰黄色	大宰府編年 Ⅰ－2類	龍泉窯系
	602	K33	表土	皿	口縁～胴部	－	－	－	－	外面体部	良	無	有	灰白色	オリーブ黄色	－	龍泉窯系 内面：界線
	603	J 29	V a	皿	口縁～胴部	－	(13.8)	－	－	－	良	無	有	白色	明オリーブ灰色	－	龍泉窯系
	604	D34	表土	坏	体部	－	(14.6)	－	－	－	良	無	有	灰白色	明オリーブ灰色	大宰府編年 Ⅲ－5類	龍泉窯系
	605	H35	V a	碗または坏	口縁部	－	－	－	－	－	良	有	有	灰白色	オリーブ黄色	－	龍泉窯系
	606	A	表土	坏	底部	10	－	高台径 (7.6)	－	内底面・外底面	良	有	有	灰白色	オリーブ灰色	－	龍泉窯系
	607	A	表土	坏	口縁～胴部	－	－	－	－	－	良	有	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 Ⅲ・Ⅳ類	龍泉窯系 外面：連弁文
	608	F36	表土	坏	口縁～胴部	－	－	－	－	－	やや良	有	無	灰白色	オリーブ灰色	大宰府編年 Ⅲ・Ⅳ類	龍泉窯系 外面：連弁文
	609	J 35・36	表土	坏	口縁～胴部	－	－	－	－	－	良	無	有	灰白色	オリーブ灰色	大宰府編年 Ⅲ・Ⅳ類	龍泉窯系 外面：連弁文

＊()は復元・残存値

第64表　青磁観察表２

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	露胎	焼成	貫入	発色	色調 胎土	釉薬	分類	備考
第401図	610	G34	遺構内	坏	底部	5	—	高台径 (5.8)	—	外底面	良	有	有	灰白色	オリーブ灰色	—	龍泉窯系、内底面:草花文印刻 溝5内出土
	611	J25	遺構内	碗	口縁～胴部	5	(17.2)	—	—	—	良	無	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 I－4類	龍泉窯系、内面：分割線あり 近世古道内出土
	612	J32	表土	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	無	弱	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 I・II類	龍泉窯系 内面：文様あり
	613	J34	表土	碗	胴部	—	—	—	—	—	良	有	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 I・II類	龍泉窯系 外面：連花文、内面：界線
	614	J35	III	碗	胴部	—	—	—	—	—	良	無	有	灰白色	オリーブ黄色	大宰府編年 I・II類	龍泉窯系 内面：連花文
	615	I33	IVa	碗	胴部	—	—	—	—	—	良	無	有	灰白色	オリーブ黄色	大宰府編年 I・II類	龍泉窯系 内面：連花文
	616	K32	攪乱	碗	底部	20	—	(6.7)	—	外底面と高台畳付	良	無	弱	灰白色	浅黄色	大宰府編年 I・II類	龍泉窯系 外面に溶着物あり
	617	A	表土	碗	腰部～底部	15	—	—	—	外底面	良	有	弱	灰白色	灰オリーブ色	—	龍泉窯系、高台打ち欠き 内面：櫛目文
第402図	618	I35～37	表土	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	有	有	灰白色	オリーブ灰色	大宰府編年 II－b・c類	龍泉窯系、穿孔1カ所あり 外面：鎬連弁文
	619	G37	IVa	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	有	弱	灰白色	オリーブ灰色	大宰府編年 II－b・c類	龍泉窯系 外面：鎬連弁文
	620	A	表土	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	無	有	灰白色	灰白色	大宰府編年 II-b･c･III-2類	龍泉窯系 外面：鎬連弁文
	621	J25-26	遺構内	碗	口縁部	—	—	—	—	—	良	有	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 II－b類	龍泉窯系、外面：鎬連弁文 近世溝内出土
	622	D12-13	表土	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	有	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 II－b・c類	龍泉窯系、外面：鎬連弁文 C区出土遺物
	623	H36～38	表土	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	無	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 II－b・c類	龍泉窯系 外面：鎬連弁文
	624	I34	IVa	碗	体部	—	—	—	—	—	良	有	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 II－b・c類	龍泉窯系 外面：鎬連弁文
	625	F31	表土	碗	底部	40	—	高台径 5.2	—	外底面～高台畳付	良	有	有	灰白色	灰オリーブ色	大宰府編年 II－c類	龍泉窯系、外面：鎬連弁文 内底面:列点文
	626	J32-33	表土	碗	体部～底部	30	—	高台径 (5.6)	—	外底面～高台畳付	良	有	有	灰黄色	灰オリーブ色	大宰府編年 II－b類	龍泉窯系 外面：鎬連弁文
	627	G31	IVa	碗	底部	5	—	高台径 (6.0)	—	外底面	良	無	有	灰白色	緑色	大宰府編年 II類	龍泉窯系 外面：連弁文か
	628	K35	遺構内	碗	胴部～底部	20	—	高台径 (5.1)	—	高台内	良	有	弱	灰白色	オリーブ灰色	大宰府編年 II－b類	龍泉窯系、外面：鎬連弁文 近世土坑内出土
	629	D28	IVa	碗	体部	5	—	—	—	—	良	有	弱	灰白色	灰白色	—	龍泉窯系、白磁の可能性あり 体部外面：片彫連弁文か
	630	J37	IVa	碗	底部	10	—	高台径 (6.4)	—	外底面～高台畳付	良	無	弱	灰黄色	灰白色	大宰府編年 I・II類	龍泉窯系　外面:連弁文か 内面:方形の印刻
	631	F・G31	表土	碗	底部	10	—	高台径 (5.8)	—	外底面～高台畳付	良	有	弱	浅黄橙色	にぶい黄色	大宰府編年 I・II・IV類	龍泉窯系
	632	J32	表土	碗	底部	5	—	高台径 (6.0)	—	外底面～高台畳付	良	有	弱	灰白色	オリーブ黄色	大宰府編年 I・II・IV類	龍泉窯系
	633	L30	表土	碗	口縁～底部	20	(15.2)	高台径 (6.0)	(6.6)	外底面 ～高台内途中	良	無	弱	灰白色	灰オリーブ色	上田編年 D－II類	龍泉窯系
	634	K27	Va	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	有	弱	灰白色	オリーブ灰色	上田編年 D－II類	龍泉窯系
	635	L32	表土	碗	口縁～胴部	5	(17.6)	—	—	—	良	有	有	灰白色	緑色	上田編年 D－II類	龍泉窯系
	636	J27	Va	碗	口縁部	5	(17.0)	—	—	—	良	有	有	灰白色	緑色	上田編年 C－II類	龍泉窯系 外面:雷文帯、内面:草花文
	637	I35	IVa	碗	体部～底部	—	—	—	—	—	良	無	有	褐灰色	灰オリーブ色	大宰府編年 II－a・IV類	龍泉窯系、外面:連弁文 内面:文様あり、砂の付着
	638	J32	IVa	碗	体部～底部	15	—	高台径 (6.2)	—	外底面	良	無	弱	灰白色	オリーブ灰色	上田編年 D・E類	龍泉窯系 内面:草花文の印刻
	639	A	表土	碗	底部	20	—	高台径 5.4	—	外底面 ～高台内途中	良	無	弱	灰白色	明オリーブ灰色	上田編年 B－II・C・D類	龍泉窯系 内面:「太」の字・草花文の印刻
	640	K33	表土	碗	底部	5	—	高台径 (6.9)	—	外底面を環状に 釉の掻き取り	良	有	有	灰白色	緑色	—	龍泉窯系 内面：草花文の印刻
	641	D30-31	表土	碗	底部	11	—	高台径 (6.4)	—	高台内	良	有	有	灰白色	緑色	上田編年 B－II類	龍泉窯系 内面：草花文の印刻
	642	F31	VI	碗	体部～底部	20	—	高台径 (6.5)	—	外底面～高台畳付	良	有	弱	にぶい黄色橙色	オリーブ灰色	上田編年 D－II・E類	龍泉窯系
第403図	643	I35～38	表土	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	有	有	灰白色	オリーブ灰色	上田編年 B－IV類	龍泉窯系 外面：線描連弁文
	644	J35～38	表土	碗	口縁～胴部	—	—	—	—	—	良	無	有	灰白色	オリーブ灰色	上田編年 B－IV類	龍泉窯系 外面：線描連弁文
	645	F31	表土	碗	体部	—	—	—	—	—	良	有	有	灰白色	緑色	上田編年 B－IV類	龍泉窯系 外面：線描連弁文
	646	A	表土	皿	口縁部	—	—	—	—	—	良	有	弱	灰白色	灰オリーブ色	—	龍泉窯系、稜花皿 内外面：線刻あり
	647	G38	Va	香炉	口縁部	—	—	—	—	—	良	無	有	灰白色	オリーブ灰色	—	龍泉窯系
	648	K27	IVa	不明	底部か	—	—	—	—	底部	良	有	有	灰白色	明オリーブ灰色	—	龍泉窯系、青白磁の可能性あり 蓋・置物か

＊( )は復元・残存値

白磁（第405・406図）

白磁皿（649～664）

649は口縁部から腰部までが残存する。法量は復元口径10.0cmを測る。器形は胴部が直線的に広がり，口縁部付近が分厚くなる。内面の腰部と胴部の境には横位の沈線を巡らせる。釉は内面と外面の腰部と胴部の境付近まで施した後，残存はわずかであるが，内底面の釉を環状に掻き取っている可能性がある。釉調は灰白色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質でわずかに気泡を含む。

650は口縁部から胴部下半までが残存する。器形は胴部が緩やかに内湾して立ち上り，口縁部は直口縁を呈する。釉は残存部の全面に施し，釉調は灰白色を呈し，口縁部外面には釉垂れが認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

651は口縁部から腰部までが残存する。法量は復元口径9.4cmを測る。器形は腰部で屈曲して立ち上り，口縁部が外反する。内面の屈曲部には段が認められる。釉は残存部の内外面に施した後，内底面の釉を掻き取っているため，残存はわずかであるが，内底面の釉を環状に掻き取っている可能性がある。釉調は灰白色を呈し，表面には貫入や釉がちぢれた部分が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質でわずかに黒色粒を含む。

652は口縁部から腰部までが残存する。法量は復元口径12.0cmを測る。器形は腰部で屈曲して立ち上り，口縁部が外反する。釉は内面と外面の腰部まで施し，釉調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で精良である。

653は口縁部から腰部までが残存する。器形は腰部で緩やかに屈曲して立ち上がり，口縁部が外反する。内面の屈曲部には横位の沈線を巡らせる。釉は内面と外面の体部上半に施し，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

654は口縁部から胴部上半までが残存する。法量は復元口径11.4cmを測る。器形は口縁端部がわずかに外反し，その下には突帯状の段が認められる。釉は残存部の全面に施し，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒をわずかに含む。

655は口縁部から腰部までが残存する。法量は復元口径8.2cmを測る。器形は体部が内湾して立ち上がり，口縁部は直口縁を呈する。釉は内面と外面の腰部付近まで施され，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

656は腰部から底部までが残存する。法量は底径3.2cmを測る。器形は底部が平底で小さく，体部は直線的に開く。釉は残存部では内面のみに施され，釉調は浅黄色を呈し，表面に貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で精良である。

657は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径5.6cmを測る。器形は高台部が低く逆台形状を呈し，底部は中央が分厚くなる。釉は内面と外面の腰部まで施した後，内底面の釉は回転台を利用せずに環状に掻き取っている。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

658は胴部下半から底部までが残存する。法量は復元底径6.8cmを測る。器形は底部が平底で体部は直線的に立ち上がり，内底面と腰部の境には沈線状の段が認められる。釉は残存部の全面に施し，特に底部外面は板状工具で釉をのばしている。釉調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質でわずかに黒色粒を含む。

659は腰部から底部までが残存する。法量は復元底径6.2cmを測る。器形は底部が平底で，体部が強く屈曲して立ち上がる。内底面と腰部の境には沈線状の段が認められる。釉は残存部の全面に施し，特に底部外面は板状工具で釉をのばしている。釉調は浅黄色を呈する。胎土はにぶい黄橙色を呈し，陶器質で黒色粒を含む。

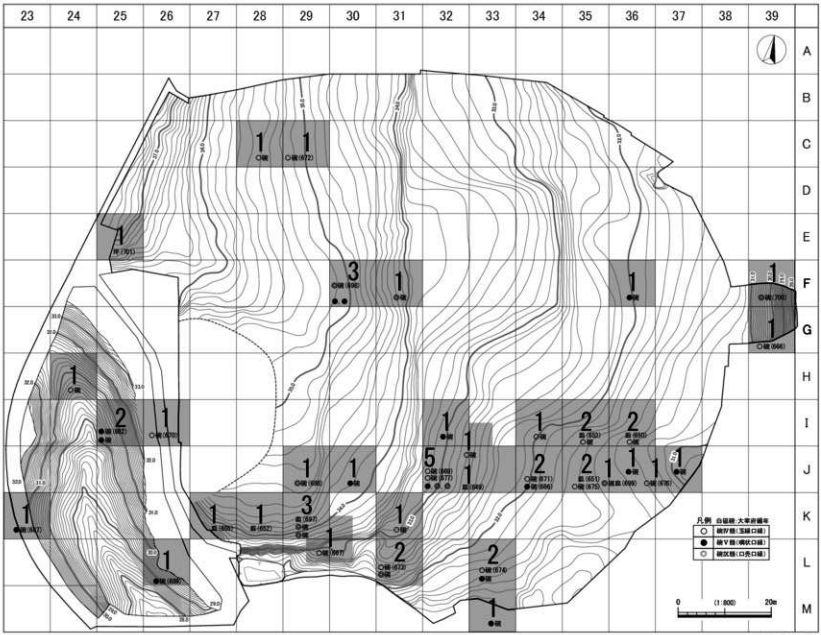
660は腰部から底部までが残存する。法量は復元底径6.6cmを測る。器形は底部が上げ底で器壁は薄く，体部は緩やかに立ち上がる。内底面と腰部の境には沈線状の段が認められる。釉は残存部の全面に施し，特に底部外面は板状工具で釉をのばしている。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で精良である。

661は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径5.6cmを測る。器形は高台部がかなり磨耗しているが，高さが低い抉り入り高台である。内底面と腰部の境には段が認められる。釉は残存部では内面のみに施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土はにぶい黄橙色を呈し，陶器質である。

662は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径7.2cmを測る。器形は高台部が低く尖り，底部の器壁は薄い。釉は残存部の全面に施した後，内定面の釉を環状に掻き取り，また高台部畳付の釉も掻き取っている。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

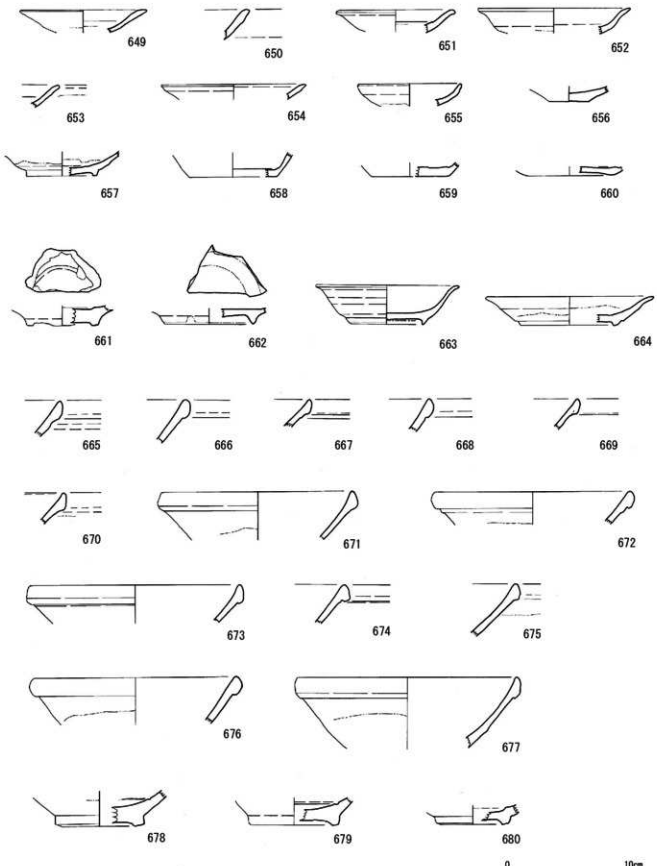
663は口縁部から高台部までの1/3が残存する。法量は復元口径11.4cm，復元高台径5.7cm，器高3.1cmを測る。器形は高台部が低く尖り，体部は腰部で屈曲して直線的に立ち上がり，口縁部は外反する。釉は口縁部から外底面までの全面に施した後，高台部畳付の釉を掻き取っている。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で精良である。

664は口縁部から高台部までの1/6が残存する。法量は復元口径13.2cm，復元高台径7.8cm，器高2.3cmを測る。器形は高台部が低い逆台形で，畳付は外側から削り斜めの形状を呈する。体部は直線的に開き口縁部でわずかに外反する。外面の口縁部と体部の境にはわずかな段が認



Va層コンタ図

第404図　白磁分布図


649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
0
10cm

第405図　白磁

められる。釉は内外面ともに体部まで施す。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

白磁碗（665～700）

665～677は玉縁状の口縁部を持つ破片である。

665は口縁部から胴部上半までが残存する。器形は玉縁がやや小形で厚みは体部厚とほぼ変わらない。釉は残存部の内外面ともに施されており，釉調は灰白色を呈し，表面に多くの気泡が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒をわずかに含む。

666は口縁部から胴部上半までが残存する。釉は残存部の内外面ともに施されており，釉調は灰白色を呈し，表面に多くの気泡が認められる。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒をわずかに含む。

667は口縁部から胴部上半までが残存する。器形は玉縁がやや小形で胴部から口縁部へ移る部分が段となる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒をわずかに含む。釉は残存部の内外面ともに施されており，釉調は灰白色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒をわずかに含む。

668は口縁部から胴部上半までが残存する。器形は玉縁の下位に段が認められる。釉は残存部の内外面に施す。釉調は灰白色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

669は口縁部から胴部上半までが残存する。器形は玉縁がやや小形で，胴部の器壁は薄い。釉は残存部の内外面ともに施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で多くの黒色粒を含む。

670は口縁部から胴部上半までが残存する。釉は残存部の内面と外面の口縁部下まで施す。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

671は口縁部から胴部と腰部の境付近までが残存する。法量は復元口径15.0cmを測る。器形は胴部の器壁が薄く，玉縁は分厚くなる。釉は内面と外面の体部下半まで施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質でわずかに黒色粒を含む。

672は口縁部から胴部上半までが残存する。法量は復元口径15.3cmを測る。器形は玉縁が折り曲げ状となっており，その下が肥厚して突帯状になっている。釉は内面と外面の体部上半まで薄く施す。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質でわずかに黒色粒を含む。

673は口縁部から胴部上半までが残存する。法量は復元口径16.6cmを測る。器形は体部の器壁が薄く緩やかに内湾して立ち上がる。玉縁は折り曲げ状となり，その下にわずかな段が認められる。釉は残存部の内外面ともに施されており，釉調は灰白色を呈し，表面には貫入がみられる。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

674は口縁部から胴部上半までが残存する。器形は玉縁が分厚く，折り曲げ状となり，その下に段が認められる。釉は残存部の内外面ともに薄く施し，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

675は口縁部から胴部と腰部の境付近までが残存する。器形は体部が緩やかに内湾して立ち上がり，玉縁は小さく折り曲げ状を呈する。釉は内面と外面の体部上半まで薄く施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

676は口縁部から胴部上半までが残存する。法量は復元口径16.0cmを測る。器形は体部がやや内湾して立ち上り，玉縁は分厚く折り曲げ状を呈する。釉は内面と外面の体部下半まで施されており，釉調は灰白色を呈し，表面には貫入のほか，細かな気泡が多く凹凸が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒をわずかに含む。

677は口縁部から腰部までが残存している。法量は復元口径17.2cmを測る。器形は体部が緩やかに内湾して立ち上り，玉縁は折り曲げ状を呈する。釉は内面と外面の体部上半まで薄く施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒をわずかに含む。

678～680は低い高台部を持つ底部片である。

678は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径7.0cmを測る。器形は高台部が低く，外面を直に，内面を斜めに削り出している。底部は分厚く，内面の底部と腰部の境に横位の沈線を巡らせる。高台部と腰部の境には工具痕が認められる。釉は内面と外面の体部下半まで施されており，釉調は灰白色を呈する。高台部と腰部の境には工具痕が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒と気泡を含む。

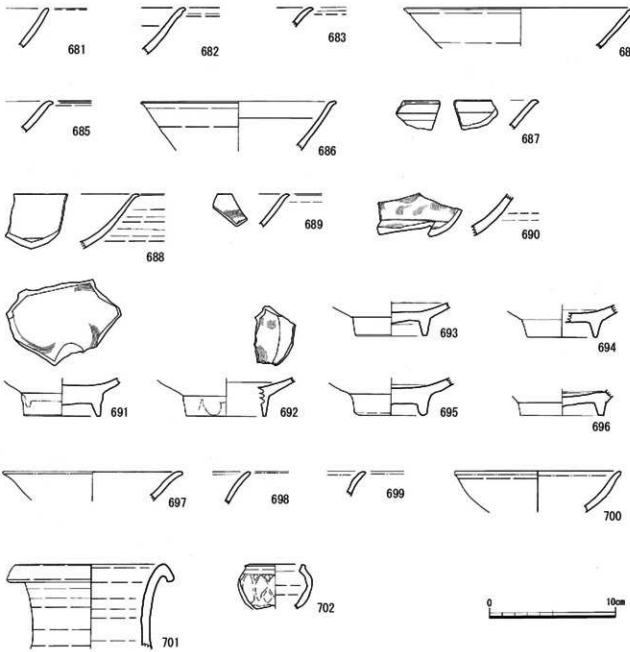
679は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径7.0cmを測る。器形は高台部が低く，外面を直に，内面を斜めに削り出している。底部は678よりも薄く，器面調整は内面の底部と腰部の境に横位の沈線を巡らせる。釉は残存部では内面のみに施され，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

680は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径5.6cmを測る。器形は高台部が低い逆台形を呈し，畳付は外方から削り斜めの形状を呈する。内底面と腰部の境には段が認められる。釉は残存部では内面のみに施され，釉調はにぶい黄色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は淡黄色を呈し，やや軟質で精良である。

681は口縁部から胴部下半までが残存している。器形は体部が直線的に立ち上がりそのまま口縁部にいたる直口縁を呈する。釉は残存部の内外面に施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒をわずかに含む。

682～689は端反りの口縁部を持つ破片である。

682は口縁部から腰部と胴部の境付近まで残存する。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁部は短く外反す



第406図　白磁・青白磁

る。また外面の口縁端部やや下を肥厚させ突帯状に形作る。体部中位に沈線状の痕跡が残るが，これは工具痕か施文されたものかは不明である。釉は残存部の内外面に施されており，釉調は淡黄色を呈する。胎土は浅黄橙色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

683は口縁部から胴部上半までが残存している。器形は口縁部で外反し，外面のロ縁端部やや下には工具痕が認められる。釉は残存部の内外面に施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を多く含む。

684は口縁部から腰部と胴部の境付近まで残存する。法量は復元口径18.3cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がり，口縁部は肥厚してやや下に段が形成され，口縁端部は外方へ尖り，口唇部には平坦面を形成する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を多く含む。釉は残存部の内外面に施されており，釉調は灰白色を呈する。

685は口縁部から胴部上半までが残存する。器形は口縁端部が外側へ尖り嘴状を呈する。釉は残存部の内外面に施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒をわずかに含む。

686は口縁部から腰部と胴部の境付近までが残存する。法量は復元口径15.4cmを測る。器形は体部が直線的に立ち上がって口縁部に至り，口縁端部は外方へ尖り嘴状を呈し，内面には明確な稜を持つ。口唇部には平坦面を形成する。外面に２条，内面に１条の沈線状の痕跡が残る。釉は残存部の内外面に薄く施されており，釉調は灰白色

を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

687は口縁部から胴部上半までが残存する。器形は口縁端部が外方へ尖り嘴状を呈し，内面には明確な稜を持つ。口唇部には平坦面を形成する。外面に２条，内面に１条の沈線状の痕跡が残る。釉は内外面の残存部に施されており，釉調は灰白色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

688は口縁部から腰部までが残存する。器形は体部が緩やかに内湾して立ち上り，口縁端部は外方へ尖り嘴状を呈し，口唇部には平坦面を形成する。口縁端部内面には釉が厚くかかるため，明確な稜は形成されない。器面調整は内面の腰部下半には横位の沈線を巡らせる。また体部上位にも沈線状の痕跡が残るが，これは工具痕か施文されたものか不明である。釉は残存部の内面と外面の腰部と胴部の境付近まで施され，釉調は灰白色を呈し，表面に貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒とわずかな気泡を含む。

689は口縁部から胴部下半までが残存する。器形は口縁端部が外方へ尖り嘴状を呈し，口唇部には平坦面を形成する。口縁端部内面には釉が厚くかかるため，明確な稜は形成されない。器面調整は体部内面には櫛目文を施す。釉は残存部の内外面に施され，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

690は胴部片である。器形は緩やかに内湾して立ち上がる。内面の腰部と胴部の境に横位の沈線を巡らせ，全面に櫛目文を施す。釉は残存部の内外面に施され，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質でわずかに気泡を含む。

691～696は高い高台部を持つ底部片である。

691は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径6.0cmを測る。器形は高台部が細く高く直立し，底部は分厚く，器面調整は内底面に櫛目で花文状の文様を施す。釉は内面と外面の高台部半ばまで施されており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒をわずかに含む。

692は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径6.2cmを測る。器形は高台部が細く高く直立し，腰部の器壁は薄い。内底面と腰部の境に横位の沈線を巡らせ，内底面に櫛目で花文状の文様を施す。釉は内面と外面の高台部半ばまで施し，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

693は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径5.7cmを測る。器形は高台部が細く高く直立する。器面調整は内面の腰部と胴部の境付近に横位の沈線を巡らせる。釉は残存部では内面のみに施し，釉調は明緑灰色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，黒色粒と気泡をわずかに含む。

694は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径5.5cmを測る。器形は高台部が細く高く直立する。内底面と腰部の境にはわずかな段が認められるが，あまり明瞭ではない。釉は残存部では内面のみに施し，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒とわずかな気泡を含む。

695は腰部から高台部までが残存する。法量は高台径5.8cmを測る。器形は高台部が**691～694**よりも分厚く，畳付け外側を斜位に削っている。高台部は調整が比較的粗雑であり表面に凹凸が認められる。内底面と腰部の境に横位の沈線を巡らせる。釉は外底面を除く全面に厚く施す。釉調は灰白色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で気泡と黒色粒を含む。

696は腰部から高台部までが残存する。法量は復元高台径6.6cmを測る。器形は高台部が高く直立し，比較的分厚い。釉は残存部では内面のみに施した後，内底面の釉を環状に掻き取っており，内底面と腰部の境には段が形成される。釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒子を含む。

697～700は口縁部が緩やかに外反し，施釉後に口縁部周辺の釉を掻き取ったロ売げとなる破片である。

697は口縁部から胴部上半までが残存する。法量は復元口径14.2cmを測る。釉は口縁部周辺以外の全面に施しており，釉調は灰白色を呈し，表面には貫入と，内面の口縁部やや下にわずかな黒斑が認められる。胎土は灰白色を呈し，やや軟質で黒色粒を含む。

698・699は口縁部から胴部上半までが残存する。**698**の体部外面には沈線状の痕跡が１条認められる。釉は口縁部周辺以外の全面に施しており，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

700は口縁部から胴部上半までが残存する。法量は復元口径13.1cmを測る。釉は口縁部周辺以外の全面に施しており，釉調は灰白色を呈し，表面には貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒を含む。

白磁壺（701）

701は長頸壺の破片である。口縁部から頸部までが残存する。法量は復元口径13.6cmを測る。器形は頸部が緩く外反しつつ立ち上がり，口縁部は折り曲げられ屈曲部には稜が形成される。釉は残存部の全面に施し，釉調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬質で黒色粒や気泡をわずかに含む。

青白磁（第406図　702）

702は青白磁の小壺の破片である。口縁部から胴部と底部の境付近まで残存する。法量は復元口径4.6cmを測る。器形は胴部が丸く膨らみ，口縁部は短く直立する。内面の頸部には明確な稜を形成する。釉は内面と外面の胴部と底部の境付近まで施した後，口縁部の釉を掻き取

る。釉調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，硬　　質で黒色粒を含む。

第65表　白磁観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm)			露胎	焼成	貫入	発色	色調		分類	備考
							口径	底径	器高					胎土	釉薬		
第405図	649	J32・33	Ⅴb	皿	口縁～腰部	5	(10.0)	－	－	外面の体部下半以下，内底面	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅱ～Ⅷ類	中国福建省産 内底面蛇の目状釉剥ぎか
	650	I36	Ⅳa	皿	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅱ～Ⅷ類	中国福建省産
	651	J35	Ⅳa	皿	口縁～腰部	5	(9.4)	－	－	内底面	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅲ類	中国福建省産
	652	K28	Ⅴa	皿	口縁～腰部	5	(12.0)	－	－	外面の体部下半以下	良	無	良	灰白色	明緑灰色	大宰府編年Ⅲ類	中国福建省産
	653	I35	表土	皿	口縁～腰部	破片	－	－	－	外面の体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅲ類	中国福建省産
	654	J35～38	表土	皿	口縁～胴部	5	(11.4)	－	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅲ・Ⅳ類	中国福建省産
	655	K27	Ⅳa	皿	口縁～腰部	5	(8.2)	－	－	外面の体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅴ～Ⅷ類	中国福建省産
	656	J35	Ⅲ	皿	腰部～底部	30	－	3.2	－	外面の体部下半以下	良	有	やや不良	灰白色	浅黄色	大宰府編年Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ類	中国福建省産
	657	K32	表土	皿	腰部～高台部	15	－	高台径(5.6)	－	外面の体部下半以下，内面	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅷ類	中国南部産 内定面を環状に釉の掻き取り
	658	F39	表土	皿	胴部～底部	5	－	(6.8)	－	－	良	無	良	灰白色	明緑灰色	大宰府編年Ⅸ類	中国南部産
	659	A	表土	皿	腰部～底部	10	－	(6.2)	－	－	良	無	やや不良	にぶい黄橙色	浅黄色	大宰府編年Ⅸ類	中国南部産
	660	A	表土	皿	腰部～底部	10	－	(6.6)	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅸ類	中国南部産
	661	A	表土	皿	腰部～高台部	15	－	高台径(5.6)	－	外面の体部下半以下	良	無	やや不良	にぶい黄橙色	灰白色	森田編年D類	中国産 抉り入り高台，目跡あり
	662	M35	表土	皿	腰部～高台部	15	－	高台径(7.2)	－	内底面，高台畳付	良	無	良	灰白色	灰白色	－	中国産 内定面を環状に釉の掻き取り
	663	J31	表土	皿	口縁～高台部	35	(11.4)	高台径(5.7)	3.1	高台畳付	良	無	良	灰白色	灰白色	森田編年E－2群	中国産
	664	H33	表土	皿	口縁～高台部	20	(13.2)	高台径(7.8)	2.3	内外面の体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	－	中国産
	665	F・I36～38	表土	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	やや不良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	666	G39	Ⅴa	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	やや不良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	667	K・L29・30	表土	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	668	E27～30	表土	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	669	J32	表土	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	670	I26	遺構内	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	外面の体部	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系，玉縁碗 近世古道内出土
	671	J34	Ⅳa	碗	口縁～腰部	5	(15.0)	－	－	外面体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	672	C29	表土	碗	口縁～胴部	5	(15.3)	－	－	外面体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	673	L31	表土	碗	口縁～胴部	5	(16.6)	－	－	－	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	674	L33	表土	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	675	J35	Ⅳa	碗	口縁～腰部	破片	－	－	－	外面体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	676	J37	Ⅳa	碗	口縁～胴部	10	(16.0)	－	－	外面体部下半以下	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	677	J32	Ⅳa	碗	口縁～腰部	10	(17.2)	－	－	外面体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系 玉縁碗
	678	J34	Ⅳa	碗	腰部～高台部	10	－	高台径(7.0)	－	外面体部下半以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系
	679	E25	表土	碗	腰部～高台部	10	－	高台径(7.0)	－	外面	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系
	680	H37	Ⅳa	碗	腰部～高台部	5	－	高台径(5.6)	－	外面	良	有	良	淡黄色	にぶい黄色	大宰府編年Ⅳ類	福建省産系
第406図	681	A	表土	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	－	福建省産系
	682	I25	Ⅲ	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	無	良	浅黄橙色	淡黄色	大宰府編年Ⅴ－1～3類	中国福建省産 端反碗
	683	G35～38	表土	碗	口縁～胴部	破片	－	－	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅴ－1～3類	中国福建省産 端反碗
	684	I35～38	表土	碗	口縁～胴部	5	(18.3)	－	－	－	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年Ⅴ－1～3類	中国福建省産 端反碗

＊（）は復元・残存値

第66表　白磁・青白磁観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	露胎	焼成	貫入	気泡	色調 胎土	色調 釉薬	分類	備考
第406図	685	A	表土	碗	口縁～胴部	破片	—	—	—	—	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産 端反碗
	686	J 34	Ⅳ a	碗	口縁～胴部	5	(15.4)	—	—	—	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産 端反碗
	687	K23	表土	碗	口縁～胴部	破片	—	—	—	—	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産 端反碗
	688	J 29	表土	碗	口縁～腰部	破片	—	—	—	外面体部下半以下	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産 端反碗
	689	L 26	表土	碗	口縁～胴部	破片	—	—	—	—	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産、端反碗 内面：櫛目文
	690	A	表土	碗	胴部	破片	—	—	—	—	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産、 内面：櫛目文
	691	K33・34	表土	碗	腰部～高台部	25	—	高台径(6.0)	—	高台外面途中以下	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産、 内面：花文状の櫛目文
	692	H33	表土	碗	腰部～高台部	5	—	高台径(6.2)	—	高台内～高台畳付	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V－4類	中国福建省産、 内面：花文状の櫛目文
	693	K31	表土	碗	腰部～高台部	15	—	高台径(5.7)	—	外面体部下半以下	良	有	良	灰白色	明緑灰色	大宰府編年V類	中国福建省産
	694	K31	表土	碗	腰部～高台部	10	—	高台径(5.5)	—	外面	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V類	中国福建省産
	695	J 24	Ⅳ a	碗	腰部～高台部	20	—	高台径5.8	—	外底面	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V類	中国福建省産
	696	I 36	Ⅳ a	碗	腰部～高台部	20	—	高台径(6.6)	—	外底、内底面	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年V期	中国福建省産 内底面蛇の目状釉剥ぎ
	697	K29	Ⅳ a	碗	口縁～胴部	5	(14.2)	—	—	口縁端部	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年IX類	中国福建省産 口禿碗
	698	F 30	表土	碗	口縁～胴部	破片	—	—	—	口縁端部	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年IX類	中国福建省産 口禿碗
	699	I 35・36	表土	碗	口縁～胴部	破片	—	—	—	口縁端部	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年IX類	中国福建省産 口禿碗
	700	F 39	Ⅳ a	碗	口縁～胴部	5	(13.1)	—	—	口縁端部	良	有	良	灰白色	灰白色	大宰府編年IX類	中国福建省産 口禿碗
	701	E 25	表土	壺	口縁～胴部	5	(13.6)	—	—	—	良	無	良	灰白色	灰白色	大宰府編年I類	中国福建省産
	702	I 35～38	表土	小壺	口縁～底部	20	(4.6)	—	—	口縁端部と体部下半	良	無	良	灰白色	明緑灰色	—	青白磁、中国南部産 復元最大径5.8cm

＊（）は復元・残存値

青花（第408・409図）

景徳鎮窯系青花（703～715）

青花皿（703～708）

703～706は底部が基筒底を呈する。

703は1/6が残存し、法量は復元口径10.0cm、復元底径2.6cm、器高2.7cmを測る。外面の口縁部に波濤文、体部下半に芭蕉葉文を描き、内面の体部下半に花文と二重の界線、内底面に捻花文を描く。釉は内外面ともに施され、底部畳付周辺を露胎とする。器面の色調は明緑灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し、精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

704は底部片で、法量は復元底径3.2cmを測る。外面の体部下半に芭蕉葉文、内面の体部下半に花文と二重の界線、内底面に捻花文を描く。釉は内外面ともに施され、底部畳付周辺を露胎とする。器面の色調は明緑灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し、精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

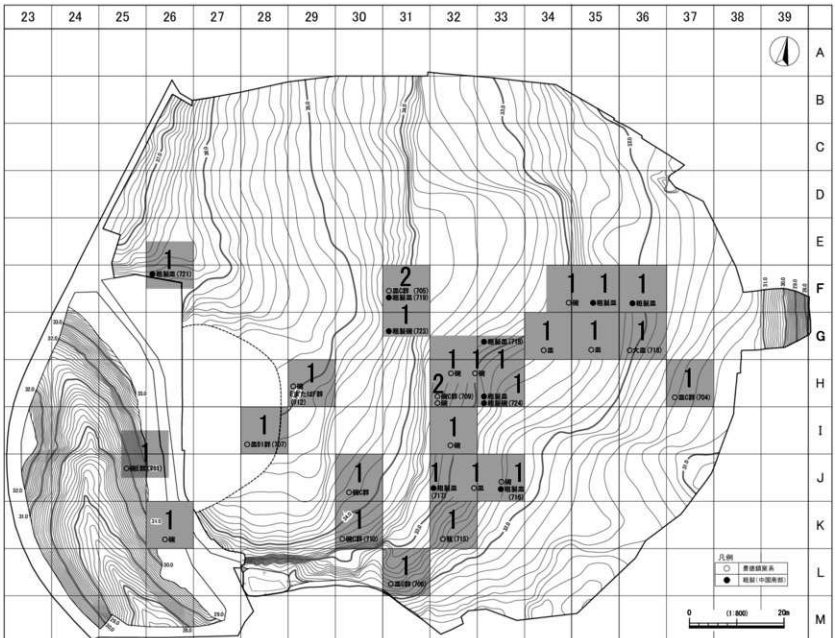
705は底部片で、法量は復元底径4.0cmを測る。外面の体部下半に二重の界線、内底面に「寿」の字を描く。釉は内外面ともに施され、底部畳付周辺を露胎とする。器面の色調は明緑灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し、精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

706は底部片で、法量は復元底径3.6cmを測る。外面の体部下半に界線、内底面に「寿」と思われる文字を描く。釉は内外面ともに施され、底部畳付周辺を露胎とし、器面の色調は明緑灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し、精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。外面腰部と内底面に砂の付着が認められる。

707・708は底部に高台を有する皿である。

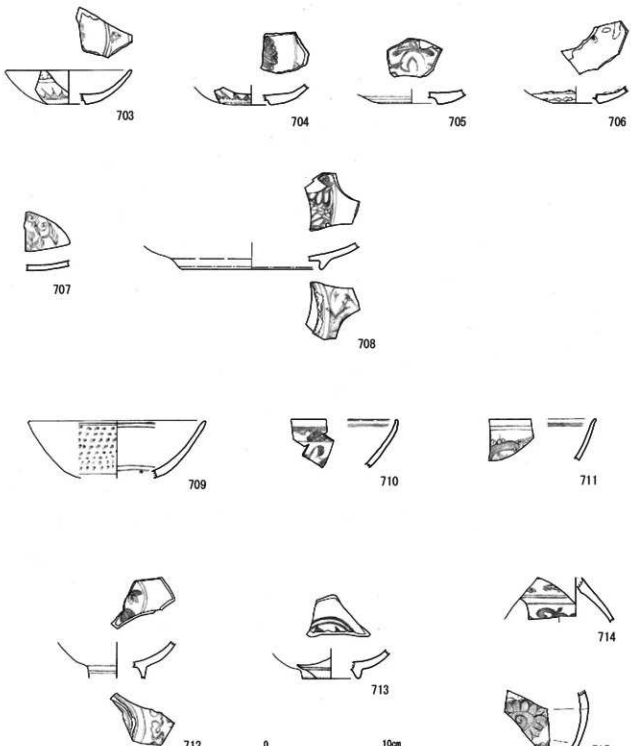
707は底部片である。内底面に玉取り獅子を描く。釉は内外面ともに施され、器面の色調は明緑灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し、精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

708は底部片で、法量は復元高台径11.0cmを測る。器形は高台が逆「ハ」の字状を呈し、高台外面には成形時の斜位の工具痕が残る。内外面に不明の文様が描かれる。釉は内外面ともに施され、高台畳付とする。器面の色調はやや青味がかった明緑灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し、精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。高台畳付は砂の付着が認められる。



第407図　青花分布図

Va層コンタ図

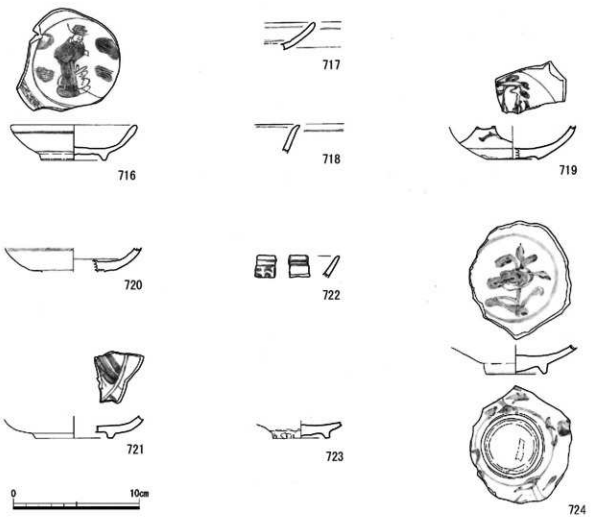


第408図　青花１

青花碗（709～713）

709は口縁部から腰部の破片である。法量は復元口径14.0cmを測る。器形は体部が曲線的に立ち上がり，口縁端部は丸みがあるがやや尖らせる。体部外面に列点状の文様を体部全体に描き，内面は口縁部および内底面と体部の境に二重の界線を描く。内底面の文様は欠損のため不明である。釉は内外面ともに施され，器面の色調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

710は口縁部片である。器形は体部が曲線的に立ち上



第409図　青花２

がり，口縁端部は丸くおさめる。口縁外面に波濤文と思われる文様帯を描き，体部にも文様が認められるが，何が描かれているかは不明である。釉は内外面ともに施され，器面の色調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良だがボサボサとした陶器質な印象である。また景徳鎮産としたが，胎土がやや陶器質のため，中国福建省産系の可能性もある。

711は口縁部片である。器形は体部がやや丸みがあり，器壁が薄く，口縁端部はわずかに外反し，丸くおさめる。体部外面に二重の界線と龍文，内面は口縁部に二重の界線を描く。釉は内外面ともに施され，器面の色調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

712は底部片である。器形は体部が丸みのある器形を呈する。体部外面に界線と連弁文，外底面には界線と文様が描かれるが欠損のため不明である。内面は内底面に二重の界線と葉文が認められる。高台端部が細かく割れており，人為的な可能性もある。釉は内外面ともに施され，器面の色調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

713は底部片である。法量は復元高台径4.6cmを測る。器形は体部が丸みのある形状を呈する。体部外面に2本の界線と文様，内底面に二重の界線と文様をそれぞれ描くが，欠損のため文様は不明である。釉は内外面ともに施され，高台畳付から内底面は露胎である。器面の色調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で黒色粒子を含んでいる。

青花瓶（714・715）

714は頸部から肩部の破片である。外面に界線と文様が描かれるが文様は小片のため不明である。釉は内外面ともに施され，器面の色調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

715は胴部片である。内外面に胴部の継ぎ目の痕跡が

認められ，外面には花文が描かれる。釉は内外面ともに施され，内面の体部下半は露胎で，器面の色調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良で黒色粒子をわずかに含んでいる。

粗製青花（716～724）

福建省産系の粗製青花である。

粗製青花皿（716～721）

716は口縁部から体部の一部と底部が残存する。法量は復元口径10.0cm，底径5.2cm，器高2.8cmを測る。器形は体部が丸みをもって立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。体部外面の口縁部と腰部に界線，内面の口縁部に崩れた四方襷文，内底面に人物文を描く。釉は内外面ともに施され，高台畳付は露胎である。器面の色調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，精良である。

717は口縁部から腰部の破片である。器形は体部が丸みをもって立ち上がり，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。体部外面の口縁部と腰部に界線，内面の口縁部と体部立ち上がり部分に界線を描く。釉は内外面ともに施され，内底面に露胎部分が認められる。器面の色調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや粗く軟質である。

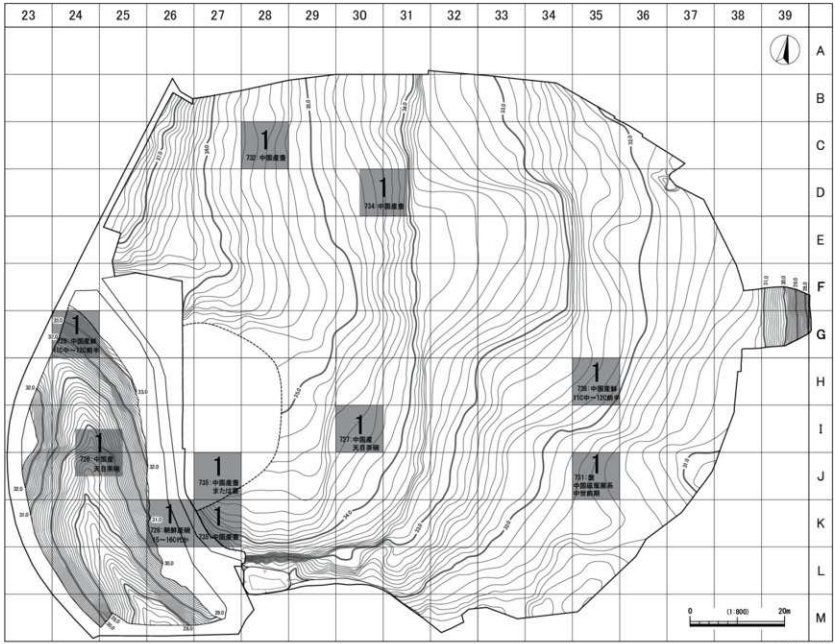
718は口縁部片である。口縁部が端反る形状を呈し，口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。口縁部の内外面に界線を描く。釉は内外面ともに施され，器面の色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや粗く軟質である。

719は体部下半から底部の破片である。法量は復元底径4.0cmを測る。器形は体部が丸みをもって立ち上がり，底部は碁笥底状を呈する。体部外面に界線と不明文様，内底面に界線と「寿」字文を描く。釉は内外面ともに施され，底部外面の接地部から外底面は露胎で赤色化し，接地部に砂の付着が認められる。器面の色調は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや粗く軟質である。

第67表　青花観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高	露胎	焼成	貫入	発色	色調 胎土	釉薬	分類	備考
第408図	703	A	表土	皿	口縁～底部	15	(10.0)	(2.6)	2.7	高台畳付	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類C群	景徳鎮窯系，内面:花文・捻花文 外面:波濤文・芭蕉葉文
	704	H37	Ⅳa	皿	胴部～底部	10	—	(3.2)	—	高台畳付	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類C群	景徳鎮窯系，外面:芭蕉葉文 内面:花文・捻花文
	705	F31	表土	皿	胴部～底部	10	—	(4.0)	—	高台畳付	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類C群	景徳鎮窯系，外面:界線2条 内面:「寿」字文
	706	L31	表土	皿	体部～底部	10	—	(3.6)	—	外面の腰部以下	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類C群	景徳鎮窯系，外面:界線 内面:「寿」字文，砂の付着
	707	I28	遺構内	皿	底部	破片	—	—	—	—	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類B1群	景徳鎮窯系，内面：玉取獅子文 中世柱穴内出土
	708	G36	表土	皿	腰部～底部	5	—	高台径(11.0)	—	高台畳付	良	無	良	灰白色	明緑灰色	森分類Ⅰa類	景徳鎮窯系 内外面:文様あり，砂の付着
	709	H32	表土	碗	口縁～腰部	20	(14.0)	—	—	—	良	無	やや不良	灰白色	明オリーブ灰色	小野分類C群	景徳鎮窯系，外面：列点状の文様 内面：界線2条
	710	K30	表土	碗	口縁～胴部	破片	—	—	—	—	良	無	やや不良	灰白色	明オリーブ灰色	—	景徳鎮窯系 外面：波濤文
	711	I・J 25・26	表土	碗	口縁～胴部	破片	—	—	—	—	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類E・F群	景徳鎮窯系 外面：龍文，内面：界線2条
	712	H29	遺構内	碗	胴部～底部	5	—	—	—	—	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類E・F群	景徳鎮窯系，竪穴建物2号内出土 外面：蓮弁文，内面：葉文
	713	A	表土	碗	胴部～底部	5	—	(4.6)	—	高台～高台畳付	良	無	良	灰白色	明緑灰色	小野分類E・F群	景徳鎮窯系 内外面：界線2条，文様あり
	714	A	表土	瓶	頸部～肩部	5	—	—	—	—	良	無	良	灰白色	明緑灰色	—	景徳鎮窯系 外面：界線，文様あり
	715	K32	表土	瓶	胴部	破片	—	—	—	内面の胴部下半以下	良	無	良	灰白色	明緑灰色	—	景徳鎮窯系，外面：花文 胴接ぎの痕跡あり
第409図	**716**	J33	Ⅳa	皿	口縁～底部	60	(10.0)	5.2	2.8	高台畳付	良	無	良	灰白色	灰白色	—	福建省産，外面：界線2条 内面：四方襷文・人物文
	717	J32	表土	皿	口縁～胴部	破片	—	—	—	内底面	良	有	良	灰白色	灰白色	—	福建省産 内外面：界線
	718	G・H 33	Ⅳa	皿	口縁部	破片	—	—	—	—	良	有	良	灰白色	にぶい黄橙色	—	福建省産 内外面：界線
	719	E31	Ⅴa	皿	胴部～底部	10	—	(4.0)	—	—	良	有	良	灰白色	明緑灰色	—	福建省産，砂の付着 内面:「寿」字文
	720	A	表土	皿	胴部～腰部	5	—	—	—	外面底部	良	有	良	灰白色	明緑灰色	—	福建省産 内底面：環状に釉を掻き取る
	721	E・F 26	表土	皿	腰部～底部	5	—	高台径(6.0)	—	高台畳付	良	無	良	灰白色	明オリーブ灰色	森分類Ⅴ類	漳州窯系，芙蓉手皿 内外面：文様あり
	722	A	表土	碗	口縁部	破片	—	—	—	—	良	有	良	灰白色	淡黄色	—	福建省産，外面：列点状の文様 内面：界線2条
	723	F・G 31	表土	碗	腰部～底部	10	—	高台径4.5	—	高台～外底面	やや不良	有	やや不良	灰白色	灰白色	—	漳州窯系 工具痕あり
	724	H33	表土	碗	腰部～底部	40	—	高台径4.9	—	高台畳付	やや不良	有	やや不良	橙色	明オリーブ灰色	—	漳州窯系 内外面：花卉文

＊()は復元・残存値



Va層コンタ図

第410図　国外産陶器分布図

720は体部下半から底部の破片である。器形は体部が丸みをもって立ち上がり，底部は碁笥底状を呈する。体部外面の体部上半と腰部に界線，内底面に界線を描く。釉は内外面ともに施され，外底面は露胎で，内底面は釉を環状に掻き取る。器面の色調は明緑灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で軟質である。

721は体部下半から底部の破片である。法量は復元高台径60cmを測る。器形は体部が丸みをもって立ち上がり，底部高台は断面方形を呈する。体部外面に縦位の区画線と不明文様，内底面に二重の界線と不明文様を描く。釉は内外面ともに施され，高台畳付は露胎で，体部外面に虫食い状の剥落が認められる。器面の色調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し，おおむね精良で黒色粒子を含んでいる。

粗製青花碗（722～724）

722は碗の口縁部片と思われる。体部外面に二重の界線と列点状の文様，内面に二重の界線を描く。釉は内外面ともに施され，器面の色調は淡黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し，やや粗く軟質である。

723は底部が残存する。法量は高台径4.5cmを測る。青花と思われるが，無文で白磁となる可能性もある。器形はやや「ハ」の字状に開く高台で，高台外面は直立気味で部分的に縦方向に工具痕が残り，高台内面は斜めに削り出し，端部は面取りをおこない，断面形状が台形を呈する。釉は内外面ともに施され，高台部から外底面は露胎で赤色化する。器面の色調は灰白色を呈する。胎土は灰白色を呈し，軟質で黒色粒子を含む。

724は底部が残存する。法量は高台径4.9cmを測る。器形は「ハ」の字状に開く高台で，高台外面は直立気味で，高台内面は斜めに削り出し，高台端部は斜めに面取りをおこない，高台畳付は尖り気味の形状を呈する。外面体部は花弁文と腰部に界線，内底面に界線と花弁文を描く。釉は内外面ともに施され，高台畳付周辺は露胎で赤色化する。器面の色調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は橙色を呈し，おおむね精良で黒色粒子をわずかに含み，軟質である。

国外産陶器（第411図）

陶器碗（725～727）

725は碗で，体部下半から底部が残存する。器面調整は体部外面と外底面には工具による回転ケズリ調整，内面は回転ナデ調整をおこなう。また高台部は４箇所の抉が認められ，内底面にも４箇所の目跡が残る等，重ね焼きの痕跡が認められる。釉は全面に施され，1/3は白色の釉で残りは灰色の釉を施す片身替わりとなっている。焼成は良好で，硬質である。胎土は精良で，しまりがあることなどから朝鮮産と思われる。

726は天目茶碗の底部片と思われる。法量は復元底径4.4cmを測る。器形は体部下半から直線的に体部上半で丸みをもって真上方向に屈曲し，口縁端部を外側へわずかに外反させる。焼成は良好で，釉は内面と体部外面腰部まで施され，腰部には釉垂れが厚く溜まっており，外面以下は露胎とする。釉調は口縁部外面が鮪色，内面と体部外面は黒色を呈する。胎土は白色粒子などをわずかに含むが精良で，硬質な印象をうけることなどから中国産と思われる。

727は天目茶碗で，口縁部から腰部が残存する。法量は復元口径11.6cmを測る。器形は体部がやや丸みをもって立ち上がり，口縁端部のやや下方で真上方向にわずかに屈曲し，口縁端部は尖り気味におさめる。また，体部外面にはロクロ目が顕著に認められる。焼成は良好で，残存部の内外面に褐色釉が施される。胎土が精良で，硬質であることなどから中国産と思われる。

陶器鉢（728～730）

728・729は口縁部片で同一個体の可能性がある。728の法量は復元口径23.3cmを測り，器形は体部が丸みのあるボール状を呈する。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整を行う。口縁端部を内面側に突出させ，そのやや下方に１条の突起を巡らせるため，突起が２条施されているようにみえる。焼成はおおむね良好である。胎土は粗く，多くの砂粒を含んでいる。

730は口縁部片である。器形は口縁部を「L」字状に屈曲させ鍔状口縁を呈する。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整で，鍔状の口縁部上面に２条の凹線を施す。また口縁端部の外面は面取りをおこない，口端よりやや下方に稜線を有する。焼成はおおむね良好である。胎土はやや粗く，多くの砂粒を含んでいる。

陶器盤（731）

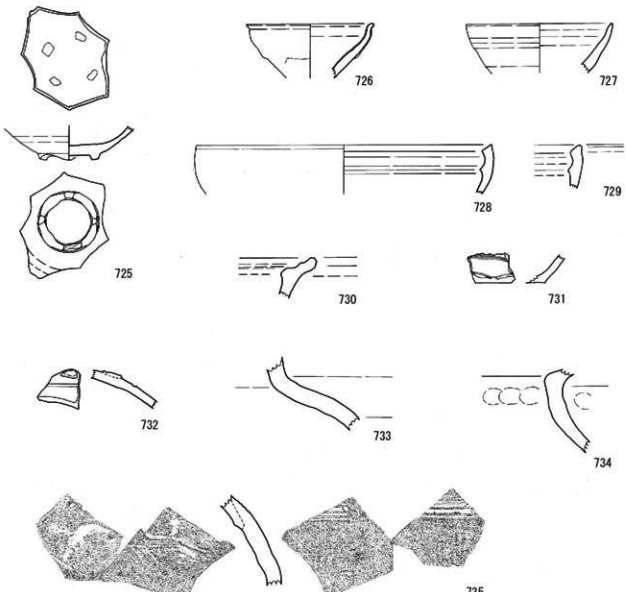
731は盤の底部片である。外面は露胎で体部は赤褐色に発色している。内面は黄釉を施した後に褐釉で文様を描く鉄絵を施す。焼成は良好である。胎土は粗く，黒・白色粒子などの細粒を多く含んでいる。

陶器壺（732～735）

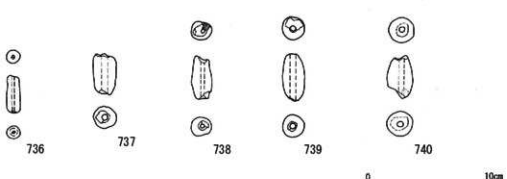
732は耳壺の肩部片である。肩部に横形の耳を貼付け，そのやや下方に１条の沈線を施す。器形は外面に褐色釉を施す。焼成は良好である。胎土は精良で，黒色粒子をわずかに含んでいる。中国産と思われる。

733は頸部から肩部である。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整である。焼成はおおむね良好で，肩部に降灰と砂粒の付着物が認められる。胎土は735と一致しており，同一個体の可能性もある。

734は頸部から肩部である。器面調整は内外面ともに



第411図　国外産陶器



第412図　土製品

回転ナデ調整で，頸部内面に指頭圧痕が認められる。焼成はおおむね良好で，内外面に2～3㎜大の黒色粒がまばらに付着する。また頸部の屈曲部より上方と外面と肩部内面に降灰が認められる。胎土はおおむね精良で，白・黒色粒子を多く含んでいる。

735は胴部上半片である。器形は体部が丸みを持つ形状を呈する。器面調整は内外面ともに回転ナデ調整で，内面に接合痕と斜位の工具調整痕が認められる。焼成はおおむね良好である。胎土は粗く，破断面の観察では層を成しているようにみえ，白・黒色粒子を多く含んでいる。

土製品（第412図　736～741）

土製品は土錘が7点出土しており，全て管状土錘である。このうち実測に耐えるものは5点であった。出土状況は遺構に伴うものはなく，表土や攪乱，包含層（Ⅳa層）からの出土で，出土区の集中は認められなかった。

736・737は筒形の形状を呈する管状土錘である。

736は完形品で，法量は最大長3.0㎝，最大幅1.1㎝，孔径0.2㎝，重量3.7ｇを測る。焼成は良好で，器表面に光沢が認められる。胎土はやや粗く，白・黒粒子，石英等が多く含まれている。

737は両端部が一部欠損する。法量は残存長3.3㎝，最大幅1.9㎝，孔径0.4㎝，重量9.0ｇを測る。焼成は良好で，胎土はやや粗く，白・黒粒子，石英等が多く含まれている。

738～740は紡錘形の形状を呈する管状土錘である。

738はほぼ完形品で，両端部が一部欠損する。法量は残存長3.4㎝，最大幅1.5㎝，孔径0.2～0.3㎝，重量5.8ｇを測る。器形は成形時の凹凸が残り，やや粗雑である。

第68表　国外産陶器観察表

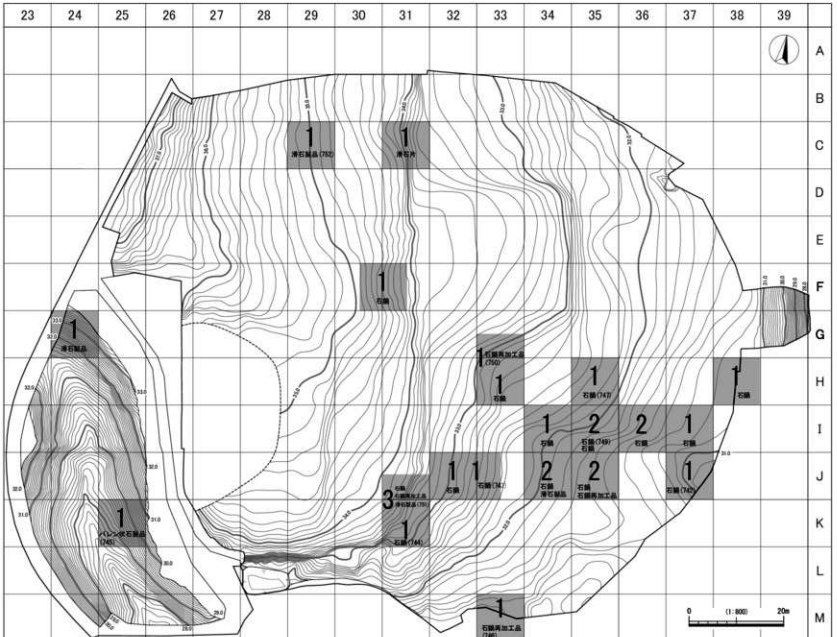
挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 石英	長石	角閃石	黒雲母	小礫	その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第411図	725	K26	表土	碗	底部	15	—	(4.8)	—	回転ケズリ	回転ナデ						○	灰色 灰白色	灰色 灰白色	良	朝鮮産，2種の釉を用いる 抉り入り高台，目跡あり 口縁部打欠か
	726	I・J 25・26	表土	碗	口縁部～胴部	5	—	(4.4)	—	回転ケズリ	—						○	オリーブ黒色	オリーブ黒色	良	中国南部産 天目茶碗
	727	I 30	表土	碗	口縁部～腰部	10	(11.6)	—	—	回転ナデ	—						○	褐色	褐色	良	中国南部産 天目茶碗
	728	H24	Ⅱ	鉢	口縁部	5	(23.3)	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	中国産，729と同一個体か 大宰府編年Ⅰ－1ｂ類
	729	H35	Ⅴa	鉢	口縁部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	にぶい橙色	にぶい橙色	良	中国産 大宰府編年Ⅰ－1ｂ類
	730	A	表土	鉢	口縁部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	褐灰色	灰黄褐色	良	中国産 櫛状口縁，2条凹線あり
	731	J 35	表土	壺	胴部～底部	破片	—	—	—	ナデ	—						○	灰褐色	にぶい黄色	良	磁竈窯系，中世前期 叩締あり
	732	B28	表土	壺	肩部	破片	—	—	—	ナデ	ナデ						○	褐色	にぶい橙色	良	中国産，有耳壺 1条沈線あり
	733	K27	Ⅴa	壺	頸部～肩部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	黒褐色	黄灰色	良	中国南部または東南アジア産，自然釉がかかる 735と同一個体か
	734	D30・31	表土	壺	頸部～肩部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ						○	褐色	褐色	良	中国南部または東南アジア産，自然釉がかかる
	735	J 27	表土	甕or壺	胴部	破片	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○					○	にぶい赤褐色	灰黄色	良	中国南部または東南アジア産，粘土帯接合痕あり

＊()は復元・残存値

第69表　土製品観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	残存	法量 最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	胎土 石英	長石	角閃石	黒雲母	小礫	その他	焼成	備考
第412図	736	L35	表土	管状土錘	完形	3.0	1.1	0.2	3.7	○					○	良	器表面に光沢あり
	737	J 27	表土	管状土錘	両端部欠損	(3.3)	1.9	0.4	9.0	○					○	良	
	738	A	表土	管状土錘	ほぼ完形	(3.4)	1.5	0.2～0.3	5.8	○					○	良	
	739	C30	Ⅳa	管状土錘	ほぼ完形	(3.7)	1.8	0.4	10.0	○		○			○	良	
	740	J 35	Ⅳa	管状土錘	両端部欠損	(3.4)	2.0	0.4～0.5	8.7	○					○	良	指頭圧痕

＊()は復元・残存値



Va層コンタ図

第413図　石製品分布図

焼成は良好で，胎土はやや粗く，白・黒粒子，石英等が含まれている。

739はほぼ完形品で，両端部が一部欠損する。法量は残存長3.7cm，最大幅1.8cm，孔径0.4cm，重量10.0ｇを測る。焼成は良好で，胎土はやや粗く，白・黒粒子，石英等が含まれている。

740は両端部が欠損する。法量は残存長3.4cm，最大幅2.0cm，孔径0.4～0.5cm，重量8.7ｇを測る。焼成は良好で，胎土はやや粗く白・黒粒子，石英等が含まれている。

滑石製品（第414図　741～751）

741～743は滑石製石鍋である。

741は口縁部から底部までの1/8程度が残存する。法量は復元口径21.4cm，復元底径18.0cm，器高9.2cmを測る。器形は底部が平底で，体部中位に張りを持ち口縁部が内傾する。器面調整は外面がノミ状工具による縦位のケズリ調整を行い，内面には使用痕と思われる横位の擦痕が認められる。体部上位には比較的長い鍔を形作る。外面には使用時のものと思われるススが付着している。

742は口縁部から体部上半までが残存する。法量は復元口径21.9cm，復元最大径25.3cmを測る。器形は口縁部が内傾して立ち上がり，体部上位に断面三角形の鍔を形作る。器面調整は外面がノミ状工具による縦位・斜位のケズリ調整を行い，内面には使用時のものと思われる擦痕が残る。また鍔の下面より下にはススの付着が認められる。

743は口縁部から体部上半までが残存する。器形は口縁部がほぼ直立して立ち上がり，体部上位には短い逆台形の鍔を形作る。器面調整は外面がノミ状工具による縦位・斜位のケズリ調整を行い，内面は縦位・横位の擦痕が残るが，整形時または使用時のものであるかは不明である。

744～750は滑石製石鍋片の転用品と考えられる。

744・745は石鍋の補修に用いられるパレン状石製品と考えられる。

744はほぼ完形で，法量は最大長6.3cm，最大幅4.5cm，最大厚2.0cm，重量46.2ｇを測る。器形は受部が楕円形を呈し，突起部は付け根で若干くびれ平面形状は三角形を呈する。器面調整は受部表面が不定方向のケズリ調整を行い平坦に仕上げ，裏面は不定方向のケズリ調整を行って突起部を作り出している。突起部にはススの付着が認められるため，こちら側を石鍋の外面に向けて使用されていた可能性がある。

745は完形で，法量は最大長6.6cm，最大幅12.4cm，最大厚1.6cm，重量190.8ｇを測る。器形は横に長い不整形を呈し，側面も含めて全体的に歪な形状をしているため未製品の可能性がある。上面にはわずかではあるが平坦部が残っており，残存部の湾曲から見てもこちらが石鍋使用時の口縁部にあたると考えられる。また表面には長方形の範囲でノミ状工具の痕跡が残るため，石鍋の瘤状把手を削り落とした可能性がある。器面調整は両面ともにノミ状工具による縦位のケズリ調整を行っており，これは石鍋整形時のものと考えられる。また両面ともに深い擦痕が残っており，これは再加工時に幅の狭い工具を用いて横位・斜位のケズリ調整を行ったものと思われる。側面にもケズリ調整を行い，外面に薄く伸びる部分を作り出している。表面の下部には石鍋として使用した際のものと思われるススの付着が認められる。

746～748は板状の滑石製品である。

746は法量が最大長9.8cm，残存幅3.7cm，最大厚1.9cm，重量105.8ｇを測る。器形は残存部の三辺に平坦面を形成しているため，正方形または長方形に加工していたものと考えられる。器面調整は表面がノミ状工具による縦位のケズリ調整を行っており，これは石鍋整形時のものと考えられる。また両面ともに石鍋使用時または再加工時の擦痕が認められる。上面・下面・右側面にもノミ状工具痕が認められ，平坦に整えられている。特に右側面は角に面取りを行うようにやや丸く仕上げられており，残存部の湾曲から見ても石鍋口縁部を利用したものと思われる。表面にはススの付着が認められる。

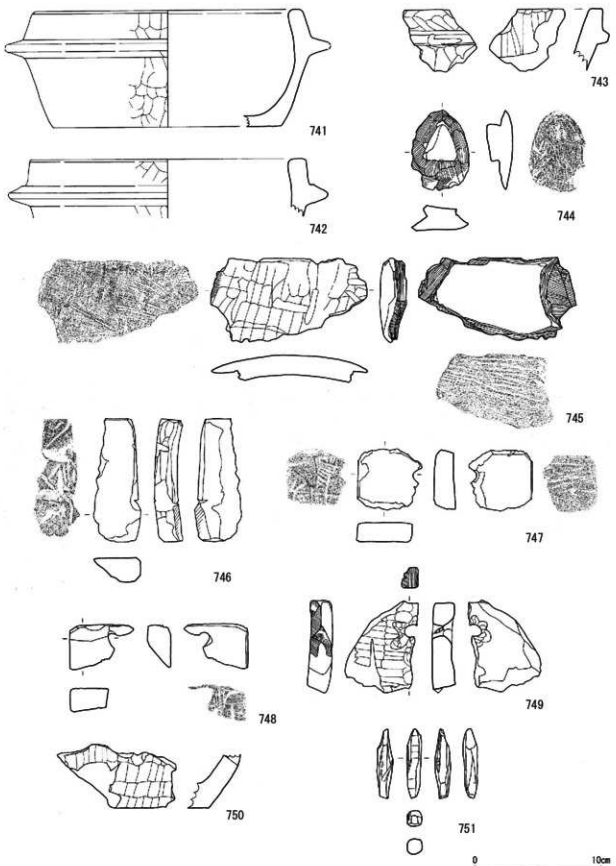
747は法量が残存長4.8cm，残存幅5.0cm，最大厚1.6cm，重量71.9ｇを測る。器形は残存部の２辺に平坦面を形成しているため，正方形または長方形に加工していたものと考えられる。器面調整は両面とも縦位のケズリ調整の後，横位のケズリ調整を行う。上面と左側面は短軸方向に工具による調整を行い，平坦に整えられている。また残存部右端には径1.0cm以上の穿孔が認められる。残存は僅かであるが，破片に湾曲が認められるため石鍋片の転用品である可能性がある。

748は法量が残存長3.5cm，残存幅5.0cm，最大厚1.8cm，重量34.1ｇを測る。器形は残存部の２辺に平坦面を形成しているため，正方形または長方形に加工していたものと考えられる。器面調整は表面がノミ状工具によるケズリ調整を行い，その後横位の擦痕が認められる。裏面は後世の損傷が激しいが，平坦面に横位の擦痕が認められる。上面と左側面は平坦に整えられており，特に上面は比較的角に丸みがあり，残存部の湾曲から見ても石鍋口縁部を利用している可能性がある。また残存部右端には径1.2cm以上の穿孔が認められる。

746～748はその形状から温石として使用された可能性が考えられる。特に**747・748**は全面にススの付着が認められるため再加工後に被熱したと思われ，温石を温める際に付着した可能性がある。

749・750は滑石未製品である。

749は法量が残存長7.3cm，残存幅5.7cm，最大厚1.8cm，重量104.0ｇを測る。器形は台形または円形を呈すると



第414図　石製品

想定される。残存部右端には1ヶ所の穿孔が認められる。これは意図が不明であるが，回転を利用して小孔を開けた後，表裏両面から孔の周辺を削り取り範囲を拡大させている。器面調整は表面がノミ状工具による横位のケズリ調整を行っており，これは石鍋整形時のものと考えられる。裏面は縦位・横位の擦痕が残り，これは石鍋使用時のものか再加工時のものか不明である。上面と左側面には擦痕が残り，平坦面を形成している。表面にはススの付着が認められる。形態が歪なため未製品であると考えられるが，平面形状や穿孔が見られることから温石としての使用を目的としていた可能性がある。

750は法量が残存長5.0cm，残存幅9.3cm，最大厚2.0cm，重量113.7gを測る。器形は石鍋の底部から胴部下半の一部が残存しており，側面は全て破断面と思われ加工痕は認められない。残存部の上部には径0.7cmの穿孔が認められる。器面調整は表面がノミ状工具による縦位のケズリ調整を行っており，これは石鍋整形時のものと考えられる。裏面は石鍋使用時のものと思われる擦痕が認められる。**750**は石鍋片に再加工を行っているのか不明である。しかし表面に付着する石鍋使用時のものと思われるススが小孔の内面には認められないため，石鍋が破損した後に穿孔を行っている可能性があり，未製品とした。

751は棒状の滑石製品である。法量は残存長5.5cm，最大幅1.1cm，最大厚1.2cm，重量11.3gを測る。器形は細長く両端がやや薄くなり，断面形は隅丸方形を呈する。上端は尖り気味だが，先端部に新しい破断面があるため使用時または後世に欠損したものと思われる。下端は尖らず平坦面を形成している。器面調整表面は縦位のケズリ調整を行い，平坦面を4面作り出している。平坦面の角には擦痕が残るが，これは整形時のものか，使用痕または後世の傷であるか不明である。器面には凹凸が目立つため，未製品である可能性も考えられる。

第70表　石製品観察表

掲図番号	遺物番号	出土区	出土層位	器種	石材	残存率(%)	法量				備考
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
第414図	741	J-37	Ⅳa	鍋	滑石	破片	口径(21.4)	底径(18.0)	器高(9.2)	305.6	本戸編年鍋-a-1類 ススの付着
	742	J-32・33	表土	鍋	滑石	10	口径(21.9)	－	－	194.4	本戸編年鍋-a-1類，復元最大径25.3cm ススの付着あり
	743	K-31	Ⅳa	鍋	滑石	破片	－	－	－	64.9	本戸編年鍋-b類
	744	K-25	Ⅲ	バレン状石製品	滑石	ほぼ完形	6.3	4.5	2.0	46.2	ススの付着あり
	745	M-33	表土	バレン状石製品	滑石	破片	6.6	12.4	1.6	190.8	石鍋片転用品，未製品の可能性あり ススの付着
	746	H-35	遺構内	板状石製品	滑石	30	9.8	3.7	1.9	105.8	温石か，石鍋片転用品の可能性あり ススの付着，縄文時代遺構内出土
	747	J-34	表土	板状石製品	滑石	20	4.8	5.0	1.6	71.9	温石か，石鍋片転用品の可能性あり 径1.0cm以上の穿孔1ヶ所あり，ススの付着
	748	I-35	表土	板状石製品	滑石	10	3.5	5.0	1.8	34.1	温石か，石鍋片転用品の可能性あり 径1.2cm以上の穿孔1ヶ所あり，ススの付着
	749	G・H-33	表土	滑石未製品	滑石	25	7.3	5.7	1.8	104.0	石鍋片転用品，温石未製品の可能性あり 1ヶ所の穿孔あり，ススの付着
	750	J・K-31	表土	滑石未製品	滑石	破片	(5.0)	(9.3)	2.0	113.7	石鍋片転用品か 径0.7cm穿孔1ヶ所あり，ススの付着
	751	C-29	Ⅳa	棒状石製品	滑石	ほぼ完形	(5.5)	1.1	1.2	11.3	使用用途不明品，端部を欠損する 未製品の可能性あり

＊()は復元・残存値

第５節　自然科学分析

1　テフラ分析

本報告では，縄文時代早期の遺構である土坑１号（速穴土坑）が掘り込まれている土層および遺構埋土に含まれる火山砕屑物を抽出し，その鉱物組成や砕屑物の特性を捉え，給源火山や噴出年代の明らかにされているテフラの特徴と試料中の砕屑物の特徴とを比較することによって，含有されるテフラを同定し，遺構に関わる資料を作成する。

(1)　試料

試料は，川久保遺跡で検出された縄文時代早期とされる土坑１号（速穴土坑）の埋土と遺構の掘り込まれている地山の土層より採取された火山灰土７点である。試料にはテフラ試料①～⑦までの試料名が付されている。各試料の採取位置は以下の通りである。

テフラ試料①，②，⑤，⑥の４点は，それぞれ「遺構外　Ⅶａ層該当」，「遺構外　Ⅶｂ層該当」，「遺構外　Ⅶａ層該当」，「遺構外　Ⅶｂ層該当」とされ，土坑１号が掘り込まれている火山灰土層から採取されている。発掘調査所見によれば，基本層序のⅦａ層は，縄文時代早期の遺物包含層とされる黒褐色土であり，Ⅶｂ層は，その下位の黒色土とされている。

テフラ試料③，④，⑦は，いずれも土坑１号内の遺構埋土から採取されており，それぞれ「遺構内上層」，「遺構内中層」，「遺構内下層」とされている。外見はいずれも黒褐色土である。

(2)　分析方法

a　テフラ組成分析

試料は，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250 メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が 1/16mm より小さい粒子を除去する。

水洗後に乾燥させた後，篩別して，得られた粒径 1/4mm-1/8mm の砂分を，ポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を，偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型，中間型，軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

b　屈折率測定

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象とする。屈折率の測定は，古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

(3)　結果

a　テフラ組成分析

分析結果を表１，図１に示す。各試料の重鉱物組成は，互いに類似しており，斜方輝石が最も多く，次いで不透明鉱物，単斜輝石の順に多い。火山ガラス比は，いずれの試料にも少量または微量の軽石型火山ガラスと微量または極めて微量のバブル型火山ガラスが含まれる。

b　屈折率測定

1）火山ガラス（図２）

いずれの試料にも複数のレンジが認められる。テフラ試料⑥では n1.497-1.500 の低屈折率のレンジと n1.505-1.509 の高屈折率のレンジとに分かれ，テフラ試料⑥以外の６点では，n1.497 前後 -1.500 前後の低屈折率のレンジ，n1.505 前後 -1.510 前後の中屈折率のレンジ，n1.512 前後 -1.514 前後の高屈折率のレンジの３つのレンジが見出せる。

2）斜方輝石（図３）

テフラ試料①～③の３点の試料では，γ 1.705 付近からγ 1.712 付近までの低屈折率のレンジとγ 1.720 付近から 1.730 付近までの高屈折率のレンジとに分かれる。テフラ試料④～⑦の４点の試料では，γ 1.705 付近から 1.714 付近までのレンジを示し，モードはγ 1.707 ～ 1.708 にある。

(4)　考察

今回のテフラ試料では，重鉱物組成および火山ガラス比によるテフラの識別はできないが，火山ガラスと斜方輝石の屈折率の状況から，複数のテフラに由来する砕屑物が混在していることが推定される。砕屑物のうち，全試料に認められた低屈折率のレンジを示す火山ガラスとテフラ試料①～③に認められた高屈折率の斜方輝石は，町田・新井（2003）に記載されたテフラの屈折率の値と遺跡の立地する場所の地質とから，シラス台地を構成する入戸火砕流に由来すると考えられる。また，テフラ試料⑥以外の試料に認められた中屈折率のレンジを示す火山ガラスとテフラ試料⑥の高屈折率のレンジを示す火山ガ

表1. テフラ組成分析結果

遺構名	層名	試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
連穴土坑1	遺構外Ⅶa層該当	テフラ試料①	122	44	0	84	0	250	3	1	10	236	250
	遺構外Ⅶb層該当	テフラ試料②	151	29	0	69	1	250	2	1	8	239	250
	遺構内上層	テフラ試料③	134	41	0	74	1	250	1	0	14	235	250
	遺構内中層	テフラ試料④	143	38	0	65	4	250	3	1	10	236	250
	遺構外Ⅶa層該当	テフラ試料⑤	157	36	0	56	1	250	0	2	5	243	250
	遺構外Ⅶb層該当	テフラ試料⑥	151	37	0	61	1	250	4	0	4	242	250
	遺構内下層	テフラ試料⑦	128	51	1	70	0	250	1	0	13	236	250

ラスは，上記と同様に屈折率の値から推定すると，串良川の谷壁に露出するシラス台地下の阿多火砕流堆積物（鹿児島県，1990）に由来する可能性がある。さらに，テフラ試料①～③の低屈折率のレンジを示す斜方輝石とテフラ試料④～⑦の斜方輝石は，その屈折率の値から，上述した阿多火砕流堆積物と基本層序の8a層に堆積する桜島薩摩テフラ（Sz-S：小林，1986）の両者に由来する砕屑物が混在していると考えることができる。

各試料において高屈折率のレンジを示した火山ガラスについては，その屈折率の値から，遺構外の試料ではSz-Sに由来する可能性が高いと考えられる。しかし，遺構内の試料では，Sz-Sの噴出以降鬼界アカホヤテフラ（K-Ah：町田・新井，1978）の降下までの期間に噴出した桜島火山のテフラに由来する可能性があると考えられる。特に遺構内下層から採取されたテフラ試料⑦では，高屈折率の火山ガラスの存在が顕著に認められる。上述した期間に噴出した桜島火山のテフラは，下位よりSz-13，Sz-12，Sz-11の3枚になるが（町田・新井，2003），本分析による屈折率の値からは，Sz-12に由来する可能性が高いと考えられる。Sz-12の噴出年代は，暦年で約9000年前とされている（奥野，2002）ことから，土坑1号の構築年代は，新しくとも9000年前よりは古いと考えられ，縄文時代早期とされる発掘調査所見および前述した遺構内出土の炭化物および土器付着物の放射性炭素年代測定結果とも概ね整合すると言える。

なお，当社ではこれまでにも鹿児島県志布志市から大崎町および串良町に至る地域に分布する縄文時代遺跡において本報告と同様の方法によるテフラ分析を行ってきた。それらの事例では，本報告と同様に特にSz-12とSz-13との識別が問題とされ，主に屈折率の傾向から検討してきた。串良町の田原迫ノ上遺跡や大崎町の永吉天神段遺跡などでは，縄文時代早期とされる遺構の覆土から，Sz-12に由来する火山ガラスを検出している。ただし，その一方で，志布志市の牧野遺跡や下原遺跡における基本土層の分析ではSz-13に由来する可能性の高い火山ガラスを検出している。現時点では，Sz-12およびSz-13の各テフラの分布域を特定するには至らないが，分析事例を蓄積することにより，分布域の傾向の把握が期待される。

引用文献

古澤　明，1995．火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123-133．

鹿児島県地質図編集委員会，1990．鹿児島県地質図縮尺10万分の1．鹿児島県．

小林哲夫，1986．桜島火山の形成史と火砕流．文部省科学研究費自然災害特別研究，計画研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（代表者荒牧重雄）報告書，137-163．

工藤雄一郎，2012．旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学．新泉社，373p．

町田　洋・新井房夫，1978．南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ―アカホヤ火山灰．第四紀研

究，17，143-163.
町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.
奥野　充，2002，南九州に分布する最近約３万年間のテフラの年代．第四紀研究，41，225-236.
Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869- 1887.
Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

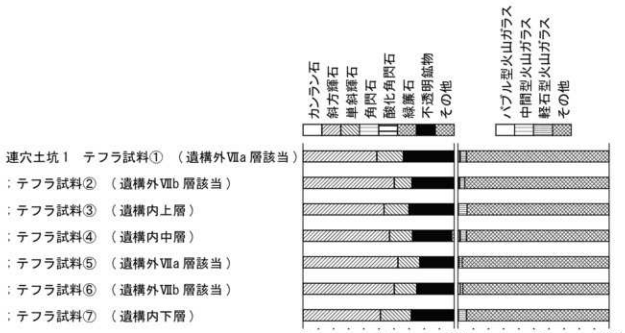


図１．重鉱物火山ガラス比

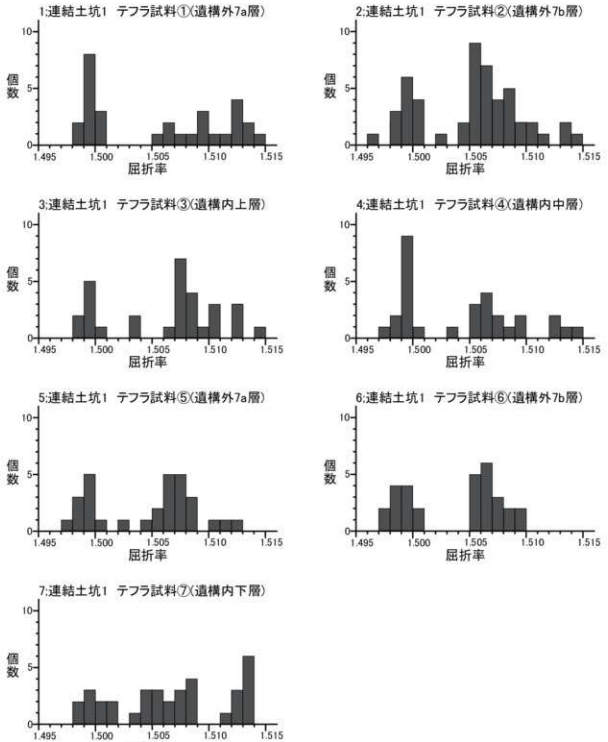


図 2. 火山ガラスの屈折率測定結果

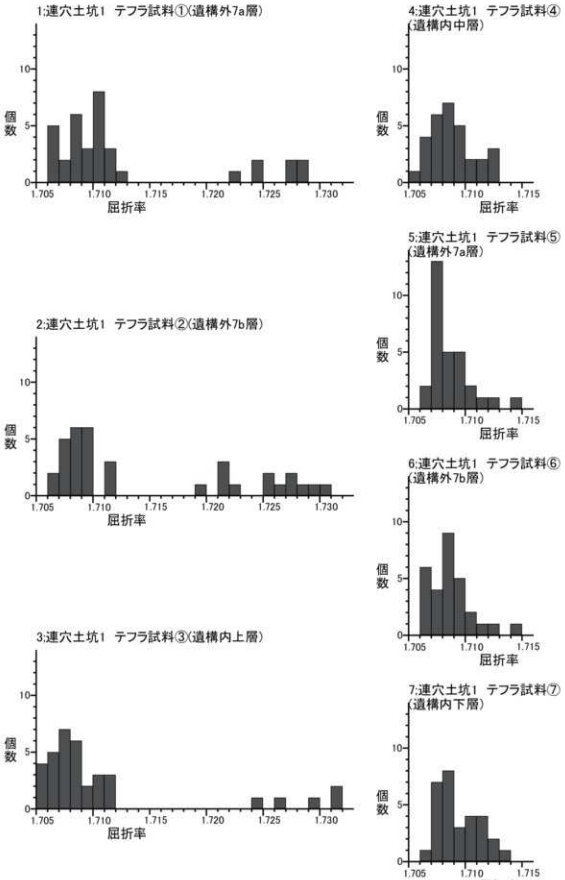
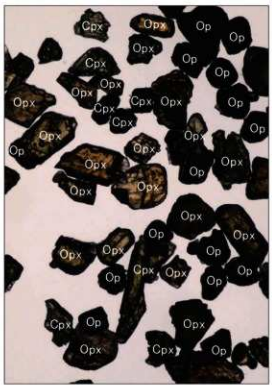
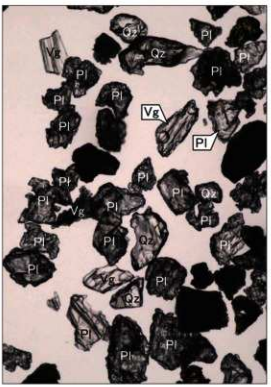


図 3 斜方輝石の屈折率測定結果

図版1　重鉱物・火山ガラス



1.重鉱物(連穴土坑1　テフラ試料②　遺構外7b層該当)



2.火山ガラス(連穴土坑1　テフラ試料②　遺構外7b層該当)

3.重鉱物(連穴土坑1　テフラ試料⑦　遺構内下層)

4.火山ガラス(連穴土坑1　テフラ試料⑦　遺構内下層)

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Op:不透明鉱物. Vg:火山ガラス. Qz:石英. Pl:斜長石.

0.5mm

2　放射性炭素年代測定

本報告では，縄文時代早期の遺構とされる土坑１号（連穴土坑）に関わる埋土中より採取された炭化物や土器の付着物について放射性炭素年代測定を実施し，遺構に関わる年代資料を作成する。

(1)　試料

試料は，調査区南東隅近くで検出された土坑１号（連穴土坑）の埋土内より採取された炭化物２点と，同様に採取された土器片の内面の付着物１点の計３点である。各試料には，発掘調査者により試料№が付されており，埋土上層から出土した炭化物は試料№１，埋土下層から出土した炭化物は試料№２，土器片付着物は試料№３とされている。炭化物試料はいずれも微細片であり，土器付着物も微少量である。

(2)　分析方法

試料表面の汚れや付着物をピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて，試料内部の汚染物質を化学的に除去する。（酸－アルカリ－酸処理：AAA 処理）。その後超純水で中性になるまで洗浄し，乾燥させる。なお，アルカリ処理は，0.001M ～ 1M まで濃度を上げ，試料の様子をみながら処理を進める。1M の水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合は AAA と記す。一方，試料が脆弱で 1M の水酸化ナトリウムでは試料が損耗し，十分な炭素が得られないと判断された場合は，薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。本分析試料は，３点ともに AaA 処理を行った。

精製された試料を燃焼して CO_2 を発生させ，真空ラインで精製する。鉄を触媒とし，水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスし，測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置を用いて，14C の計数，13C 濃度（13C/12C），14C 濃度（14C/12C）を測定する。AMS 測定時に，標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。δ 13C は試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また，測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach,1977）。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正とは，大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動，及び半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので，形成当時の 14C 年代を反映している）等を用いて作られており，最新のものは 2013 年に発表された Intcal13（Reimer et al.,2013）である。また，較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが，今回は RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1 を用いる。なお，年代測定値に関しては，国際的な取り決めにより，測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver and Polach, 1977），将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため，表には丸めない値（1 年単位）を記す。

(3)　結果および考察

結果を表１に示す。同位体補正を行った年代値は，試料№１が 9,120 ± 30BP，試料№２が 9,225 ± 30BP，試料№３が 8,600 ± 70BP である。一方，暦年較正の２σの結果は，試料№１が 10,378 ～ 10,222cal BP，試料№２が 10,496 ～ 10,269cal BP，試料№３が 9,735 ～ 9,475cal BP である。

上述した年代測定結果は，工藤（2012）の言う縄文時代早期前葉の年代とよく一致しており，連穴土坑１の発掘調査所見を支持する。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料No.	種類	処理	δ13C (‰)	補正年代 (層年較正用) BP	層年較正結果									測定番号
					誤差	cal BC/AD				cal BP			相対比	
No.1	炭化物	AaA	-28.75±0.22	9,120±30	σ	cal BC	8,322	–	cal BC	8,283	cal BP	10,271	– 10,232	1.000	pal-10166
				(9,121±30)	2σ	cal BC	8,429	–	cal BC	8,368	cal BP	10,378	– 10,317	0.113	(PLD-32998)
						cal BC	8,351	–	cal BC	8,273	cal BP	10,300	– 10,222	0.887	
No.2	炭化物	AaA	-24.63±0.21	9,225±30	σ	cal BC	8,532	–	cal BC	8,516	cal BP	10,481	– 10,465	0.107	pal-10167
				(9,223±32)		cal BC	8,479	–	cal BC	8,419	cal BP	10,428	– 10,368	0.447	(PLD-32999)
						cal BC	8,409	–	cal BC	8,347	cal BP	10,358	– 10,296	0.446	
					2σ	cal BC	8,547	–	cal BC	8,320	cal BP	10,496	– 10,269	1.000	
No.3	土器付着物	AaA	-30.34±0.44	8,600±70	σ	cal BC	7,707	–	cal BC	7,696	cal BP	9,656	– 9,645	0.060	pal-10165
				(8,603±66)		cal BC	7,683	–	cal BC	7,573	cal BP	9,632	– 9,522	0.940	(PLD-32997)
					2σ	cal BC	7,786	–	cal BC	7,767	cal BP	9,735	– 9,716	0.014	
						cal BC	7,760	–	cal BC	7,526	cal BP	9,709	– 9,475	0.986	

1)酸-アルカリ-酸処理のうち、AAAは定法による分析、AaAは脆弱であるためアルカリの濃度を下げた分析。

2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

4)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

5)層年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)である。

6)層年の計算には、補正年代に()で層年較正用年代として示した。一桁目を丸める前の値を使用している。

7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、層年較正曲線や層年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、層年較正用年代値は1桁目を丸めていない。

8)統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である(確率参照)。

9)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

縄文時代早期連穴土坑１埋土中出土土器

第Ⅴ章　総括

第１節　縄文時代早期

１　集石

縄文時代早期の集石は276基検出された。その多くが安山岩を主体とし，５～10cm大の礫で構成されている。これに対して縄文時代前期の集石はホルンフェルスを主体とするものが多くなるという傾向がみられる。集石が所属する時代に関しては，大まかにⅦ層が早期前半，Ⅵ層が早期後半である可能性が高いとしか言えないが，少なくともⅥ層の集石の多くから塞ノ神Ａ式土器が出土していることから，Ⅵ層集石の多くが塞ノ神Ａ式土器の時期の遺構と考えられる。分布域に関しては，Ⅶｂ・Ⅶａ・Ⅵ層いずれも遺跡の南側から多くの集石が検出されているが，Ⅶａ層で遺跡全体に広がった集石が，Ⅵ層段階で再び遺跡の南側に集中している様相も見られる。

２　連穴土坑

(1)連穴土坑の検討

連穴土坑は12基検出されている。検出地点は，おおまかに５か所の地点に分けることができる。ここでは連穴土坑のまとまりごとに，調査区南東角部Ｊ～Ｌ35区，調査区南側Ｋ・Ｌ31～33区，調査区南西部の３つの区域に分け，それぞれ検討をおこなっていくこととしたい。連穴土坑は南東角部と南側に特に集中しており，その形状等から土坑15～18号も連穴土坑である可能性が高いため，検討には土坑15～18号も合わせた18基でおこなうこととしたい。検討項目は，土坑の法量（長軸幅・短軸幅・深さ）・長軸方向・煙道位置・斜面利用の有無・平面形状・床面断面形状の６つである。

(2)連穴土坑の検討内容

まず，連穴土坑の法量であるが，長軸幅は115cm～210cmと約１ｍの幅があり，これをグラフにすると，115～125cm，140～185cm，200～210cmの３つの山が確認できた。短軸幅は55cmと65cmのものが多くなり，山は一つしか確認できなかった。山の数が違うことからも，連穴土坑の長軸幅と短軸幅に関連性は無く，長軸幅には短いもの・中間・長いものの３パターンがあり，短軸幅は55～65cm前後の幅があれば遺構の用途としては問題なく機能していたと考えられる。

次に深さであるが，連穴土坑の検出面は，ほぼⅦａ層上面であり，本来の遺構形成面であるⅦ層中よりも下位で検出されている。よって，本来の連穴土坑の深さは不明であるが，土坑６号の深さ（50～55cm）を見ると，少なくとも60cm以上の深さがあったと考えられる。

次に長軸方向・煙道の位置・斜面利用の有無を検討したい。まずは長軸方向であるが，東西軸８基，南北軸６基，北東－南西軸３基，北西－南東軸１基である。煙道の位置に関しては，煙道の位置が分からないものを除き，東西方向を軸とし，煙道が東側にあるものが３基，西側にあるものが４基である。南北方向を軸とし，煙道が南側にあるものが０基，北側にあるものが３基である。北東－南西方向を軸とし，煙道が北東側にあるものが２基，南西側にあるものが１基である。煙道の位置に関しては，南北軸のものに限っては，北側を意識して煙道を作っている可能性が考えられる。

連穴土坑の多くは傾斜地に作られている。ただし，この中で傾斜に沿って（傾斜を利用して）連穴土坑を作成しているのは６基のみであり，残りの12基は傾斜地に作られていながら，斜面に垂直に作られている。

次に連穴土坑の平面形状であるが，遺構の長軸と短軸を比してａ：細長いもの，ｂ：幅があるものの２つと，焚口側に比して，煙道側が狭くなるｃ：台形状のものの計３つに分類した。基数はそれぞれ，ａが10基，ｂが６基，ｃが２基である。

床面断面形状は大まかに分類すると，ｄ：ブリッジ部分が高くなるもの。ｅ：ブリッジ部分が低くなるもの，ｆ：床面の高さがほぼ水平なものに分けることができた。分類ｄは連穴土坑５・７・11号のようにブリッジ直下に高まりを作るものがあるが，土坑４号のように煙道部分から焚口部分へと緩やかに下るものも含める。分類ｅは連穴土坑２号のようにブリッジ直下から焚口方向へ掘り込みのあるもの，土坑８号のようにブリッジ直下から煙道方向へ掘り込みがあるもと，様々な形態があるが，共通してブリッジ部分が低くなる土坑である。同じように連穴土坑10号も煙道側に段を設けているが，ブリッジ直下は一番低くなっている。また，連穴土坑９号も煙道側から焚口側方向へ緩やかに立ち上がることから分類ｅとしている。分類ｆは床面の高さがほぼ水平なもので，土坑６号がこれに該当する。

(3)連穴土坑の検討結果

以上の６つの項目の検討を経て，区域ごとに連穴土坑を見ていくと，南東角部と南側・南西部では以下の項目で違いが確認できた。

①　長軸方向は南東角部では東西軸のものが多い。南側・南西部では南北軸のものが増加。

②　斜面利用の有無では，南側・南西部のみに斜面を利用したものが確認された。

③　平面形状は南東角部では分類ａが主体。南側・南西部では分類ｂが増加。

④　床面断面形状は南東角部では分類ｅのみ。南側・南西部では分類ｄが主体となる。

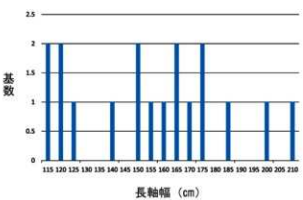
なお，検討の過程で土坑18号については，埋土の状況が連穴土坑とするには疑わしいこと，長軸方向が唯一北西

ー南東方向であること等から，連穴土坑の可能性が低いとし，参考として扱うこととした。

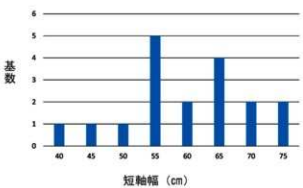
(4) 区域ごとの連穴土坑の違いについて

次に南東角部と南側・南西部の連穴土坑の違いについて考えていくこととする。そこに時間差が存在するかどうかである。出土遺物は連穴土坑１・10・13号からそれぞれ吉田式土器や石坂式土器が出土しているが，いずれも南東角部である。連穴土坑１号に関しては，テフラ分析と年代測定をおこなっており，テフラ分析では，下層から検出された火山灰は桜島火山のテフラＳｚ-1由来の可能性が高く，その噴出年代は約9,000年前とされている。また，遺構内から出土した炭化物２点と土器付着炭化物１点の年代測定は，炭化物が9,120±30BPと9,225±30BP，土器付着炭化物が8,600±75BPという測定結果になっている。出土した土器は吉田式土器であり，炭化物の測定結果は一致するが，土器付着炭化物はやや新しい年代が出ている。検出面に関しては，遺構の深さの部分で述べたとおり，ほぼⅧa層上面検出のため，参考にはならない。そこで，連穴土坑内に堆積した遺構内埋土の検討をおこなったが，全てⅦ層起源の埋土が堆積しており，少なくとも縄文時代早期前半期の遺構であること以外に，明確な違いは見られなかった。

以上，連穴土坑のみで検討した結果，①連穴土坑は南東角部と南側・南西部という２つの区域で異なった傾向がみられた。②少なくとも南東角部の連穴土坑は吉田式土器・石坂式土器の時期の遺構である可能性が高く，テフラ分析・年代測定結果のそれと一致する。



第415図　連穴土坑の長軸幅（ｎ=18）



第416図　連穴土坑の短軸幅（ｎ=18）

第417図　連穴土坑平面形状による分類

3　縄文時代早期土器

縄文時代早期土器は１類～15類土器が，薩摩火山灰層とアカホヤ火山灰層に挟まれるⅦ層・Ⅵ層から出土している。場所により層厚に違いがあり，安定していないため，各土器型式が層位的に出土しているとは言い難い出土状況である。

１類土器は岩本式土器，２類土器は前平式土器，３類土器は志風頭式土器である。ともに出土量は少なく，分布域は調査区の南側に多く分布している。これは薩摩火山灰層下位の草創期土器の分布と重なる。２類土器の前平式土器は，胴部の貝殻条痕が斜位方向に施される２ａ類と，口縁部上端に棒状工具等で楕円形の刺突文を２列

ほど施し，胴部の貝殻条痕が横位方向に施される２ｂ類土器に分類している。２ｂ類土器は後続する志風頭式土器により近い特徴を持つ土器の一群である。

４ａ類は加栗山式土器，４ｂ類は札ノ元Ⅶ類土器，４ｃ類は小牧３Ａタイプである。ともに出土量は少なく，４ａ類の分布は調査区の全体に点在するように出土している。

５類は吉田式土器である。岩之上式土器や倉園Ｂ式土器も含まれている。分布域は調査区の中央から南側に集中して出土しており，特にＪ30区から多く出土した。

６類土器は石坂式土器である。12類土器とともに川久保遺跡の縄文時代早期で多く出土した土器型式である。６ａ類：口縁部が外反するものと６ｂ類：口縁部が外傾するものに分類した。前迫亮一氏は石坂式土器を２つに分類し，口唇部に丸みを持ち，口縁部が外反，胴部がやや膨らむ等の特徴を持つものを石坂Ⅰ式，口唇部が平坦で，口縁部が外傾もしくは直行し，胴部はほぼ直線的で，口縁部に瘤状突起を持つ等の特徴を持つものを石坂Ⅱ式としている（前迫2003）。川久保遺跡の６類土器はおおよそ，６ａ類＝石坂Ⅰ式，６ｂ類＝石坂Ⅱ式に該当する。出土した石坂式土器の中でも，掲載番号83の石坂式土器は，寸胴形を呈し，胴部に貝殻条痕文を弧状に施す珍しい文様が施されている。６類土器は遺跡の中央から南東部に最も多く出土しているが，北西部にも分布が見られ，全体的にはいくつかの土器集中域が確認できる。

７類土器は下剥峯式土器である。石坂式土器と比較すると出土量は激減する。分布域は遺跡の南側のみであり，散在して出土している状況が見られる。

８類土器は押型文土器，９類土器は手向山式土器，10類土器は変形撚糸文土器である。３型式とも出土量は少なく，特に変形撚糸文土器は１個体のみが包含層から出土している。８～10類土器の分布域は他の土器とは異なり，押型文土器は遺跡の西側から南側にかけて，手向山式土器は遺跡の南側，変形撚糸文土器は遺跡の北東角部から出土している状況である。

11類土器は塞ノ神Ａ式土器である。12類土器と比較すると出土量は圧倒的に少ない。川久保遺跡では，押型文土器や手向山式土器と塞ノ神Ａ式土器の間に編年されている妙見・天道ヶ尾式土器や平栫式土器は１点も出土していない。塞ノ神Ａ式土器の出土量の少なさは，その点と関連していると考えられる。

12類土器は塞ノ神Ｂ式土器である。川久保遺跡の縄文時代早期で最も多く出土した土器型式である。12類土器の中でも，貝殻押引文を施す土器の一群は苦浜式土器に近い一群であると考えられる。12類土器の分布は，遺跡の中央から南側に多く分布しており，Ｇ28区から遺跡の東南角部に向けて弧状に分布が集中している状況が見られる。遺跡の北側にも点在するが量は少ない。石坂式土器と同じように遺跡の北西角部にも量は少ないが，ある程度の出土が確認できる。川久保遺跡は東は中良川，南と西側は谷地形が形成されているが，北側には平坦部が広がっており，石坂式土器や塞ノ神Ｂ式土器の分布を見る限りでは，遺跡はさらに北側へ広がっていると考えられる。

13類土器は苦浜式土器，14類土器は石京西式土器，15類土器は轟Ａ式土器である。出土量は少なく，苦浜式土器はＤ31区とＧ33区に，石京西式土器はＫ30区にそれぞれ集中して出土している。轟Ａ式土器は出土量は少ないが，広く散在してさらに出土している状況である。

川久保遺跡では以上のとおり，平栫式土器などのいくつかの土器型式を除くと，ほぼ全ての土器型式が出土しており，綿々と生活が営まれていたことが分かる。また，草創期から早期初頭にかけては主に遺跡の南側に分布していた遺物が，次第に遺跡全体に拡大していく様相も確認できる。しかしながら，塞ノ神Ｂ式土器に後続する苦浜式土器の段階になると，土器の出土量が激減し，後続する轟系土器も含めて１～３個体のみの出土となっている。このような土器の増減の激しさと，集石のみが検出され，竪穴住居跡が１基も検出されていないことなどから，川久保遺跡はキャンプサイト的な遺跡であるとも考えられるが，遺跡の継続性から考えると，良好なキャンプサイトでありながら，居住はしていないという矛盾が生まれる。そう考えると，川久保遺跡は集石や連穴土坑などの調理をおこなう場所であり，居住域は遺跡に近接した場所に存在する可能性も考えられる。川久保遺跡の北側には平坦部が広がり，石坂式土器や塞ノ神Ｂ式土器の分布から，遺跡は北側へ広がると考えられ，居住域が存在する可能性も考えられる。

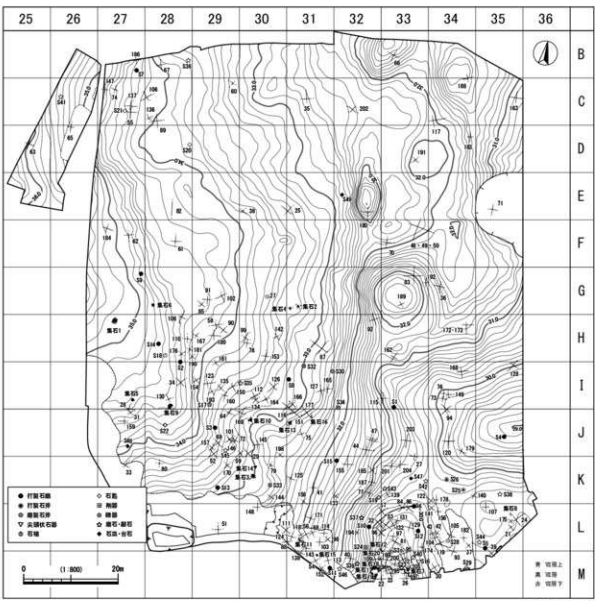
４　縄文時代早期石器

川久保遺跡Ａ地点からは，Ⅶｂ層～Ⅵ層にかけて縄文時代早期及び前期の石器が多数出土したが，いずれの土器型式に伴うかを断定する事はできなかった。出土した石器については代表的・特徴的な器種を抽出して分類・図化を行い，図化した石器群については出土分布図を作成して掲載している。

縄文時代早期の石器は，打製・磨製石鏃，石槍，石匙，削器等の剥片石器類，打製・磨製石斧，礫器，磨・敲石，石皿・台石等の礫石器類，石核，軽石製品等が出土した。出土した石器を器種別に見ると，磨・敲石125点，打製石鏃97点，石匙27点，石皿・台石23点，礫器16点，磨製石斧９点，打製石斧７点等となっており，堅果類加工具の占める割合が最も高く，次に狩猟具の占める割合が高くなっている。石鏃は小型で平基状を呈するものや抉りが深く二等辺三角形状を呈するものが出土しており，また，いわゆる「トロトロ石器」と呼称されるものも出土している。磨製石鏃も１点出土が見られる。石槍はⅦｂ

層及びⅦａ層から出土しているが，早期後半以降は出土が見られない。削器は安山岩製の大型品が出土している。安山岩製の大型スクレイパーについては被熱を利用した特殊な剥片剥離技術による製作過程が想定されているが（桑波田2012），本資料については被熱等の痕跡は確認できなかった。磨製石斧は，早期前半では刃部のみ研磨された部分磨製の石斧及び小型のノミ状の磨製石斧が出土しているが，早期後半になると基部まで研磨された磨製石斧や素材の一部のみに加工が施された大型品が見られるようになる。局部磨製石斧のほとんど基部を欠損していることから，使用時に破損したものと考えられる。S39の磨・敲石は，両端部が使用されて平坦になっており，敲打痕は右側面にまで及んでいる。剥片剥離時に使用される叩石とは使用痕が異なるため，磨製石斧類の敲打整形に使用された叩石の可能性がある。S47の石皿は，当初石皿として使用されていたものを砥石に転用したと考えられる資料であり，磨製石器の研磨加工に使用されたものと考えられる。早期で見られる砥石はこの１点のみである。

出土した石器と集石の分布状況を見ると，早期前半では集石と狩猟具及び堅果類加工具はほぼ重なるように分布しているのに対し，早期後半では狩猟具の分布域と集石及び堅果類加工具の分布域が異なる。早期後半になると，B32～Ⅰ35区に構築される集石は１基のみになり，代わって狩猟具の分布が見られるようになることから，早期前半と後半で遺跡内の土地利用の在り方に変化が生

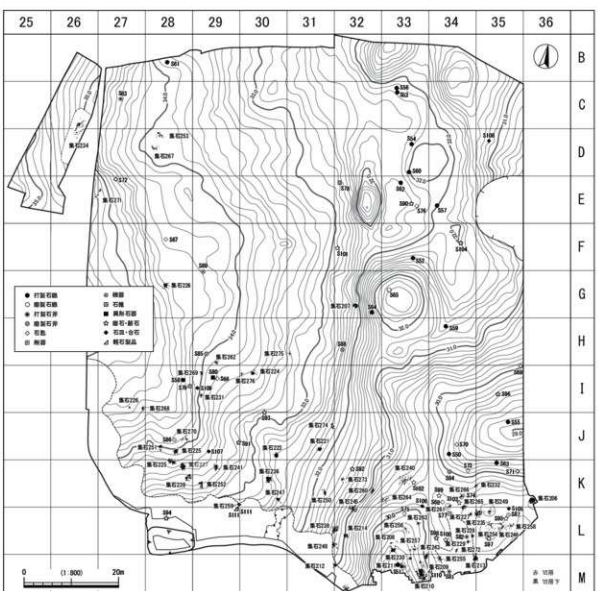


Ⅶ層上面コンタ図

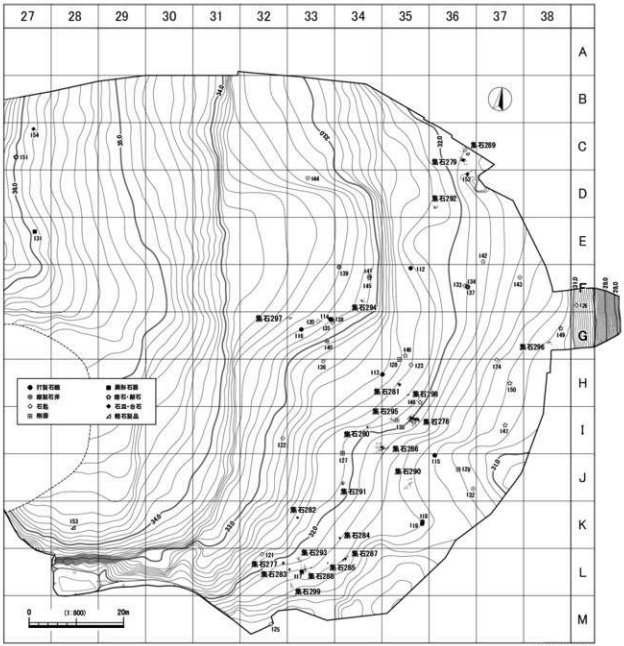
第418図　Ⅶ層検出集石及びⅦ層出土石器分布図

じていた可能性が考えられる。石器の使用石材を見ると，剥片石器類は黒曜石や安山岩，頁岩，チャート等の利用が多く見られるのに対し，礫石器類は安山岩や砂岩，ホルンフェルスが多用されている。早期前半では主に在地石材の利用が見られ，一部に西北九州産の安山岩が見られる程度であるが，早期後半になると西北九州産黒曜石や安山岩，大分県姫島産黒曜石の利用が見られるようになる。

以上より，川久保遺跡では縄文時代早期から磨製石器の利用が開始されているが，磨製石器の製作活動については本格的なものではなく，石器の器面の一部を加工する程度の簡易的な製作活動であった可能性が高いと考えられる。堅果類加工具についてはその出土比率が高い事から，植物質食糧の利用が縄文時代早期から積極的に行われていたものと考えられる。早期前葉の前平式土器段階に「高度の堅果類利用体系の確立」が見られるという指摘もあるが（中原1999），今回の報告では確認するには至らなかった。狩猟具等の生産・加工についても可能性は指摘できるが，石器生産の詳細については剥片類の石材分布や接合資料等を含めたより詳細な分析が必要である。



第419図　Ⅵ層検出集石及びⅥ層出土石器分布図



Va層コンタ図

第420図　Ｖａ層検出集石及びＶ層出土石器分布図

第71表　石器組成表

器種	Ⅵ層										Ⅵ層										Ⅴ層												合計
	黒曜石	安山岩	頁岩	チャート	珪質岩	花崗岩	凝灰岩	砂岩	ホルンフェルス	計	黒曜石	安山岩	頁岩	チャート	珪質岩	花崗岩	凝灰岩	砂岩	ホルンフェルス	メノウ系	計	黒曜石	安山岩	頁岩	チャート	珪質岩	花崗岩	凝灰岩	砂岩	ホルンフェルス	粗粒岩	計	
打製石器	13	10	1	3						27	37	17	2	4	2					3	65	13	9	1	1							24	120
磨製石器													1								1												1
石錘		2								2																							2
石匙		7	1		1					9	1	15	1		1						18	2	6	2	1							11	38
削器		3								3		3									3		3	4	2							9	15
異形石器											1										1												2
打製石斧			3							3		4									4		8										15
磨製石斧			6							6		4									4		18							1		3	32
礫器								1	7	8		1								7	8									2			10
敲石																														5			5
磨・敲石		51				6	1	1		59		57				4	2	5			68		18	1				3		11	1		103
石皿・台石		5				6	1	1		13		7				3					10		4					5		3	1		36
合計	13	83	11	3	1	12	2	3	7	139	39	109	12	4	3	7	2	5	7	3	199	16	39	34	4	0	8	8	0	28	4	3	445

第２節　縄文時代前期

縄文時代前期の遺構・遺物はＶａ層を主体として，遺構は集石23基が検出され，土器は16～18類土器が出土している。

縄文時代前期の集石は23基検出されており，その分布は遺跡の中央よりも東側半分に偏り，その中で南北に分布している。集石の所属する時期に関して，土器の分布と比較してみると，どの土器とも関連性が考えられる位置関係となる。しかしながら，出土している土器の総数が圧倒的に多いことや，集石内からも土器が出土していることから，18類土器の時期の集石が多いと考えられる。

16類土器は西之薗式土器である。柴畑光博氏により型式設定された（柴畑2002）土器であり，南さつま市西之薗遺跡を標式遺跡とする土器である。貝殻条痕地に貼り付けによる隆帯文を基調とするとされており，その点からも轟Ｂ式土器の枠組みの中で扱われることが多い。川久保遺跡では５個体が出土している。どれも口縁部上端に２条の文様の施された突帯文を施し，器面調整は貝殻条痕調整がおこなわれている。文様構成により，大きくは２類に分類でき，外面の貝殻条痕調整の上から文様を施すものと，施さないものに分けられる。さらに細分すると，突帯上の文様がキザミのものと，刺突文のものに分けられる。後続する轟Ｂ式土器の器面調整から考えると，胴部に文様を施すものが古くなると考えられる。また，合わせて突帯上の文様はキザミを施すものが，刺突文を施すものよりも古くなる可能性が考えられる。17類土器は轟Ｂ式土器である。５点のみが出土しており，出土量は非常に少ない。それぞれH36区とK36区から集中して出土している。全形が確認できるのは１点のみであるが，器形が尖底になるため，後続する西唐津式土器よりも，むしろ西之薗式土器に近い特徴を持つ土器と言える。

18類土器は曽畑式土器である。口縁部に刺突文が施されるものが少なく，それらも含めて古い段階の曽畑式土器は出土していない。この状況は，大隅半島では古い段階の曽畑式土器が出土していないという，これまでの出土状況と合致している（岩永2006）。

縄文時代前期の石器は，打製石鏃，石匙，削器等の剥片石器類，打製・磨製石斧，礫器，磨・敲石，石皿・台石，砥石等の礫石器類，軽石製品等が出土している。

出土した石器を器種別に見ると，磨・敲石34点，打製石鏃23点，磨製石斧22点，石皿・台石13点，石匙11点，打製石斧９点等となっており，縄文時代早期同様に堅果類加工具の占める割合が高い事に加えて，磨製石斧の占める割合が高くなっている。石匙は縦型及び横型の両者が出土している。早期後半から大型化及び横型の石匙の幅広化の傾向が見られるが，前期でも同様の傾向が確認できる。磨製石斧は，太型蛤刃石斧や定角式磨製石斧，小型の鑿状の磨製石斧が出土している。特にＳ137～Ｓ139は蛇紋岩製の定角式磨製石斧であり，装着痕や使用痕が見られない事から非実用品とも考えられる。県内では薩摩半島八瀬尾地域や徳之島の井之川岳周辺に蛇紋岩類の分布が知られているが，県内の未知の産地あるいは県外の蛇紋岩が使用されている可能性も考えられる。素材獲得後に本遺跡内で加工されたものか，あるいは，製品の状態で遺跡外から搬入されたものかという点も含め，産地同定等より詳細な分析が必要であろう。また，図化は行わなかったものの小型の砥石が５点程出土していることから，早期から引き続き磨製石器の加工が行われていたようである。

図化した石器群と集石の分布状況を見ると，石鏃や削器は散布した状況であるが，磨製石斧や磨・敲石はＦ33～Ｉ37区の範囲内にまとまって出土しており，H35～L33区やC・D36区の標高32.0ｍ前後に集中する集石とは分布域がやや異なっている。石材利用については，剥片石器類と礫石器類での利用の仕方や西北九州産黒曜石や安山岩の利用など，縄文時代早期と類似した在り方をしている。

第３節　古代・中世

１　古代

古代の遺構の中で特徴的な遺構は土坑34号があり，２か所のカマド跡と１か所の炭をかき出したと考えられる黒色土範囲が確認できることから調理の機能を持つ施設と考えられる。土坑34号の北側には柱穴群が検出されているが，明確な掘立柱建物跡は認定できていない。

本遺跡における出土遺物は遺構に伴う出土遺物は少なく，表土および基本層序Ⅳ層などの包含層出土遺物が多数を占めている。まず出土遺物全体数量の割合を一番多く占めるのは土師器でおよそ1500点以上の破片が出土しているが，ほとんど小片のため中世の土師器と区別できていないため正確な数量は把握できていない。以下はいずれも小片で個体数を示すものではないが，多いものから順に須恵器（139点），黒色土器（91点），墨書土器（14点），焼塩土器（10点）となる。出土遺物の器種構成は食膳具では土師器の皿・坏・椀，黒色土器の皿・坏・椀，須恵器の皿・坏，貯蔵・煮炊具では土師器の壺・甕，須恵器の壺，甕が出土している。この他に注目する遺物として，内面見込みに線刻が認められる刻書土器（428），運搬・保存具を兼ねた焼塩土器，墨書土器などが出土している。また，土師器坏・椀に同一形状の植物繊維痕の圧痕（406・408・418・419・420・426）が残存しており，これは焼成以前の痕跡で体部内外面のいずれか１箇所または内外面両方の２箇所に認められる。

遺構では土坑からは主に８～10世紀代の土師器の坏，甕などが出土している（松田2004）。このうち土坑40号

では甕の口縁部片と共に内外面が黒色化した両黒の黒色土器（いわゆる黒色土器B で森編年では９世紀中頃～11世紀前半とされる）が出土しており，本遺跡では両黒の黒色土器は他の破片1点と合わせて２点しか確認できていない。また土坑50号では円盤状の底部を有する充実高台の坏や墨書土器などが出土しており，鹿児島における充実高台の年代観（中村和美2006）から10世紀初頭頃の遺構と考えられる。

包含層出土遺物は一番古いもので須恵器の模倣坏（402）号で中村編年のⅡ－３または４型式に類似しており６世紀後半～７世紀前半の所産と思われる。遺物が最も多く出土する時期は出土遺物が類似する曽於市高篠遺跡の松田氏（松田2004）や鹿児島県の平安時代の土器京膳具の様相について検討された岩元氏の編年（岩元2012）を参照比較するとと土師器の坏・椀，黒色土器の高台付皿・坏・椀，須恵器坏などの形態から９世紀代のものが主体を占めている。では次にこれらの出土遺物の分布状況について種別ごとに概観する。

土師器（第265図）・黒色土器（第273図）は，共に調査区北西部（Ｂ～Ｅ27～30区）と東側中央周辺部（Ｆ～Ｊ34～38区）に集中が認められる。また，南西部（Ｊ～Ｍ23～26区）にも甕を中心に土器の集中が認められるが，谷の斜面や底から出土していることから，廃棄や流れ込みの可能性が考えられる。

墨書土器（第274図）は16点出土しており，そのほとんどが調査区北西側（B～E-27～30区）に分布している。「囲」または「田」を含む墨書されたものはすべてこの分布域で出土している。これらは同一文字が墨書された可能性があり，まとまって出土している点が注目される。

焼塩土器（第266図）の出土数は10点で，ほとんどが体部の小破片で実測に耐えうるものは口縁部から体部片が残存する１点（435）のみであった。出土地点は調査区の北西（Ｂ・Ｃ30区，Ｄ27区）と北東（Ｆ・Ｇ37区）に集中して出土している。出土遺物の大半は小破片ばかりで接合できる資料は認められず，同一個体の可能性が全くないとは言い切れないが１個体として数えている。また，Ｄ35区の出土品は小穴から出土しているが，出土数量が少ないため，分布図に加えている。焼塩土器は調査区の北西側（Ｂ～Ｅ27～30区）に集中が認められる。

須恵器は調査区の北東側（Ａ～Ｄ32～37区）を除いてほぼ全域で出土しているが，出土遺物の大半が甕の破片で同一個体が多数存在し，遺物の分布状況が捉えにくいため，分布図は掲載していない。

出土遺物の分布状況と遺構との関係は出土遺物の集中域とほぼ重なっているが，土坑は遺物の集中域と若干離れた位置に検出されており，時期は明確ではないが掘立柱建物は遺物の分布域には重なる状況が認められる。特に調査区北西側（Ｂ～Ｅ27～30区）は掘立柱建物や土坑などの遺構が多数検出され，遺物では内面見込みに線刻される土師器椀（428）を含む土師器の集中に加え，墨書土器や焼塩土器もこの区域に集中している状況から官衙に関連する集落の中心的な区域である事が想定される。また，東側中央周辺部（Ｆ～Ｊ34～38区）も調査区北西側と同様に焼塩土器や若干ではあるが墨書土器などを含む遺物の集中が認められ，土坑や掘立柱建物などの遺構も検出されている。この２箇所の遺構・遺物の集中域は，遺物内容は共通しており併存関係は不明で前後関係があるかもしれないが，先述のとおり９世紀代を主体とするほぼ同時期の遺構・遺物と考えられる。

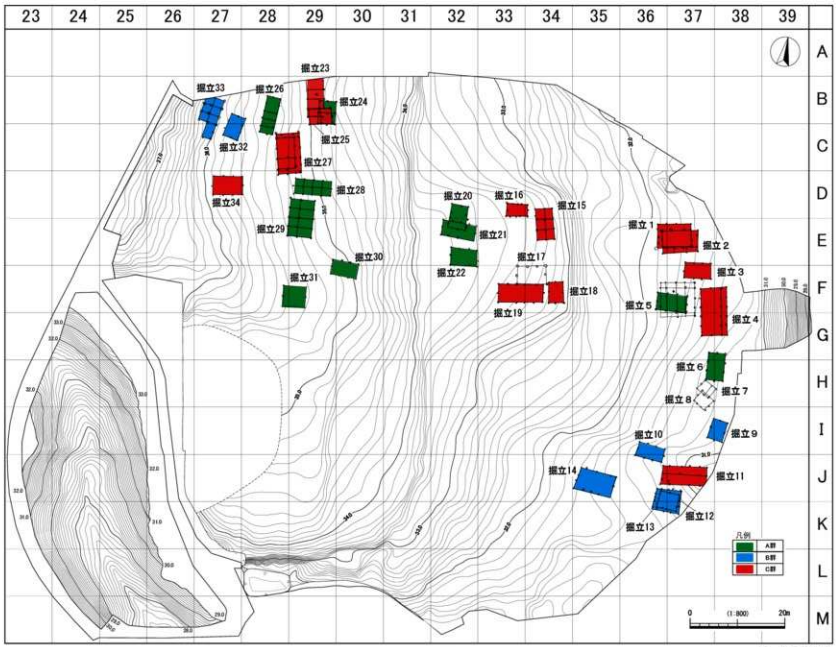
２　中世

中世の遺構としては，土坑墓３基，竪穴建物跡１基，掘立柱建物跡34棟ほか，古道や溝が検出された。土坑墓１号と竪穴建物跡１号は同じＪ37区から検出された遺構であり，切り合い関係こそ無いが，非常に隣接して存在する遺構である。遺構内からはともに，11世紀後半から12世紀前半と考えられる東播系須恵器片が出土しており，ほぼ同時期に作られたと考えられる。時期がほぼ同じであり，これだけ隣接した遺構であるからには，相互に意識して作られた可能性が高いと言え，土坑墓１号に関連する祭祀行為をおこなった建物跡である可能性が考えられる。また，近くには小型ながら土坑墓１号と同じ形状である土坑93号も作られている。これら遺構の立地する場所は，すぐ東側に串良川へと下る急斜面があり，遺跡の南東端部である。遺構の内容と立地から考えても，小規模な墓域を形成していたと考えられる。

掘立柱建物跡は34基検出され，地形・古道・溝により，区画されながら分布している。遺跡の南西部に関しては，近現代の建物や墓域があり，アカホヤ火山灰およびその直上まで削平を受けていたため，古代・中世の遺構はほとんど確認できなかったが，中世の遺物はこの南西部にも多く分布しており，建物跡等があったと考えられる。

掘立柱建物跡は建物の向きにより，Ａ群：グリッドラインよりも10°程東に傾き，南北軸に平行する一群（５・６・20・21・22・24・26・28・29・30・31号），Ｂ群：グリッドラインよりも20°程東に傾く一群（９・10・12・13・14・32・33号），Ｃ群；グリッドラインにほぼ平行するもの（１・２・３・４・11・15・16・18・19・23・25・27・34），その他（７・８・17号）の４つに分類した。

遺構の埋土に関しては，調査時に一部範囲でのみ残存していたⅡ層（黒色土），Ⅲ層（黒褐色土もしくは暗褐色土）の色調から，黒色土＝中世遺構埋土，黒褐色・暗褐色土＝古墳・古代の遺構埋土という認識を持っていたが，柱穴の埋土に関しては，建物の向きに関係なく，東側では黒色土の建物が多く，中央から西側にかけては黒



第421図　堀立柱建物群分類図

Va層コンタ図

褐色土の建物が多いことから，柱穴の埋土の違いは時期差ではなく，立地の差である可能性が高いと考えられ，埋土での分類が難しかった。柱穴内出土遺物については，24号で古代土師器，25号で古代土師器・古代須恵器，28号で土坑墓２号と同時期となる中世の青磁底部片，33号で古代の黒曜土器片が出土している。

Ａ群の掘立柱建物群は遺跡の西側にやや集中する傾向があるが，中央や東側からも検出されている。28号建物の柱穴内から12世紀中～後半の青磁片が出土していることから，12世紀中頃以降の建物群と考えられる。これらは竪穴建物や土坑墓とほぼ同時期の遺構群と考えられるため，26号建物は土坑墓２号との位置関係よりＡ群から外れる可能性も考えられる。溝４・７も埋土より中世の溝と考えられるため，Ａ群と同時期であると考えられる。

Ｂ群の掘立柱建物群は，遺跡の東側と西側に分かれて検出されている。12・13号建物は建物の方位が若干ずれていたため別の遺構としたが四面庇の１つの建物の可能性も考えられる。また，溝９・10・14はその方向からＢ群と同時期の遺構と考えられる。

Ｃ群の掘立柱建物群は東側・中央・西側にほぼ同数の建物が検出されている。特に中央の建物群は地形を利用して配置されている。この中央部の地形の変化に関しては当初，造成の可能性も考慮して調査を実施したが，造成の根拠となる成果は得られなかった。11号建物は竪穴建物１号と土坑墓１号と同じ場所に建てられている。また，４号建物は溝４を切って造られていることから，Ａ群とＣ群の建物には明らかな時間差が見られる。

以上，掘立柱建物跡の分類は，柱穴埋土からの分類が難しく，主に建物の向きからおこなった。柱穴から出土した遺物や，包含層遺物の出土状況も踏まえて考えると，Ｃ群→ＡまたはＢ群の順で変遷していくと考えられ，Ｃ群は古代にまで遡る可能性も考えられる。

本遺跡における中世の出土遺物は国内外の搬入遺物が多く認められ，中世の各時期を通して認められるが，中世前期の11世紀後半～13世紀初頭との中世後期の15・16世紀代にそれぞれ一定数の遺物が出土している。遺物の出土状況は，遺構では中世前期の土坑墓の副葬品として中国産白磁の完形品や土師器皿が出土している以外は小片が出土している程度で，その多くは表土や基本層序Ⅳ層などの包含層から出土している。包含層の主な出土遺物は国内産では土師器の皿・鍋，中世須恵器の東播系捏・擂鉢と甕，畿内系の楠葉型の瓦器椀（558），陶器では備前焼の擂鉢・壺，瀬戸・美濃系の皿・天目茶碗，滑石製の石鍋やその二次加工品，国外産では中国産陶器の鉢・福建省系の盤・壺と朝鮮産の碗，磁器では同安系と龍泉窯系青磁皿・碗，白磁皿・碗，青白磁の小壺，景徳鎮窯と福建省系青花皿・碗などが出土している。この他に破片も併せて土錘が８点ほど出土しているが時期は不明で中世よりも古い可能性がある。種別ごとの数量については，個体数量ではなく破片数量となり，一定の数量が見込まれる土師器片は古代の土師器と区別できていないため数量は不明であるが，白磁（221点），東播系須恵器（155点），青磁（147点），青花（46点），滑石製品（30点），瀬戸・美濃系陶器（17点），備前焼陶器（15点），中国産陶器（13点），瓦器・朝鮮産陶器・青白磁（各１点ずつ）となっており，時期毎の細分を行わず中世を通してではあるが貿易陶磁器が土師器を除く全体数量の７割近くを占めている。遺構に伴う遺物としては竪穴建物跡１号から森田編年Ⅰ期（11世紀後半～12世紀前半）に比定される東播系捏鉢（**竪穴建物跡１号－１**），堀立柱建物28号から大宰府分類Ⅴ－４（12世紀中頃～12世紀後半）に比定される白磁が出土している。また，確実に遺構に伴うものとして土坑墓では副葬品が出土しており，土坑墓１号からは大宰府分類Ⅳ－１ａに比定される玉縁白磁碗の完形品，土坑墓２号からは大宰府分類Ⅴ－４（12世紀中頃～12世紀後半）に比定される口縁が嘴状を呈する白磁の完形品，土坑墓３号では土師器皿４枚が出土している。これらの遺構は出土遺物より中世前期の所産と考えられる。この他の遺構では土坑から土師器皿や白磁片が出土しているが時期は不明で中世後期の遺構を明確にはできていない。

次に包含層出土遺物の分布状況図を種別ごとに概観し，中世前・後期の遺物の集中が認められるかを確認する。

中世土師器（第392図）は皿・鍋が出土しており，調査区南東部（Ｉ～Ｊ31～36区）に集中が認められる。

楠葉型瓦器椀（**558**）はE27区の包含層から出土しており，高台部分が欠損するが残りはほぼ完形で橋本編年Ⅲ－１期（12世紀末～13世紀）に比定される。楠葉型瓦器椀は畿内系の瓦器椀で，生産と流通に関して摂関家との関連が想定されており，京都や摂関家と関連する遺跡に分布することが特徴的とされている（森島1995）。鹿児島県内での出土事例は数例が報告されており，このうち霧島市の桑畑氏館跡や出水市の中郡遺跡群はいずれも摂関家との関連が想定されている。白磁や青磁等の貿易陶磁器も多数出土しており，併せて楠葉型の瓦器椀の出土は本遺跡に畿内と繋がりのある有力者が存在していたことを想起させることができる点で重要といえよう。

中世須恵器（第391図）である東播系捏・擂鉢は調査区南東部（Ｈ～Ｋ31～38区）に散逸的に出土している。

国内産陶器（第395図）の備前焼擂鉢は調査区中央南側（Ｊ32，Ｋ・Ｌ29・30，Ｋ27）に間壁編年Ⅳ期，調査区中央（Ｅ・Ｆ31）に間壁編年Ⅴ期に集中が認められる。

青磁（第399図）は中世前期に同安窯系青磁の皿・碗，龍泉窯系青磁の皿・大宰府編年碗Ⅰ類（劃花文）等が出土し，調査区南東側の（１～Ｌ31～35区）に集中が認められる。中世後期には龍泉窯系青磁で皿・大宰府編年碗

Ⅱ類（連弁文）・上田編年碗Ｂ－Ⅳ（ヘラ先細連弁文）・碗Ｃ（雷文帯）・碗Ｄ（端反り）類等が出土し，調査区南東側の（Ｉ～Ｌ32～35区）と調査区中央（Ｆ・Ｇ31区）に集中が認められる。

白磁（第403図）は中世前期に大宰府編年Ⅳ類の玉縁口縁碗，大宰府編年Ⅴ・Ⅷ類の嘴状口縁碗などが多く出土しており，Ⅳ類は調査区南東部（１～Ｌ31～36区），Ⅴ・Ⅷ類は調査区南東部（Ｊ31～36区，Ｌ・Ｍ33区）と調査区中央（Ｆ30区）等に点在している。またこの他に青白磁の小壺（**702**）がＩ35～38区や白磁水柱（**701**）の口縁部がＥ25区の近世土坑内に混入して出土している。中世後期は大宰府編年皿・碗Ⅸ類の口禿白磁が出土しており，調査区南東部と調査区中央（Ｆ30・31区）等に点在している。また15・16世紀代の白磁で森田編年皿Ｄ類（**661**），Ｊ31区で森田編年皿Ｅ類（**663**），Ｍ35区で内底面を環状に釉薬を掻き取り露胎とする白磁皿（**662**），Ｈ33区で内外底面を露胎とする白磁皿（**664**）がそれぞれ出土している。

青花（第406図）は景徳鎮窯の小野編年Ｂ1・Ｃ群の皿，Ｅ群の碗，瓶などが出土しており，調査区中央部の南側（Ｆ～Ｌ28～32区）に集中が認められる。また，16世紀後半遺構の福建省産の粗製青花は皿，碗が出土しており，調査区南東側（Ｆ～Ｊ31～36区）に集中が認められる。

国外産陶器（第409図）は，中国産の天目茶碗・大宰府編年鉢Ⅰ－１ｂ類（**728・729**）・福建省産系の盤（**731**）・壺が出土している。天目茶碗・壺は時期が不明だが残りのものは中世前期の所産である。分布図では調査区北西・南東側と南西の谷部分に遺物の分布が認められる。また朝鮮産の高台に抉り入りが施された碗は15・16世紀の所産と思われ，Ｋ26区の谷部分から出土している。

石製品（第413図）は木戸編年Ⅲ－ａ（**741・742**）・ｂ（**743**）類，石鍋の二次加工品，石鍋補修材のバレン状石製品（**745**）などが出土しており，石鍋はⅢ－ａが12世紀代，Ⅲ－ｂが13世紀代の所産である。石製品は調査区南東部（Ｈ～Ｊ31～38区）に集中が認められる。

以上中世遺物の種別ごとの分布状況を確認したが，中世を通して調査区南東側に遺物の集中が認められ，数量は少ないが調査区中央よりの北東域にも種別を問わず遺物が出土していることが確認された。中世土坑と掘立柱建物群などの遺構と重ねてみた場合，調査区北東部の遺物集中域は掘立柱建物群の東側の縁辺部に認められ，遺物の集中が顕著な調査区南東部は土坑や掘立柱建物群などの遺構がない空白部分に集中が認められる。また，調査区南西部の谷の部分にも各種別の遺物が認められるが，これは遺構が検出されていないことから，流れ込みや廃棄されたものと考えられる。

引用参考文献

石川秀雄・柴野照文　1974「鹿児島県八瀬尾における四万十帯中の蛇紋岩」地学雑誌80

岩永勇亮　2006「縄文時代前期における近年の研究の成果と今後の課題」『鹿児島考古』第40号　pp.39-52

尾上　実・森島康雄・近江俊秀　1995「瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

木戸雅寿「石鍋」同上

上田秀夫　1992「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.２』日本貿易陶磁学会

森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」同上

小野正敏「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」同上

上床　真　2016「鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き」『研究紀要・年報　縄文の森から　第９号』　鹿児島県立埋蔵文化財センター

小畑弘己　2004「磨製石器と植物利用：南九州地方における縄文時代草創期　早期前半の石器生産構造の再検討」『文学部論叢』82

柴畑光博　1993「南九州の曽畑式土器とその前後」『考古学ジャーナル』No.365　pp.9-14

柴畑光博　2002「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第四紀研究』41(4)　pp.317-330

中原一成　1999「南九州における縄文時代草創期から早期前葉の堅果類利用についてー磨石・敲石類，石皿を視点としてー」『南九州縄文通信』13南九州縄文研究会

中村和美　2006「第5章　奈良・平安時代　８土師器と須恵器」『先史・古代の鹿児島：遺跡解説　通史編』鹿児島県教育委員会

中村　慶　1982「曽畑式土器」『縄文文化の研究』３　縄文土器Ⅰ　pp.224-235

前迫亮一　2003「石板式土器再考」『縄文の森から』　創刊号 pp.43-50

松田朝由　2004「土器の製作技術と土器様相」『高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(71) 鹿児島県立埋蔵文化財センター

山本信夫　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2014『中部遺跡群』鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(１)

第三調査係　2005「土器胎土の鉱物を求めて－土器制作推定地のための基礎研究ー」『研究紀要・年報　縄文の森から　第３号』　鹿児島県立埋蔵文化財センター

隼人町教育委員会　2005「留守氏館跡Ⅱ-第３・４次調査-」

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（38）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保遺跡４　Ａ地点

縄文時代前期・古代・中世編（第２分冊）

発行年月　2021年３月

編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ　0995-70-0574　ＦＡＸ　0995-70-0576

印　刷　株式会社　あすなろ印刷
〒890-0041　鹿児島市城西2-2-36
ＴＥＬ　099-214-3757　ＦＡＸ　099-214-3758

鹿児島県